

昭和49年4月20日印刷 昭和49年5月1日発行 5月号(第28巻第5号)毎月1回1日発行 昭和33年4月20日第3種郵便物認可 昭和42年4月21日国鉄大局特別機承認誌第210号

奇譚クラブ



1974

新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

1974.5

THE KIFAN CLUB

Published Monthly by

'Akasuki' Shuppan

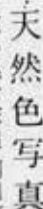
Osaka Japan

5

雑誌 2805 5

¥600

カメラ・ハント楽我記…辻村隆
女体緊縛の醍醐味を語る…塚本鉄三



~~~~~女体緊縛の華~~~~~本誌写真部構成~~~~~

## 緊縛女体の光と影

[illegible]

|              |       |        |           |       |       |       |          |         |        |      |       |        |        |         |        |         |        |        |        |       |         |        |       |          |         |          |           |        |       |         |
|--------------|-------|--------|-----------|-------|-------|-------|----------|---------|--------|------|-------|--------|--------|---------|--------|---------|--------|--------|--------|-------|---------|--------|-------|----------|---------|----------|-----------|--------|-------|---------|
| これからの、どうするの？ | 美しき吊り | 苦痛が悦楽か | 逆一筋の縛りの魔術 | 愛撫の實め | 俯瞰撮影  | 黒縄と白肌 | 身動きできぬ境地 | ポリウムを縛る | 浮上した女体 | 麗しの背 | 汚辱の縄  | 高小手本縛り | 責めの陶酔境 | 失神したマゾ女 | 前手縛り悶天 | 柱の彼方の天国 | 荒縄の海老責 | 美と縛の女神 | はずれた猿轡 | 可憐な置物 | ながし目の天使 | 酒の肴になる | 妖艶の洗礼 | 奔弄されるままに | 海老縛りの妙味 | 柱につながれた女 | 痛さをこらえる異国 | 責の果の諦観 | 痛打の一瞬 | ホステス裸人生 |
| 長井美津子        | 前田真知子 | 関谷富佐子  | 中河恵子      | 渡部純美  | 前田真知子 | 関谷富佐子 | 関谷富佐子    | 座間明子    | 中河恵子   | 金原恵子 | 佐々木真弓 | 川路叢子   | 関谷富佐子  | 関谷富佐子   | 関谷富佐子  | 中河恵子    | 三浦純子   | 前田真知子  | 梨花悠紀子  | 長井美津子 | 佐々木真弓   | 関谷富佐子  | 前田真知子 | 川路叢子     | 長井美津子   | 関谷富佐子    | 前田真知子     | 関谷富佐子  | 佐々木真弓 |         |

◆本誌二百号突破記念◆

百萬円懸賞原稿募集

▽賞金△

ジョーン物でも結構ですし、見聞記  
レポーター写真、画、参考資料などがあ  
下すれば幸いです。資料に限り返さ  
に心ばいます。更に、論説意見、エ  
感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲、  
何ん形式の御執筆の下でも最も得意と  
を選る流は絶対下に排して下さい。あ  
心的な新作に限りません。幾多のS・M

▽内 容△

ここに三百号の多きを数えるに至りました。

その間、風俗雑誌のバイオニアとしての幾多の辛酸を具に奮めながら、読者の皆様の温かい

き御支援によって、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りました。

一本は異色ある風俗文獻誌として生長してまいりましたが、今まで読者の方々の投稿による多くの薬草や野草の花のよう

「S.M.文庫」としての本誌の真価が

三百号発刊を記念して、  
更に一層の内容の充  
実と清新化を計りたく、  
皆様の作品に期待し

て原稿募集を企画しました。  
一、内容は本誌に発表するにふさわしいもの

であれば、どのような傾向のものでも結構ですが、一例を挙げれば、サディズムに関連した

たもの  
マソ  
各種フ  
エテツ  
シユ一  
般、同  
性愛、  
切腹

風谷、特異風谷習習介、アブノーマル

テクニクなど、古今東西を問わず異色文藝に属するものを取り上げて下さい。

~~~~~

「フイリオン」物でも結構ですし、見聞記
 実迎致しませう。写真、画、参考資料など大いに
 欲ば添下されば幸いです。資料に限り返す
 戻れば求めにに応じます。更には、論説、意見、エ
 ツセイ、感想、形式手紙、随筆、シナリオ、戯曲
 など、如何を選ぶか御執筆の下さ最も得意とさ
 れる模倣的な新作に絶対には排して下さい。あ
 るまで野心的な新作に限りません。幾多のS・M

作家を輩出させて本誌の誌面を野心のある読者の方は登竜門として試みて下さい。

▽規定△
一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限

ります。原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上

一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載し、入選と同時に規定の賞金を贈呈致す。

入達と同時に規定の資金を贈呈致します。前掲載の際、発表に支障ありと思われる箇所を削除することもありますので予め御承願い。

原稿は原則として返戻は申上げません
原稿御入用の方は前もってコッピをと

一、懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿

と区別するため、第一頁に△懸賞▽とお書き下さい。ペンネーム、匿名はご自由ですが、

住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。

性のある奇巧に作品を発表して、貴方の力量

一、原稿の送付先は、大阪市住吉区大領町四の六八、桃出版株式会社編集宛、必ず郵送

(第一種便)として下さい。直接の訪問並に持ち込みは固くお断わり致します。

.....



初緊縛の表情

△矢島靖子▽



「畜化願望」の心理を解く △苗木陽子▽藤川冬一郎.....(29)
S研△ダベリ会▽顛末記 △てしまった経緯塚本 鉄三.....(30)
『羞恥のなかのSM談義』.....梅川 幸子.....(52)
告白「孤独、寝苦しい夜のゴムプレイ」.....風流極道軒.....(56)
連載・紫蘭の門(23)『南蛮拷問』.....浅野かつみ.....(68)
体験記「白いイルリガートル」.....苗木 陽子.....(74)
畜化願望の女「輪姦願望」の訴え.....戸入ひそむ.....(80)
妙なる調べ「女性放尿の実態研究」.....佐治 麻造.....(82)
連載・Mグループ作品『女の虜囚』(3).....桐島 次郎.....(100)
懸賞応募作品「被虐のひと」.....鶴崎 好夫.....(111)
私の履歴書「ゴムマント」に希望を求めて.....前河恵一郎.....(114)
S & Mの考察『塚本鉄三論 点描』.....千葉 青鬼.....(124)
連載小説『大 噴 火』△第六十七回▽.....早木 夢二.....(132)
わが家のバース「瘦せた縛り」.....秋津新次郎.....(138)
連載・SM企業(7)『SMスワッピング』.....杉山 潤三.....(147)
美鼻に憑かれて「鼻 責 考」.....高村 浩子.....(150)
M女通信「浩子は、ふるえる小羊です」.....鬼山 絢策.....(156)
連載・M派交友録(50)『躍る牝豹』.....戸越春太郎.....(170)
異常性体験告白「我が「性」の回想」.....白鳥 大蔵.....(176)
江戸残酷帳「妖異招き猫」.....塚本 鉄三.....(182)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△藤田明子の巻▽
『蚯蚓千匹の名器の持主』.....

目次フォト.....前田真知子・笠井奈保子

〜 S 研 < ダベリ会 > 顛末記 〜 [塚本鉄三・撮影]

カラー・フォト・セクシオン (十一ポーズ)	笠井奈保子	矢島靖子	深田菊子	秋野英子
	福井桃子	前田真知子	高村浩子	苗木陽子
初緊縛の表情☆S研に捧げ	矢島 靖子			
た裸身☆見られる快感	前田真知子			
異常美への挑戦☆疼痛に耐	中河 恵子			
にじみ出るマゾ	松本 たえ			
逆さ一本吊り	金井奈加子			
妊婦逆吊り	西条 紀代			
後手交叉	長野 良子			
豊満	高村 浩子			
諦観	南 加津子			
膨隆	鈴木千鶴子			
東京の踊り子	笠井奈保子			
陶酔の境地	秋野 英子			
ペット調教	深田 菊子			
捨身の肢体☆責め終りて	座間 明子			
沖縄美人	玉木 章子			
飼育妻の生態	江口 淑子			
引回し	福井 桃子			
肉体の貫禄	荒尾 慶子			
剃毛への憧れ	安井喜久子			
股間縛り	苗木 陽子			
全身で惑溺	山原 京子			
刺青をめくる				
イメージギャラリ	「華麗なる惨美」市川幸三郎 (61)			
「屈辱との闘い」須坂旭 (64)	「屈従への出発」マエダ			
「二人の関係」志羽利也 (103)	「刻みこむ愛条」須坂旭			
悦する腰掛け「絹川文代」(134)	「マゾ開眼への途」日本			
武士(141)「青空市場」マエダヒオミ(162)	「その夜のプレゼント」			
「マエダヒオミ」(166)「強引な治療法」須坂旭(215)	「白と黒の戯れ」マエダ			
「帰る時間？」若江正史(219)				
ヒオミ(227)				



奇 ク サ ロ ン (234)

奴隷になりたい悠子の便り	山下 悠子
私の「責め」のプログラム	川西 鉄三
S 研ニュース	塚本 鉄三
アブやSMのことを一緒に話し合おう	砂本 信
告白「のぞき」の体験	北浦 澄夫
「SM研究会」発足大賛成	南田 信雄
羽賀さんへ 御主人の前で	沢田 路夫
愛妻のキンバク写真	今野 恒春
剃毛法私論	北川まりこ
須坂旭様のイメージ画	須坂 旭
イメージ画「愛情」	大月吐志夫
ムチ打ちプレイについて	小川 茂正
イメージ画「待ってるよ」	林 繁三
苗木陽子を想う	秋野 美水
私のSM空想	竹淵 淳
SM「ダベリ会」賛成!	
私達(夫婦)は待っている	瞳 次郎
艶女、悠紀子!	市橋紋次郎
サロン落穂抄	塚本 鉄三
SMに淫した、この頃の日記抄より	須渾 朔
あぶてききりぬき	野村多津男
メーヌスの女神	縄木縛太郎
「研究会」に参加したい	最上 卓也
近況報告 裕子とのこの頃	西田 正美
多数の嘲笑の中のSEX	望月百合子
百合子の浣腸プレイ	河本 光三
女性下着とハプニング	南 加津子
たった一枚の写真	宮本 満
告白 おむつ仲間	島崎 若人
告白 立腹(たちばら)	羽衣 慶
前田嬢へ 我がS性の経歴	編集 部
編集部だより	牧 禄郎
滑車での「吊り」について	

思春期の白昼夢「わら束の中」.....原 君子 (212)

浩が行く(4)『バーックラックに陽は沈む』.....久留木 栄 (222)

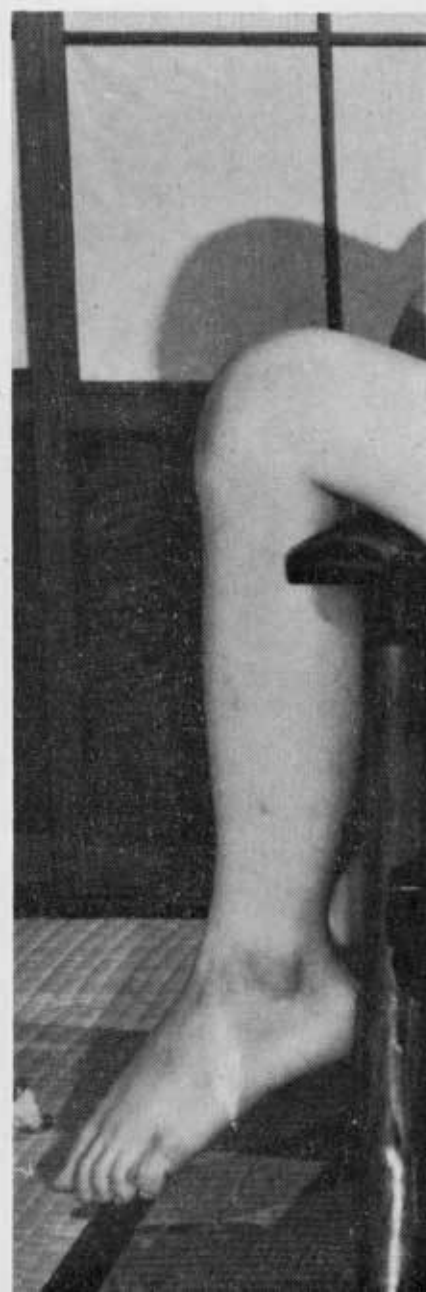
読者通信.....編集部選 (274)





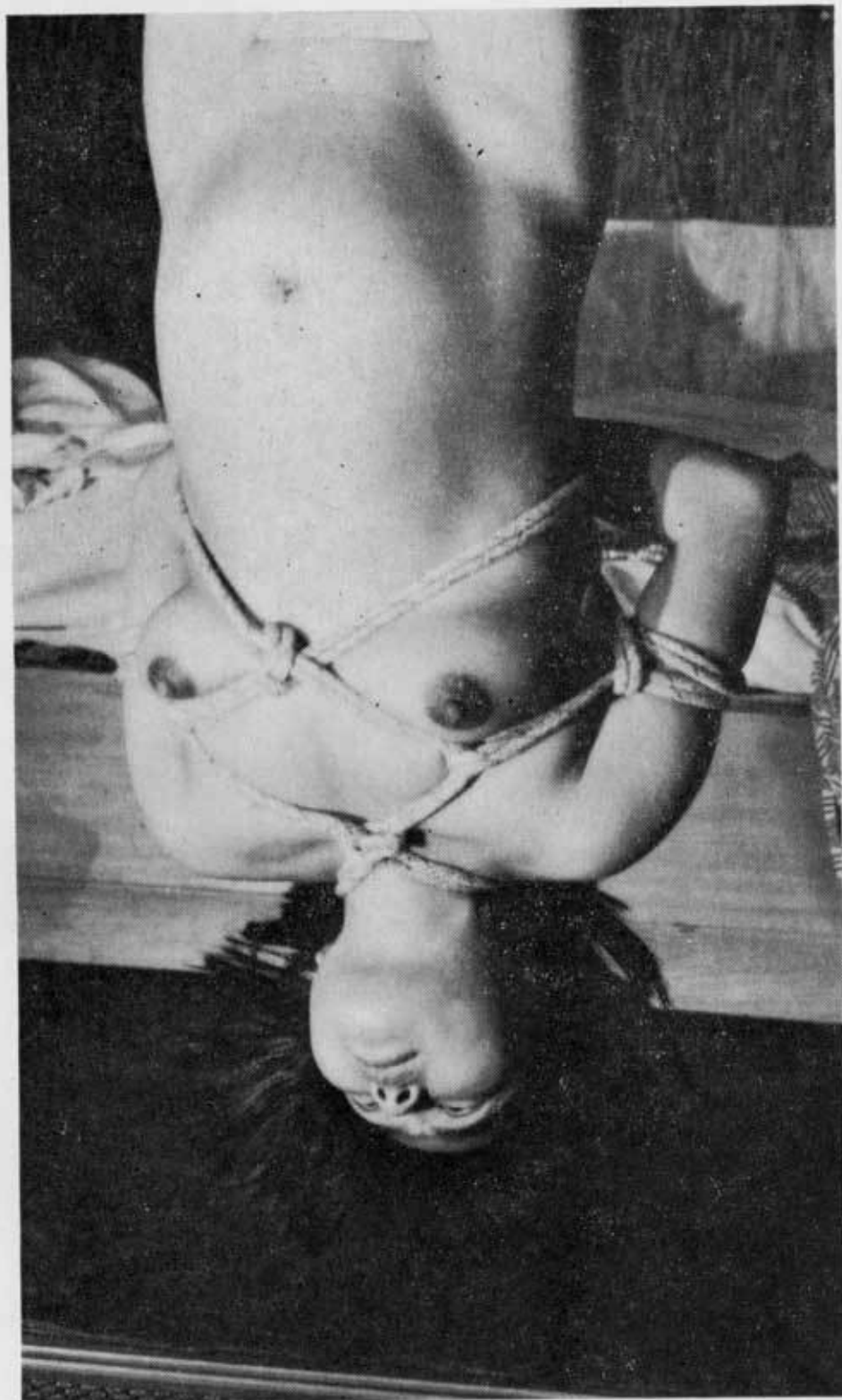
にじみ出るマゾ <中 河 恵 子>

異常美への挑戦



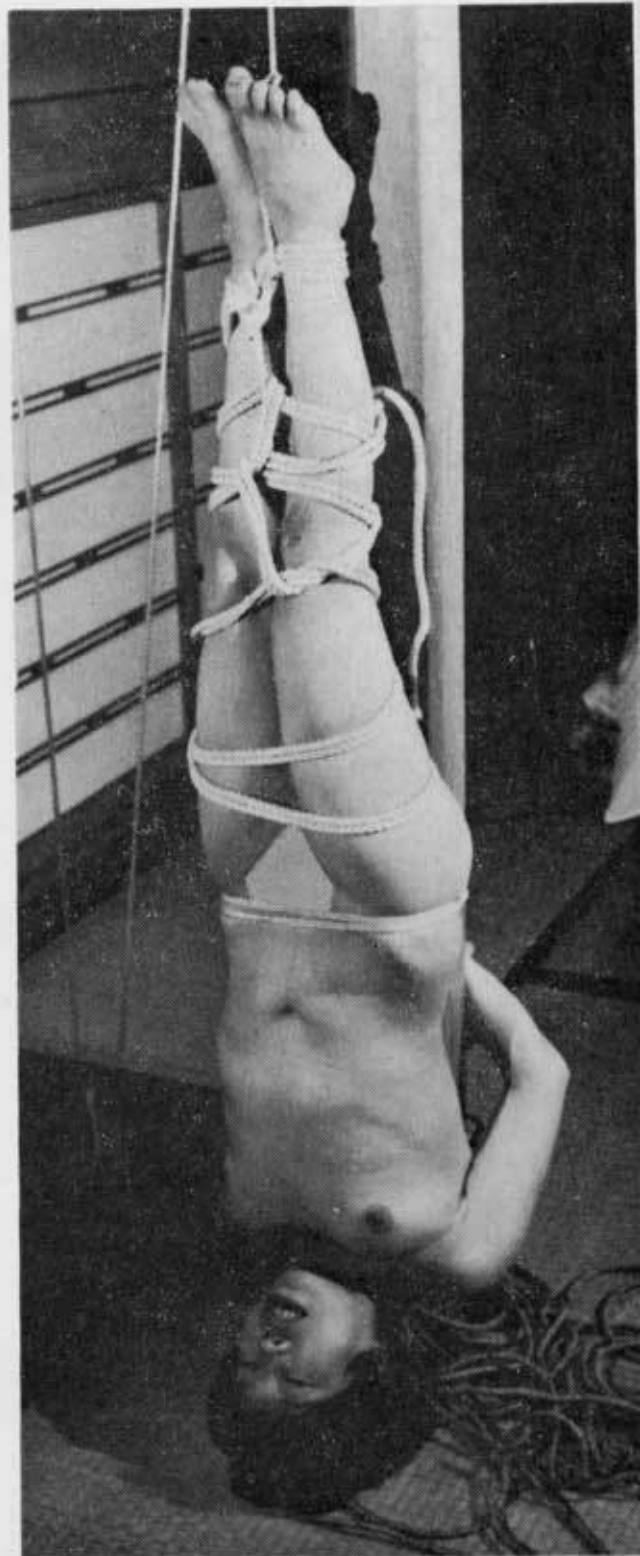
△前 田 真 知 子▽

妊婦逆吊り



△金井奈加子▽

逆さ一本吊り



△松本たえ▽

後手交叉



△西条紀代▽

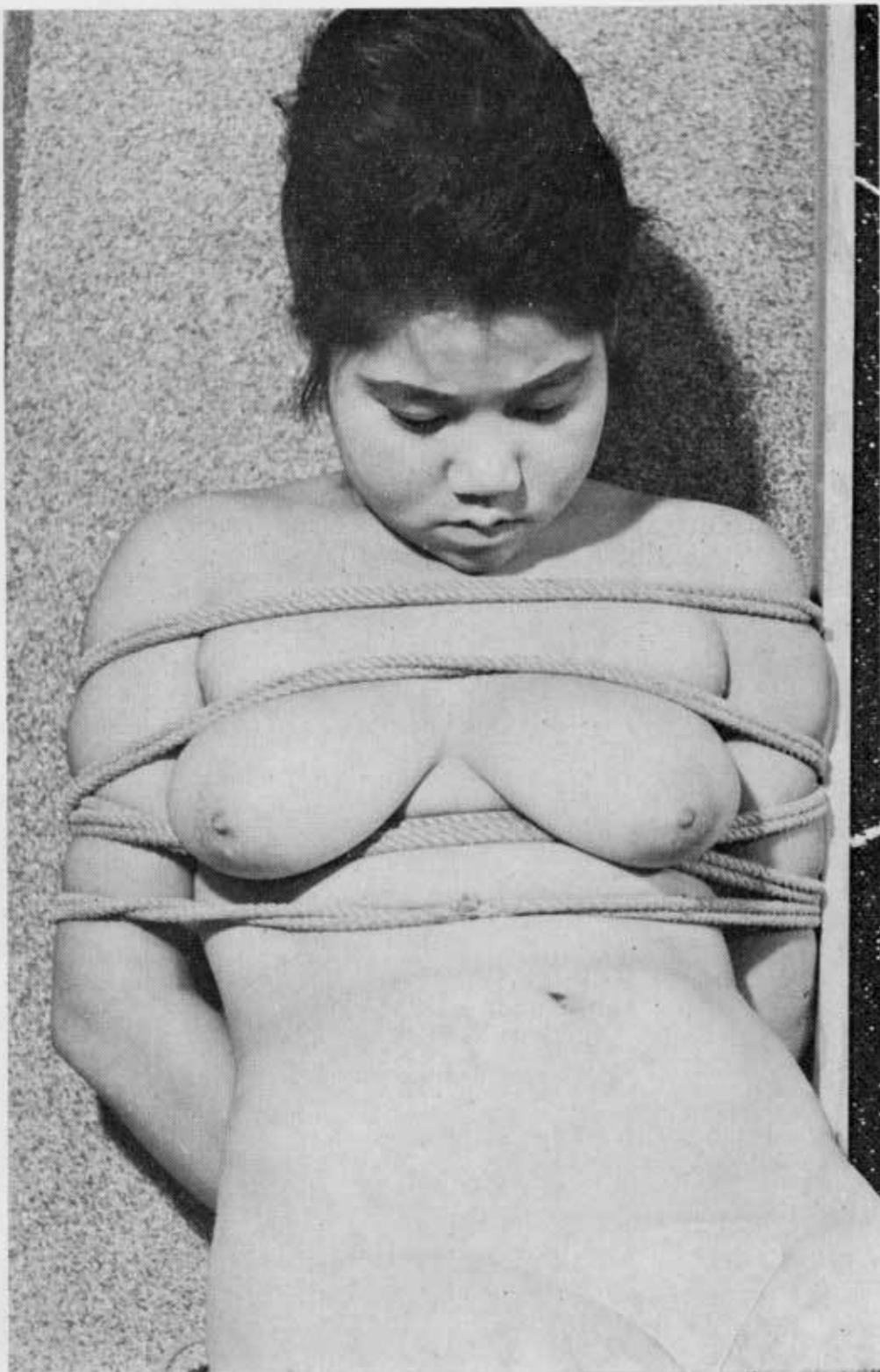


S
研に捧げた裸身

△矢島靖子▽

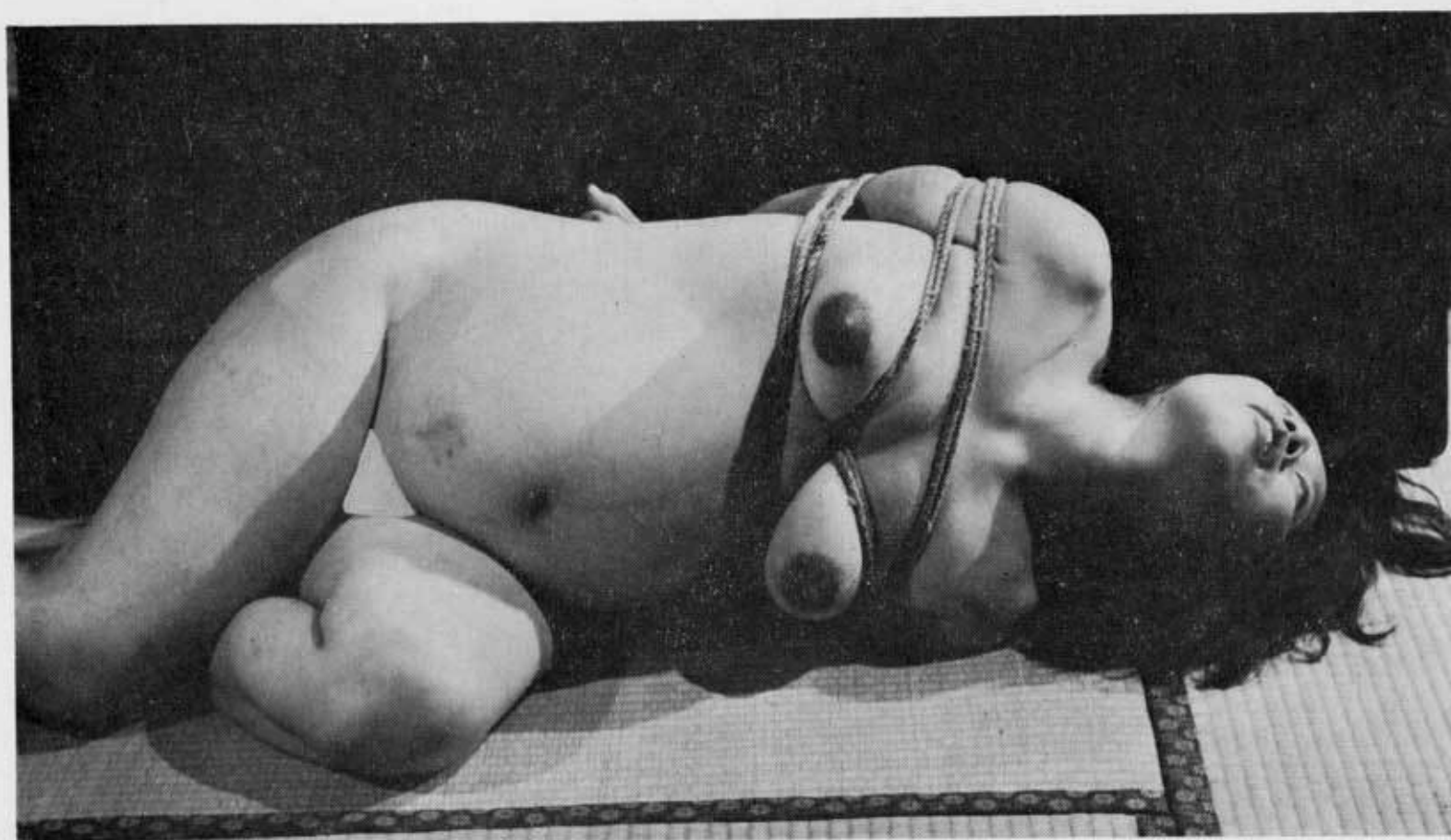


「諦観」 <高村浩子>



「豊満」

<長野良子>



「膨隆」

△南

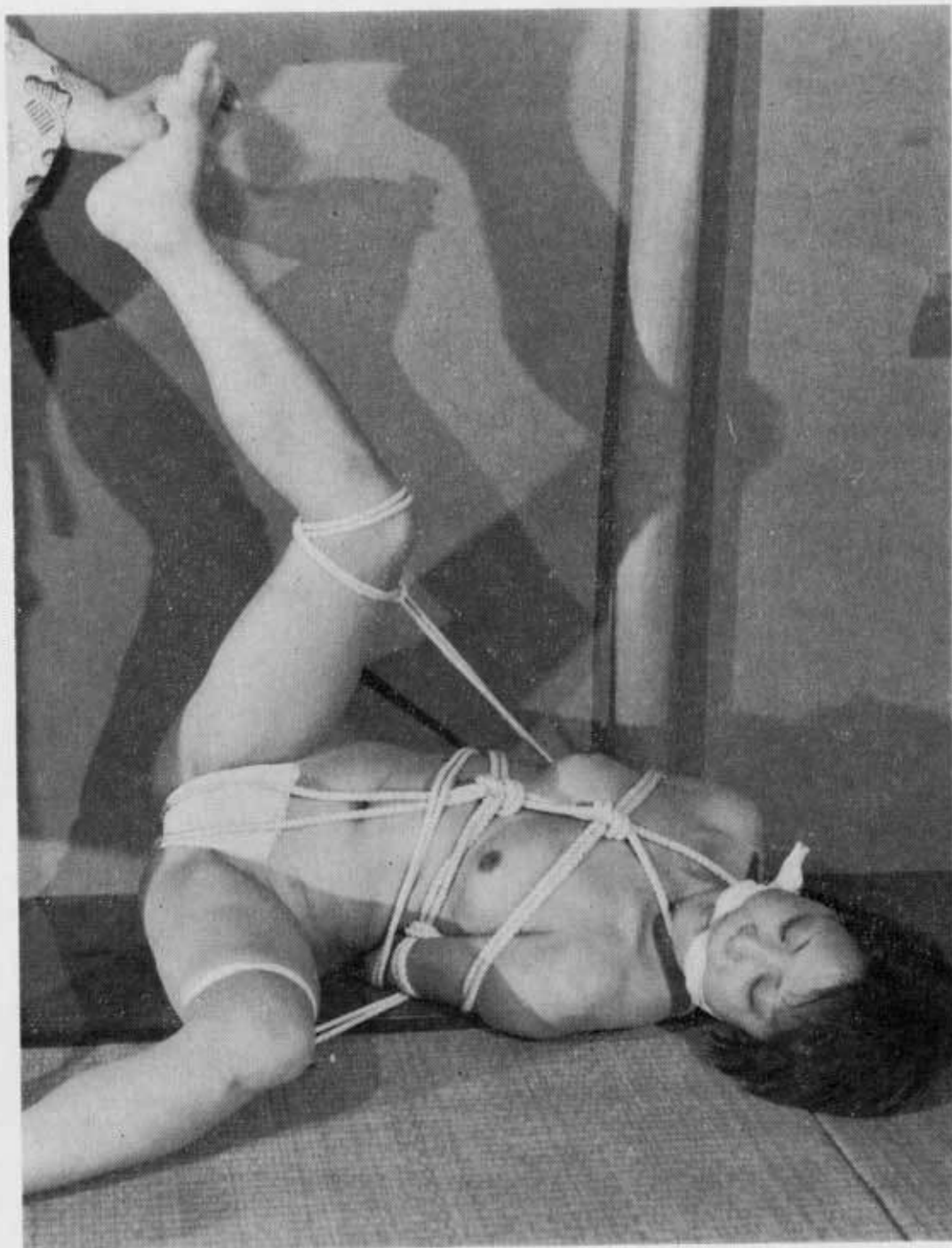
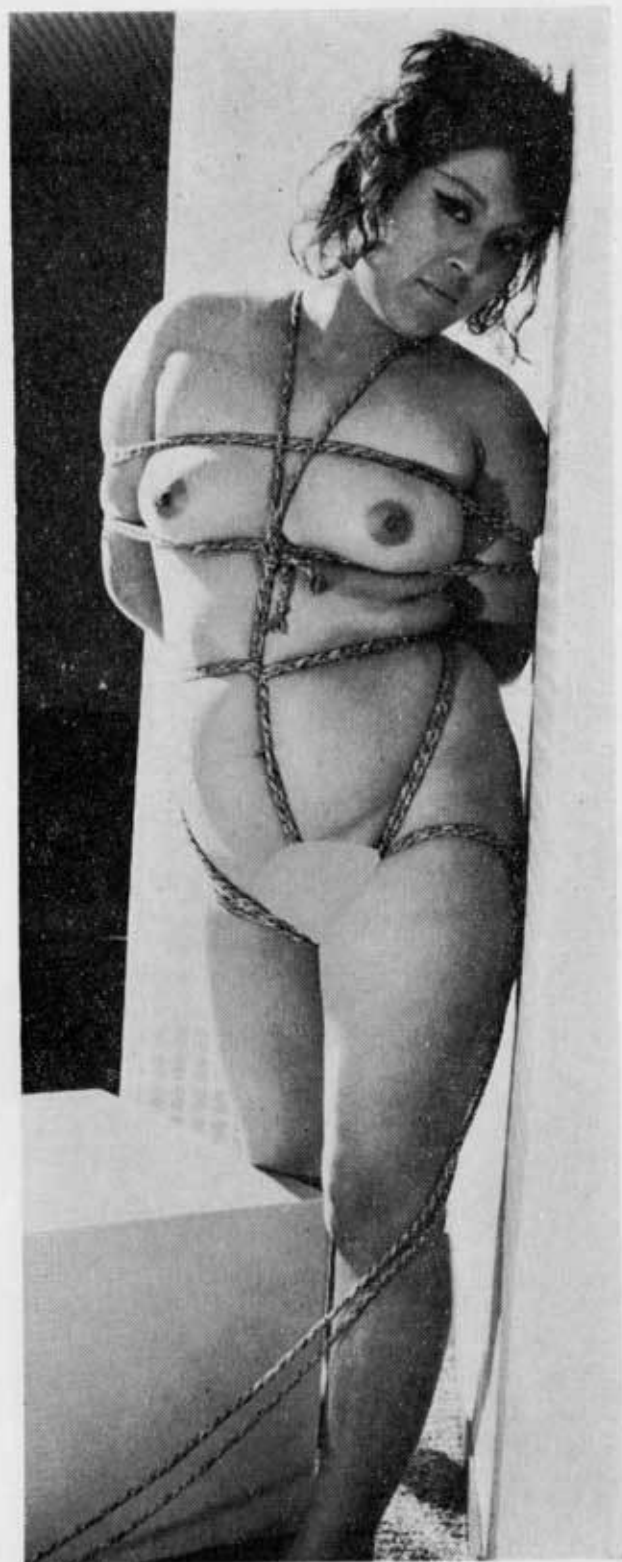
加津子▽



陶 醉 の 境 地 <笠 井 奈 保 子>



△ 鈴 木 千 鶴 子 △
東 京 の 踊 り 子

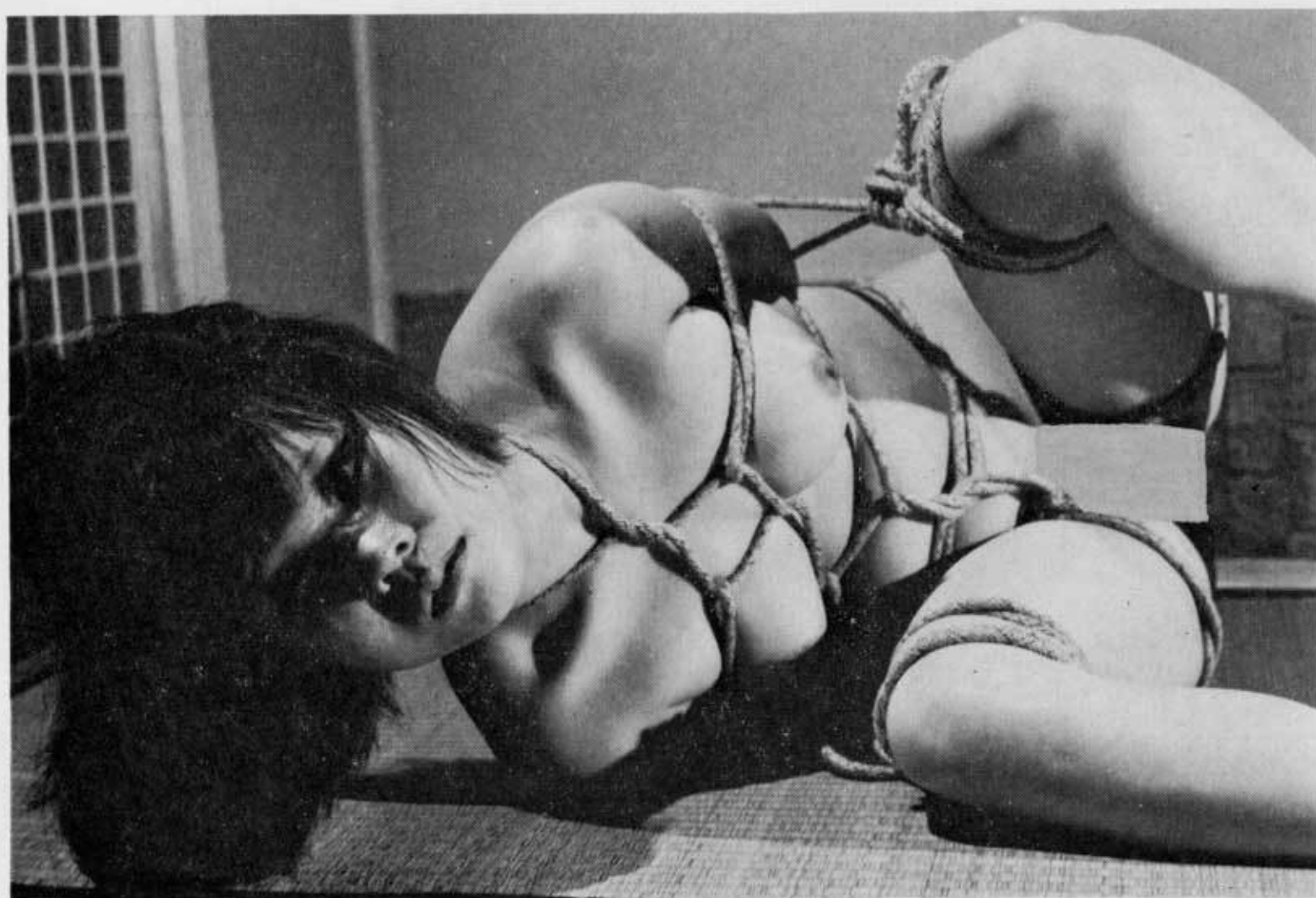


ペ ッ ト 調 教 <秋 野 英 子>

捨 身 の 肢 体 <深 田 菊 子>

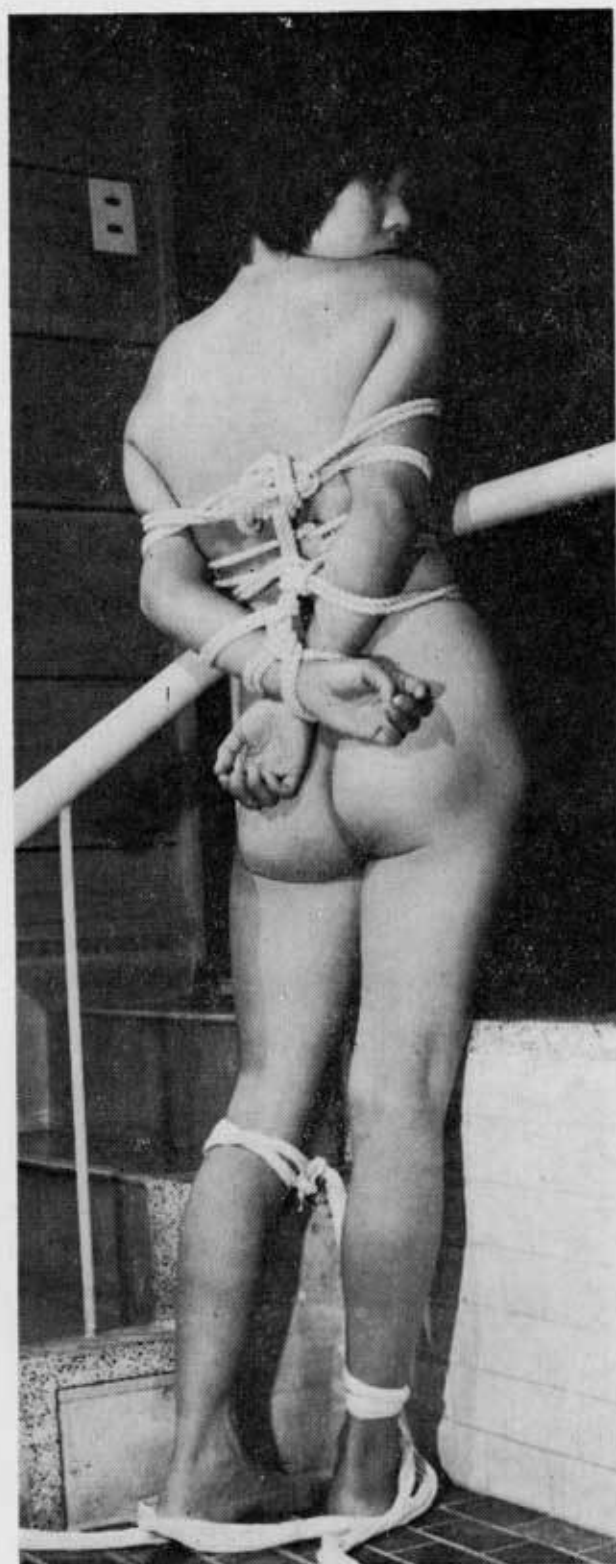
△座 間 明 子▽

沖 縄 美 人





飼育妻の生態 <玉木章子>



<深田菊子>

責め終りて

引
回
し

△江
口
淑
子▽

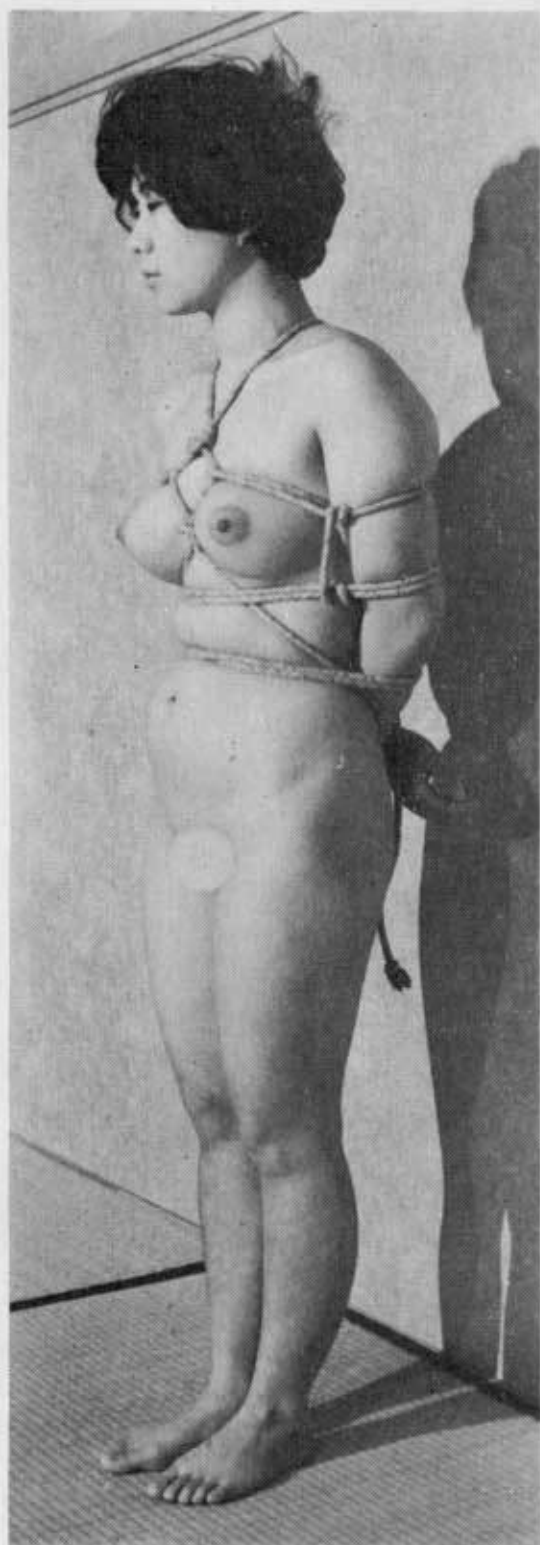


肉 体 の 貫 禄

＜福 井 桃 子＞

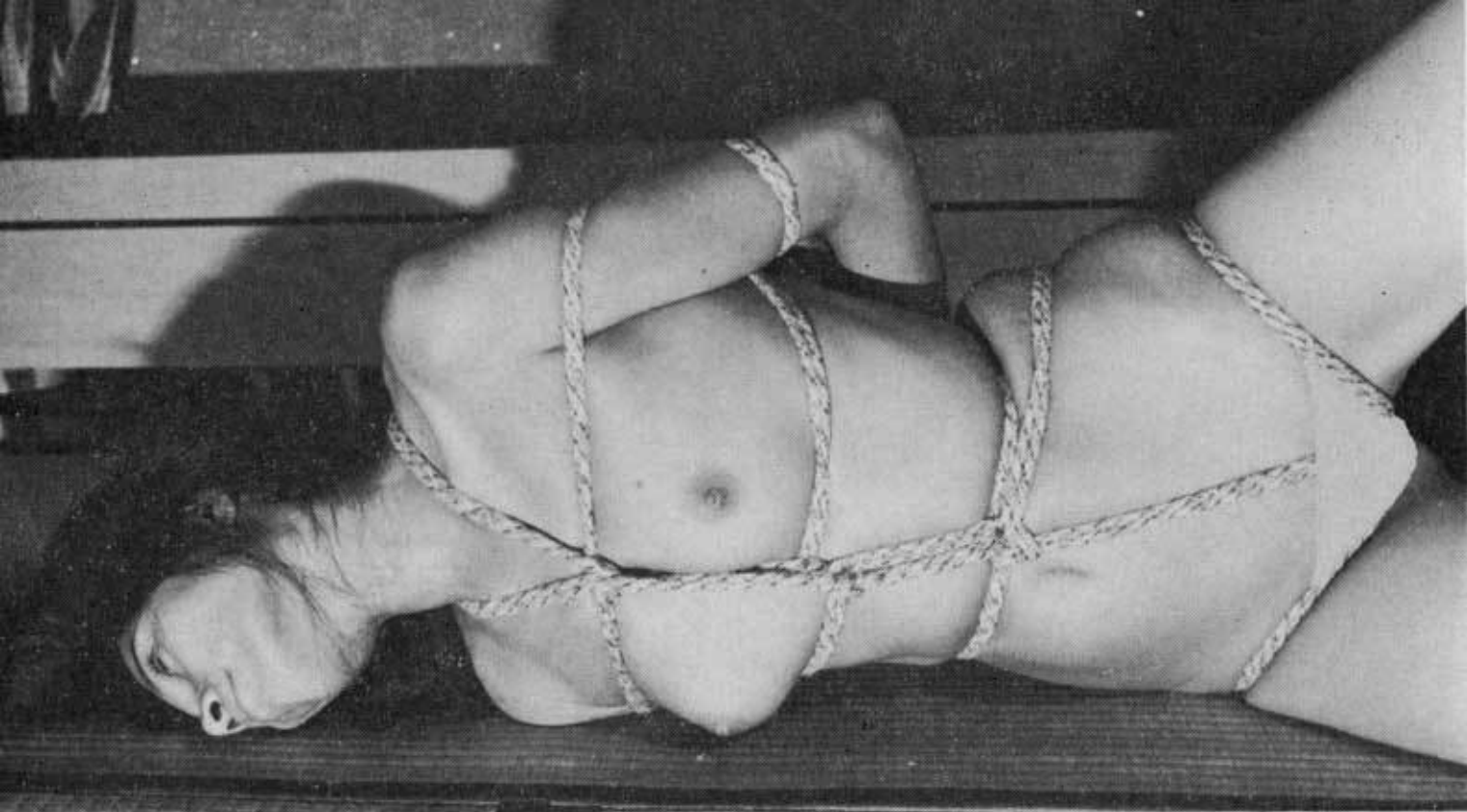
剃
毛
へ
の
憧
れ

△荒
尾
慶
子▽



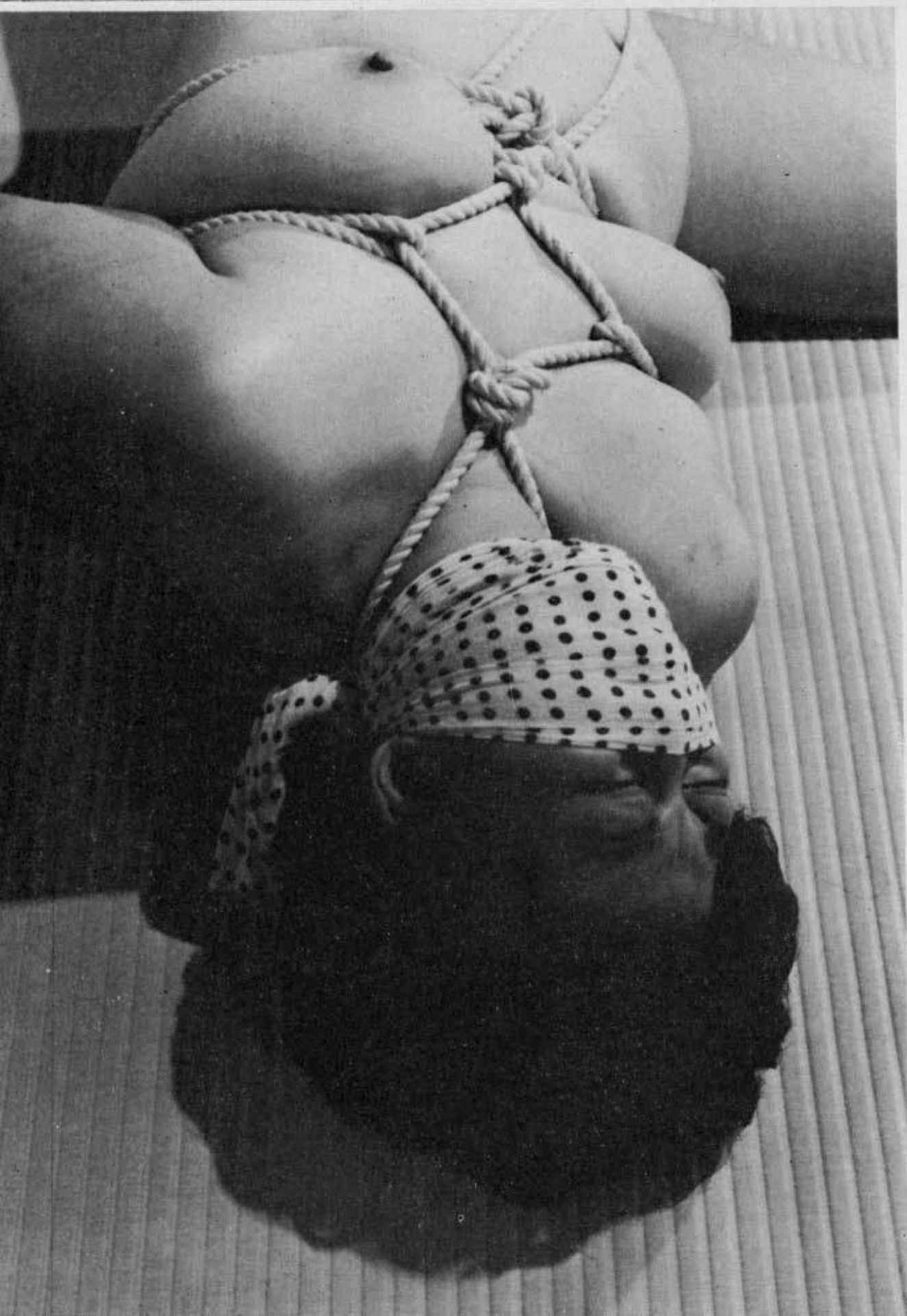
股間縛り

△安井喜久子▽



全身で惑溺

△苗木陽子▽

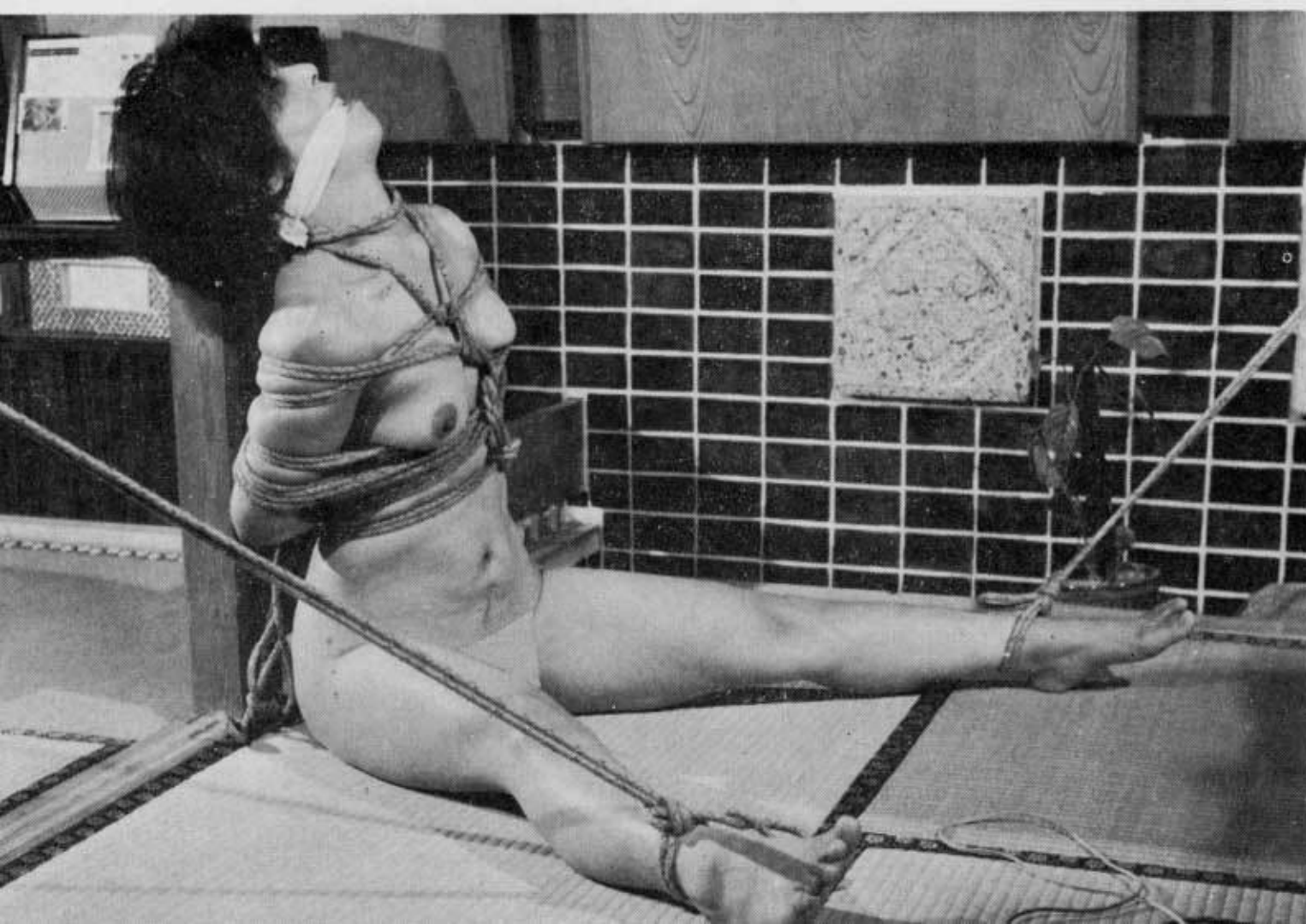




見られる快感

〔S研△ダベリ会▽の顛末〕

△矢島靖子▽





疼痛に耐える

＜前田真知子＞

刺青をめくる

＜山原京子＞







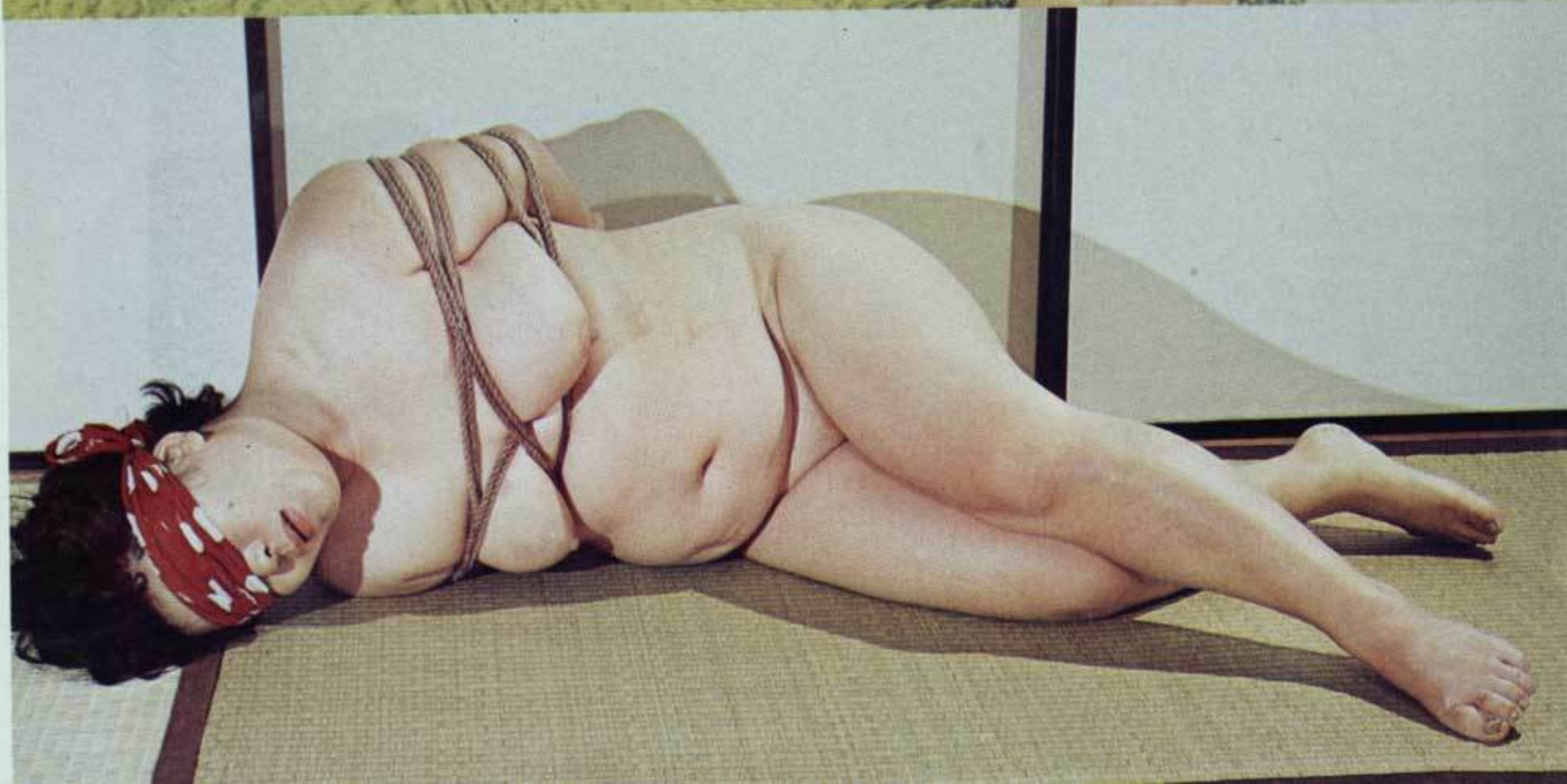












奇

譚

ク

ラ

ブ

1 9 7 4

5 月 号

＜第 28 卷 第 5 号・通刊 第 315 号＞

Ⅱ△畜化願望△の心理を解くⅡ

白豚、苗木陽子さんに憧れたボクは、彼女の△畜化願望△の心理について考えてみた。塚本鉄三氏の手によって、あれほど巧みに飼育された白豚は、自分では縛られるのは最初だと言っているが、それはそれに違いないにしても、ボクには彼女の内面的な生活に於いて、相当の自己飼育を長年月、経てきているように思えて仕方がない。彼女が「ケモノになりたい」と絶叫するきっかけになったのは、確かに塚本氏の執拗で

モデル……苗木 陽子……

手馴れた手腕に負うところが大きいだろうが苗木陽子の従前のM女とは違う「畜化願望」の情念が、ぶすぶすと、くすぶっていたからだと思ふ。苗木陽子が白豚や牝犬になり果てたとき、彼女の淫奔な肉体が、どのように人間放れした狂乱状態を見せたかと思うと、ボクの心は妖しく、ときめき、カメラ・ルポの文章を読んで体中の汗を、しぼりつくしてしまうのである。

（藤川冬一郎・記）



〔S研〕

ダベリ会

顛末記

羞恥しゆうちのなかのSエスMエム談義だんぎ

——やじまやすこ しば いきさつ——
 矢島靖子を縛ってしまった経緯

塚 本 鉄 三

それは全くのハプニングだった。SM研究会の会合に顔出しするといつて、東京から日航機で飛来した奇ク愛読の一女性が、出席者の紅一点から一転してSMプレイの主人公に早変わりしてしまったのだった。楽しかったSM談義のかずかず。それにも増して、矢島靖子さんを全裸にして縛ってしまうというプレイの御馳走には一同、満悦至極だった。



東女（あずまおんな）飛来す

私がSM研究会なるものを提唱して以来、予想外に沢山の方々から便りを頂いた。極力返事を書き、電話の可能の方には電話を掛け或は相当数の方には、お逢いもした。

東京在住という矢島靖子も、私に手紙を呉れて、そうした会合があったら、出席したいと言ってきていた一人だった。とはいっても深田菊子とか高村浩子、木村洋子、前田真知子といった女性のように、自分がいじめられたいとか責められたいとかいう意志表示をしているのでは決してなかった。

“ダベリ会”があれば、拝聴したいという軽

い気持の通信のように受けとれたので、まさか、矢島靖子が大阪まで飛来しようなどとは私も夢にも考えていなかった。ましてや、SMプレイにまで発展するとは、それこそ、予想だにしていなかった。

だから、矢島靖子が日航機で所用を兼ねて大阪へ行くから、と言ってきたとき、S研究会の中から、SM談義を交わすのに向いていそうな四人に、その旨を通知し、大阪国際空港で落ち合うことにしたのだった。

SMプレイが矢島靖子を主人公にして、出来るなんて、夢にも考えていなかったので、勿論、ダベリ会を——ということで四人に連絡したのだった。

早速、馳せ参じた四名の男性を、仮に、A氏、B氏、C氏、D氏としよう。

A氏は大阪郊外に住む自家営業の小売商の方でライトバンで直接、空港駐車場へ。B氏は北陸から新幹線で新大阪駅へ、そして新大阪駅からタクシーで大阪空港へ。C氏は四国から全日空便で。D氏は商用で大阪滞在中のため、空港バスで難波から駆けつけるという具合だった。

私が万が一、SMプレイが出来ることがあったときのことを慮って、カメラと責道具の

入った軽装備のバッグ二個を、秘かにトラックに忍ばせて、空港駐車場へ車を駐めたのは約束の時間の二十分前だった。

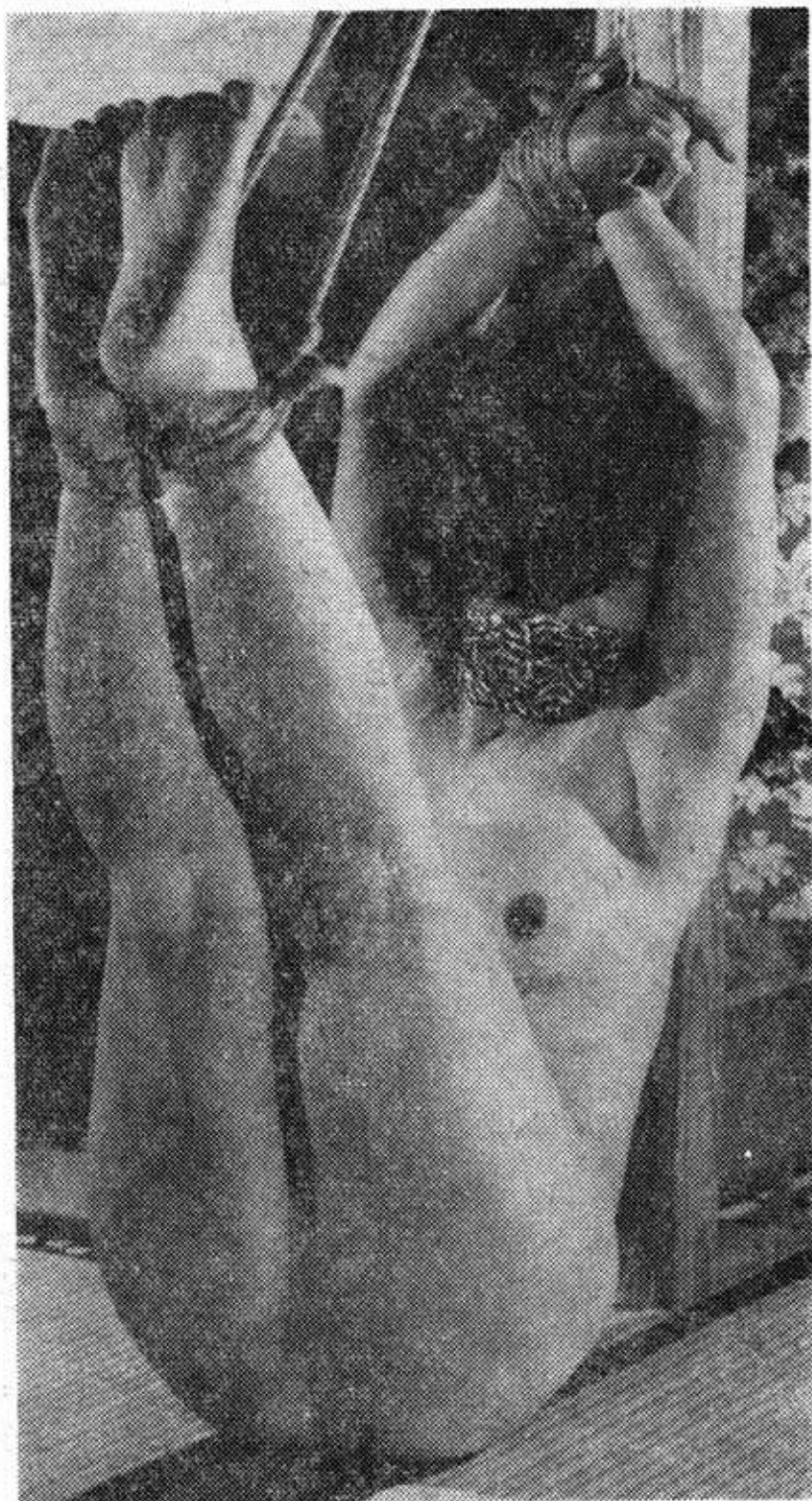
面識のあるA氏が空港建物の方から横断歩道を渡りながら私の方へ向って手を振っているのが見えた。

私が面識のあるのは彼だけだ。矢島靖子さんを含めて、B氏C氏D氏とも、手紙の交換電話のやりとりだけで面識はない。しかし、旅行社あたりが何十人ものお客を場所と時間

を定めて、小旗一本で集めているのだから、目印さえ定めておけば、ことは簡単だ。約束の時間の五分前に全員集合。

早速、国際線待合室の上にあるコーヒショップへ向う。ここは総ガラス張りで空港が目の下に見える。まるで管制塔の中にいるようだ。それにウエイトレスの制服が超ミニで、むちむちとした太股のつけ根までむき出しにしている若い女の子がサービスしてくれるので、その方の眺めも、すこぶる絶景だ。





そして、何よりも気にいったのは極めて空いていることだ。それはそうだろう、これから外国へ旅行するのに、こんなところで長居しているバカはいないだろうから。

そこで、我らS研会員の面々が、コーヒと紅茶とジュースで頑張ることになるのだが、もっとも、ここには、その他に気のきいたものはないから、まあ会計を持つ私としても大安心である。

さて、矢島靖子さんの紅一点を囲んで五人の男性が座を占める。私が各氏を紹介しない

から、お互いに何処の誰ともわからない。だが、各々奇クのファンであることについては変りはないのだ。だから、話はすぐに弾んできた。A氏が発刊されたばかりのカバーをかぶせた奇ク3月号を鞆の中から取りだしてテーブルの上へ置いた。

そう、奇クの3月号がテキストのような格好になった。口絵のこと、ルポのこと、私に對する質問に私は答えた。熱してくると、知らず知らず声が大きくなった。それに気づくと、まるで密読するように六人は額を集めて

小言で話し合った。

エッチな話題になると、みんな言い合わしたように矢島靖子の顔を見た。すると、彼女は、ぽっと頬を染めた。

そんな初々しい彼女を眺めると、言葉でいじめたくなった。

「SMプレイをやったことがあるの？」とみんなの訊きたがっている問いを放ってみる。「そんなこと、一度だってありませんわ」と答えて、再び頬を、ぽっと染める。

お互いに住所も名前も知らない——といった無責任な間柄のSMファンの集まりだ。忽ちにして、奇クの愛読者だという一女性に對して、言葉による「責め」が集中する。

奇ク3月号をテキストブックにしてのSM勉強会が、いつの間にかやら、矢島靖子を中心にしたダベリ会になったかと思うと、四人の男性の口は、ようやく滑りがよくなってきて体験やら告白やら、情報交換が次々と、行われる。やはり女性がいると話が、はずむ。

私は、どちらかというと、今までにSMの研究を、専らM女との交際の中に求めてきたようだ。何処の誰にも負けない位、二十年近くもの間、縛った女の写真ばかりを撮り続けてきた私の縄に掛かった女は、何十人に達す

ることだろうか。

先日、膨大な数のネガを整理してみて、これは勿体ないと思った。なんとか印画紙に焼付けて同好の方々に見てもらいたいものだと考えた。さて、それはさておき、今日のように男性のSMマニアの方々と親しく話し合うのも、SMを研究している私にとって、大いに参考になる。

とは言っても、私はそのとき、ダベリ会の内容を書こうなどとは夢にも思っていなかった。で、テレコを持っていたわけでもなく、またメモなどしたわけでもなかった。もっともメモしなくとも、書こうという腹づもりがあれば、細大洩らさず記憶しておくぐらいのことは朝飯前なのだが、最初から、そうした心づもりは毛頭、抱いていなかったのだ。

だから私も、のんきに構えて、皆と一緒に雑談に耽り、ウェイトレスの超ミニの品定めに参加したりして談笑の中の一員になっていた。今迄、S研の友とも何人か逢っていたが、それも、記事にするなどという気がいささかもなかったことは同じである。

先日、青木順一氏とお逢いして、三時間余り雑談した際、数多くの夫人の責め写真を見せて貰った。私にも一度、夫人を責めてほし

いという彼のたつての希望であったが、もし私が青木夫人とプレイをする機会があったとしたら、それがルポ記事になるかならないかは別にして、私のSM生活に一つのプラスを加えることは事実だろうと思う。

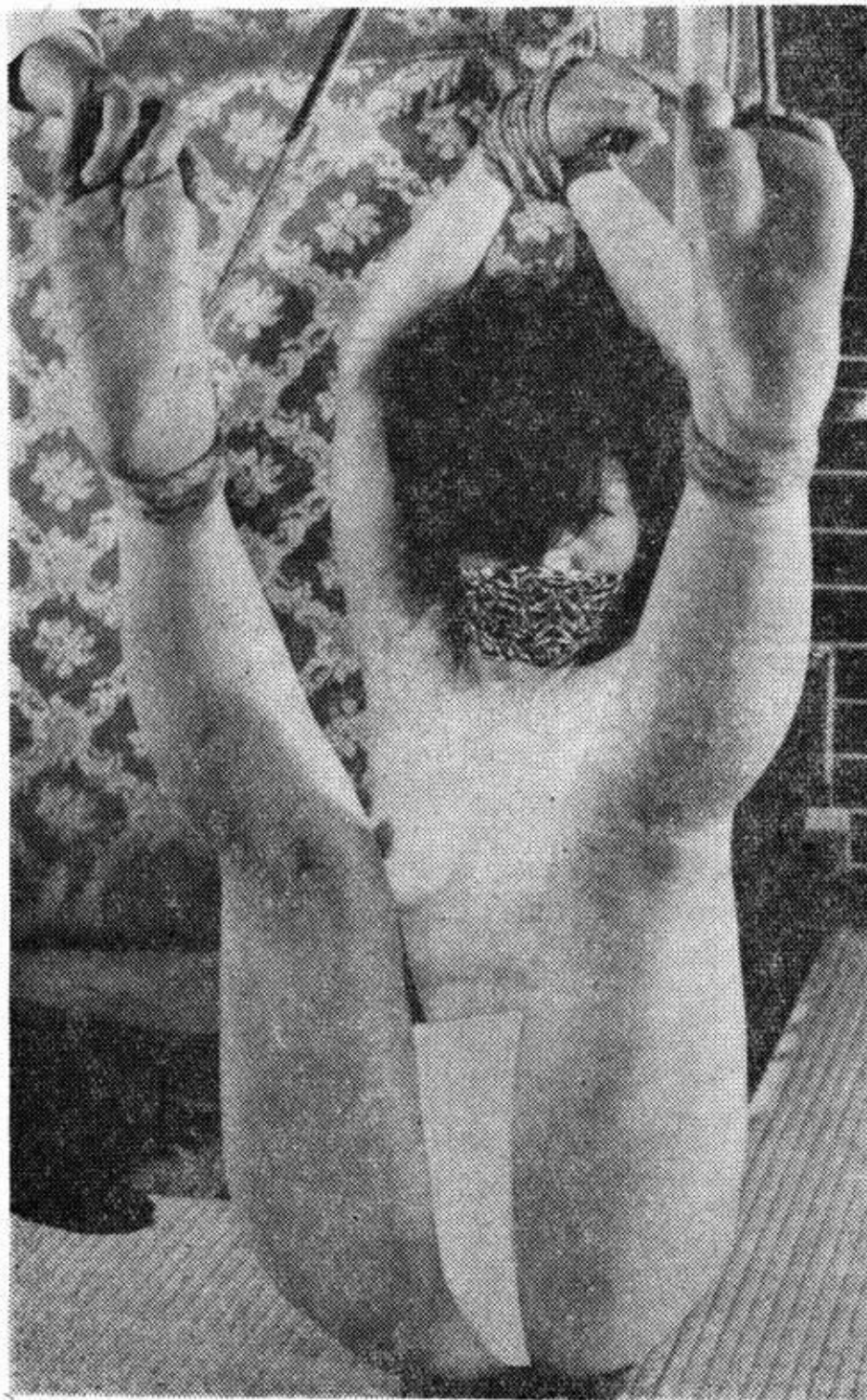
そんなわけで、私は至って、リラックスして、この会合に顔を出していた。

矢島靖子という奇ク愛読者の女性にしても私は詳しいことは知らなかったし、知ろうと

いう努力は特別にしなかった。虚心坦懐、彼女が手紙で書いてきた範囲と、ここへ来て喋ったこと以外は、何も知らなかった。

それが、話の途中から、妙な方向へ進展していったのだ。多分、あくまでも明るい部屋の雰囲気と、抜けるように青い冬の澄んだ空気に魅せられてのせいだったのだろう。

誰言い出すともなく、彼女を縛ってプレイしたら……という話になった。矢島靖子は、





それを聞いて、目もとから頬にかけて紅を散らしながら、「私、そんなこと、とても、できっこありませんわ」と尻込みしていたのだが、無責任な男たち（名前も住所も喋っていないのだから）の無責任な強要（やはりSだけのことはある）と言って悪ければ熱心な口説きが、やがて効を奏した。

執拗で、強引なのは、こんなときには効果

的なのか、或は彼女が、もともとプレイの主人公になることを覚悟してきたものなのか、そこところは私にも、しかとはわからないのだが、とにかく、いつの間にやら彼女は、SMプレイをすることを承諾していた。いや実際は、承諾させられていたといった方が、よいかも知れない。

彼女は言っていた。

「私、地元の東京でだったら、絶対にいやなんです。でも、大阪まで出てきましたから、そんなに言われるんでしたら、生まれて初めてなんだけど、やってみようかしら」

そうと話がきまれば、善は急げだ、彼女の気の変らないうちに、SMプレイの段取りをやってしまおうと、一同は彼女を取り囲むようにして空港駐車場へと足早に向った。

空は澄んでいて、つい今さっき離陸したばかりの航空機が北摂の山の上で、大きく旋回しているところだった。ジェット噴煙が輪を描いて軌跡を、はっきり残していた。

SMプレイに熱中すること

二台の車に分乗した総勢六人の男女は、空港駐車場を出発した。

こうした事態を予測していなかったのも、私は適当なプレイの場所を予約しているわけではなかったから、全くの行きあたりばったりだ。とあるホテルの駐車場が広かった、という只それだけで、車をすべり込ませた。

私にしても、こんなハプニングでもない限り、こんな文章を書くこともなかったのだ。矢島靖子の緊縛写真が、撮れなかったとした

なら、そんな意欲も湧く筈もなかった。

ホテルでは、人数が六人だから、三部屋を借りてほしいという。それはいいとして、広い部屋がないかと尋ねたが、今はふさがっていて、狭い部屋しか空いていないということなので、どうも仕方がない。

その狭い部屋に六人が集合したが、とにかくプレイをするのには至って狭い。とにかく借りたのだから——と、四人の男性は、自分の部屋の風呂へ入ると言って引き揚げた。

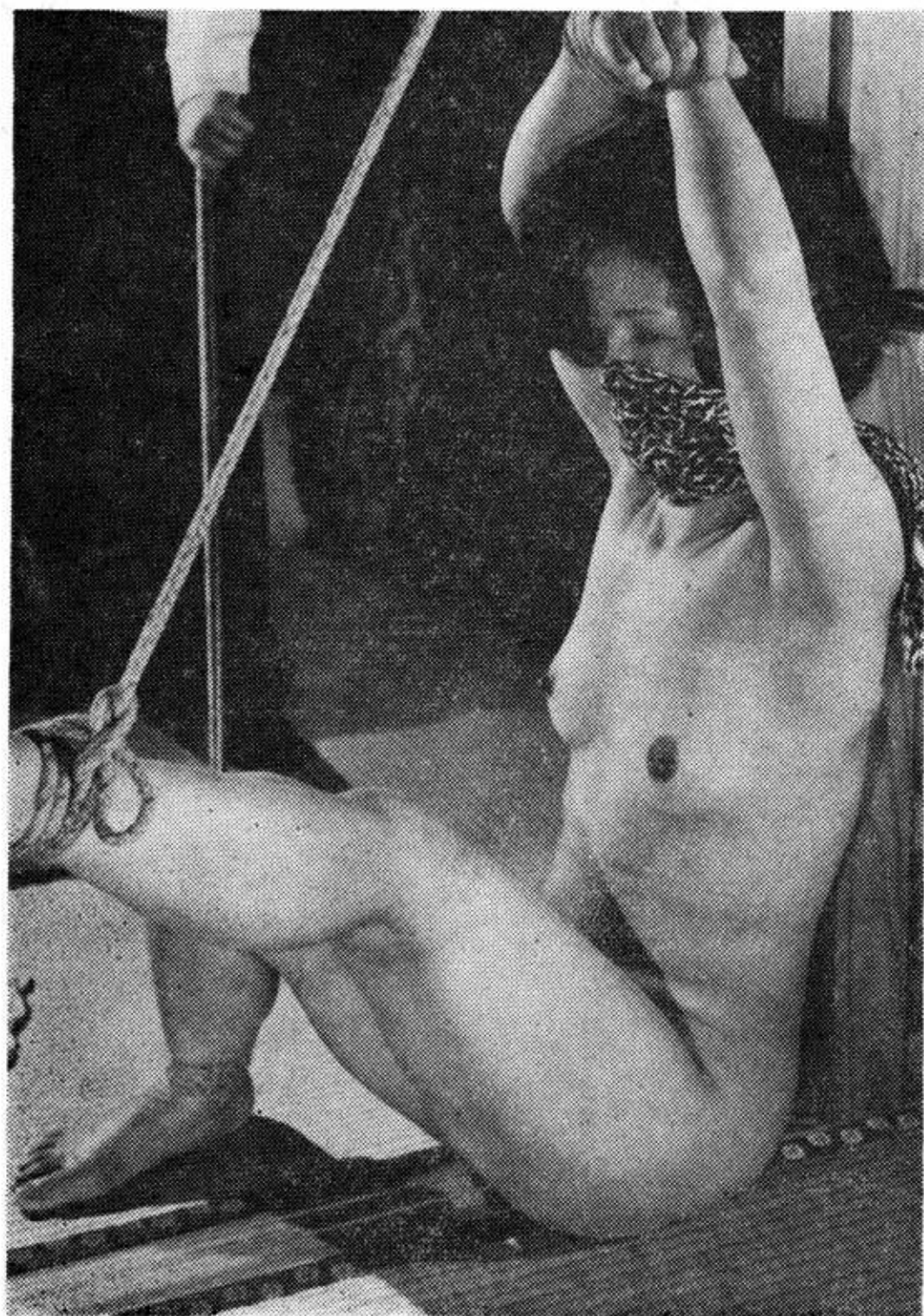
私は矢島靖子と二人になる。

そこで私は、プレイフォトの撮影についての承諾を求める。なんといっても奇巧の愛読者だから話は、至って手っとり早いが、彼女は写真というと尻込みして、いささか難色を示して、消え入りたげな風情である。

私はA氏に鞆二個を、すでに運び込んで貰ってある。SMプレイをOKした以上、写真撮影も、恥らいのなかで、やっと納得した。

彼女に入浴を促しておいて、風呂から上ってきた連中に手伝って貰って、プレイの場所作りをやる。人手が揃っているの、忽ちのうちに、準備が出来上ってしまった。

彼女が入浴している間、五人の男たちは車座になって、SM談義に花を咲かせる。とり



とめもないエッチな話ばかりだ。

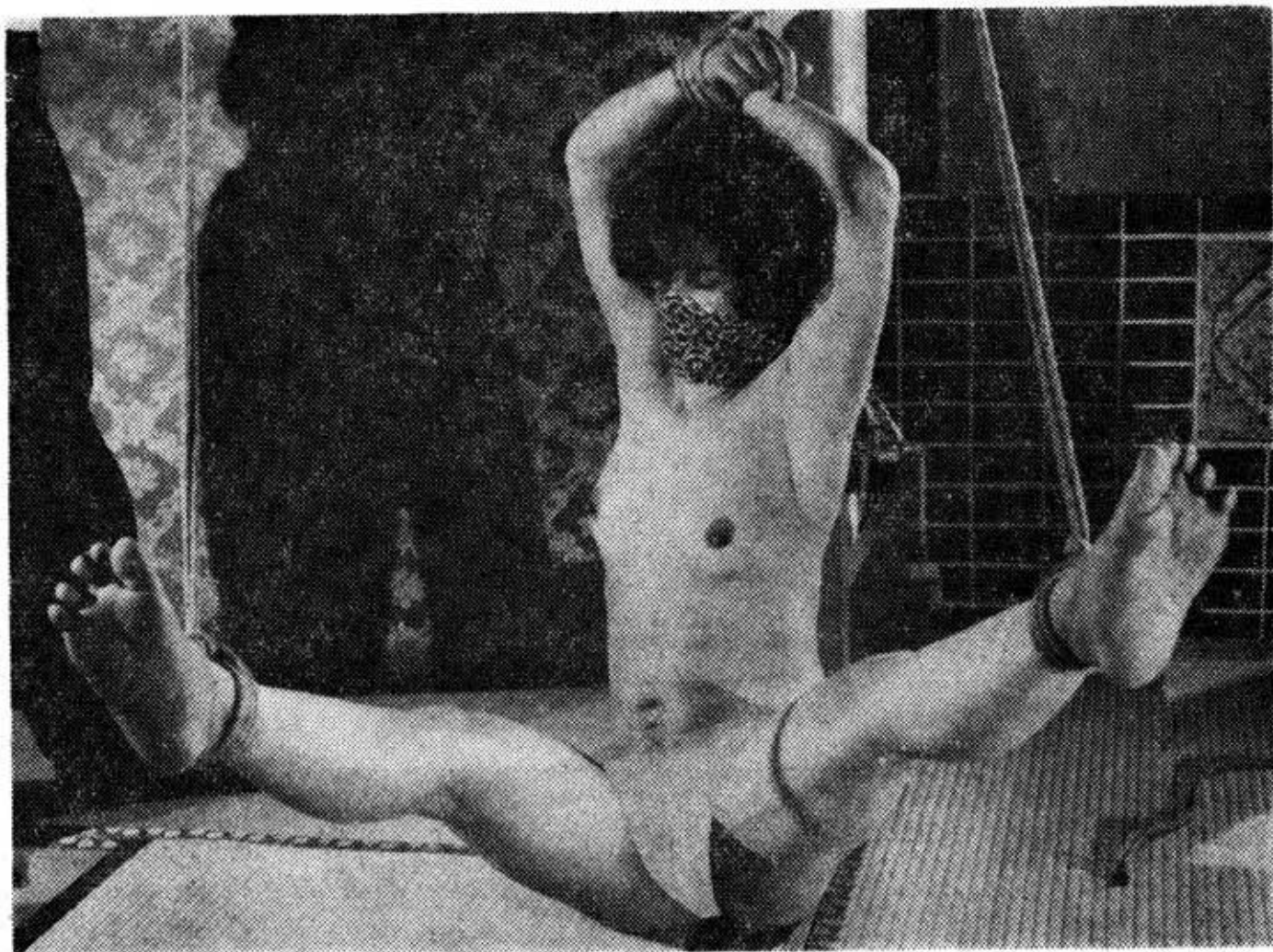
皆の胸の中は、矢島靖子を、私が、どのようにして責めるのか、彼女は、五人の男の前で、どのようにして責められ、そして恥じらうか、と、そんなことを考えて、わくわくしているのに違いなかった。

やがて、彼女は風呂から上ってきた。

上気した顔で、浴衣をまとっている。

そこで皆は、私がどのようにして矢島靖子を縛るか、見守っている。

私は無言で彼女の浴衣の肩口を脱がそうとした。だが、彼女は襟口を両手で掴んで脱がさせない。仕方なく、私は前で蝶結びにしてある紐を、ちよいと解いた。



「あれ？」
いつの間に着けたのか、下には、ちゃんと

両手をうしろへ回して、す早く、手首を縄で縛る。初めだからと思って、私は特に柔らか

シユミーズを着ている。裾に手をやると彼女は襟元の手を離したので、さっと浴衣を剥がす。

「ね、ね、ね。私、痩せてるから、これだけはカンニンして……」

「痩せているということは、スタイルがよいつていうことでしょう。それにね……」

あとは、私は彼女の耳元に口を寄せて低音で妖しく、ささやいた。

「あの人たちが、貴女の裸を見たくて、うずうずしてるんですよ」

「まあ！」

矢島靖子の頬に、紅が散った。よく、顔を赤らめる女性である。

「だから、肩だけを、はずしましうね」

肩の吊紐をずり上げると、

いマンドラの縄を持ってきた。最近は、とんと余り用いない縄だ。

シユミーズをパリりと落すと、案の定、下には、ちゃんとパンティを穿いている。

「まあいいや、こんなものは、いつでも、好きなときに取れるのだから、それまでの楽しみに置いておこう」

そう心づもりして、私は胸に縄をかけてゆく。彼女の言うように、ぺしゃんこの胸だ。縄が、その可愛いらしい乳房の上と下を痛々しくくらいに通ってゆく。

そのときの彼女の羞らいは、また、なんとかしたことだろう。だが、考えてみれば、それは、そうかも知れない。四人の男たちの八つの目が、じっと彼女の方に熱く燃えるような視線を注いでいるからだ。

私は一本縄で、するすると高手小手に縛っておいて部屋の真中の柱の前につれてきた。四人の視線が、彼女が移動するに従って、粘っこく、あとを追う。立たしておいて縄尻を柱に留めた。

あとは、このパンティを脱がすだけだ。

「ほっ」と、A氏が溜息をつく。

「ふーん、こうして縛るのだナ」とB氏。

「さあ、とにかく、写真を撮ろう」

いつの間にやら、写真を撮るのが、あたり前のような空気になってきた。今日は助手のライトマンが何人もいるから大助かりだ。各人一個宛のストロボを持ってそれぞれ私の指定した場所に位置して貰う。

私は縄でへしやげた乳首を掘り起すふりをして、乳房を縄の間から顔を出させる。

「ああ、あああ」

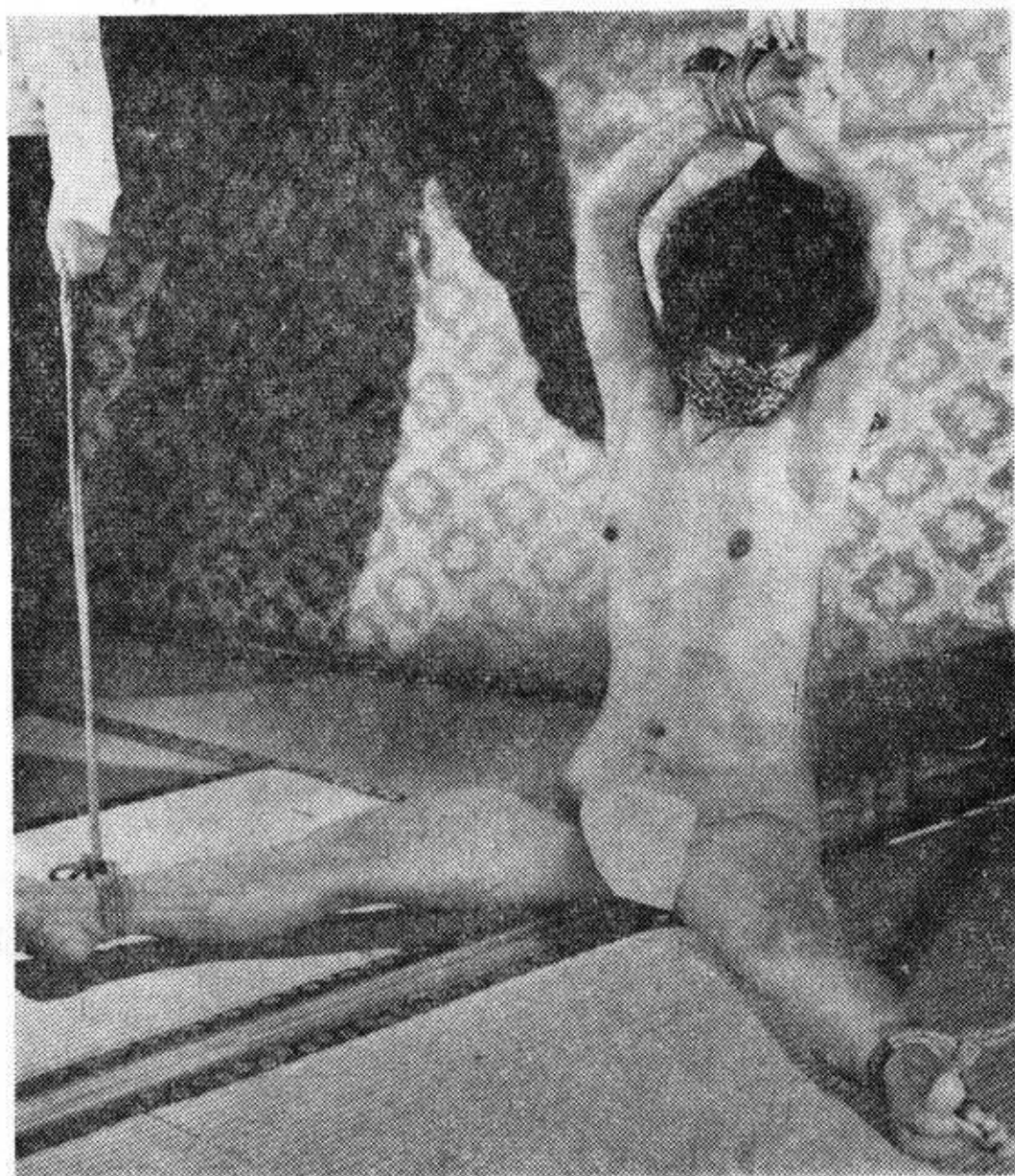
彼女の顔がのけぞり、目もとがほんのりと赤くなる。別に、乳房を揉んだって、わけではない。私が、ただ近づいただけだ。

一瞬の隙について、さっと私はパンティを、ずり下していた。四人の視線が、つと移動する。あっと言う間もない早業だった。

彼女は、身も世もあらず、全身をくねらせて身もだえする。

だが、如何に見られようと、後手に縛られて柱に固定されていては、もう、どうしようもないのだ。

観念するほかはなかった。



「それっ、始めるゾ」

私の合図で、四つのストロボが、一斉に彼女へ向けられる。私はカメラを構える。

今や、矢島靖子は、五人の男性の重囲のなかに、その縛られた裸身を晒しているのだ。

女性に見惚れていて、ストロボの発光面が他所を向いているC氏に注意をする。

依然として、彼女の羞じらいは、つづく。

シャッターが落ちて、きらめく閃光――。

「ハハンこうして撮るのか」

D氏の嘆声が洩れた。

消えいりたいばかりの恥かしさに身を焦がしている女性の風情というものは、なんと美しいものであるうか。

なよなよとして、今にも、くずれ折れてしまいそうになる靖子の瘦身。もがけばもがくほど、縄が皮肉に喰い込んでゆきそうだ。

シャッターを切り終わると期せずして、四人は女体のまわりに集まる。

彼女は、ますます恥かしがる。

「僕にも、ちょっとぐらい、このあたりを、触わせて下さいよ」

B氏が縄目の間の乳房に割り込んでくる。

肩も、お尻も、四人の手には、物珍しさでは例外ではない。

勿論、私とて、矢島靖子の縛られた裸身を

見るのは初めてだ。それは奇ク愛読者の方々にとっても同じことだと思う。

今日は、その愛読者の代表として、四人の方が、助手を勤めて下さっているわけだ。

「縄がほれ、ここに四本あります。どなたか更に、この上から縛ってみませんか？」

私は長短四本の縄を手渡す。

「どんな風に縛るんですか？」とC氏。

「どんな縛り方でもいいですから、好きなように、やってごらんなさい」

三人がかりでの女体縛りが始まった。少し締め具合が緩いが、まあ、いいだろう。

調子が出てきたところで、二人に両手でストロボを持ってもらい、あとの二人で責めの介添えをしてもらうことにする。

も早や、矢島靖子は嵐に襲われた小舟のように、今やメロメロである。どうやら、彼女も典型的なマゾ女性のようなのだ。

といって、初対面の私には、彼女との心の交流というものは、いささかもない。只、物理的に責めているに過ぎない。

もう一人で立っているのが、やっと——という彼女の髪の毛を驚づかみにして、ともすれば消え入りたげな顔を正面向かせ、また、首に縄を掛けて引っ張り、倒れてしまいそう

になるのを防いでおいてシャッターを切る。

そこは、やはり奇クの同好者でS研の友だちのことはある。

一を聞けば十を知る早さで私の意図を、す早く察して行動してくれる。だから、予想外の短い時間で、何枚もの氣にいった写真が撮れた。

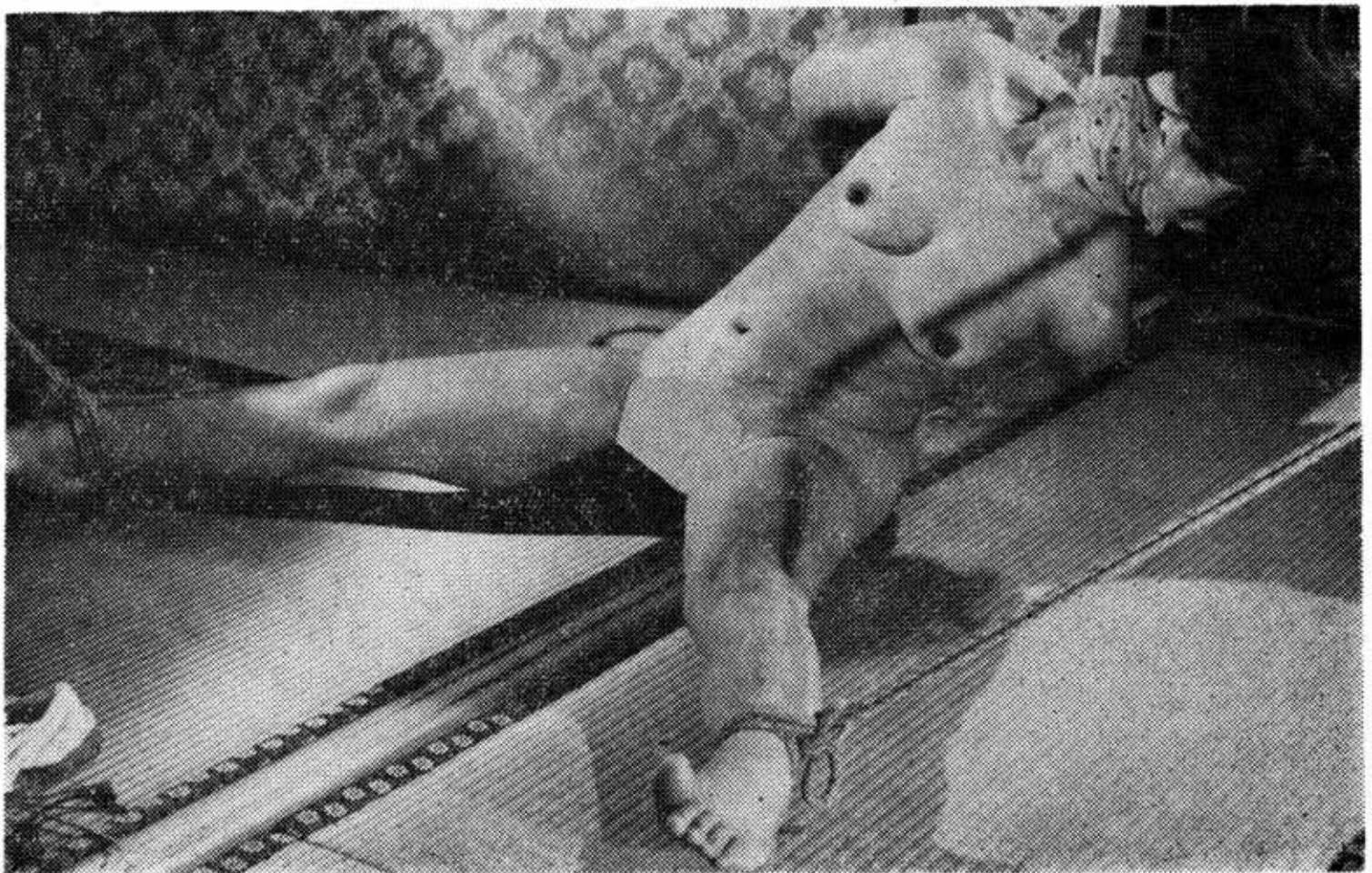
特別に変った責めをやらなくても、矢島靖子は縛られただけで、そして、見られているだけで、悶え、くにかくにやになっ

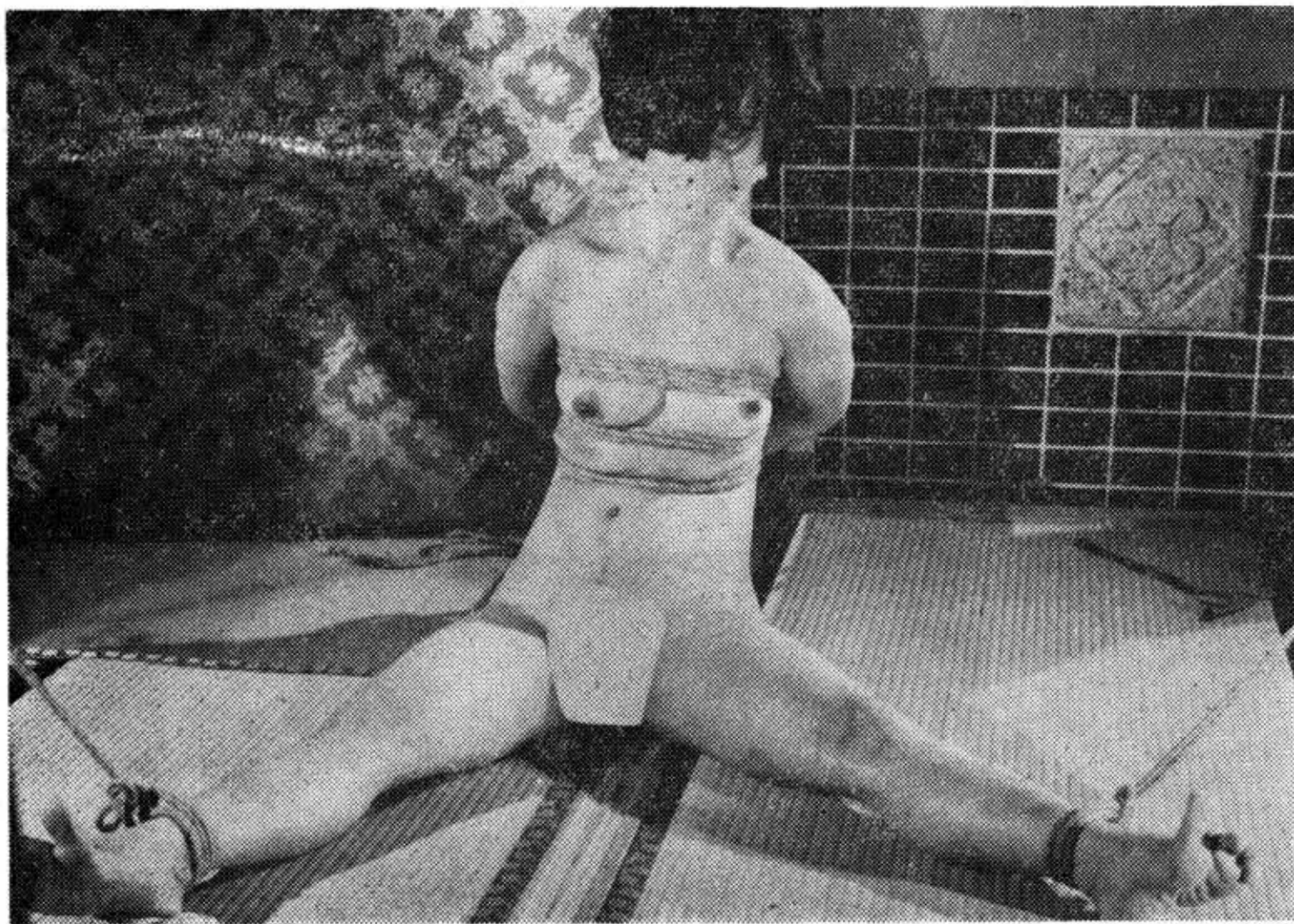
た。ポーズをとらせると、綺麗な足の拇指が、ぐぐっと、力が入って、そりかえった。

私は、何枚となく写真を撮った。

可愛い顔が、苦痛と羞じらいに、のけぞると、可憐で食べ

てしまいたかった。上半身は縄で締めつけられて痛々しいほど細く、痩身だったが、下半身には案外ボリューム





があった。太股の肉が盛り上り、ピンク色の膚が、はちきれそうだ。

全体に、そう肉づきのよい方ではなく、どちらかといえば、ファッションモデルタイプだが、いろいろに責めてみると、風に吹かれた柳の枝のような強靱さがあった。

「彼女は、きっとセックスの味はいいよ」

私はA氏の耳元で、ささやいた。

そんな私達の私語も知らぬげに、矢島靖子は、畳の上に縛られたまま、ころがされている。これで、何度縛り直したことだろう。

解くのも、縛るのにも、人手には事欠かない。最初裸身を見て考えたときよりずっと辛抱づよい。それにタフだ。いや、マゾといった方が、よいかな。

縄目が痛くないかと尋ねても、「いいえ」と答え、休憩しようかと聞いても、「休まなくてもよい」と返事する。

縄で縛られた法悦境を、少しでも長く味わっていたといった様子が、ありありと窺えこれは、私たちにとても勿怪の幸いだ。

女体が一旦、こうした恍惚状態に陥ってしまうと、体に力が入らないのか、まるで水母のように、くしゃくしゃにやだ。

男たちの熱っぽい視線が、全身に注がれているのを意識してか、しないでか、彼女は目を閉じて畳の上に横たわっていた。

「きれいな足をしていますね」

A氏が投げだしている足首を手を把る。

「写真は、こんなにして撮るんですか。雑誌を読んでいて考えたのとは、大分、違うな」D氏が感心したように言う。

「まあ、今日のところは、こんな具合です。でも、一人で責め役、写し役を兼ねていると中々重労働ですよ。今日はカメラは三台ですが、多いときは五台、使いますからね」

「このカメラなんか、凄く重いですナ」

「ゼンザ・ブロニカですよ。グリップをつけていますから、重くても持ち易いことは持ち易いですが、長いレンズをつけると不安定に

なりますし、こんな狭い部屋だと、ヒケがなくて困りますね」

そんな雑談を交している間も惜しく、私は畳の上にのびている矢島靖子を抱き起す。

太股に力が入ってピンク色に鮮やかに染まった肌にライトが映えて、テカテカと光る。

まるで水に濡れた紅ホウズキのような美しさだ。惚々として眺める。

「誰か、こうして責めてみませんか？」

私は手本を示す。

B氏が先ず手を差し伸べる。

粘土細工のような女体が、くねくねする。

優美でそして、あでやかだった。

色気を抜きにして、虚心で眺めて

いられる風情ではなかった。皆の咽

喉が、ぐっと鳴り、生ツバを飲み込む音がした。

落花狼藉落花紛々

SMのことについて、齒にキヌをかぶせず



に、好き放題に喋り合うことが出来るというのは、こうした同好者なればこそだ。

私にしたって、二十年近くも、縛った女の写真ばかりを撮ってきたといっても、他では一向に自慢話にもならない。いや、むしろ、そんなことを軽々しく喋ったりしたら、変人

扱いされるのが関の山だから、塚本鉄三というペンネームを使わないときは至って真面目で謹厳な顔をしている。

それが、こんなSM同好者と一緒になったときは、いっぱしの先生呼ばわりされて、悦にいつているのだから世話はないわけだが、これも人生の一部リクリエーションの一部だから、いいじゃないか。

ここに出席された男女五人の方々もきっと、そうだろうと思う。実生活の面では、真摯な紳士淑女であるに違いない。そんなことを忘れてダべっているから、肩がこらなくて楽しいのだ。

女を縛って、猿ぐつわを噛ませたり毛髪を驚づかみにして、顔面を仰向かせたりすると、まことに絶妙な美しさを見せる。それも瞬間、チラリと見せるときがあるから、目が放せない。矢

島靖子にしたって、コーヒ・ショップで真面目な顔をして、神妙にSMばなしを聴いていた時と、今とでは、もう、がらりと様相が変ってしまったっている。

全裸にひん剥かれて縛られてる——というそれだけで、魅力的なのだ。

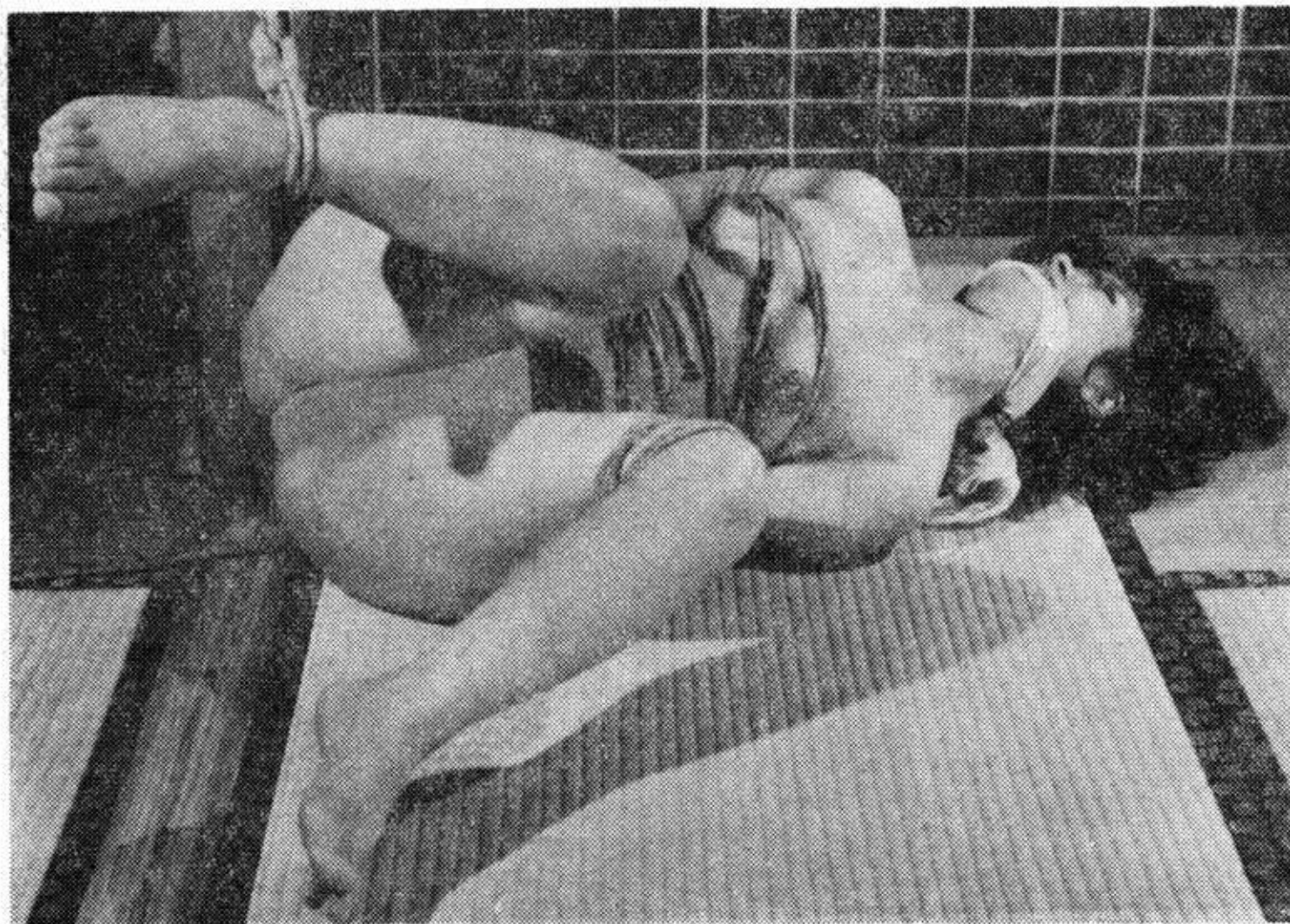
四人のSMファンも、一人じゃないという、衆をたのんでハレンチになっていた。四人で思い思い、好き好きに『女を責めている』という愉しさが、とても、たまらないのだ。

靖子の髪の毛を掴んで引っ張ると足が空を蹴って舞いあがり、足の拇指が、きゅっと面白いように、そこかえる。それが、奇妙にエロチックなのだ。

太股の艶々とした皮膚の脂ぎった輝きを、私たちの目の前に晒しているといったことも閨房のムードを、さらけだしているようで、何ともはや、色気があって、あって、たまらないのだ。

誰も考えていることは一緒だ。左右の足首に縄を、からませる。私はマンダラ縄を六本、準備してきているから、数には、こと欠かない。

それに人手も、たっぷりある。両側から足首を縛った縄を、ぐぐっと引っ張る。当然のことながら、靖子は膝を開かせまいとして、必死になって両足に力をこめる。



男たちは面白がって縄を引っ張る。そんなプレイも、そう長くは続かない。

やがて、靖子の脚は、左右に大きく開かせられてしまう。男は、いくつになっても、そんな遊びには熱中するものだ。

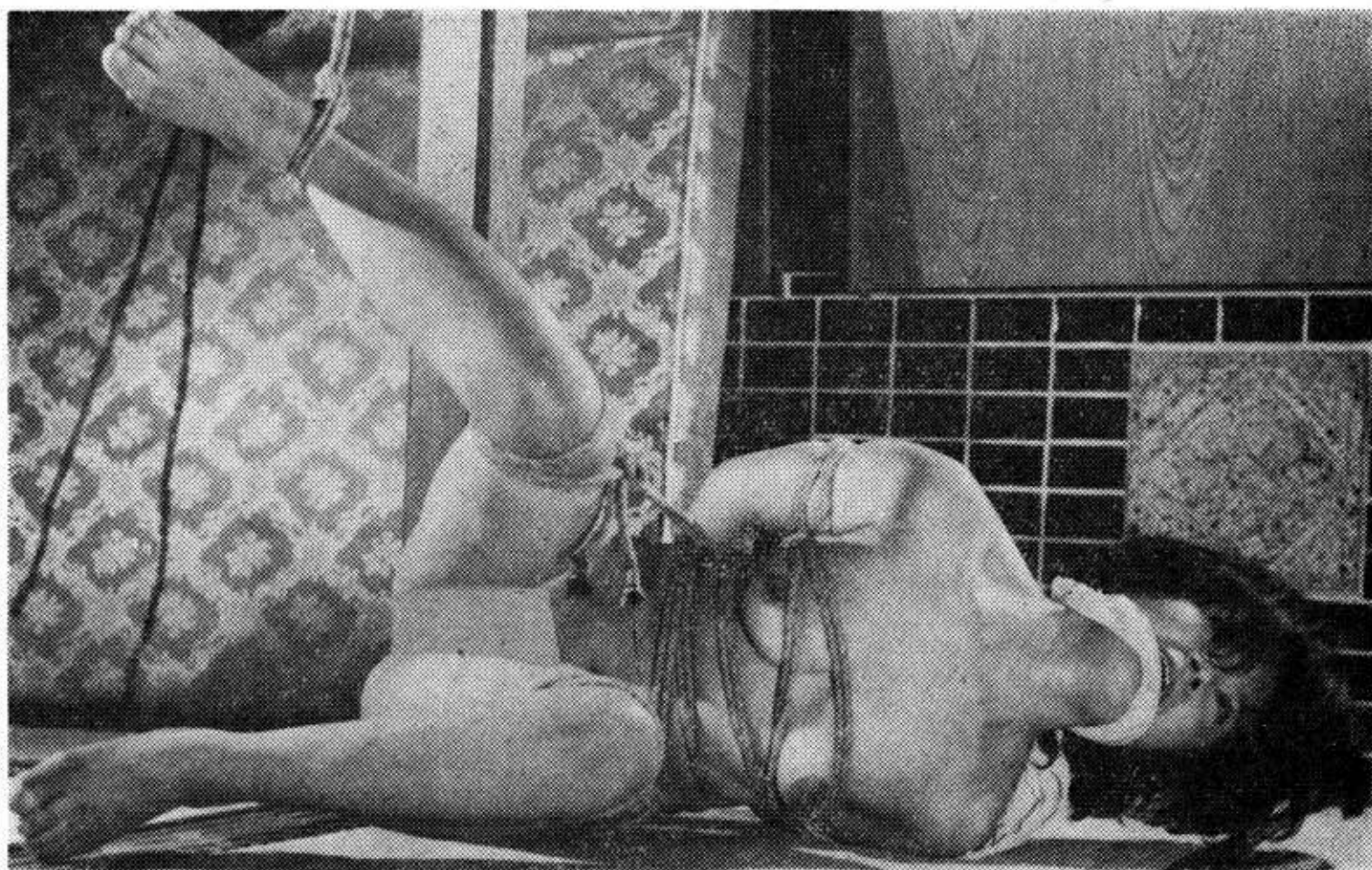
八の字から一直線になるまで開ききってしまうと、今度は足首を上へあげさせて、あられもない格好にしてしまう。

矢島靖子の端正な顔が、羞恥と苦痛にゆがんでいるのがとても美しい。

こんなに沢山、写真を撮ることが出来るのだったら、もっと事前に、責めのアイデアを考えておくのだったと後悔した。

やはり、どうしても、私が縛り、そして、責めの趣向を考えることになってしまう。もともと、今日のS研の友の選考も、ダベリ会という最初の狙いだったから、実践派の方々は敬遠したのだ。

私にしたら、どうせ、初対面から即SMプレイ即写真撮影——といったケ



ースは、今までに数多く経験しているから、その点は、いいのだが予測せずして、責め写真撮影、兼SMプレイということになると、やはり、事前の心づもりは、欲しかった。

東京から、わざわざ遠来の客として、顔を見せられた彼女のことだ。ひょっとしたら、もう二度と来てももらえないかもしれない。

とにかく、白黒フィルムとカラーネガ、カラーポジのエクタクロームと、三台のカメラを駆使して撮るだけは撮った。

あとは、四人の男性と一人の女性とが、SMについて、どれだけ楽しむかだ。

私はカメラを手にしたまま、彼等が靖子を責めているのを、ぼんやりと眺めていた。

全く無邪気なものだ。丁度、少年が玩具で遊んでいるように——
 といって、私は決して、それを幼稚だとか馬鹿気たことだと思っているのではない。いや、むしろ

そこに、嘗ての自分の姿を見て、心のなごむものを覚えるのだ。

私は——女を縛って写真に撮る——ということに、内心忸怩たるものがあった。そうした異端の心を喜ばない、自分の心の一隅が、いつも気にかかっていた。

それが、こうしたSMの同好者と一緒にいるときは、心の安らぎを覚えるのだった。

「いや、いやっ。そんなこと、いやっ」

矢島靖子の甘ったるい嬌声がした。

四人の人垣が、ゆらぎ、そして、その中の一人が何かを、やっている。

そうした光景を、私は白昼夢でも見るように、ぼんやりと眺めていた。

ああ、SMプレイの妙味

全国の熱心なファンの方々やS研賛同者の方々からの便りは、ともすれば沈み勝ちになる私の心を励ましてくれた。

極力、返事を書き、そして、電話をした。

二月初めに銀行振込みの電話料の明細が届いたが、その金額が平素の月の五倍に達しているのを見ても、如何に私が長距離の電話を長時間、掛けたかの証左になると思う。

今、この原稿を書いていて、二通の誌友からの便りを貰った。名前を伏せて、参考までに転記することを許して頂こう。

☆

塚本鉄三様——。

奇ク十二月号で塚本様の「SM研究会」の提唱を目にし、すっかり賛同し、そのまま心に沈黙させ、機会を待っていたのですが、その願いに拍車をかけましたのは、苗木陽子女史という稀にみるモデル使用による迫真のSMルポです。

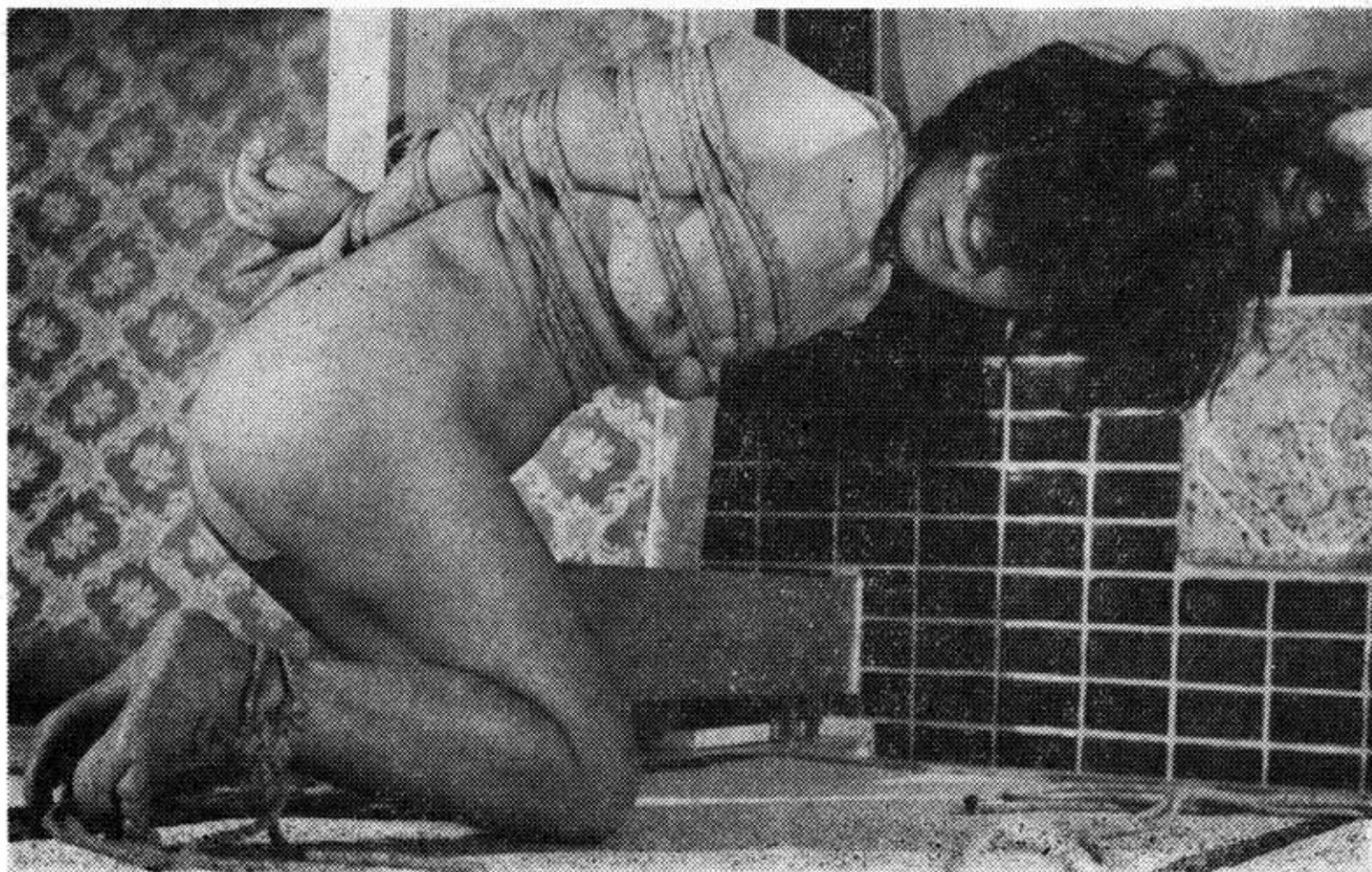
『豊満女性願望』というより、フェチシストに近い私は、そのものすごいポリウム感と「恥態」に圧倒されたのです。せつかくの名文でありながら、生来の遅読のため、やむなく拾い読みをし、自らの興奮度に合わせて、プレイ状況をイメージし、煽情的な核心部分だけを、その心理的ニュアンス共々味わい、その性のドラマの巨大な波のうねりに合わせて自らを、もてあそび、プレイ者としての氏と私とが、いれかわり、緊縛された女体の淫液と臀部の感触を肌に感じたときと夢想した時点で、私は頂点に達していました。

その登りつめた悦楽は、気の乗らない女性と行為するの比ではありません。小生、命と

燃えた女性に失恋し、心身虚脱の谷間を彷徨し、その女性が、たまたま60キロもあった為、それに似た女性を追い求め、ついに数年以前から、太った女性以外は女にあらず、太った女性以外では燃えないという性向の男になってしまいました。

失恋後、ふとした契機でサドを読み、その人間存在の広大な深淵に驚き、且つ狂喜しました。つぎに、『O嬢の物語』『家畜人ヤプー』へと進み、精神の禁忌としての、またそれ故に価値あるSMの世界は、私の虚飾の世界を照らし増殖し、例えば空想だけとはいえず鋭化し、拡大されるばかりです。しかし、夢想は夢想。やはり具体的な形を持たないと中途半端のような、なにか物足りなさを覚えま

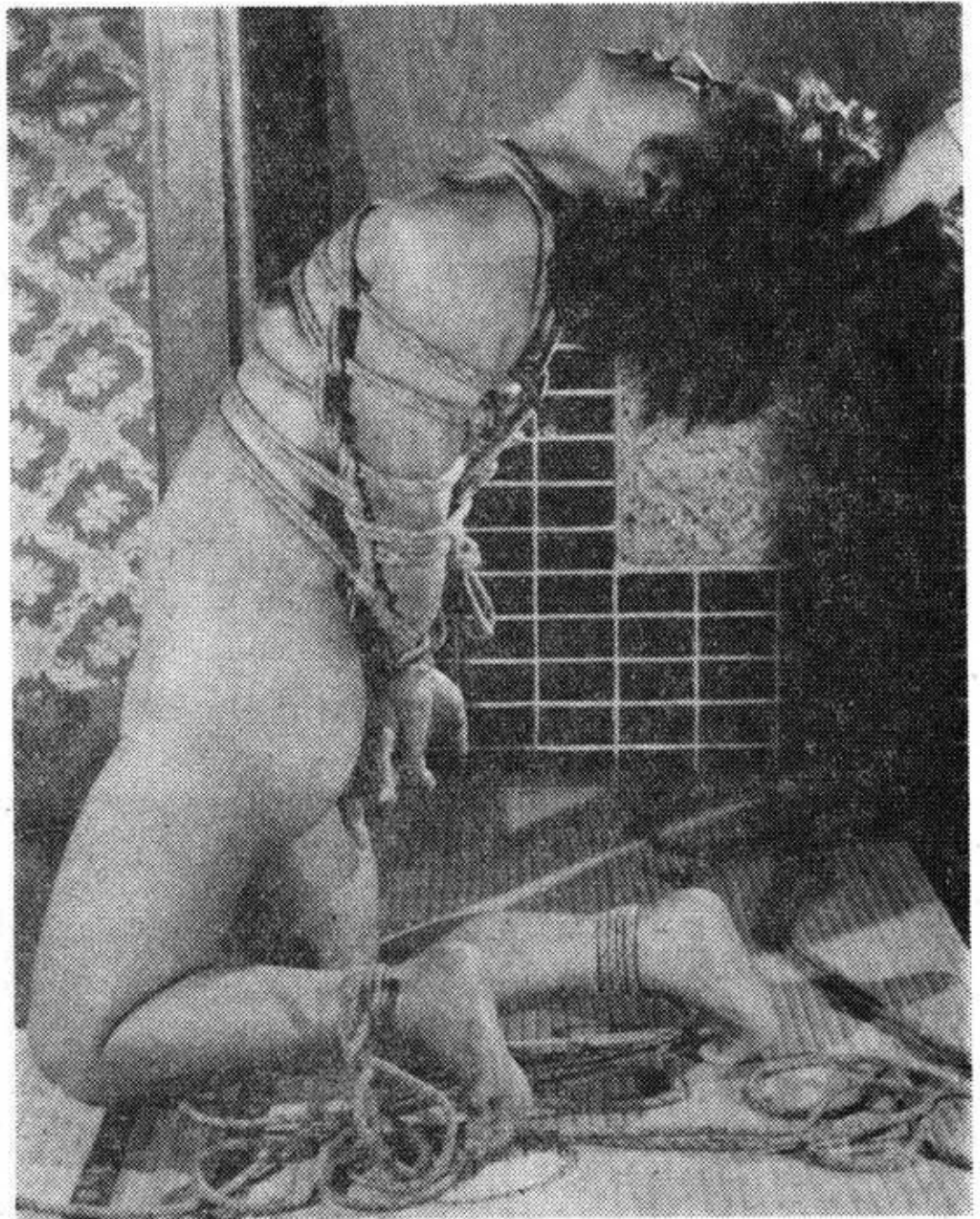
す。幸い、塚本様の「研究会」提唱は、私にとって、また多くの悩める友にとって、救いの神であり、私は、この機会を奇クを初めて手



にして以来、何年間も待ち望んでいたのです。

それを提唱なされた氏の繊細さと明哲さはルポの文章と写真の撮り方に溢れており、その寛容さは、とかく秘められたものになりがちな、この広大無辺な世界に、数多くの花を咲かせようという温情に満ちています。と同時に、この世界への氏のなみなみならぬ打ち込み方は、男女の性を超越した業というか、内奥の精神の黒い輝きを希求するという意味で、太古、われわれの輝きであったディオニュソスに捧げられる祭儀なのではなからうかと、その求道的な精神を思うにつけ、幼稚な推量ながら、氏の胸の内を、おもんばかりです。

私自身のS的経験といえ、とうてい、氏の足元にも及ぶものではありませんが、五、六年前、ある豊満な女性（65キロ位）を相手に鎖、仮面（ドクロ）模様の刀剣などを使用して手動シャッターによるカラー写真を数十



枚撮り、保存してあります。

経験はそれだけですが、SMへの趣向は常に胸のうちに疼き、一対一のプレーは、もとより、複数のプレー、猥褻観察、蛇と女、その他、男女の性意識を倒錯させたテーマ等々を空想しています。

とにかくS・Mでは幼稚園児に等しい私で

す。助手でも何でも、氏の御指導でSMの真髓に身を以て開眼したいという欲求で、いっぱいです。その後SM研究会は、もう結成されたのでしょうか。されたとすれば、今、男女各何人位、加入しているのでしょうか？

カメラの取材よりも、プレイそのものに、打ち込みたいとの事です。が、視姦的願望の極度に強い私に、カメラを持たしていただけないでしょうか。（プレイそのままだら、最高であるのは、いうまでもありませんが……）

いまは、私にとって豊満の女神ともいうべき苗木陽子様に向って、心は燃え上っております。（彼女を熱望する諸氏の中にあって、この願いは身勝手かもしれませんが……）

彼女の生命の泉と呻吟にまみれながら、巨大な臀部に、顔を埋めて窒息したいという願望。彼女も乗気であるという研究会。いまは



只、何がなんでも加入したい、加入させて戴きたい。SMの世界への開眼を契機に、満たされなかった実人生を光輝あるものとして、この手に握りたい。ひたすら、そのみ切望するばかりです。△後略、原文のまま▽

☆

この書面の主は、白豚こと苗木陽子のように

な肥満体の女性が、お好きなようだ。たしかに、苗木陽子がカメラ・ルポに登場してからというものは、太った女性が好きだというマニアの便りが沢山、きている。

だが、世の中は面白いもので、痩せた女が好きだという人も極めて多い。この靖子にしたら、顔は細面で身体は苗木陽子なんかか

ら比べるとギスギスだ。とは言っても、骨だらけというわけではない。要所要所には、肉が適当についていて、スタイルとしては、万人向きのする、ほっそりした身体つきだ。

こう、抱きしめてみると、胸と両腕の中で溶けてしまいそうになる。"か細さ"を秘めてはいるが、少々の責めには、こたえないような、しぶとさも具えているようだ。

縛られた裸身を四人のS好みの男性に囲まれた靖子の投げだしたように開股された太股が淫らなまでに艶々しく輝いているのが、私の目に映った。

と、そのとき、「あ、ああ、いや、いや」という彼女のハスキーな吐息が洩れた。

四人は、靖子に対して、どんな責めを加えているのだろうか。

ふと私は、自分だけが入浴をすましていないことに気づいた。カメラを、その場に置くと浴室へと立った。

明るい陽ざしの射し込む昼風呂は、また格別だ。外は寒風が吹き荒ぶというのに、ここばかりは、春風飴蕩の極楽の境地である。

入浴している間に例の一通を紹介しよう。

☆

拝啓、塚本鉄三様。このたび貴方の提唱さ



れた「SM研究会」に賛同致す者です。

私は十年來の奇譚クラブの愛読者でありまして、ここ一、二年、急に思いついてSMに関心を持ち出したものではありません。二月号、三月号を拝見した限りでは、会員の立場を尊重し、節度ある紳士の会である事がうかがわれ、是非とも会員の一人に加えて頂きたいと思っています。

3月号の巻頭のカメラ・ルポ「牝獣と牡獣の対決」は全く素晴らしく、息もつがせず一気に読ませてもらいました。鮮明なる写真と適確な文章、本当に敬服の外ありません。

M女の手馴れた扱い方によって白豚の畜化

の進行具合が手にとるようで、畜化願望の牝たちにとっては、塚本氏は救世主のように仰がれることでしょう。責められて白豚に変身してゆく苗木陽子の心境は、如何ばかりだったでしょうか。

私も牝獣の調教には大変興味を持っております。是非一度、塚本様にお会いして、話も承り、この手で、じかに牝犬を飼い馴らしたものだと思っております。

「S研」の主旨に全面的に賛同し、これからの二十年、三十年の余生を、SM研究のために捧げたいと思っています。〔後略〕

☆

熱心なS研賛同者の方々からの数々のお便り、本当に有難く思っている。いろいろな御意見はSMの研究に大いに参考になったし、また教えられることも多かった。

風呂から上って部屋へ戻ると、矢島靖子は四人の紳士たちの手で、身体という身体を、調べつくされ、むさぼりつくされて、畳の上に長々と横たわっていた。

「おい、どうしたんだ？」

「ああ、お風呂でしたか？」

「お風呂でしたか、はないだろう。僕のいない間に、責めすぎたんと違うか？」

「いいや、そんなことはありませんよ。彼女が、こんなにして責めてほしいって、言うもんですから、一寸、責めてみたんですよ。したら、こんな始末なんです」

「そんな馬鹿な。あんな大人しい彼女が、自分からこんなにしてほしいって願い出るなんて、そんなことがあるわけじゃないか。さしては、四人がかりで縛られているのをいいことにして、いたずらをやったな？」

「ええ、やりましたよ。彼女が泣いて、凄く喜ぶ責めをね。どんな責めをやられたか、彼女の口から聞いてみて下さいな」

「しょうがないナ。よし、それじゃ、日が暮

れるまで、あと一時間、彼女を、もう一責めするとうか。僕がいない間に彼女がやられた責めを、彼女の口から聞いてみるか」

私は靖子を抱き起した。

途端、彼女の口の横からツツと涎が糸を引いているのが見えた。それは、私が不在の際の四人の男たちの手による「責め」の内容を、なんとなく物語っているように思えた。

でも、彼女の彫りの深い顔は、菩薩のようになごやかで崇高だったし、それに表情はといえば、満足気に、うっとりとしていた。

私は、彼女の涎をふいた。

靖子、桃源境をさまよう

私にしたって、矢島靖子の裸を見るのは、今日が初めてである。いや、裸どころか、顔を合わすのが、今日が初めてである。

それが、今こうして、縛りあげた裸身を目の前に抱いているのである。

SMの仲というのは不思議なものだ。ダベリ会で話をしよう——と言っていたのに、いつの間にやら、SMプレイをするようになってしまっているのだ。

それも、両方の足首に縄をかけて、左右か

ら力いっぱい引っ張るというあれもない羞恥の姿態を繰りひろげてしまったのだ。

もう、そんな「責め」を展開してしまうと他人行儀な心の隔りというものは、あとかたもなく消え去ってしまうのだ。あとには、SM同好者としての温い同志的な心のつながりだけが、ほのぼのと残っているのだ。

私は、縛られている靖子を畳の上でころがしておいて、カメラを手にした。

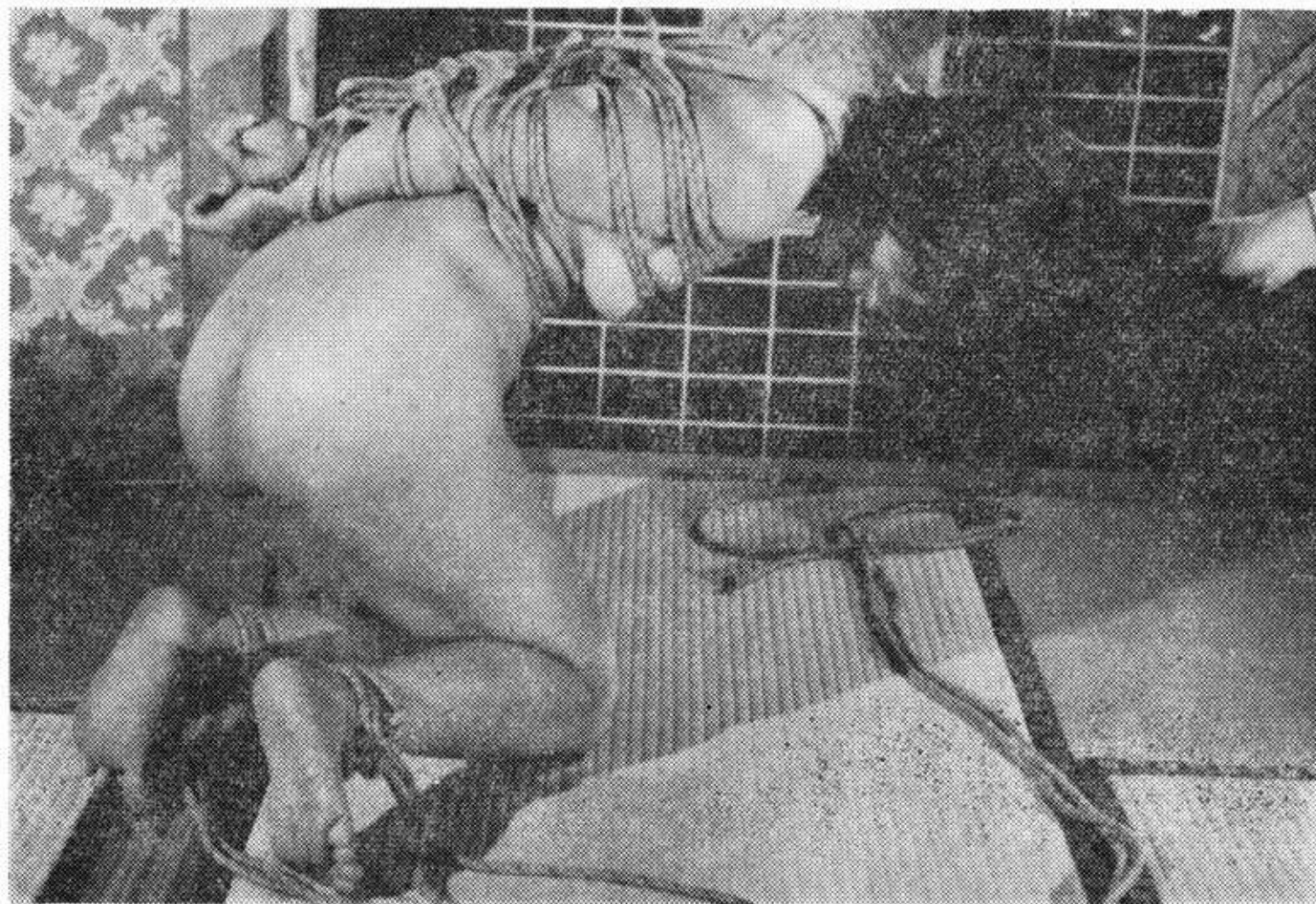
「僕がいない間に、四人からどんなにして責められたんだい？」

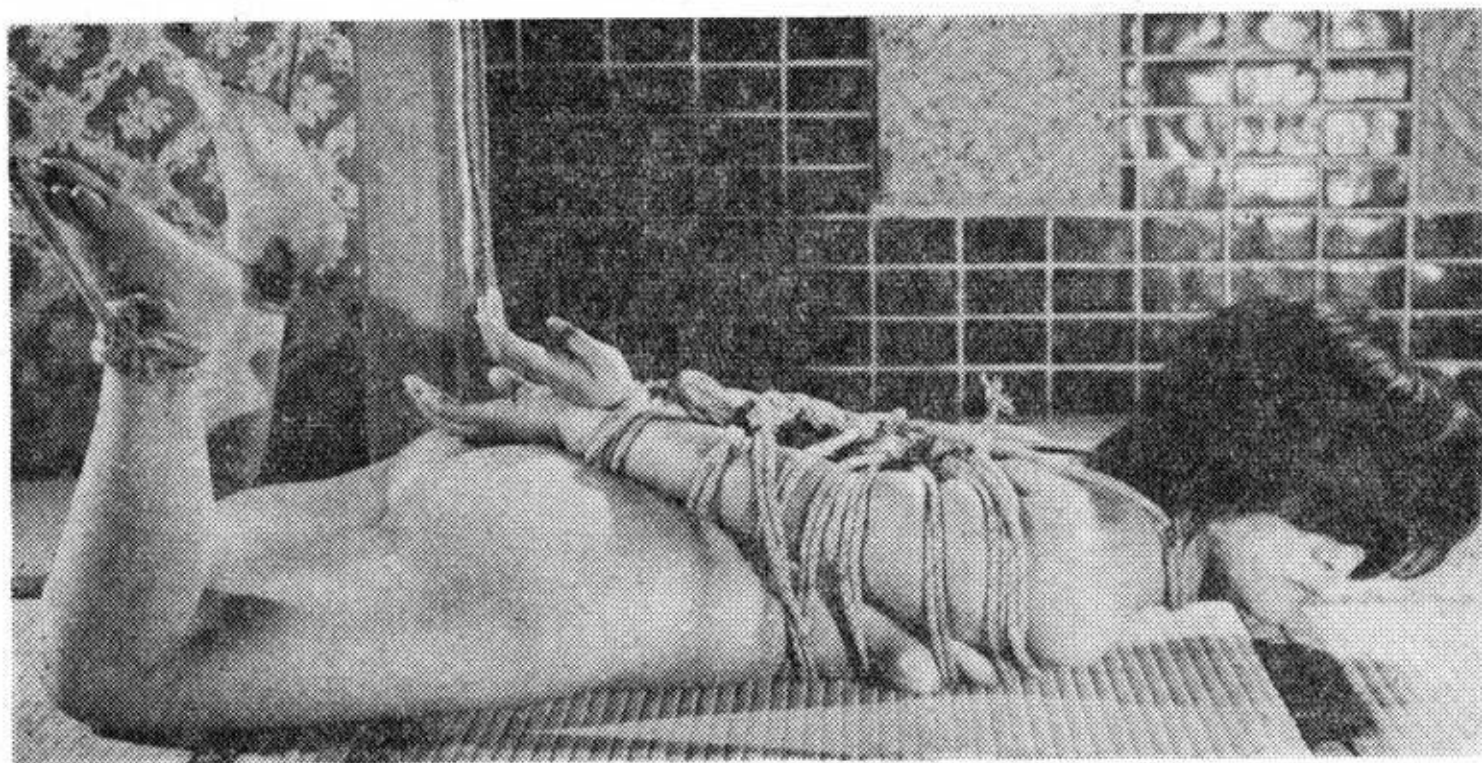
「ううう、う、むむう」

「おい、彼女に喋らさないために、猿ぐつわをしているじゃないか」

「ええ、猿ぐつわをしましたよ。あんまり呻き声を出されると困ると思ひましてね」

A氏は、とぼけたことを言





う。

か細いようで、しなやかな靖子の裸身は、縄で締めつけられ、猿ぐつわで呼吸を制限されて、体全体が赤らんでいるように見える。赤い色彩というものが、そこには何もないのに、私の目の中に、靖子の緊縛姿態が赤く見えたのは何故だろう。

下腹が布袋さんのように突き出た福相のA氏が、その肥満体に似合わず、敏捷に立ちまわって、彼が自分から「奇麗だ」と言っていた靖子の左足にとりついた。

いや、実際に、若い女性にしたって、足の爪先に至るまで、入念に手入れをしている人は案外、少ないものだ。矢島靖子は体全体から受ける感じが、「清潔」という文字がぴったりのムードだが、A氏が指摘するように、足の指は美しかった、殊に、拇指の爪は、形もよく、まるで真珠のように艶々しい。

足首を手に把った——といったって、やはりA氏はSMマニアだなあ、と思った。

その真珠のように輝いている靖子の足の拇指を、さっと口に含んでしまったのだ。

何をするのかと呆気にとられる四人。

そして、彼のその手は、ミミズの這うように、彼女の足の裏を、くすぐっているのだ。

ピク、ピク、ピクピクピク……。

微妙にうごめく靖子の足の指。

そう言えば、A氏には多分にM気もあったのだ。「僕が縛られ役をやってもいいですか、女が男を責めるマゾフォトを撮ってみませんか」なんて、以前に言っていたことが、あったっけ。

足の拇指を口に含むだけでは、すまなかった。彼のねっとりとした舌は、靖子の足の裏へと伸びていったのだ。

私はカメラを手に提げたまま、そんな光景を、一つの「責め風景」として眺めていた。

責められている矢島靖子の裸身は、やはり神々しいばかりに美しかった。責められている女性は、何故、かくばかり美しいのだろうか。その表情は、なににも増して魅力的で、むきだしの肌は肉感的だった。

A氏が独占的に靖子にとりついているのを見ると、他の三氏も禿鷹のように、縛られた女体にとりすがっていった。

太腿を両手で抱え込む者、お尻を持ち上げる者、頭髪を鷲づかみにして、顔面を引き起す者——と、それぞれ、思い思いに好みの女性の部分を愛撫責めにかかった。

「う、むむむ」

のけぞる靖子の顔面。そして、しなやかな全身が弓のように徐々に反^そってゆくのだ。

そこには、私の入る余地はなかった。

さつき、柱の前で行われた四人の手による淫ら責めが、今ここで再現されようとしているのだ。私にとっては、これも、一つのSMの勉強に違いない。

最初、お互いに尻込みして、何もやらなかった男達が、今になって枯草に火がついたように、極めて積極的に行動しだしたのを、私は、ほほえましく眺めていた。

SMの同好ということだけで、私を頼って集まってくれた四人だ。A氏以外の三名とは初対面だというのに、今はもう、このように打ちとけてくれている。

「君子の交わりは、淡きこと水の如し」と言われるが、やはり金銭で結ばれていないということは、いいことだ。入会金も会費も一銭も頂かないということは、これからも、ずっと続けてゆきたいと、つくづく思った。

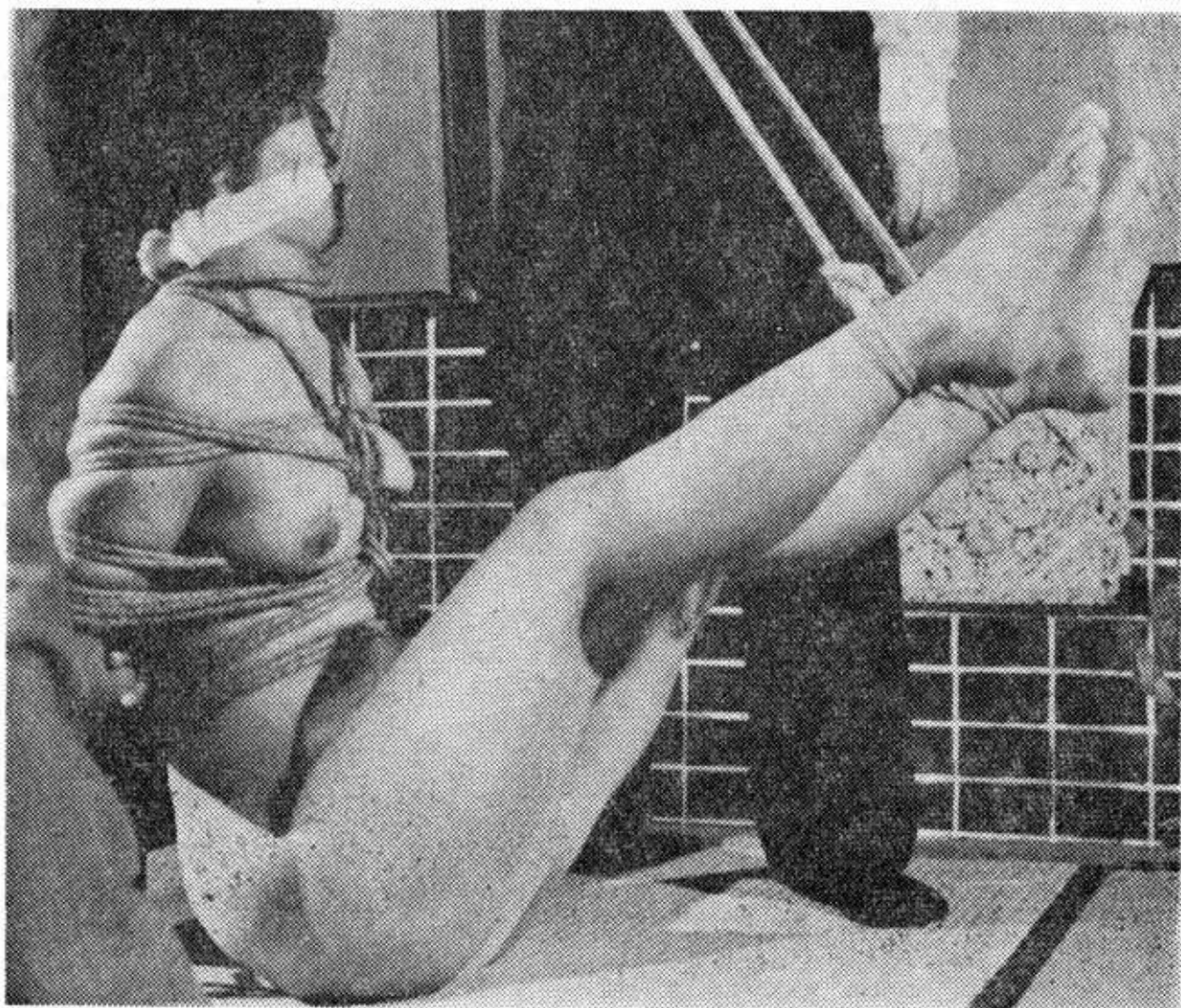
趣味を同じゅうする者同士の会合に、金銭的なトラブルは禁物だ。折角の楽しさが、そんな煩わしさによって半減されてしまう。だから、会費をとった方がよい——という意見もあるようだが、私は一切、頂かない方がよ

いと考えている。喫茶店の支払いなんか、私が負担しても、高がしれている。それを会費なんかで、というのは、みみっちい。

会合も大きなホテルのロビーなんかを利用すると、スマートにやれるんじゃないかと、考えている。というのは、S研を申込みれた方々の中には、六大都市をはじめ、北から南まで、地域的に相当広範囲にわたっている。

それで、私が、その地その地の一番大きくて有名なホテルを予約して、その近辺のS研の友を招待するプランはどうだろう。幸いにして、「プレイ旅行」だったら大歓迎という女性もいるので、好都合というものだ。人数は二、三人から四五人というところが適当だろう。SM談義に花を咲かせるにしても、SMプレイに依って、SMの真髄に触れたり、奥義を極めたりす

るにしても、このぐらいの小人数の方がマンツーマンで、うまくゆくというものだ。第一多人数だと、私にそんな人達をコントロールする能力がありそうにもないし、アシスタン



トもない。

まあ、今の段階は、そうした根まわしをするため、出来るだけ、多くの方々のコミニュケーションを培ってゆく努力が大切だ。

さて、矢島靖子の悶えようはどうだろう。

第三者として傍観者の立場から眺めている私には、身体の中心部が、もぞもぞとするような刺激的な光景だった。

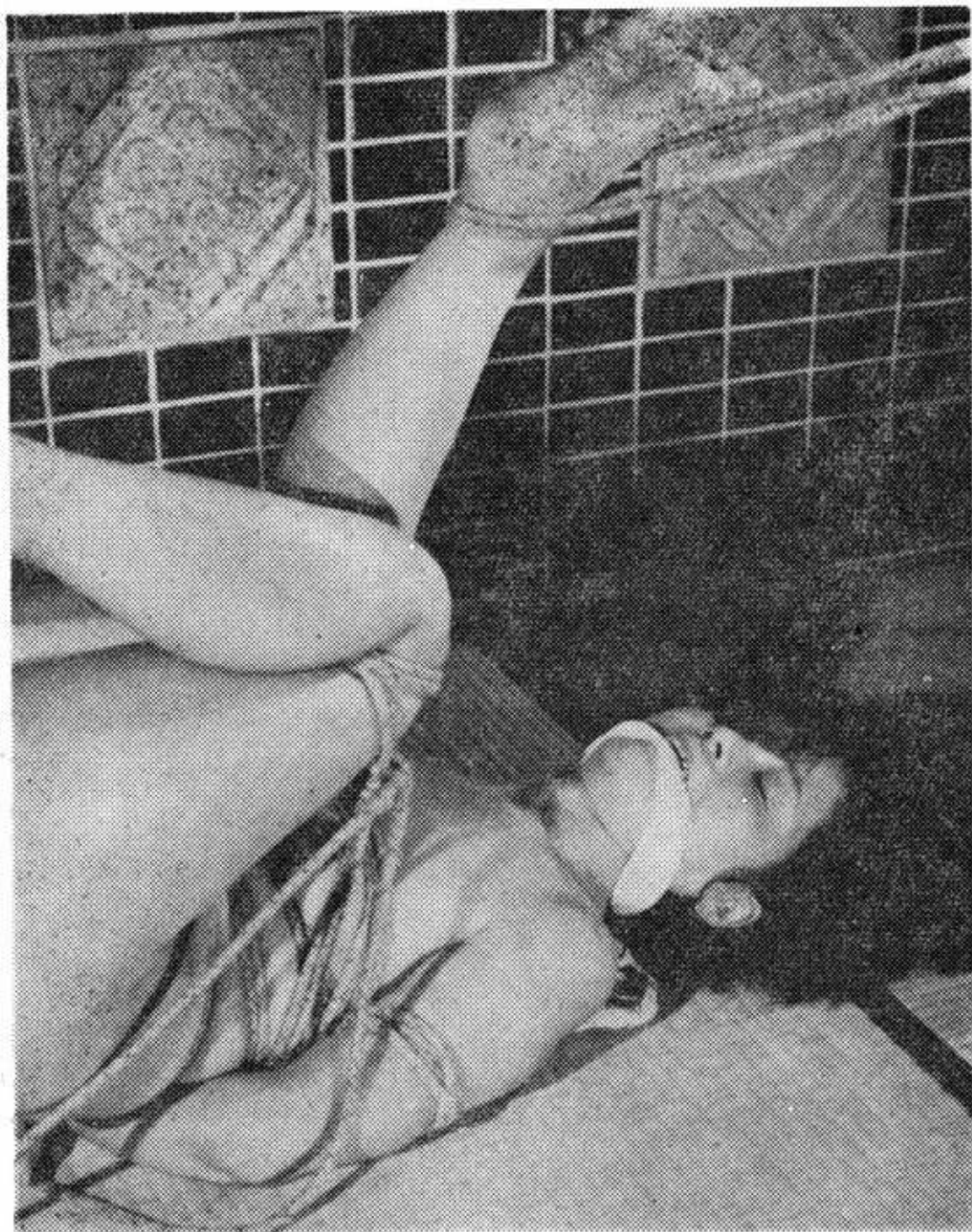
だが、一体、この矢島靖子という女性は何者なのだろうか。

SMのことについて話し合いたい——と言っていたのに急にSMプレイをやってもい

いと言いだし、そして、プレイをやればよかったで、こんなにまで、全身を投げだして燃えてしまっている。口から涎を流すまで、プレイに熱中している。

ひょっとしたら、あの「女忍者」と言われる「くの」ではないだろうか。

いや、「観世音菩薩」の化身が、SM研究



会のために、自らの女身を提して、この現世に姿を現わし賜っているのかもしれない。

私が、折角撮影したフィルムも、帰って現像してみると、何も写っていないかったということにならないとも限らない。

だが、写真が一枚も写っていないくたつて、矢島靖子が女忍者のくのの一であるか、観音様

の化身であった方が、私には嬉しかった。

いくら責めても責めても燃えるのは燃えても絶対に参らないという「女忍者」こそ私の理想像である。

矢島靖子こそ、女忍者くの一になる資格を持ったタイプである。苗木陽子は白豚にはなれても、決して女忍者にはなれない。

私は、白豚も好きだ。スタミナ抜群の牝豚を、骨の髄まで、とことんまでいたぶりつくすというのも私にとっては、うってつけの餌物である。

だが、こんな女忍者タイプの矢島靖子を、こつてりと念入りに責めてみるのも、SMの味わいがあるものだ。

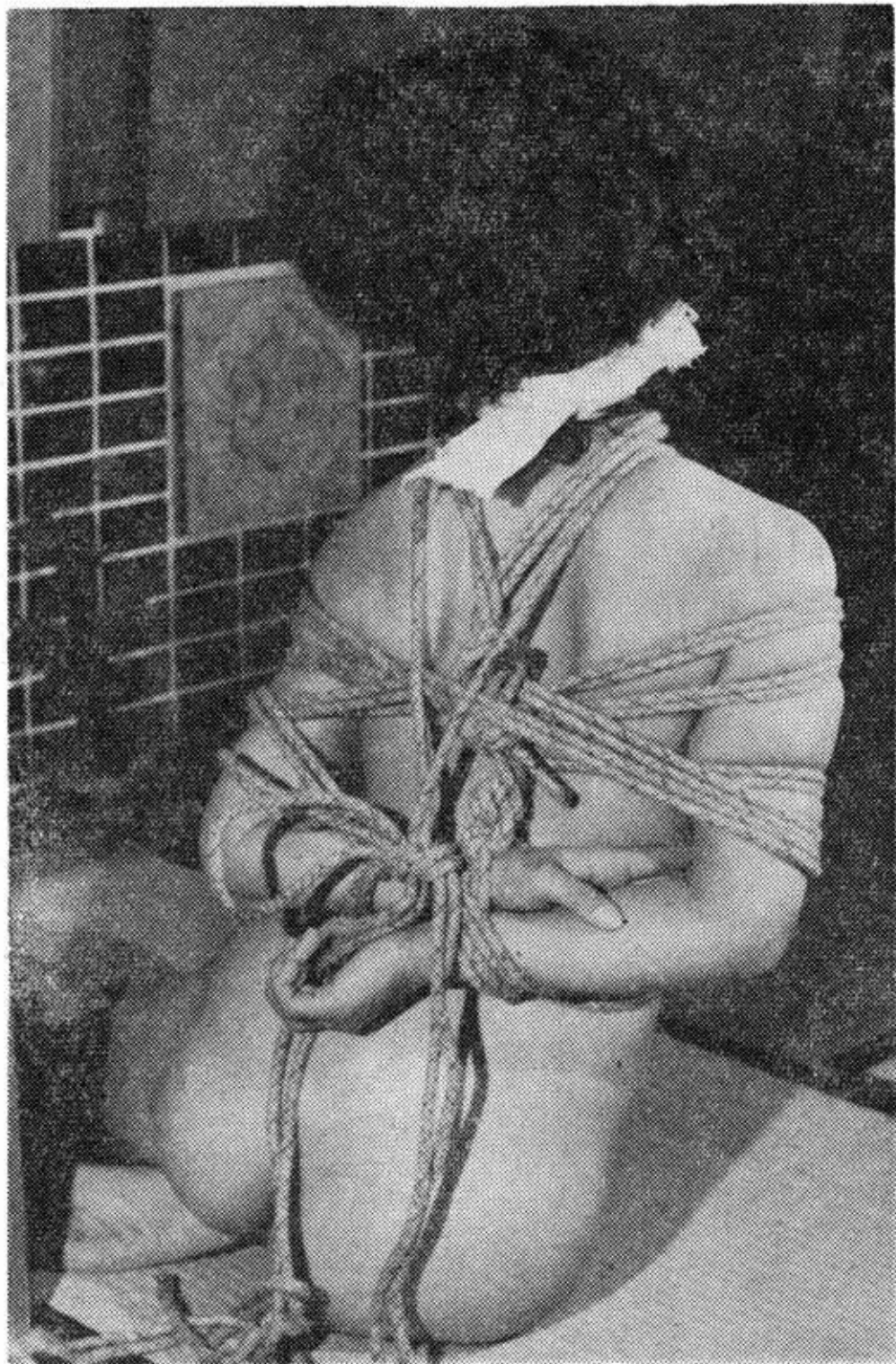
彼女が、SMの亡者を遍く済度下さる観音菩薩様であっても、これは有難いことだ。

長年月、「女体緊縛写真」一筋に生きてきた私のことだ。ここらあたりで、「奇瑞」が現われても、よくはないか——と思ったが、

現像してみると、やはり、カラーもモノクロも、はっきりと現実の姿を写し出していた。

うつそみの靖子の姿

私が四名の誌友をファインダーの中に入れないように、入れないようにと配慮しながらシャッターを切った矢島靖子の「責め写真」



が出来上ってきた。

私は、あの日の楽しかった「SMダベリ懇談会」のひとつときを思いだし、百数十枚の緊縛写真を机の上に並べてみるのだった。

プレイが終ってから、なんとなく別れ難い、後髪の引かれる思いの六人であったが、陽が傾きかけると共に、空港へ向う者、新大阪駅へ向う者、それぞれに散っていった。

「また、この次の機会に、きっと、お逢いしましょう」という別れの挨拶を交しながら、満ち足りた気持ちで手を振ったのだった。

そして、今、手元に残っているのが、この写真だけだ。奇クの愛読者の方々に、是非共その一部をお見せしたいと思う。あの短時間の間に、よくも、これだけの枚数の写真が撮れたものだ、我ながら感心する。

SMプレイの鬼となり、緊縛写真の虫となつて、対象に喰いついた成果がこれなのだ。

S研ダベリ会の模様を、奇クに書くつもりは毛頭なかった。のんびりと楽しく、ほおけて、遊びたかった。ただ、それだけだった。

それが、はからずも、矢島靖子の写真が、かくも沢山、撮れてしまって、筐底に徒らに眠らせておくのが勿体なくて、このように、駄筆を走らせる結果となってしまった。

テレビの深夜番組が打ち切りになったので、その時間を利用しての走り書きのため、文章の方も、重厚さを欠いているが、次回は、充分に心の準備もして、書きたいと思う。

尚、当日出席された四氏の方々には、一々諒解を得なかったけれども、氏名を完全に伏せたことによって、御諒承頂きたいと思う。

＜ゴムに憑かれた女の告白＞

孤 独

寝苦しい夜のゴムプレイ

— 梅 川 幸 子 —

(フォト及びイラストも)

ああ——何故、こんなことを書かなければならぬのでしょうか。今まで度々告白してきたのに、また同じようなことを書くのか、と、皆様はおっしゃるかもしれませんが、私は書かずにはいられないのです。

蒸し暑く、汗ばむ深夜。寝苦しさに体の中に燃え上る欲情をおさえきれないで、時計が午前一時を打つと待ちかねたように私は寢床から起き、着ている物を全部、脱ぎ捨てて、生れたままの糸まとわぬ裸になり、ゴム装束に身をかためるのです。窓も雨戸も、ぴたり閉め切ったお部屋の中は暑苦しく、昼間の熱気が残り、じっとしていても汗ばんで来ます。

私のゴム装束も、その時々、いろいろな組み合わせがありますが、今回もその一例を書いてみましょう。

まず、素肌の上から婦人用ゴム引レインコート^①を、まといます。このレインコートは、マニアの皆様が、よく御存知で、今更くわしく書くことはないでしょう。特大サイズのピンク色で、腰のベルトを、しっかりとゆわえ顔にはレインコートと同生地^②の収納袋を裏返しにして、裏ゴムの部分を表にしてたたんだのを鼻と口を隠すように当てがい、その上か

らゴムマスクをはめます。ゴム布特有の匂いが何ともいえず、次第に興奮が高まり、心臓の鼓動が高まるのを感じます。そしてフードを目深^{まぶか}にかぶり、足には最近、デパートや大きな靴屋に出揃っている、膝まで届く婦人用のレインブーツ（ゴム長）をはきます。このレインブーツは、黒、白、黄、赤の四色あって、かかとも婦人用ブーツだけに高く、全体の形がスマートにできています。私のレインブーツは全部、裏布をはがしています。つまり「総ゴム長」というわけです。このスタイルを三面鏡の前に立って眺めてみましょう。

螢光灯の光で鈍く輝くピンク色の特大の婦人用ゴム引レインコート。大きくゆったりと頭を覆い隠すフードの女らしさ。指先まで隠すぐらい長い袖と膝を隠し、レインブーツの足首まで届くような裾の長さ。まるでミディコートも顔まけで、マキシコート並みという過言でないでしょう。

何故、こんな女らしい素晴らしいレインコートを製造しなくなったのでしょうか。

素肌に当る裏ゴムのひやりとした感じと、次第に汗ばんでヌルヌルしてくる快感。そして、わずかに目だけ出ているフードと、ゴムマスクに隠れた顔の異様さ……。



その次には、男物の総ゴム合羽を着ます。

この総ゴム合羽は、漁師の人が着るために作られたもので、表は黒色、裏は茶色の厚い総ゴム製で、サイズは着丈一メートル二十五センチの特大サイズ。フードについている、顔を隠すためのマスクも、普通のゴム合羽と違い、巾広く左右に振り分けて真中で二つのホックで止めるようにできており、腰には巾の広いベルトがつき、袖口は水が入らないよう手首にぴったりと喰い込むようにアメゴムで出来ています。

この総ゴム合羽をガサガサ、ゴワゴワの音を立てて着込み、フードをかぶりマスクをし

ベルトを結んだ私の姿をご想像下さい。

三面鏡に写る私の姿を見て、我ながら吹き出しなくなるぐらいです。まるでゴム合羽のお化けです。顔は、まるで隠れてそれこそ、わずかに、おどおどした目が見えるのと、レインブーツの爪先が、ちよっぴり見えるので、人が見たら、やっと

女だと分るぐらいです。

ブカブカ、ガバガバの総ゴム合羽。袖口が手首にぴったりのため、袖口がふくらんでエプロンみたいで、腰のベルトを境に、胸は異様にふくらみ、腰から下は中世の西洋の、芯を入れたスカートのようにふくらんで、裾が畳につくほどです。それから両手にはオレンジ色のお台所で使うゴム手袋をはめました。このゴム手袋も、女らしいアクセントと言えましょう。

それから、いよいよ私のトレードマークとも言えるべきゴムマントの着用です。このゴムマントは皆様、御承知の黒い男物で、つい数

年前まで自転車に乗った男の人が着ているのを時々見かけることができました。裏は茶色い木綿地で、サイズはこれも着丈一メートル二十五センチの特大。ガッポリと肩から羽織りフードをかぶり、フードについているマスクのボタンをはめ、ゴムマントのボタンを全部、きちんとかけると、ゴム合羽のお化けスタイルの私は完全にゴムマントに包み隠されまずはこれで出来上りです。

大きな男物の黒いゴムマント、魔法使いのように尖ったフード、爪先まで覆い隠す丈の長さ、肩にのしかかる重み。

ゴムマントの中では次第に汗ばみ、体を異様にくねらせながら姿を作り、いろいろなポーズを三面鏡に写して楽しみます。

黒いゴムマントの爪先が、時々ちよっぴりのぞく黒いレインブーツ。

いかがでしょうか、このスタイル。まるで中世の魔法使いか、お姫様か。あるいは人目を忍ぶ貴婦人か……。

さあ、身支度の出来たところでプレイに移りましょう。

三面鏡の前に、お化粧用の小さな椅子を置き、その上に空になったウイスキーの角びんを一本、置きます。それからウイスキーびん

の口と長い筒になった部分（つまり、びんの肩から上）に、たっぷりワセリンを塗り、ゴム手袋の指先にもワセリンを塗りまして、女性が孤独を秘かに慰める器具を一本、出してきて、これにもワセリンを、たっぷり塗ります。これで用意が出来ました。これから、いよいよプレイに移るわけです。

器具に、たっぷりワセリンを塗り終えた私は、右手に器具を持って椅子に坐ります。この椅子への坐り方ですが、ゴムマントの裾を持ち上げて椅子を包み隠して立ちほだかり太股を少し開いて総ゴムマントの下に着ているゴム合羽と素肌にまとったゴム引レインコートの裾を持ち上げ、裸のお尻が、じかに椅子に坐るようにします。ちょうど、長いスカートをはいた女学生が、小さな丸椅子に坐るとき、椅子をスカートに隠して、じかにお尻をあてて坐るように。

さて、坐るといっても椅子の真中にウイスキーの角びんがニョキリと突き立っているのですから、安々と坐るわけにはいきません。太股を開いたままで膝を曲げ、中腰になり、体を少し前にかがめているわけです。

三面鏡に写った私は黒いゴムマントの裾を畳につけて前こごみになった異様な姿です。

そしてゴムマントの中では、抑え難い欲情に燃え上った体を自ら慰めるプレイに溺れようとしているのです。

中腰になった裸のお尻が、だんだんと椅子の上に降りてきて、ワセリンをたっぷり塗ったウイスキーの空びんの口にピッタリと乗りました。肩にのしかかるゴム装束の重い感じと中腰の膝のたるさ。私は、もどかしげにゴム合羽とゴム引レインコートの裾のボタンを次々と、はずし、ワセリンを、たっぷり塗った器具を持ちなおします。

中腰になった体を支える膝は、しびれが切れて上体を支えられなくなり、レインブーツのかかたが高いのでよろし、椅子に坐ろうとしても、下から突き上げてくるびんの痛さに思わず腰を上げました。時々、上目づかいにフードをかぶった頭を上げ、三面鏡に写る姿を見ると、黒いゴムマントは異様に踊り狂い、波打っています。ゴムマスクの下に当てがったゴムレインコートの収納袋は、伝って落ちる汗と涙と唾液でべとべとに濡れています。そして私は、あらぬたわごとを口走りながら、ついに椅子から転げ落ちま



した。黒いゴムマントの裾からのぞいているスマートな黒のレインブーツを、ぴくぴく慄かせながら……。

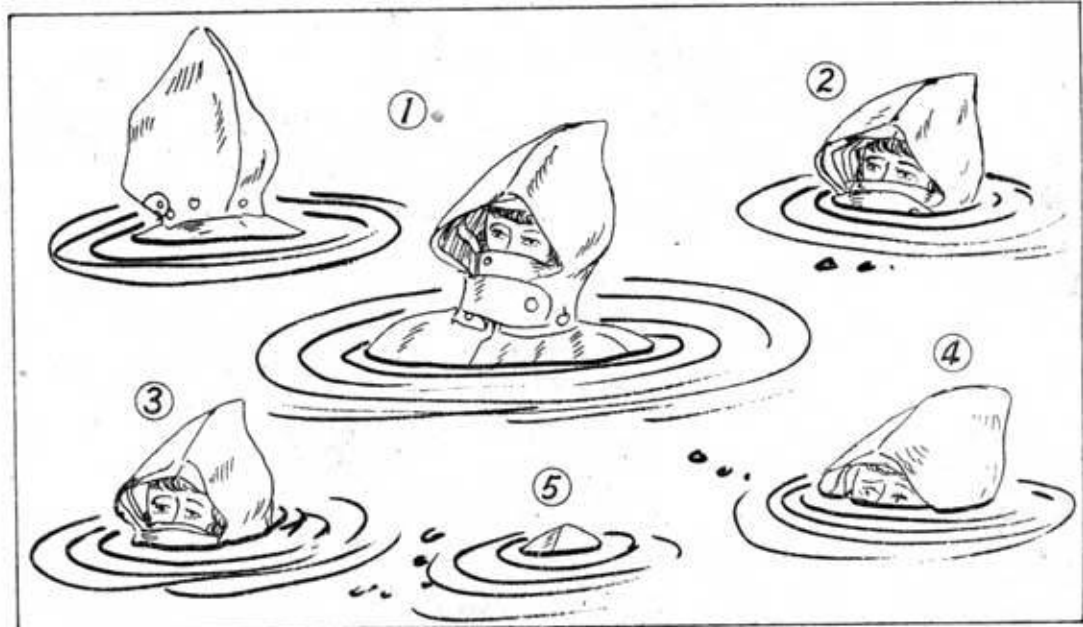
気がつくやうに全身、汗びっしょりで、素肌にまとったゴム引レインコートは体にぴったり

まつわりつき、その上から着た総ゴム合羽は汗とゴムの匂いにむせかえり、ゴム手袋の中にも汗がポトポト流れて溜っています。上体を起した私は、フードのマスクを外し、ゴムマスクを外し、フードを脱いでタオルで顔の汗を拭きました。

ああ、何という快楽人に知られたくない秘密の快楽。身仕度するときの期待感と、身も心も快楽の淵に溺れる恍惚とした快美感。陶酔の後の満足感と罪悪感の入り乱れた奇妙な感じ。

私は立ち上ると、いそいそとお風呂場へ行き、壁にもたれてシャワーの下に立ち、シャワーのせんを一杯に開いて、大雨のようなシャワーを浴びるのです。

黒いゴムマントを容赦なく打つ大粒の雨。フード、肩、胸、背中をしぶきを立てて打ち



滝のように裾に伝って流れ、裾からのぞいたレインブーツを濡らして足許に渦巻いて流れて行く雨。ゴムマントにくるまって、雨の音を聞く楽しさ。

ゴムマントは濡れてテカテカと光り、やがて、水がたっぷりしみこんで、木綿地の裏布は水を包んで冷たく重くなり、特に肩に重くのしかかり総ゴム合羽の表面に、冷たくしっとり、まつわりつきました。

私はシャワーの大雨を浴びながら、さまざまな瞑想にふけります。

ゴム装束の男に雨の中で乱暴される私。泥田の中に押し倒され犯される私。

ああ、どなたか私と同じゴム合羽、ゴムマントスタイルの装束で現れて、私を存分に責めて下さらないかしら。

瞑想が終ると私は、ぬるくなったお湯にザブザブと入ります。そしてお湯に体を沈めて

いきます。

レインブーツにお湯が流れ込んで鉛のように重くなり、太股、腰、お腹がお湯に浸るにつれて、水面上にふくらんでまくれ上るゴムレインコート、総ゴム合羽、ゴムマントの裾特にゴムマントは、まるで黒いおわんを伏せたように、こっけいな形になり、裾を中からつかんでお湯の中に沈めるのに苦労します。私は胸から肩、あごまでお湯に浸りました。テラテラと、さっきシャワーで濡れたフードをかぶった頭だけ、お湯から出て、何という奇妙な姿でしょう。

私は、もう一度、心ゆくまで秘密のプレイを楽しむのです。

お湯が波立ち、ポツカリ出たフードの頭がゆらゆらと揺れて、感きわまって、あごから目、鼻、そして額の髪の毛の生えぎわまでブクブクとお湯に沈む私。あわてて水面から額を出す私。

プレイの終わった後、お湯の中でネクタールを放出するときの快さ。

皆様の中で、孤独な私を慰めて存分に責めさいなんで下さるお方はいらっしゃいませんか。

——(おわり)——

連載小説『紫蘭の門』 (第三十三回)

南

なん

蛮

ばん

拷

ごう

問

もん

カット・岡 たかし



南蛮責具

咲き誇る桜の大樹の下枝に、衣笠美和は吊

いこんでいた。
百会（びやくえ）で束ねた紫元結がきれ、
乱れた黒髪が肩から背へと垂れ、やっと虫の
息を洩らしている。

風流極道軒

ふるさとはみな草深きところなり
——と、言っただは近松門左衛門
メメツチョに、我がヨーロッパをば
捧げんと
——言いはなちしは、ナポレオン

責めにされていた。

大地に敷かれた緋毛
氈に、かろうじてさき
がついている白足袋を
のぞけば、身にまとう

ものとは縄ばかりで
乳房の上下、へそのま
わり、脇腹と、女谷流
赤蠟縄が、みるも無残
に、その麗しい肌に喰

答打、海老責めなど御定書百ヶ条による拷
問の基本形式を、オランダからやってきたヘ
ンドリック・ファン・メルデルフオールトの
参考に供する『拷問用女性』として責められ
てきたのであった。

「トキニ、モウヒトツ、お願いガアリマス」
逆剥の美女衛門に念入りに縛りあげられた
美和の縄目から、青い目を居並ぶ腰元たちに
うつしたヘンドリックは、

「日本ノ女、モットタクサン見タイ。ココニ
イル女タチ、ミナ、ハダカニシテモライタイ
ノデース」

と、うそぶいた。

オランダ国王の命をうけて、日本に、モニ

カを受けとりきた云わば特命全權大使の言葉としては理不尽で、唐突なものであった。

はたして領田が、どう答えるか――。

血のように赤い南蛮の酒を盃に、興味深く待つ元禄屋の耳に、

「よかろう。希望を入れましょう」

ずっしりと重みのある声がきこえた。

「ただしじゃ、余にも条件がある」

「条件……ソレ何デスカ」

「居並ぶ腰元は二十人近い。それを悉く裸にいたすかわりに」

「カワリニ、何ヲ私ニ……」

「貴殿ではない。そこにいるモニカ殿に」

「モニカに？……」

モニカの金髪のしたの瞳が、いぶかしそうに領田に注がれた。が、

「モニカヲ、裸ニ……イタセ……ソウデシヨウ、老中サマ」

ヘンドリックは、すでに領田の意図を察知

前号まで――穴沢流中高舟の拷問をうけて小紫のお景がついに白状した徳夜叉の隠れ家へ、鞭兵衛たちを向けた元禄屋は、老中・領田下野の中屋敷で、和蘭人ヘンドリックと美女モニカに責められる衣笠美和の美しい姿に見入っていた。

しているように云った。

「さよう、その通りじゃ」

領田が、うなずくよりも早く、モニカが、けたたましくオランダ語で叫んだ。

ヘンドリックがそれに応えた。二言、三言やりとりがあつて、

「モニカ！」

と、ひととき大声で叫んだヘンドリックはあらあらしくその腕をつかむと、「チョット失礼」といいのこして廊下へあがり、部屋のなかへ姿を消したが、襖をしめるとき領田と元禄屋に向つて、右手の親指と人さし指を輪にしてニヤツと笑つて見せる余裕を忘れてはいなかった。

「領田様。面白い一日になりそうでござりまするな」

元禄屋は、一刻ほどまえの予感が適中した思いで、つい口元が、ほころんでくる。

「フッフッフ、すべて計画どおりよ」

「計画……？」小首をかしげたものの元禄屋は、すぐ膝をたたいて、

「して、代償は何でござります。まさか腰元たちの裸ではござりますまい」

「何だと思うの」

「わかりませぬ。こればかりは」

「地図じゃ、地図。日本の地図と、葵の紋服じゃ。それに真珠を百箇ばかりモニカ殿に」

「地図、葵の紋服でござりまするか。いったい何のために」

「ヘンドリックはオランダに帰つて日本のことを本にして出版したいのじゃそうな。そのためには是非、地図がいと申しての。それに日本を代表する紋が欲しいとのこと。葵の御紋よりほかにはあるまいが」

「しかし葵の紋服や地図は、たしか御禁制のはずでは……」

元禄屋の危惧も根拠のないことではなかった。つい六年前の文政十一年十月に、シーボルト事件という世にも高名な事件が人々の耳をそばだたせたばかりではないか。オランダ商館付の医者P・F・シーボルトなる人物に幕府天文方の高橋景保たちが、日本地図と葵の紋服をおくったことが、元禄屋の顔見知りの探索方・間宮林蔵の働きで露見し、景保は入牢のあげく拷問で殺され、同じく天文方の春川登が、左腕の頸動脈をきって盥の湯の中に浸して自殺したほか数十人が係累として家族ともども責め折檻された事件であった。が、案じ顔の元禄屋に、領田は高らかに笑つて見せた。

「ワッハッハッハ、非理法権天という古語の
あろうわ。法は所詮、**“権力”**には勝てぬ。

シーボルト事件のおりは、高橋たちが目障り
じゃったからじゃ。第一、あのシーボルトと
いう男、なにひとつ幕府に対して献上品を届
けておらぬ。だから余が、処罰してつかわし
ただけのことじゃわ。ワッハッハッハ」

「さすがは御老中さま。おみごとでござりま
する。所詮、金の力も権力には及びませぬの
う。ワッハッハッハ……」

金力が権力に及ばぬとは、元禄屋の痛烈な
皮肉であった。

それに気づかない領田ではない。

「フッフッフ、面白いのう。権力も、所詮
は金の力には及ばぬのではないかのう」

この二人、さすがは、天保四年の桜咲き句
う日本を代表する男たちと云えよう。

その哄笑の間に、用人の樺山の指揮のもと
美女衛門たちが、次々と奇態な大道具・小道
具を運び入れてくる。

「おやりになりますな、領田さま」

ずらりと並んだ責め具を前にして元禄屋は
笑った。

「わかるかの」

「いかにも。新井白石、前野良沢、宇田川玄

随、桂川甫周……オランダ文字は、わかりま
せぬが、これらの人々の書き遺した書物から
いま運び入れられましたのが南蛮人の用いま
す拷問の道具であることくらいは」

「フッフッフ。実はヘンドリックが三日前
に**“諾、承知しました”**と申しての。それで
大急ぎにつくらせたものじゃが」

大八車の車輪のようなものから、機織りの
台のようなものまで、まだ木の香の匂ってい
るような道具の数々が、春の斜陽をうけて輝
いていた。

あとは、この台に**“乗る”**——あるいはこ
の車輪で**“引き伸ばされる”**はずの女、オラ
ンダの貴族であるモニカ・ファン・ダイクの
登場を待つばかりであった。

女 の 下 着

なにをどう云い含められたのであろうか、
長襦袢——と、元禄屋たちはみたが、それは
いまでいうスリップであった——姿のモニカ
があらわれたのは、小半刻もたったところであ
った。ヘンドリックにうながされて廊下から
庭へと降り立ち、緋の毛氈に素足を乗せたの
であるが、なにさま身の丈けは下林や樺山な

ど及びもつかないくらいに高い。腰の周りも
日本の女の倍もあろうかと思われ、胸のあた
りの膨らみは、まるで小山が動くかのよう。

あっけにとられている一同に、

「領田サマ。サア、自由ニシテクダサーイ」
とヘンドリックが片目をつぶって見せた。

「まこと大丈夫かの。後日、問題になるよう
なことはなからうの」

いくら天然の真珠百箇を与えると約束した
とはいえ、あまりにたやすくモニカが応じた
ので、いささか心配になってきたらしい。

「安心シテクダサイ。コマデキタ以上ハ、
モニカモ覚悟シテイマス。切支丹屋敷ノ責メ
苦ヲ思エバナンデモナイコトデス」

それはそうに違いない。が、女ながら相手
は並みの日本の男など足もとにもよらない巨
大さ。万一、暴れられでもすると事は面倒に
なる。もう一度、ヘンドリックの顔を窺った
が、どうやら安心したらしく、

「下林、縄をかけるのじゃ。縄を！」

と声をあらげた。すると、

「縄ヲカケルイケマセン。コレカラ見セルノ
ハヨローロッパノ拷問、縄ツカイマセン」

「ならば、どうするのじゃ」

「マズ、伸バシ責メ“デース”

「伸ばし責め?……」

「ソウデース。コレ使用シマス」

ヘンドリックが指したのは機織り台(木下順二作「夕鶴」の舞台でヒロインのつうが布を織る場面に登場するので想い出されるむきも多かろう)に似た責め道具であった。

その一端をたたきながら、

「モニカ!」とヘンドリックが呼んだ。

すると、どうであろう。固唾を呑んで見守る幾十の視線のなかで、モニカはゆっくりと台にちかづくと、片足をかけてとびあがり、仰向けに寝そべってしまったではないか。

ホーッ……という、嘆息のようなものがあちこちから洩れた。

が、それもガチャ、ガチャ……という金属性の音にかき消されて、モニカの手足に黒光りのする手錠・足錠が喰いこんだ。

「人の字でござりまするな」

樺山が台の上のモニカを形容した。

両手は、ひとつにして頭上にのばされ、両脚は「八」の字にひらかれたこの姿は、まさしく巨大な人の字であった。

「コレヲコノヨウニ回転サセルト、ホレ、ホレ……次第次第第二身体が引キノバサレテ行キマス」

高さ三尺の台の側面についている把手を廻すと、足錠・手錠に連結されている鎖が不気味に鳴って、少しずつモニカの身体が、ひろがっていく。

「コレ大変苦シイ責メデス。海老責メハ駄ヲ縮メ庄迫シテ痛メツケマスガ、ソノ反対ネ。伸バシテ責メツケマス」

ギシ、ギシッ……。

把手が廻されるにつれて、モニカの額に皺が、たてに走り、乳房のあたりが、ブルン、ブルンと揺れる。

「タイヘン調子ヨロシイ。日本人、コノヨウナ細工物ヲツクルコト上手デスネ」

機織り台(?)の円滑な動きをヘンドリックは満足そうに賞めた。

「田中久重と申してな。一般にはからくり儀右衛門と申す、日本でも手練の男につくらせたものよ」

領田が床几から腰をあげて台に近寄る。

儀右衛門の作か、どうりで見事な出来栄えじゃと元禄屋は感心した。

儀右衛門は、天保から嘉永、明治へかけて一世を風靡した日本一のからくり師で、特に嘉永四年秋、時の將軍家慶公に献上した万年時計は、和時計のなかでの最高の傑作である

ばかりか、世界中の時計師から、いまだに絶讃をされている。ちなみに現在の「東芝」はこの儀右衛門の創立した田中製作所が発展したものだという。

さて、近寄ってきた領田の意図を早くも察したヘンドリックは、

「下着デゴザイマシヨウ」とニヤッと笑い、

「日本ノ女ノソレトハイササカ異ナッテオリマスル。存分ニオタシカメクダサイ」

「余が脱がせてもよいかの」

「御随意ニ」

領田の鉤鼻がヒクヒクと蠢いて、

「モニカ殿。では、失礼いたしまするぞ」

呼びかけられて金髪のしたの青い瞳に、チラリと差らいの翳りをうかべたもののモニカは、目立った反抗は示しはしなかった。

「されば!」

と腕をさしのばしたものの、どこから手をつければよいのか領田も迷った。日本の女のそれとは、どうも勝手がちがうようだ。

「コレヲ外シナサイ、コレヲ」

ヘンドリックが指したのはスリッパの肩紐であった。

うなずいて、それを右、左と、肩から、ずらせると、金色の産毛が微風に、なびく。

肩紐を外されて支えを失ったスリッパをズブズブと腰のあたりまで、ひきずりおろした領田は、ハツとした。女やくざや莫蓮女が胸にさらしを巻いているように乳房から下腹太腿の付根までが覆われているではないか。

「コレ、パニエトイイマス」

スカートを拡げるためにヨーロッパの女が用いる下着である。それを取ると、次に、

「コレハコルセット。胸カラ腹ヘカケテノ線ヲ美シクスルタメニ紐デキツク締メツケマス美シク見セタイトイウ女ノ氣持チ、洋ノ東西ヲ問イマセン」

幾重にも絡んだ紐を解くと、これは左右にパツクリと割れて、領田のひきずり出すままになった。

「コレ、ショーツデス」

ヘンドリックが僅かに腰の周りを包んでいる白い布を剥ぎとろうとしたから領田が、

「まあ、待て！ そ、そんなに急ぐことはなからう」と、あわててとめた。

このショーツとかいう布が、下半身を守る最後のものだったらしい。

「フッフッフ、ヨーロッパノ女、タクサンタクサン身ニツケテマス。湯文字ノシタニ何モツケテイナイ日本ノ女ト違イマス」

制止もきかずヘンドリックがゴム紐に手をかけてひきずりおろすと、その下から、もう一枚、それはほんの申し訳でいどに内股から下腹を覆っているだけではあったが、真紅な布があらわれてきて、目を皿のように開いて見つめていた美女衛門や槍助が、オウーッと何とも云えない呻きをあげた。

「パンティトイイマス。最後ノ布デス。サアドウサレマス。上カラデスカ、下カラニシマスカ」

上カラというのは、乳房をおおっているブラジャーのことであった。その、袋を二つにたち切つて半分ずつ胸にあてがったようなものをみるのも領田たちは始めてであった。

上か——下か——……。

考えていた領田は、

「下からに致そう。ただし、ゆっくりとな」

「承知シマシタ」

声高く云ったヘンドリックは、和蘭語で二言、三言、モニカの耳に、なにやら囁いたが淫らなことでも云ったらしく、モニカの頬がポオーッと紅く染まった。

「領田サマ。アナタニ脱ガセテ頂ケレバ光栄ダト申シテオリマス」

頬だけでなく首頸まで、あかくなつたのは

ヘンドリックの言葉が、モニカの意志ではなく、いま強制されたものだということが、ありありと、わかる。が、強制であろうとなからうと、女の身を守る最後の布をとる快樂を見送るうつけ者は、いない。

「よからう。余が剥きとつてつかわそう」

それでも威厳だけは保つて領田は、さっきヘンドリックがショーツを脱がせたのと同じ動作でゴム紐に手をかけた。

「アッ……」

モニカが始めて喘いだ。

女の羞恥というものは、いづくの国も同じと見ゆる——元禄屋がそう思ったとき、領田の指が下へ、少しさがった。

なにさま、申しわけていどの小さいパンティである。一寸（約三センチ）も真紅の布がずりさげられたかとみると、

「ア、アッ……」

モニカが顔を左に大きく傾けて、瞳を閉ざした。見つめる男たちに、それは秋の稲穂を思わせた。

上が金色であれば、下は亜麻色——と領田は云ったが、まさしく、淡い金色で、まず亜麻色と云ってよかった。

「アウ……アッ！」

モニカが今度は、右側へと大きく顔をそむけた。

白い、蒼白いと云ってよいくらいに白い肌のところどころに静脈をうきたたせた太腿のつけねまで真紅のパンティがひきずりおろされ、あとはのびきったゴム紐が双臀にかかって領田の自由にはならなかった。

「切りマシヨウ。邪魔デシヨウカラ」

下林が即座にさし出した小刀をうけとったヘンドリックが、刃をあてるとゴム紐は、パチッと音をたてて、はじけた。

広くて豊かで、淡い金色。それは絵空事のような夢幻的なニュアンスをたたえている。

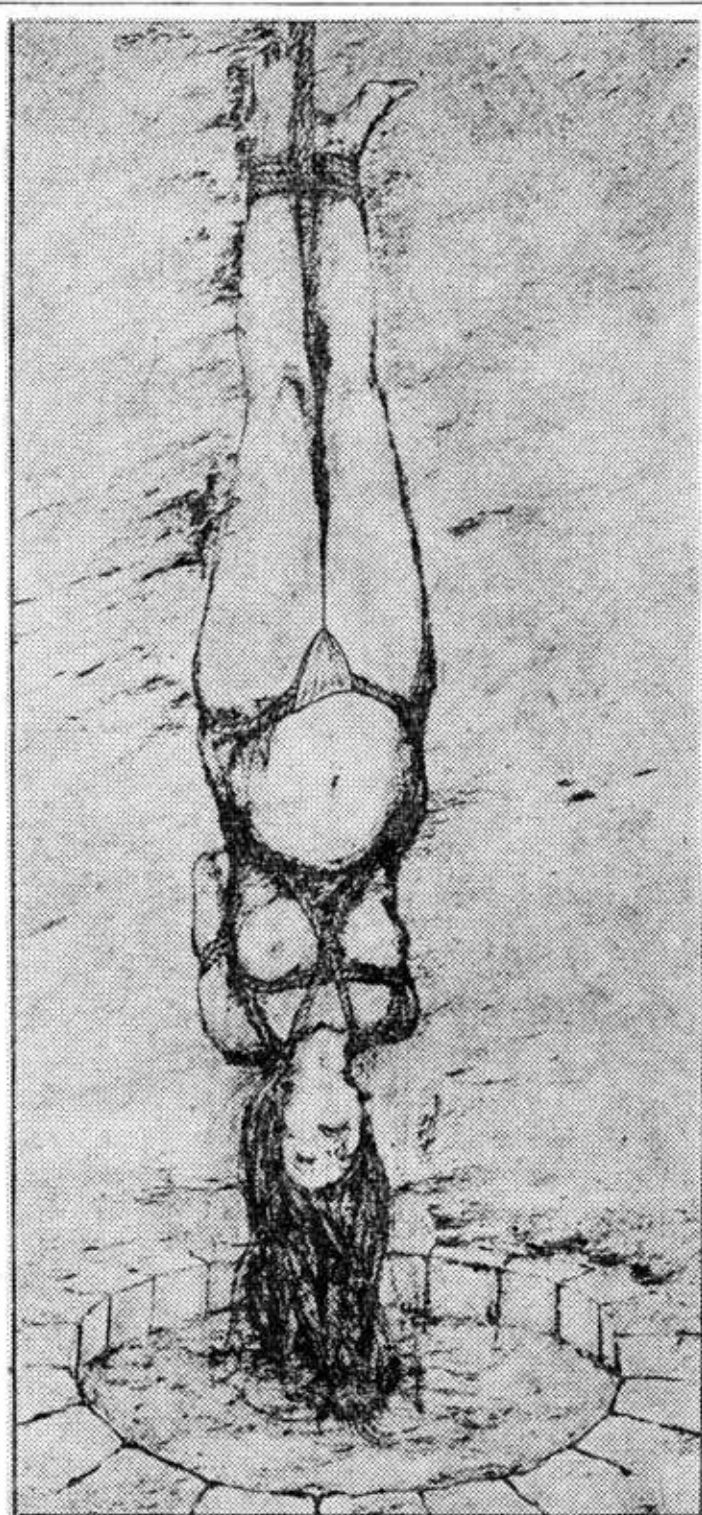
領田の手が、二度ためらったのち、思いきったように伸ばされた。

「ア、アア……」

金髪が揺れて、顔が正面に、もどった。紅い唇が、わななき、なにかを云いたそうであったが、それもつかの間、

「アアアア……」ひときわ高い喘ぎを洩らす。

「へ、へ、ヘンドリック！」



イメージギャラリー 『華麗なる惨美』 市原幸三郎

モニカが荒々しい呼吸のなかで、自分を見おろしている男に呼びかけた。

が、返事はなかった。

いままでの右手に、左手までを領田が加えたとき、モニカは、早くも歯の根をガチ、ガチと合わせ始めた。

領田は、お召平の袴を「八」の字にひらかれた双脚のあいだに分け入らせていく。

責め台の高さは二尺——左手が太腿のつけねを押さえる。右手も同じようにもう一方の太腿を押えた。が、その親指だけは、垂直に伸ばされたままであった。

その親指の黒い影が、白い肌に映っていたのも、ほんの二呼吸の間であつたろう。突如影が妖しくまがったかとみると、

「ヒ、ヒアアア……」

けたたましい叫びとともに、モニカが大きく、のけぞった。

そのはずみにブラジャーが自然に外れて、右の乳房が、ニョキッと姿を、あらわす。美女衛門たちがチャッとそれに目をやった時、ふたたび、すさまじい叫びがあがった。手錠・足錠が、ひっきりなしに金属性の音を、かなでた。

「へ、ヘンドリック、へん……ヘンド……り

ツク！ オオウ……ア、アッ、アッ！」
 あとは理解できない言葉が、のどかな春の
 大気をつんざいて流れていく。

風 車 責 め

「世俗に申す、大女のなんとかとは、よく云
 うたものじゃの」

右手をかざして見ながら領田は、満足そう
 に云った。

「こればかりは身体の大小とは関係がないよ
 うでして」

用人の樺山が、したり顔で答えてのち、

「このように巨大な図体故、内心で案じてお
 りましたが、そうでなくて、はっと致しまし
 た」

なにがホツとしたというのであろうか、白
 髪頭をして大きいも小さいもないものだど、
 あきれかえっていた槍助は、突如、真紅なも
 のが顔に飛んできて悲鳴をあげた。

「お、おや分！ こ、こいつはいったい！」
 てつきり赤い蝙蝠にへばりつかれたと思っ
 たのだが、それは、ヘンドリックが、もう何
 の役にも立たないと剥ぎとって宙に抛り投げ
 たパンティであった。

「あわてるねえ！ 槍助、よく見るんだ」
 美女衛門がとりのぞいてやったが、ふと、
 二人は顔を見合わせて、

「な、なんでしょう、親分、この匂いは」

「はて、俺にも……わからぬ」

団子鼻の孔をおっぴろげて、なおも真紅の
 布を嗅ぎまわるのを面白そうに眺めたヘンド
 リックは、

「チーズ……知ラナイデスカ。牛ノ乳カラ採
 リマス。アノチーズノ香りデス」

「チーズ？ 牛の乳からとると申すと、あの
 乳酪のことか」

己が指に鼻をあてた領田は、元禄屋にも嗅
 ぐようにすすめた。

「いかにも、牛の乳を濃く練り合わせ脂肪分
 を加えますると、このような匂いがいたしま
 するな」

乳酪または牛酪——一般庶民には、まった
 く無縁のものであったが、不老長生の妙薬と
 して古くは平安時代の貴族たちの間で、内密
 に嗜好されてきていた。

「家齊さまも御愛用なされておりますとか」
 「いかにも。そうでもなければ、とてもでは
 ないが二百余人の側妾に五十六人もの子を産
 ませることはできぬわ」

「五十七人でござりまする」

「なんじゃと、たしかに五十六人のはず」

領田は指を折り数え始めたが、いくら老中
 とはいえ、五十六人もの將軍家の子どもたち
 の名を即座にあげることは難かしい。

ニヤッと笑った元禄屋は、

「無駄でございましょう、指を折られまして
 も」

「なんじゃと」

「御子は確かに五十六人。ただこれは正式の
 御子たち。そのほかにいま一人、五十六人の
 御子たちを束にしてもかなわぬ美事な御子が
 おわします。その名は」

やっと気づいた領田は、

「その名は、徳夜叉。そちを手こずらせるほ
 どの男じゃの」

「いかにも。きやつ、いま、いずこに」

元禄屋の驚のような眼が炯々とした光を帯
 びた。

甲州武州の国境に聳える雲取山にいないと
 すれば、いま、どこに隠れているのであろう
 か。いま一度、小紫のお景を責めずばなるま
 いて——元禄屋は、空を見上げた。

雲ひとつない空であった。その下に、爛漫
 と桜が咲き誇っており、そのひともとの枝に

なかば氣を失った美和が、依然として吊り下げられたままであった。

「乳酪の匂いにまちがいない。ただし、より強烈な香りじゃがの」

「オ氣ニ召サレマシタカ」

ヘンドリックが僅かに残ったブラジャーを無造作に剥ぎとると、これまたパンティのように抛り投げながら云った。

「佳い匂いじゃ。氣に入ってたわ。で、次は、どのような拷問を見せてくれるかの」

「風車責メヲオ見セシマショウ」

「風車責め……か、面白そうじゃの」

ヘンドリックの合図で、下林たちが機織り台からモニカを抱きおろすと水車に似た責め台に今度は「大」の字に、はりつけていく。

観念したものか、モニカはされるがままに足をひらき手を真横にのばして、風車——といても、そんなに厚くはなく、うすい羽根が四枚ついただけの責具の上の人となった。

「オランダハ低イ土地デス。海面ヨリモ低イ所が二割五分モアリマス。ダカラ、水ヲ汲ミアゲテ捨テル必要カラ風車が発達シマシタ」
「大」の字にされたモニカを見上げながらのなが話であったが、要約すると次のようなことであった。

ライン川やミューズ川が巨大な三角州を構成するところにあるオランダは、国土の六割が海拔五メートル以下で、耕地の大部分がポルダーとよばれる干拓地だという。そのポルダーは、しかも絶えず揚水してやる必要があり、そのために考え出されたのが風車だという。四枚の羽根が回転し、歯車機構が動力を軸に伝えて水を吸いあげる仕組みである。

「水の多い湿気の多い国か。どうりでモニカ殿の肌も、たっぷりと潤っている筈じゃ」

磔柱ほどの高さがあるうか。

四枚の羽根を背負って縛りつけられているモニカを見上げた領田は、稽古用の槍を手にすると下から内股を突きあげた。

「アレッ……アッ、アッ……」

槍の先端、いわゆるタンポ（綿を布で包んだ部分）が、陽光をあびて、うごめく。

「オランダデハ、罪ヲ犯シタ女ヲ三日三晩、風車ニ、コノヨウナ姿デ張りツケテ曝シモノ

ニイタシマスル。二百年ホド昔ニ、オ・フ・エ・リ・ア・トイウ王女ガ魔女ダトイウ嫌疑ヲウケテ曝サレタノガ最初ダソウデスガ、チューリップノ花ガ一面ニ咲キ乱レル野面ヲ渡ル微風ヲウケテ、コトコトト廻ルソノ姿ハ、無残ナトイウヨリモ妖シイバカリニ美シイモノダッタソ

ウデ、多クノ画家ガ絵ニ描イテオリマス」

チューリップという花が、どのような花なのか知るよしもなかったが、一糸まとわぬスッ裸で高貴の美女が、空中で舞う光景は、確かに美しいものだったに違いないと元禄屋は想像した。

二度、三度、獲物を狙ってうごめいていたタンポが、やっと目標を的確に捕捉した。

「ヒ、ヒヤヤア……」

けたたましい悲鳴とともにモニカは、がっくりと首を折った。

が、領田の手がくるくると槍を回転させるたびに、金髪が波立ち、顔があがって、

「へ、ヘンドリック……」

乳房まで赤くそめたモニカは、何か口走ったが、ヘンドリックの返答はなく、チューリップの花のかわりに桜の花びらが、ひらひらとモニカの裸身に、ふりかかっていた。

モニカ車裂き

「領田サマ。オ約束ドオリニ、腰元タチヲ裸ニシテクダサイ。モニカヒトリ裸デハ、ヤハリ可愛ソウデース」

風車からおろされるやいなや、飛びついて

きたモニカを腕に抱えてヘンドリックは云った。眼の前には大八車から把っ手を外したような車が二台、これを使って車裂きの拷問をこれから繰りひろげようというのであった。「あいわかった」

領田がそう答えながら樺山に目配せをおくと、さあ、それからあとの光景は、百花瞭乱と云おうか、七彩の虹が幾重にもかかったというおうか、物事に動じない元禄屋ほどの男が、思わず身を乗り出して目を瞠ったほどの美しさであった。

これまで——数間離れた毛氈の上で、南蛮の女が責められるという場面を、いやおうなく眺めさせられていた十数人の腰元たちが樺山の「脱ぎませい。半襦袢も湯文字もすべてとり去って赤裸になるのじゃ」という声とともに、一斉に身につけているものを脱ぎ始めたのである。

何の恥らしいもなく——とすることはこの場合できなかった。なぜなら、ためらうものは無理矢理、裸にむいて三日間、中屋敷の門前で曝しものにする、今朝がた云い渡されていたのである。また、裸になるのが一番遅かったものは、拷問にかけられたうえ、美女衛門の子分たちの思いのままに罵られる事に

イメージギャラリー 『屈辱との闘い』 須坂 旭



なっていた。

江戸小紋に、矢がすりに、吉弥格子に染めぬかれた色とりどりの結城縮が、黄八丈が、桐生銘仙が、帯や腰紐、伊達巻、帯揚げといっしょに大空に舞い、長襦袢や半襦袢が緋の

毛氈に大輪の花を咲かせる。なかでも、白、緋、水色、桃色と、色とりどりの湯文字が、ほとんど同時に滑りおちていく情景は、この世の極楽かと見えた。

「吉原を買いきってもこうはいきませんぜ、

「親分」

さすがは飛ぶ鳥をおとす勢いの領田様と、槍助は興奮に胸をたぎらせて呼びかけたが、それも当然、これから彼の出番なのだ。

槍助と美女衛門と下林、それに樺山の四人が、一糸もまとわず乳房と前をかくして佇んでいる女たちを縛りあげる役目を仰せつかっているのだ。

槍助ならずとも胸が躍るに相違ない。

「行きますぞ、親分！」

これはと目をつけた女にとびかかると、アレツと悲鳴をあげるのもかまわず女谷流多角縄のうち四角に縛りあげていく。

美女衛門も、負けてはいない。手近の女に手練の菱衆縄をかけると、次の女には平行縄三人目は秘縄・黒蛾と、目にもとまらぬ早さであった。

むんむんと漂う脂粉の香りのなかで、女たちの悲鳴があがり、嬌声が乱れ、樺山のしわがれ声と下林の怒鳴り声が、ひびく。

ものの四半刻の間というものの、ここ小石川の領田家の中屋敷は、この世のものとも思われない極彩色の妖艶な絵巻を繰り拡げつづけたのであった。

が、それも、縛られるにつれて、一人、二

人と、おとなしくなっていき、春の陽が、すっかり西に傾いたころには、また、もとの静けさに、もどったのだが、しかし、これは何という沈黙であろうか。

それぞれ異なった姿態で縛りあげられた女たちが、二間（約四メートル）の間隔をおいて二列になって向きあい、いずれも片膝をたてて、いちように蹲り、ただ、肩で呼吸をしている沈黙——。

緋の毛氈に桃色の肌が映えて、そうでなくてさえ生温かい春の宵の気が、若い女たちの体温で、いっそう熱気をおびて、妖しいばかりに濃んでいた。

と、この沈黙を破ったのは、ヘンドリックの甲高い声であった。

「モニカ・ファン・インダイク——コレヨリ車裂キノ刑ニ処シマス」

抱いていたモニカを、生馬の皮を逆剥にしたという美女衛門の腕のなかに突きとばす。

「ア、アッ、ヘンドリック！」

やるせなく叫んだものの、モニカの瞳は妖しく潤んでいた。かずかずの拷問を受け、被虐に慣れさせられた女体が、いま目のあたりにした妖しい光景に煽られて、どうしようもなく燃え始めたのであろうか。

「へ、ヘンドリック！」

美女衛門の腕のなかで万力のように締めつけられ、二台の車の中央にひきずられていきながらモニカは叫んだ。

つづいて進ったオランダ言葉は、イヤと云っているのであらうか、それとも諾と叫んでいるのであろうか。

「女の否定は、肯定じゃからのう。イヤといっているのは、ヤッテ下サイというのと同じじゃわ」

領田が、ギヤマンの盃を目八分に保ったまま呟く。

車と車の間には荒筵が敷かれてあった。その上に仰向けにされたモニカは、必死で抵抗する気配を示した。

「みごとな演技でござりまするな。市村座の舞台へ出してやると云ったら、為永種彦め、随喜の涙を流して喜ぶでござりましょうに」

「フッフッフ、歌舞伎というものは不自由なもので、女形とか申す奇妙な存在があって女を舞台には出さぬ。思えば愚劣な事よ。

種彦の『鎖格子女之拷問』に致しても、なぜ絶世の美女のお琴を男である沢村田之助が演じねばならぬ。女を舞台にあげることじゃ。

そちの手中にある豊香でも千登世でも貴子で

も誰でもよい。女を舞台にあげて、スッ裸に剥くなり半裸にするなり、ともかく生身の女に、お琴を演じさせることよ」

領田の意見に元禄屋も同感であった。

「なれば、なぜ奨励いたされませぬ。歌舞伎は本来、出雲のお国なる女が創めたもの。女こそ舞台に上って踊るのが正しいのじゃと」

「そちには、まだ伝えていなかったかの」

領田は、車の車輪に片足ずつ縛りつけられているモニカに目をやりながら、

「踊る——という言葉が、オドル——男取る

——つまり男を取りたいという、男と寝たいという女心の発露であると云ったのは、そちじゃったの。だから余は幕閣の意見をまとめたの、市村家、尾上家、市川家、中村家などの役者どもに、その旨を伝えたのじゃ。ところが、あの馬鹿めらが……」

右足首と左足首を別々の車に縛りつけられたモニカは、両手で乳房をおおって、ヘンドリックの合図を待っていた。

車を右と左にひっぱるのは、槍助と美女衛門の役目らしい。合図次第で、行動を開始して、車裂き、つまり日本で云う股裂きの処刑を、いつでも開始できる体勢であった。

「馬鹿めが、お拒り申しあげたのでござりま

しょう。歌舞伎界には権現様（徳川家康）以来の、しきたりがございます。不浄の女を桧舞台にあげることはなりません——と」

元禄屋の言葉に頷いて、

「その通り。親の心、子知らずと申そうかのう。やれ格式がどうの、襲名披露がどうのと自分たちの地位を守り収入を増すことばかりに汲々として新しいものは、うけつけぬわ」

「歌舞伎の世界も滅びるのが近うござりまするの。馬鹿な奴らめ」

と云った元禄屋は、真顔になって、

「して幕閣はいかがでござりましょう。天下の御政道も歌舞伎と同じように新儀御法度の旧套墨守のありさまではございませぬのか」

「こやつ！ 自由なことを、ほざきおる！」

元禄屋をかえりみた領田は、

「そちらならでは、云えぬことよのう。天下の富を一手に握っておる、そちらならでは。ワッハッハッハッ……」

小気味のよい笑い声であった。

安房東条十萬石の藩主であり現在は老中の要職にある領田下野守信秀が、御政道を一新するために、鋭意、幕閣で立ち働いていることを知っている元禄屋は、それ以上、追求しようとはせず、ギヤマンの盃に満たされた処

女の血のように赤い酒を一息に、ほした。

その耳に、

「用意！」しばらく、まをおいて、「一、二……三！」

樺山の声が聞えてきた。

全裸で縛りあげられ、下うつむいていた腰元たちの黒髪が誰からともなく揺れて、顔があがった。怖いもの見たさ——というのであるが、羞恥もしばし忘れたような瞳、瞳、瞳……が、ゆっくりと左右に別れて、進みだした車と車の中央を見つめる。

樺山の合図は、車裂きの開始を告げるものであった。

コト、コト、コト……。

槍助が右へ向うと美女衛門が左へ進む。五寸、一尺、一尺五寸……しっかりと揃えていたモニカの足首が、それにつれて開く。二尺二尺五寸……大八車に似た奇妙な車の轍の音が、砂利を噛んで、コト、コト、コト……と不気味な、ひびきを立て、

「ア、アッ、アッ……」

モニカが喘ぐ。喘ぐたびに小山のように盛りあがった乳房がブルンブルンと揺れて、へそが激しく上下する。

必死で合わせつづけていた両膝が、むなし

く割れて「アッ！」という悲鳴があがった。

ゴト、ゴト、ゴト……

「ヒ、ヒヤアア！」

という叫びは、踵で荒筵を押えて両足が開かれるのを防ごうとしたが、かなわず、一挙に七、八寸も両膝が開き、その反動で、ふくらはぎが横にそりかえったせいであった。それにしても巨大な裸身であった。衣笠美和に較べれば倍もあろうほどの太腿、双臀、腰周り。それに見事な脚の発達は、胴長の日本の女に較べると異様なものにさえ見えた。

「フランスストイウ国ガアリマス。ソノ国ガ、イギリスストイウ国ト、百年モノ長イアイダ戦ッタコトガアリマス。フランス敗ケソウデシタ。ソノトキ美シイ乙女、出現シマシタ。ジャンヌ・ダルクトイイマス。男装シテ陣頭ニ立チ、イギリス軍ヲ散々ヤツケテ、フランスヲ勝利ニ導キマシタ。トコロガ……」

ヘンドリックは、両脚を八の字に開かれてしまったモニカを見つめながら、

「イギリス軍、謀略ツカッテ、ジャンヌヲ捕エマシタ。ソシテ、拷問ニカケマシタ」

領田たちも、モニカの裸身に好奇の視線を注ぎながらヘンドリックの話に耳を傾ける。

「ソノ拷問トモヒドイモノデシタ。マズ、

スッパダカニサレマシタ。檻ニ入レテ沢山ノ兵士ニ見セマシタ。伸バシ責メ、鞭打ち、吊シ責メ、ソレニ水責メ、火責メニモアイマシタ。ホレコノヨウニ……」

モニカの見事に発達した両脚は、すでに八の字から、一の字になるくらいに真横にひき裂かれていた。

「ジャンヌ・ダルクハ、モニカガ今サレテイルヨウニ車裂キニサレテ、シカモ」

傍らにころがっていたタンポ槍を取りあげたヘンドリックは、

「シカモデース。フランス随一ノ美少女ト謳ワレタジャンヌ・ダルクハ、ホレ、コノヨウニサレテ、何千人トイウ人々ノ中デ曝シモノニサレタ上デ、コウシテ！」

語尾に力が入って、タンポ槍が手元から繰り出された。

「ム、ムウ！」

モニカが、のけぞった。金髪が波立ち、紅い唇のなかの白い歯が強く噛み合わされた。

「処女カ、処女デナイノカヲ調べラレ……」

タンポ槍を、ほんの少し手元にひいたヘンドリックは、再び、強い口調で、

「処女デアルコトガ証明サレルト、コ、コノヨウニシテ！」

視野から消えたのは、タンポの部分だけではなかった。

「ジャンヌハ結局、火焙リニサレマシタ」

「それはまた何故ですじゃ、白状しなかったのでござりましょうに」

元禄屋は、小紫のお景のことを思いうかべて尋ねた。

「ナニサマー糸マトワヌ素ッ裸、日夜颯リニクル兵士タチニ耐エカネタノデゴザリマシヨウ、一年半ノチニ一切ヲ白状シテ、火焙リニサレマシタ。フランス国民ニ対スル見セシメノ意味モアッタノデシヨウ」

「一年半のちにのう……遅すぎるわ」

元禄屋は独りごちた。お景は、まさしくジャンヌ・ダルクのような女だ。穴沢流中高舟の拷問にも真実は、ついに白状しなかった。

「あと一年半ものう」

一年半もお景が真実を白状するのを待っているわけにはいかない。なんとかして一日でも早く徳夜叉の隠れ家を、戌夜のロザリオの所在を吐かせたい。

無然とした表情で腕を組む元禄屋をよそに、どうやらモニカに新しい責めが加えられるらしく、領田に何事か耳打ちした美女衛門と槍助が足早に裸身にかけよった。(つづく)

注腸造影検査受診体験記

白いイルリガートル

浅野 かつみ

○月○日、東京R病院内科診察室で、

「一度、精密にレントゲンを撮らなければなりませんね。この放射線科は、すべて予約制になっていますので、今すぐに診ることは出来ませんが、一応あとで日時の予約をしておいて下さい。ただ病院の方針としてバリウムを下から入れることになっていきますから念のため。このカルテをもって放射線科の窓口で受付けてもらって下さい」

と、渡されたカルテと処方箋をもって長い廊下を歩くうち、ふとカルテの内側を見ると（放）注腸検査、とゴム印が押されている。

「お願いします」と窓口のナースにカルテを渡すと、早速、記帳をしながら

「三日後の○月○日に、この部屋に来て下さ

い。注意書は、この紙に書いてありますからあとでよく読んで下さいね。当日は撮影の前に浣腸をしますから」

ごく事務的に言われたが、診察券と注意書をもってその病院を出たときは、浣腸を受けることの予約をとったような気持だった。

『注腸検査（大腸の検査）——検査前日は夕食を早めにとって、その後は検査当日まで朝食その他、何もとらず来院して下さい』

いろいろな注意事項のうち、注腸検査の項だけ、横に二重丸が打たれている。

勤務先での昼休みに、社内診療所のナースと廊下で会ったので聞いてみた。

「注腸というのは、お尻からバリウムなどを入れるのよ。大腸の検査の時は口から飲んだ

ってだめなの。それに前もって必ず浣腸されるし、自分で、いちじく浣腸をして行ったら、いけないの。あれでは充分、排便されないわよ。バリウムは浣腸器で入れられるのだけれど、どの位、入れるのかしら」

R病院の放射線科の受付に電話を、してみた。

「○月○日に検査を受ける浅野ですが、何時頃、お伺いすればよろしいでしょうか」

「浅野さんですね。注腸検査は十時ですからそれまでにお越し下さい。すぐ浣腸してレントゲンの用意をしなければいけませんから。注意書はお読みになったでしょう。その日の朝、排便があっても必ず浣腸はしますから。投視撮影のとき、少しでも残溜物があつては困りますので」

今迄、医療機関で浣腸を受けた経験はあるが、注腸そのものは初めてであるし、殊にその前に、三日にせよ待ち時間があるということは、期待と一種のあせりで落ちつけない。時々、注意書をポケットより取り出しては眺める。

○日が来た。病院が遠いので、余裕をもって自宅を出たつもりだったが、途中の交通停滞などで予定より十分位遅く到着した。朝の食事は採っていないし、一時間半も電車バス



に乗り継いでいるのでさすが疲れを感じる。

昨年、新築されたばかりのこの病院は、未だ塗料の香が鼻につき、真白い壁、天井が目にしみる。放射線科の待合椅子に掛けると、すぐ受付にいたナースから「浅野さんですねこれからすぐ浣腸しますから、どうぞこちらへ」大きな声で言われた。周囲の二、三人の人から、じろりと見られたような感じがするので、もう少し気のきいた伝え方はないものかと思いながら、そのナースの後について準備室と表示のあるドアに入る。

あまり大きくない部屋の片隅に、茶色のレザー張りのベッドと、イルリガートル台が置かれているのが、すぐ目にとびこんでくる。「少しお待ち下さいね、準備をさせていただきますから」

ナースは、そう言い残すと、隣の部屋に消えた。やがて「ガチャン、グオン……」などと、用意する音が静かな病院内に、こだまするように聞えてくる。

「やはりシリンダーではなくイルリガートル使用なのだろうか。浣腸でなく腸洗浄のことかな」などと考えている所へ、先のナースが両手に重そうにイルリガートルをさげてやって来たが、そのイルリガートルの大きいこと今まで、点滴用のものは見たことがあるが、

腸洗浄専門のものともなると、このような大型になるのかと感心したり不安になったり。

目盛には数字が入れてないので、どの位の分量か、はっきり判らないが、一五〇〇CC位はあるように思われる。文字どおり満々と石鹸液がたたえられ、白い泡が、その上に盛り上っている。太めの茶色のカテーテルの先端附近には、滑りをよくするためか石鹸液らしい泡が一杯に塗られている。

「そのチューブを、どの位入れるのですか」「この位です。ここに、しるしがあるでしょう。十センチ位かしら」

なる程、目盛りがあり、また先端より一センチ位の所に左右に穴があいているのも、いやに目につく。かなり太い感じのカテーテルであり、途中の、とめ鉄で、しっかり液洩れを防いでいる。

「そのベッドに、向うを向いてお尻を出して横になって下さい。少し足を曲げて、お尻をベッドの端から、つき出すような感じでね。お腹には力を入れないように。口を少し開けると力が入りませんから」

今までカテーテルつきで浣腸されたことは一度しかなく、その時のS病院では五〇〇CCシリンダーだったし、あまり深くもなかった記憶がある。

ナースの温かい指を感じたと思う間もなくカテーテルの先端を意識する。が、その前の感覚では、深さなど不思議に解らない。しかし、カテーテルは固いものだという感じだけは伝わってくる。などと思う間もなく、とめ鉄が、はずされたのであろう。なま温かい液が直腸に流れ込んでくるのが分かった。四、五秒で直腸は一杯になったようで、膨満感で相当な痛みを覚える。思わず「ううっ痛い」と口走ってしまった。

「痛めますの？ 一度、休みますから」と、言うが早いのか、するすると固い感じだけは、なくなった。

「トイレに行っていらいっしやい。便秘してますのね。少し便を出してから、また入れますからどうぞ」

カテーテルがなくなると少し楽になった。

「もう大丈夫です。続けて下さい」

前記と同じ要領が、また繰り返された。液が直腸部より大腸に徐々に流入していくのが温かいせいか、よく判る。三分位、過ぎただろうか。カテーテルは静かに抜去され

「では、おトイレへ行って下さい。この次の部屋の左側にありますから」

イルリガートルを振り返ってみると、きれいに空になって泡が少し残っているだけであ





る。

トイレで文字どおり、すっかりお腹を空にして、また、待合室に戻る。気のせいか、体が少し軽くなったようだ。

一息入れたところで、

「浅野さん、どうぞ」

と呼ばれる声に誘われて、内心ではドキドキしながら放射線撮影室に入る。回転式シーメンス製X線撮影機が中央に据り、下着だけの姿で、その装置内の台に横たわる。

横には空のイルリガートルが、ぶら下げられており、技手が、それにバリウム液を注ぎ込む。さき程のイルリガートルと同じ型のものだ。浣腸に使われた分は、既にきれいに洗われて別の場所に置かれてある。

バリウム液の量は、見たところ一〇〇〇CC位だろうか、技手の手で満たされたイルリガートルは真白くなり、その中に液が入っているようには見えない。まるで上下に白く塗り分けられたガラス筒のような感じで、実に美しい。

「〇〇さん、お願いします」

技手の声にナースが現われ、カテーテルがまた、挿入されるが、今度はそのカテーテルは臀部にテープで、しっかりと固定される。徐々にバリウム液が入ってくるのは感じとれ

るが、不思議に便意は催さない。

そのままで左を向いたり右に向きを変えたりして幾枚ものX線撮影が行なわれるが、その間にもバリウム液は休みなく注がれ続けている。十数枚も写したであろうか。固定用テープはとられ、カテーテルは抜去される。

「トイレに行つて、バリウムを全部、出してしまつて下さい。急ぎませんか」

言われるままトイレに行つたが、排出感がなくても、いくらでもバリウムが出てくるので、一寸、奇異な感じがする。

すべて排出し終つたところで、もう一度、撮影を受け、その日の検査は終つたわけであるが、腸の検査は病院によってバリウムを飲むだけ。注腸、適時双方など分けて使用など種々あるらしい。私が門をたたいたR病院では注腸が専門だったようで、私にとっては、いわば幸運だったといえよう。

下腹部に疼痛が続いたので診断を受けた結果だったのだが、同じくこの病院で二、三日後、胃の透視を受けたところ、便秘し、内科外来処置室でナースより浣腸を受けた。五〇CCシンダーでカテーテル付きであったが浣腸施行中に、そのナースが自分の体験談などを話してくれたので、このことについてはまたの機会にお知らせしたく思っている。

大腸カタルと診断され、しばらくその病院で投薬を受けていたが、薬がなくなるとともに足も遠のいてしまった。

ところが、半年位してまた、健康を害してきたような自覚症状を覚えたが、前のR病院では通院に時間がとられ過ぎるので、今度は勤め先の近くのT病院を訪れた。

R病院での検査のことも診察のときに説明し、症状を述べたところ、一応この病院でもX線写真を撮るよういわれ、バリウムを飲む方法で第一回目の検査を受けたが、数日後に結果を聞きに行くと

「バリウムを飲んでもらつて検査をしたが、直腸まで充分、届いてないので、このレントゲン写真をみただけでは判別出来ない。御苦労だが、バリウムを下から入れる方法で、もう一度、撮つてみなければならん。注腸撮影というのだが、それだと飲んだ場合より、ずっと、はつきり解るので、受付けで予約をしてくれないかね」

受付ではナースが手早く記入し、電話でX線科と打合わせたのち、注意書を渡された。「詳しいことは、この注意書をお読みになつて下さいね。二十三日にこの用紙をもって、この横にある処置室にお越し下さい。時間は十時ですから遅れないようにね」

「処置室に行けばよいのですね」
 「そう、そこでお浣腸をしますから。それが
 済んでから透視します」
 帰りに、その注意書をみた。

No19

注腸造影についての注意

浅野かつみ殿

昭和四十八年〇月二十三日（〇曜日）
 午前十時までに内科外来処置室へこの用
 紙をもっておいで下さい。

前日は夕食は午後六時までに消化のよ
 いものを軽く召し上って下さい。午後七
 時頃、本日処方された下剤（ヒマシ油）
 を服用して下さい。当日は絶飲食です。

処置室で二回、浣腸をすませてから放
 射線外来に行つて頂きます。

検査に要する時間は個人毎に異なりま
 す。従つて予定時間から大分ずれること
 もありますので予め御了承下さい。

妊娠および妊娠の疑いのある方は前も
 ってお申出下さい。

都合が悪くなったときは、なるべく早
 く〇〇〇内線〇〇に御連絡下さい。

〇〇〇病院
 内科外来

この病院については思い出がある。都内で
 最高規模クラスのこのT病院に四、五回、通

ったことはあるが、浣腸を受けたことはなく
 何れも下剤の投与での、失敗に終わっている。

大病院だから、その位のこととは外来に対し
 ては処置の中には入らない位に考えているの
 かも知れないが、何かと理屈をつけて試みた
 もの、考えてみれば、その処置を頼み込む
 という方が無理なのであり、今回も胃と腸の
 X線撮影のとき、前もって、或は、とも期待
 を持ったのだが見事はすされ、その結果を聞
 きに行った日も、あきらめ切っていたところ
 思いもよらぬ結果をみたわけで、思い立って
 から四年目に、やっと望みが、かなったとも
 いえる気持であった。注意書の「浣腸」の文
 字が焼き付くように目に、しみる。二回とあ
 るが、これは一般のグリセリン浣腸と石鹼に
 よる腸洗浄のことだろうか。

指定日、T病院に赴く。十時少し前、処置
 室の標示のある室の隅に腰掛けて、みること
 もなく、ナースの後の壁をみると、タイルに
 「浣腸カン」がぶら下っている。イルリガー
 トルなら知っているが、これは初めてである
 「カン」の下部よりゴム管がのび、先端に嘴
 管がついている。あれでされるのかな、どの
 ナースが担当してくれるのだろうか、などと
 思いながら待つこと十分位で、一人のナース
 が私の伝票を、とり上げた。

じつとその様子をみていると、横のナース
 に「今日は注腸造影があるのね……」と話し
 ながら浣腸カンをとり上げるので、あれから
 先かなと思っているうちに、石鹼液を手ぎわ
 よく入れながら、「浅野さん」と呼び、「あ
 ちらのカーテンのかげのベッドへ、どうぞ」
 という。

スクリーンに隔てられたベッドを指差し、
 「ここにお休みになって待っていて下さい」
 ナースに言われるまま、じつと横になって
 周囲をみると、ベッドの横にはイルリガート
 ル台も何もない。どうするのだろと考えてい
 るうちに、さき程のナースが浣腸カンをぶら
 下げ、他の手にトレイをもってやって来た。
 「ちょっと〇〇さん、手伝ってちょうだい」

看護助手を呼び、
 「あんた、このカンを、持ち上げてくれな
 い。あまり高くないようにしてね。液が、こ
 ぼれるから」

青い服を着た無帽の助手嬢は、神妙にカン
 を、もち上げる。

「浣腸しますから」

と宣告するように言い終ると、トレイから
 細長い紙袋をとり上げ、その中からカテーテ
 ルを、とり出す。恐らく完全消毒済のものだ
 ろう。それを嘴管の先に、とりつける。





「ズボンを下ろして下さい。そして向こうをお向きになって」

話しながらカテーテルに、トレイから、とり出した軟膏を塗りつけ、

「お腹に力を入れないようにね。口を少し開いて、力が入ると痛いですから。はい、そのカンを少し上げて頂戴。もう少し。その位」助手嬢の顔の高さに持ち上げさせたナースの指先を感じたかと思うと、そのまま力強く、といった感じでカテーテルが押し込まれる。その間にもナースと助手嬢との、おしゃべりは続く。

「この中に何が入っているのです？ クレオソートですか」

「石鹼液よ。これを腸の中に流し込んで、お通じをつけるの。そのカン、だんだん軽くなってきたでしょう。そのチューブを伝って流れているの。もう少し低くして……はい、もういいでしょう」

ゆっくりカテーテルは抜去されて、代りにちり紙が当てられる。

「出来るだけ我慢してからおトイレへ行して下さいね。そのあと、十一時に、またここに来て下さい。もう一度、浣腸をしますから」

「今、どの位、入れたのですか？」

「そうね、五〇〇CC位かしら」

十一時少し前、また、処置室に行く。さきのナースが覚えていてくれて、

「浅野さん、ベッドで待っていて下さい」

待つ程もなく、すぐナースはやってきた。

もう用意が出来たのかと一瞬ためらって見ると、もって来たのは浣腸器やイルリガートルではなく、半透明の、丁度、歯磨のチューブみたいな型をしたもので、その先端に十五糎位の嘴管がついている。チューブ自身の長さは二十糎位だろうか。

「こんどは、これを使います。さっきの浣腸で十分、出たとは思いますが。では同じようにあちちを向いてズボンを下げて下さい」

補助者は連れて来ていない。ナースはベッドの横に、しゃがみ込み、嘴管の挿入をはかるが、仲々うまくゆかないらしい。

「一寸、そのまま、お待ちになってね」

足早に出て行ったかと思うと、先程、使った軟膏をもって来て、嘴管に丁寧に、塗りつける。

「お腹に力を入れないでね」

今度は、あっけないほどスムーズだった。

ゆっくりチューブを搾っているらしく、冷たい薬液の流入を感じる。この器具は恐らく使い捨てにするものだろう。

「この中にグリセリンが入っていますのよ。」

こんな型だから簡単に出来るし、前のように石鹼液を溶かしたりしなくてもいいのよ。これなら、家庭でも出来るわよ。でも一人ではどうかな」

後日になって、自分で使ってみたことはあるが、素人では一人でするのは一寸、むづかしいといったような感じだった。

「トイレに入ったあと、これを、放射線科にもっていったね。それから、こちらの伝票は帰りのときに会計の窓口ね」

渡された伝票には「処置、高圧浣腸、グリセリン浣腸」と書かれている。

受付係が私の伝票をもって「6」のドアに消えると、すぐそこからナースが出て来て準備室に入り、イルリガートル、カテーテルエネマシリンジのようなゴム球のついたものそれに便器などを手早くトレイにまとめ、もとのドアに入って行った。便器など、どうするのだろう、などと考える間もなく、

「浅野さん、お入り下さい」

呼ばれる。

「浣腸は、すましましたね。では、腕をまくって下さい。肩に、お注射をしますから」

筋肉注射をうたれたが、腸の蠕動運動などを止める作用のものらしい。が、このため、あとで、ひどい苦しみを受けることとなった

のだが、その時は別に気にもとめなかった。撮影室の中は手前が操作室、奥が撮影室になっている。

「その、つい立の向うに箆がありますから、そこで着ているものを全部とって、箆の中の白いガウンに着換えて下さい」

言われるままに着かえると、何のことはない、おばQスタイルだ。

「その機械の台の前に立って、白い線に真っ直ぐに沿って下さい」

立つと、すぐその台は回転をはじめ、ベッドのようになり、すぐ上に、撮影装置がみえる。ナースが又、現れ、ヒップを撫でる。下穿きをとったかどうか確認しているようだ。

「右をむいて、上の足だけ曲げて下さい」

簡単に裾がまくられ、カテーテルだけが挿入される。かなりの異物感があり、一寸、串ざしになったような感じとなるが、出ている部分は念入りにヒップ、足などにテープで固定される。

「先生、入れてよろしいですか？」

ナースの手でカテーテルは白いイルリガートルに連結される。

遠隔操作でイルリガートルは自動的に所定の高さまで上っていく。バリウム液の量は案外、少ないが、相当ゆっくり注入されている

ようで時間がかかる。

注入が終わったところで連結は外されたが、カテーテルはそのまま、先端をクリップで止めるとナースは室外に出て行き、

「それでは始めます」

とスピーカーから声が流れはじめる。その指示どおり上を向いたり、下を向いたり、頭の方を下に向けたりして後、やがて平行になると、ナースが手にゴム球をもってやって来た。エネマシリンジだろうか。

「まっすぐ上を向いて、足を少し広げて下さい」

カテーテルにゴム球が連結されると、「シュツ、シュツ」と空気が送り込まれる。その度毎に大腸が、みるみる膨らんでいく。

「少し苦しいでしょうが、我慢して下さい。」

すぐ楽になりますからね」

ナースは慰めてくれるが、本誌記事に見られる空気流腸も、この種のものと思われるものの、バリウム液を注入された上、更に空気を入れると、相当な苦しみであることは事実である。

膨満したまま撮影再開。途中で、もう一度空気を同じ要領で追加注入される。お腹の中は文字どおり一杯となり、これ以上、入れられないように祈るばかりとなる。

「ハイ、これで全部、撮影は終わりました」

スピーカーの声にホッとすると、再び台は回転し、立ったままの姿となったところで、ナースが後にまわり、

「そのまま足を少し開いて下さい」

と言いながらテープを剥がし、カテーテルを静かに抜去して、飛び散っていたバリウム液をチリ紙でふきとり、便器に入れる。

「全部、終わりましたから、着換えてこの伝票を会計にもって行って下さい」

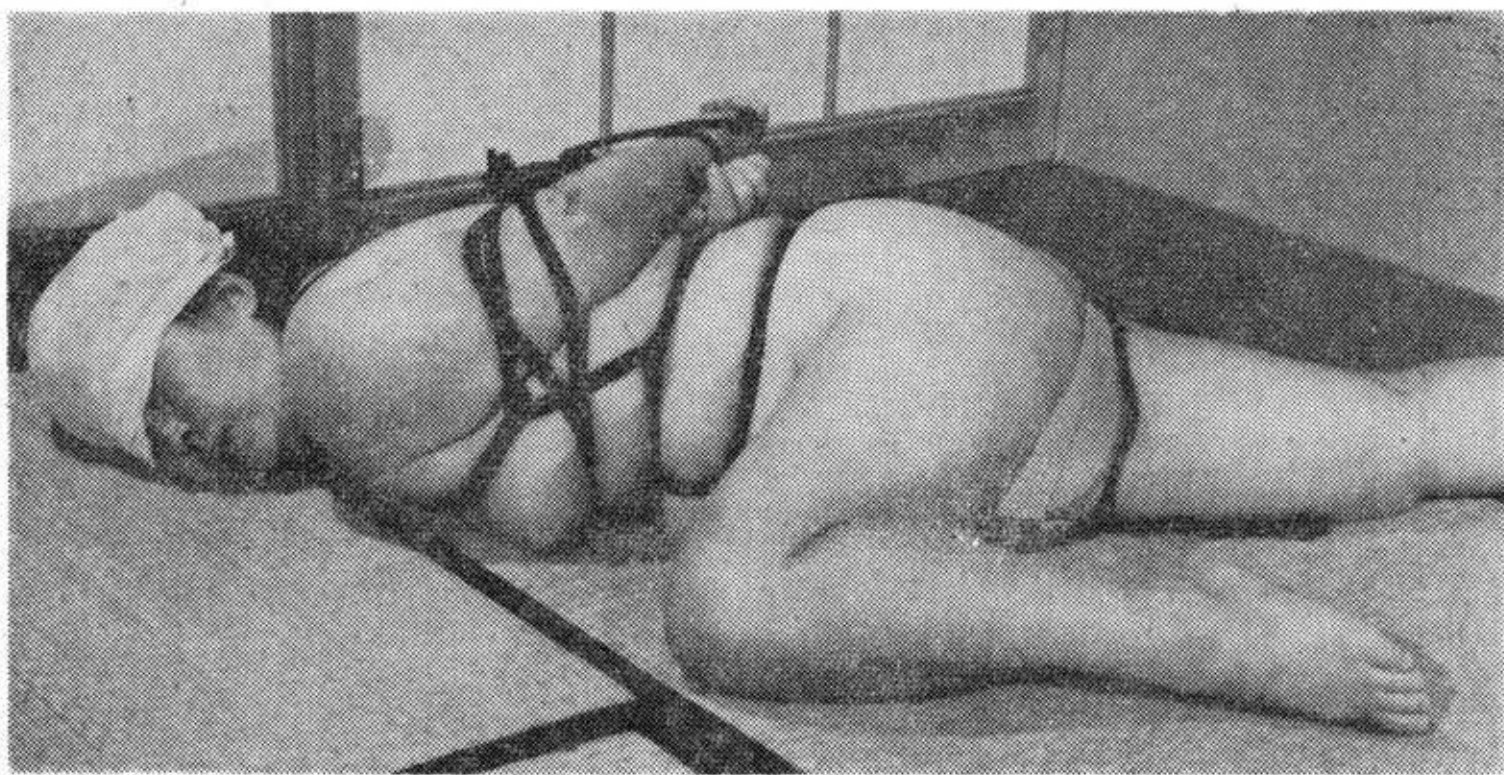
伝票をもらって撮影室から出たものの、大腸の膨満感は一方向に治まらない。それは徐々に痛みになり、待合室にある会計窓口に着いた頃には立ってはおれない位の激痛となり、会計を済ますのも、やっとで、そのまま、待合室の椅子に蹲ってしまった。

受付係の好意で救急扱いとして診断をすぐ受けることとなったが、担当の女医さんは、「注腸検査は、あとで空気とバリウムは抜いてくれる筈ですがね。苦しいでしょう。しかし、今流腸など出来ないのです、注射をしておきますから」

腸の蠕動を、促す作用のものであろうか、一時間程ベッドで休息しているうちに、すっかり楽になった。

——(おわり)——





……畜化願望の女から編集長へ……

「輪姦願望」の訴え

苗木陽子

編集長さま

立春が過ぎたと申しますのに、毎日、大変お寒い日が続き、時折り、雪が、ぽろついたりしておりますが、お元気にて、御活躍のこと、かげながら、およろこび申し上げます。

私が始めて、お便りを差し上げましたのは、去年の暑い夏の盛りでございました。そして二度目は、さわやかな秋の頃、更に三度目は十一月も終りに近い、たしか、うら淋しい晩秋の頃だったかと、記憶しております。

それが、四度目のこのお便りを書いております今は、毎日、雪の便りばかりの今日この頃でございます。年月のたつのは早いものだと今更のように、驚かされますのも三十路女みそじ

のひがみでございましょうか。

私も、おかげさまで風邪かぜひとつひかず、毎日、忙しく走りまわっております。今年になりましてからは、とかく外出勝ちでございましたので、奇ク三月号を入手しましたのも、やっと、二月の声を聞いてからでした。

巻頭のルポ「牝獣と牡獣の対決」を開きましたとき、私の血は妖しくたぎり、頬がほてりました。あのときの、あのプレイと、思ううかべますと、タイトルを見ただけで、もう体が燃えて燃えて仕方ありませんの。

ルポの文章を読み、写真を眺めながら、もう幾度、マスターベーションしてしまつたことでしょうか。陽子って好色で欲張りな女で

すわね。こんな、お恥かしいお便りを書くなんて、どうかしているなあ、と、自分でも思うんですけど、それでも、どうしても書かすにはいられないのです。

私は昨年十二月に、生れて初めて、四人の男女による合同のSMプレイを経験いたしました。あの時は、プレイが終ったら、本来なら、ぐったりして、ぼんやりと、二、三日は気の抜けたようになるものなのに、家に帰るなり、またまた、猛烈にSMプレイがしたくなってきました。何処まで、好色度が深まるのでしょうか。自分ながら、そら恐ろしいような気さえ、いたしますわ。

それだけ、刺戟が強かったのでしょうか。すっかりケモノ扱いにされた私は、部屋へ入るなり、全裸にむかれて人間扱いはしてもらえませんでした。二人の男性から、体中の脂という脂が絞りとられてしまうほど徹底的にいじめ抜かれて、全身がとろけ、しびれて感覚を失ってしまうような満足感を、たっぷり味わいました。

あのプレイの中で、坂本さんに指でアヌスを責められました時は、今までに生を享けて以来、一度も味わったことのない、異様なまでの感覚とアクメを経験しました。

A 感覚って素敵ですわね。たまたなく気持がよかったのです。とても感激でしたわ。

あんなSMプレイでしたら、私は一晩中でもやられてみたいのです。一回より二回、二回より三回という風に、回を重ねるたびに私の好色度は、ますますエスカレートしてくるように思えてなりません。

編集長さま

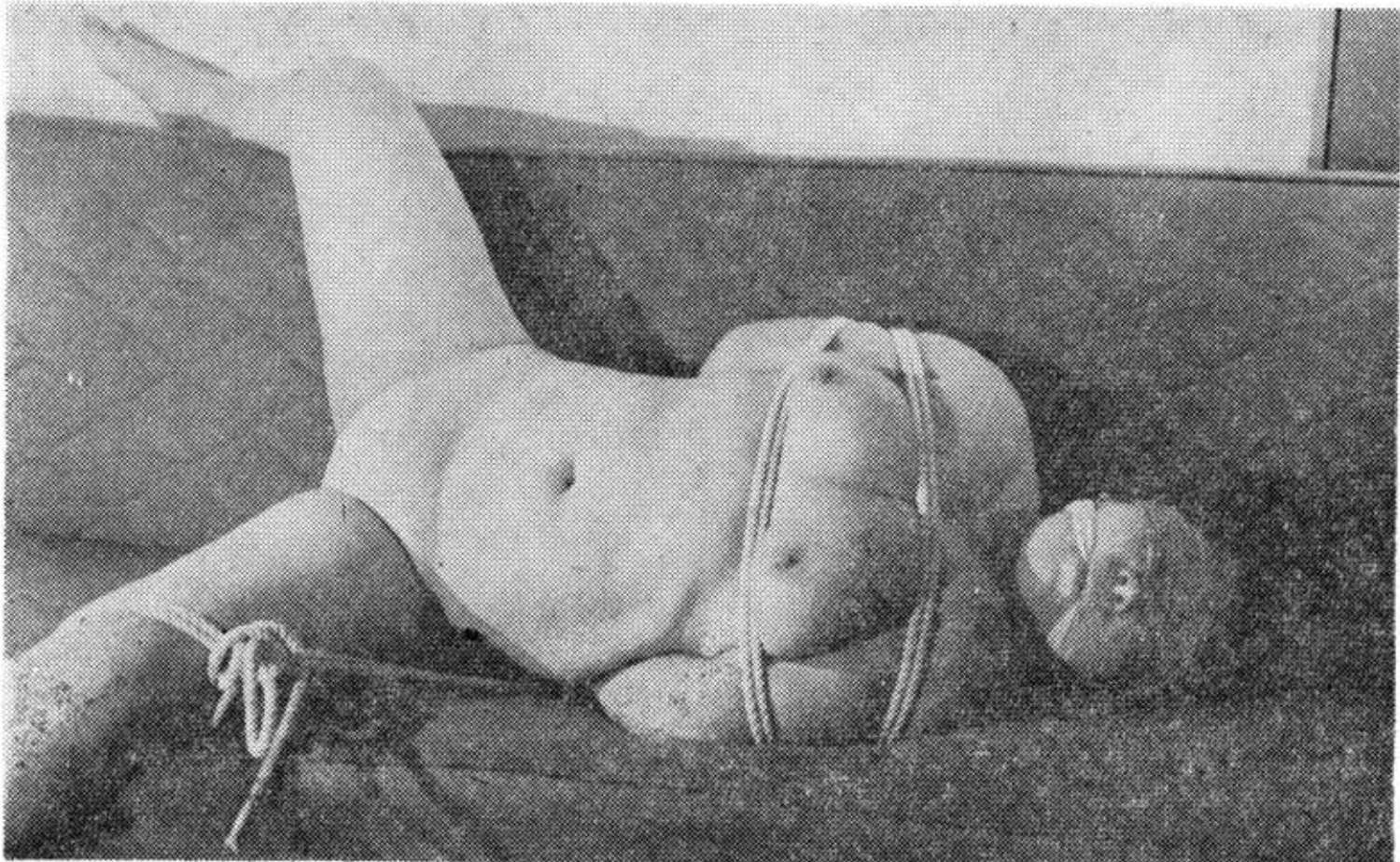
私という女は、本当に生れつきケモノじみた性さがを持っていたのでしょうか。

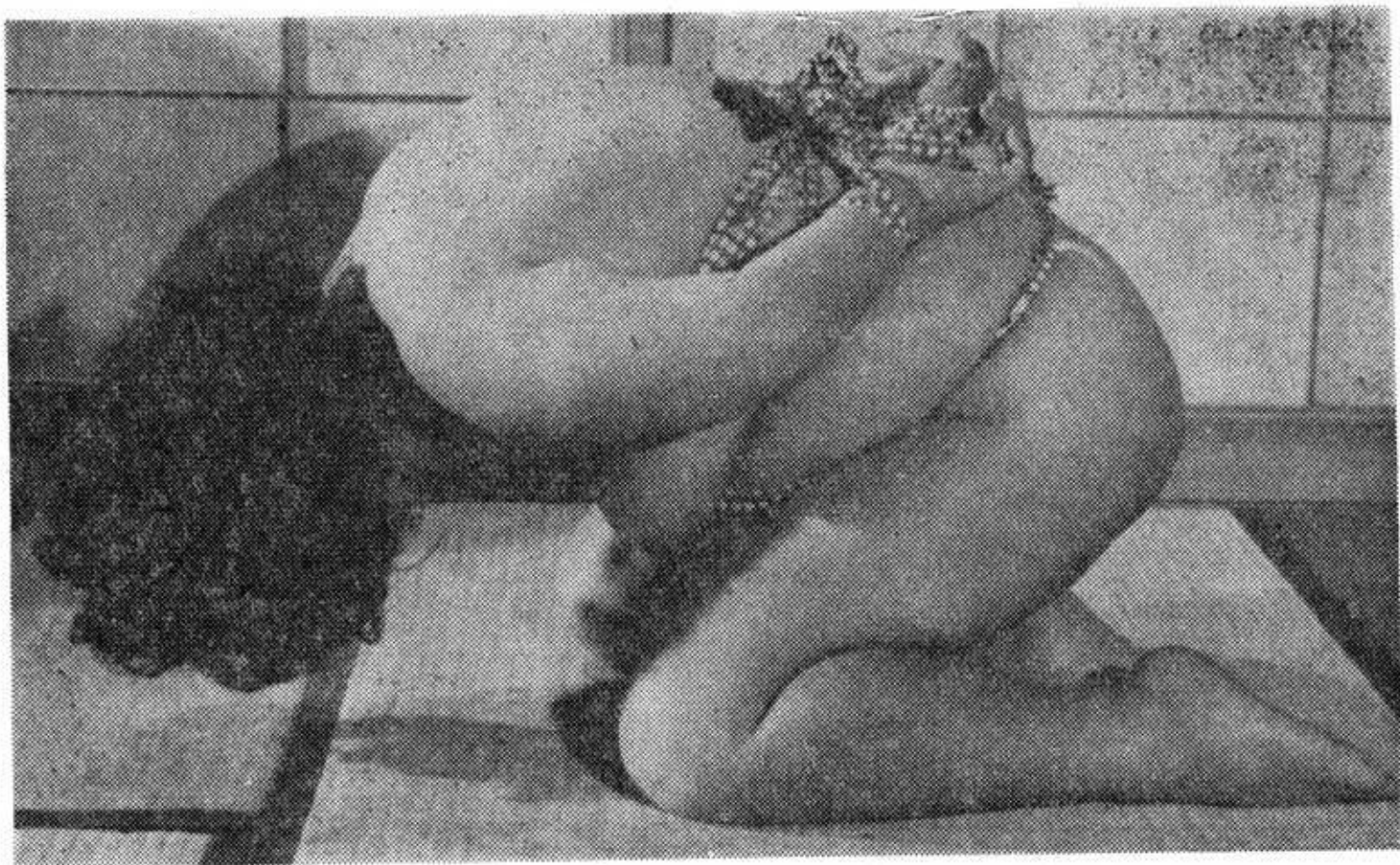
“責め”というものに抱いていました憧れが、塚本様とのSMプレイによって、飼育され、その都度、新しい感覚を開眼され、その激しい快感に、のたうち回ってまいりました。

私にとりましては、そのすべてが驚異であり新鮮な刺戟でもありました。

“ムチ打ち”も、“剃毛責め”も、私の体中のアブノーマルの血を沸きたたせました。

どんな些細な“責め”も、私にと





りましては、耐えがたい魅惑でありこの世の中に、こんな素晴らしい「快楽」があるのかと、疑いを抱かせられるほど強烈でありました。

塚本様に責められている限り、SMプレイのマンネリはないような気がしました。それなのに、今度、四人の男女によって、新しいSMプレイを経験しましたら、またまた私の淫奔な血が異様に騒ぎたてました。

「アヌス責め」が、本当にたまらなく気持ちよかったです。アヌスを責められるのが、こんなにも快いものだとは、私は、今回、始めて知りました。アヌス一つ責めてくれない男性が多いことや、アヌスを責めて下さいなんて、女の口からは、とても言えないということを、お便りしたことがございましたが、今度という今度は、思う存分にアヌスを責められ、そして満足させられました。

編集長さま

私が恥をしのんで、お便りを差し上げました甲斐があったと、心から喜んでおります。

もし、お手紙を、お出ししなかったら、こんな楽しい目に逢うことができなかったのですもの。人の生というものは、決して無限ではございません。限りある人生を、楽しく過してこそ、有意義だと存じます。

私は自分の残りの人生を、根かぎり楽しく過したいのです。人生をエンジョイしてこそこの世に生を享けてきた甲斐があるのではないのでしょうか。

私は、出来ましたら、やはり男性ばかりの方々から責められたいのです。なんと言いましても、女性が混じっておりますと、ケモノに交身して燃え上るにしましても、一抹のしこりのようなものを感じます。これは、自分でも、自分の心理を、どのように説明しているものやら、わかりません。

アヌス責めを受けてケモノのように狂いまった私ですが、次には、また、どのような趣向の責めを加えられて、呻き、悶え、畳の上を、のたうちまわることでしょう。

私は、性に対して貪欲な女です。自分の体が、変った責めに対して、どのような激しい反応を示すものやら、自分でも非常に興味を持っておりますし、その新しい趣向の責めに体ごと溺れきってしまうことは、楽しくて楽

しくて仕方ありません。

そうしたアブの泥沼のドロドロとした、あぶくの中に全裸の体を溺れさせたら、どんなに快いことでしょうか。

編集長さま

私は十二月の、あの火のように燃えた激しい四人プレイ以来、まだ、プレイらしいプレイは、いたしておりません。

奇クに載っているカメラ・ルポの記事と写真、それに送って頂いた自分のカラープリントなどを眺めながら、自分で自分を僅かに慰めているに過ぎません。

一度、あのSMのしびれるような旨酒の味を知った私にとりまして、それは余りにも、味気ない、砂を噛むような境地なのは、編集長さまも、よく分って頂けると思います。

この私の体を、ケモノに蹴落して、思いのままになぐさみ、弄び、人間としての人格を剥奪して、責めてほしいという想念は、どうしても取り去ることができないのです。

今、私の願っておりますことは、何人もの男性の方々から、「輪姦」されたいという熾烈な欲望を満足させたいということです。

普通の方が聞かれたら、きっと目をむいて驚かれることだろうと思いますが、私は真面

目に、そんなことを考えているのです。それが、この間、二人の男性から交互に弄ばれるというSMプレイを経験してから、真剣に、それを願うようになりました。

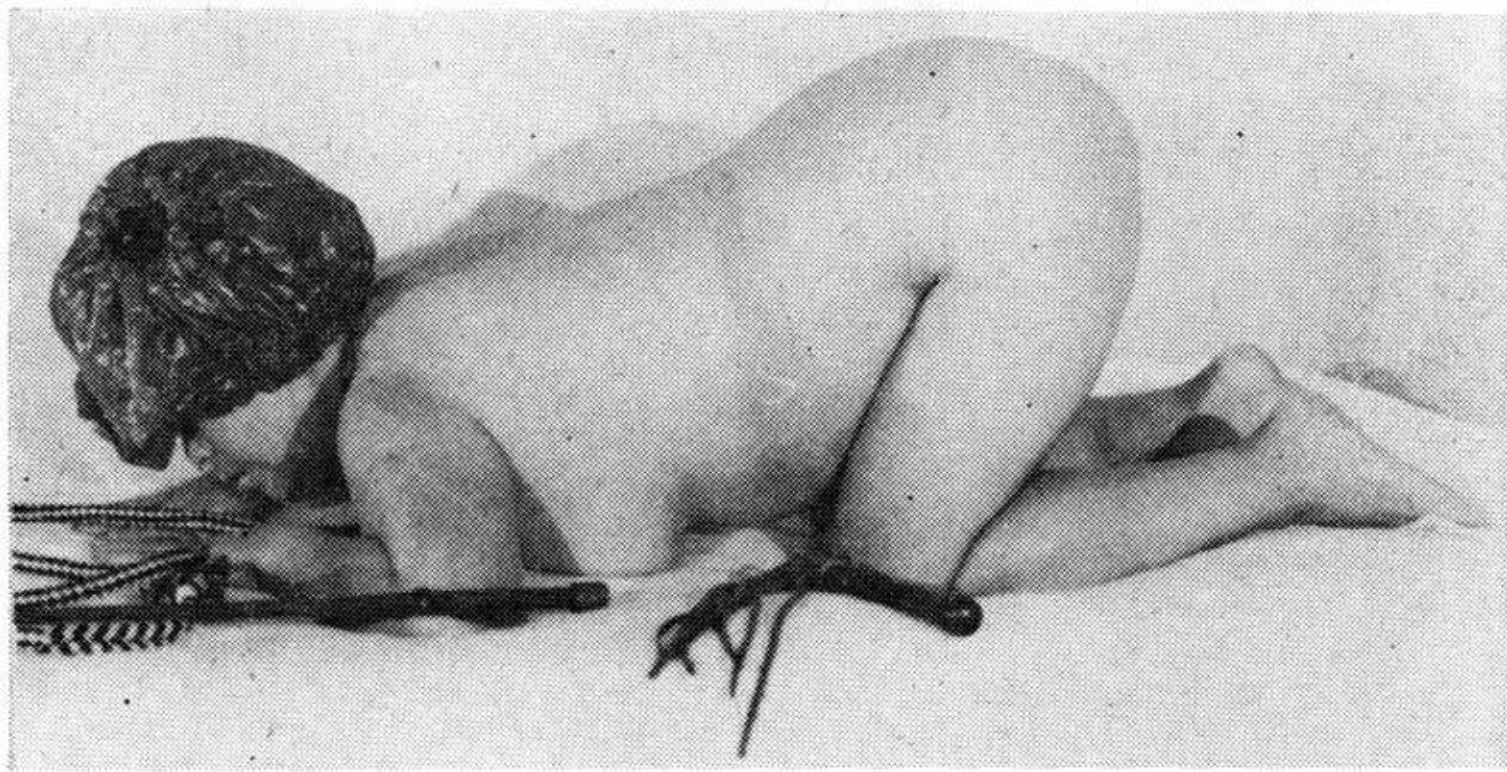
今までは、空想の中でしか考えることができなかった『輪姦願望』が、急に現実味を帯びて、私の前にベールを脱いだのです。

四人も五人もの男性に、入れかわり立ちかわり犯される……それは、なんという素晴しいことでしょうか。

私は、自分の体が、ボロ屑のようになるまで、徹底的に責めつくされたいのです。そして、その最高潮の刹那、塚本様の手によっていや、塚本様の肉体によって、とどめをさされたとしたら……私はきっと、夢幻の境地をさまようことができるでしょう。

私は、そんなことを、いつも考えて、いらしています。この次の機会には、是非とも、こんな『輪姦プレイ』をやって頂きたいものだ、私は切望しております。

その次に、私が願っておりますことは、塚本様が提唱されました△SM研究会▽のメンバーの「ダベリ会」に出席させて頂きたいことです。プレイを抜きにしたSMのお話だけの会というのも嬉しい集まりです。



私は自分の知らないSMの、いろんな話題について、いろいろの方々から、教えて頂きたいのです。自分からは、何一つ、物珍しい話題も持っていないのに、一方的に教えて頂くなんて虫のよい話ですけど、情報過多と言われる現在でも、SMに關していえば、情報貧弱だと私は思います。

ですから、私は、こうしたSM研究会の会合が催されましたら、そのたびにでも、出席させて頂きたいのです。お喋りだけと、さっきは申しましたが、お話を聞かせて頂くだけで、出席

なさった方々が承知されません時は、私の体を、「責めの実験台」に、お使い下さいましでも一向に構いません。

SMのお話の興がつのりました結果、皆様の手で、よってたかって私の体を、さんざんに責めさいなまれましたも、それに対しての覚悟は出来ております。

編集長さま

いよいよ、私が、このお便りを書きました



本当の目的の事柄につきまして、ペンを染めさせて頂きたいと存じます。

それと申しますのも、いつものことながら例の通りのお願いはかりで、本当に恐縮なのでございますが、このことを書きたいばかりに、お便り差し上げたわけでございます。

編集長さま

甚だ勝手なお願いではございますが、私に絶対安全確実な「SM紳士」を御紹介下さい

ませんでしょうか。

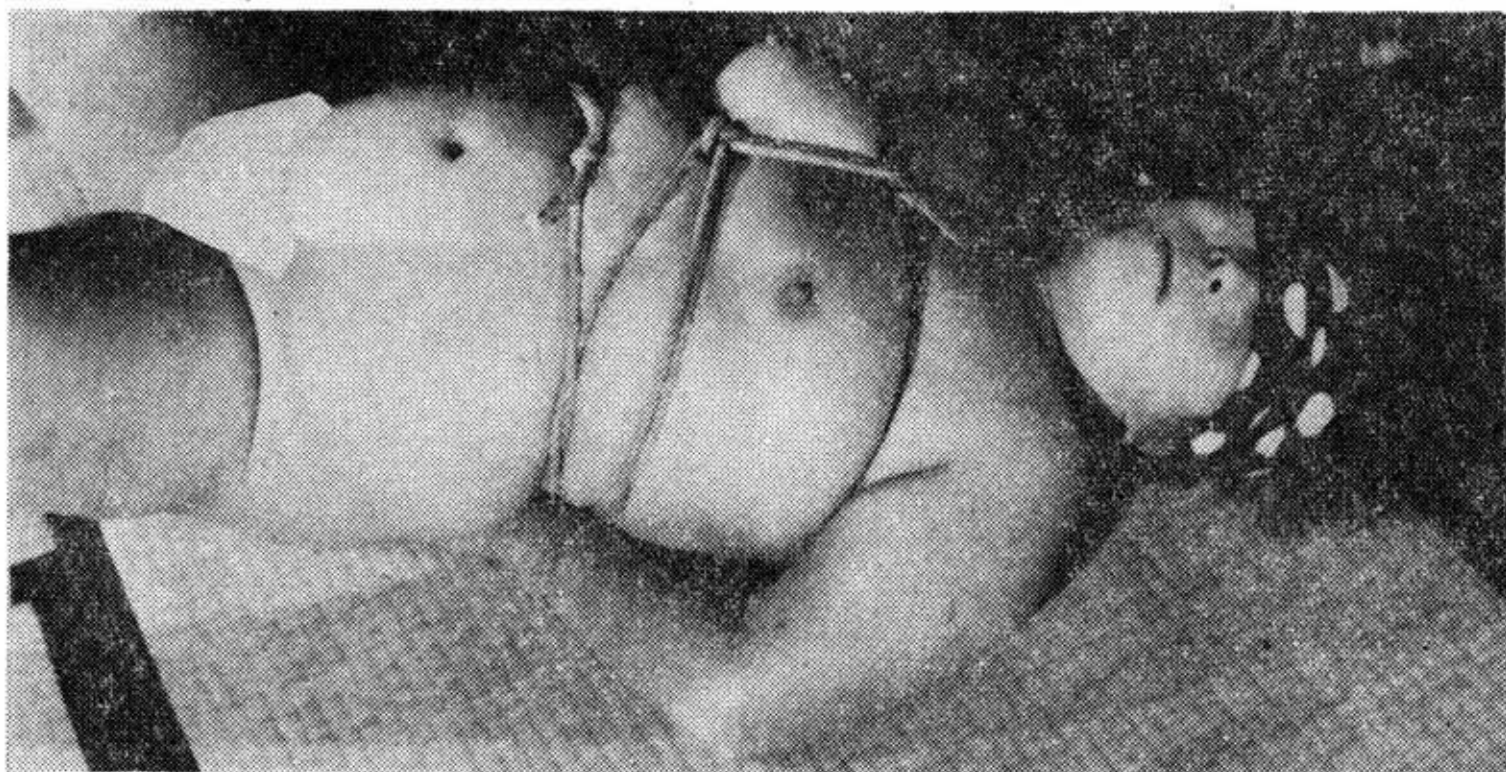
まるで、不動産投資の広告の文句のようですが、やはり女の身にとりまして、相手の男性の方は絶対安全確実な方を望みたいのです。

よく、女性の理想像として「昼は淑女で夜は娼婦」のようなと申されますが、口はばつたい申出でございすが、「昼は紳士で夜は餓狼」のような男性の方が、私にとりましては願ってもない相手なのです。

そのような方は居られませんかでしょうか。若し居られましたら、私のパートナーとして是非、御紹介願えませんか。

私は日夜、SMの想念に身をさいなまれ、このムチムチとしたボリユームのある肉体が一カ月以上もプレイなしでは、とても耐えられません。

私はケモノとして、この肥満体の肉体を、思いのままに、おもちゃにされたいのです。カメラ・ルポの記事を繰り返し繰り返し、



読んでいるうち、その時の激しいプレイの有様が思い出されて、体中が燃え上り、知らず知らず、自分で自分を慰めているのです。

全身がしびれ、硬直させても、所詮、独り芝居に過ぎないと悟ると、あとは空しさがオリのように残るばかりです。

体中がバラバラになるような「責め」にいたいという気持は、つのるばかりです。

幸い、私はお仕事の関係で、北九州地方から関東地方にかけて、旅をする機会が多うございますので、主として東海道ベルト地帯でございませうれば、お逢いするのに、好都合だと存じます。

編集長さま

私は先日、商用にて沖縄へ参りました。日中の気温が二十二、三度という、寒さ知らずで、よい避寒になりました。

九州の別府や指宿などの暖い温泉地でSMプレイが出来たら、どんなに楽しいことだろうと思いました。別に九州でなくても、今年のように寒い冬は、熱海とか伊豆の温泉、それに関西では南紀の白浜温泉などが、プレイの場所としては好適ではないかと考えます。

私は、ほんとうに欲張りで好色な女です。今までに、幾度となく「御主人様をお与え

下さい」と、勝手なお願いばかり書いておりましたが、またまた、懲りもせず、このような恥知らずな文を書き綴ってしまいました。

きつと、あきれ果ててしまわれたことと存じますが、責めに憑かれた哀れな一人の女の繰り言として、お宥し下さいませ。

「SMプレイなしの人生なんて考えられませんが」と書いたことがございますが、今では、一週間もSMプレイと御無沙汰しておりますと、この体がもぢません。

一週間に一度ぐらいの割合でSMプレイを楽しめる絶対安全確実なプレイメイトを、私にお与え下さいませ。

どこの誰ともわからない私を、好色ハレンチな奴隷女として弄んで下さる御主人様を、私にお授け下さるよう、お願い申し上げます。

勿論、塚本様のようなダイナミックで華麗なルポの記事や鮮明で大胆なプレイ写真が撮れるとは思いますが、その際のSMプレイの模様は、編集長さまへのお便りにて、その都度、書かせて頂こうと考えておりますのでどうぞ、よろしく御配慮のほど、陽子、伏しお願い申し上げます。

かしこ

苗木陽子

奇ク編集長さま



妙なる調べに惹かれて

女性放尿の実態研究

戸 入 ひ そ む

私は以前から女性の放尿について深い関心を抱いており、過去、何年かにわたって、女性の放尿の実態につき、いろいろと研究を続けて来た。研究などと大げさな言い方をする程のものでもないが、調べた結果を、まとめてみたい。一口に実態研究と言っても事が事だけに、なかなか簡単にはいかない。特に観察ということが殆ど不可能に近いだけに、研究の方法は専ら耳による聴察、そして事物を用いての実験、及び文献を参考として行つて来た。

(一) 放出の角度

男性の場合は放出の角度、落下点を自由に変えることができるが女性はいかならない。勢いの強弱によって多少、その角度や落

下点はあるが、大体、一定している。角度に個人差のあるのは、いうまでもないが、女性の年令、未婚の別によって変わってくるということが、エリスによって報告されている。すなわち、女性が立つたまま放尿する場合、幼少女にあっては、小水は前方に流れ、成人するにつれて尿流は下の方へ移り、既婚女性にあっては一層、下方、又は下後方に向うようになる」とされている。

ところでこのことは、立った姿勢による放出角度であるが、実際に、女性が放尿する場合、立ったままですることとは、特殊なケースを除いては、まずないことで、洋の東西を問わず、放尿の姿勢は、しゃがむか腰かける（跨がる）のであって、こうした姿勢で

は立位の時とは違い、尿流は一般に前方に走るといふことが今まで調べたことから分かる。私は、和式の汲取式便所で、このことを実際に確かめた。和風の汲取式便所の便器の形は二種類あって、一つは便器全体が小判型に穴になってゐるもの。もう一つは前方半分ほどが受け皿のようになってゐる。前者では尿流は直接、便槽に落下するが、後者では、一たん、この受け皿に注がれて下に流れこむことになる。前者では、殆どが便槽の前方のふち、又は前のコンクリートの壁に注がれることが、その放出音で分り、後者では受け皿の前方へチリ紙をおいて実験したところ、ずっと前の方においた紙も尿を浴びてゐることが、確認された。

(二) 放出の勢いの強弱

女性の放尿の勢いは、男性のそれに比べて、ずっと烈しいことは周知の通りである。あの烈しい小水の音は、私をたまらなくかき立て、このような研究を始める動機を作ったともいえる。

さて、一般的に女性の小水は烈しいというが、やはり個人差のあることは当然である。そして年令体格に大きな関係のあることが分かる。これを結論的に言うところ「成人女性の放尿の勢いの強さは体格に比例し、年令に反比例する」ということになる。すなわち、体の大きい女性の方が小柄な女性より烈しく、年令をとるにつれて、その勢いは弱くなる。実際、ハイティーンから二十代のグラマー女性の小水はまことに凄まじいものがある。又、大柄とは言つても、長身痩せ型の女性は、それほど烈しくはないし、反対に背は低くてもよく肥えた女性は非常に烈しい場合もある。更に、つけ加えると、入浴、運動後の血のめぐりの良い時の放出は、平常より一段と烈しくなることも確かである。

(三) 放出の音響学的聴察

女性がオシッコする音——それは私にとって、まさに妙なる調べと受けとる。特に若いグラマー女性の放出音は実に素晴らしい。この放出音を、いろいろと表現したも

のを、いくつか拾ってみると「女の小水は滝のように大きな音をたてる」「女性の放尿は実に烈しく水道の栓を開いたよう」又、非常に興味深いものとして印象深いのに「女の小便は徳川家御三家のよ、うなもので、ビシュー（尾州）と始まりキシュー（紀州）と続き、ミトミト（水戸）と終る」というのがあった。「滝のように」「水道の栓を抜いたような」は共にその烈しさをあらわし「キシュー」は、その音を、うまく表現しているといえよう。この音も、しゃがんだ時の姿勢によって多少の違いはあるようだ。トイレにしゃがんだ時、膝がすばめられている時ほど余計、音が強いようで、現代の女性の殆どといっていいほどパンティを穿いているが、パンティの降ろし方が少ないと、どうしても膝が開ききれないので、一般にシューという音が強い。これに対してノーパンの場合だと、放出音は弱くなる。

次に私の聴察によれば、幼少女では「シュー」と比較的高い音。成人女性でも未婚者の場合はこれに近く、既婚女性では「シュー」となり、年をとるにつれて「シャー」「ジャー」と変っていく。そして音の強弱は、先にのべた勢いの強弱に比例することは容易に知られよう。

今まで数多くの放出音を聞いた中で、一番、印象に残っているものとして、数年前にある駅の便所で聞いた音だった。夜も、おそかったが、あたりは、しーんとしてあまり物音がしない。私は散歩に出て、その駅の便所に入った。その便所は男女の区別はなく、小便所の反対側が共用の大便所であった。丁度、私が用を足している後ろが大便所で、終ろうとした時、一人の女性が急ぎ足に入ってきて真後ろのドアに入った。年は二十七、八か、中々のグラマーな美人だったが、衣ずれの音につづいて聞えたあの妙音。それは実に烈しく、まさに、たたきつけるというにふさわしい凄まじさが、大分長くつづいた。私は、わざとゆっくり手を洗い、必要もないのに櫛を出して髪をとき、その音にきき耳をたてた。さしもの烈しい音も、

（四）放尿後の後始末

女性はお望みの、私たちのパンティを差し上げます。小水による汚れと臭いでしたら娘（高校三年）の方が強く、分泌物の汚れと臭気は私の方が、ひどく臭うようです』

というのがあった。これみると、高校三年生の娘さんでも、あとを拭かないのもあるようだ。とにかく女性の放尿音につづいて、チリ紙の使われる音も、私の心強くとも離さないし、又その使用された紙に対しても深い関心を持っているが、このことについては稿を別にすると、この拙い研究の発表をこれで終る。

ようやく終り、紙を使う音がしてやがて彼女は出て来て手を洗い、さっさと立ち去った。あたりに誰もいないのを幸い、私は今、彼女の使った便所の戸をあけてみた。たった今、その女性の凄まじい小水を浴びた便器は、まだしずくを垂らし、かなりの暖か味さえ、感じられた。そして、その便器の前方に彼女の置土産、一かたまりの紙が残されていた。私は、はやる胸をおさえ、その紙を、そっとポケットにしまい、そこを出た。

連載 M グループ 〔空想創作集団〕 作品

女の虜囚

(3)

ある湯治客の話より

カット・岡 たち



佐 治 麻 造

「おや、君々。その書類は急ぐんだろ。早く
回し給え」

赤い符箋に目を留めた部長が、デスク越し
に呟鳴った。

「ハ、ハイ。只今すぐに。水上君ちょっと」

うろたえた彼は思わず彼女を呼んだ。

「お呼びですか」

この会社へ入る前は中学校の教師を二年間
程、していた良枝が、取り澄ましてやって来
て、冷然と彼を見つめた。

「きみ、ここんどこ、おかしいじゃないか？
それに計算も間違ってるぜ。二五〇万の〇・
〇七％は……」

彼女は眉一つ動かさないで、直ちに言い返

入社して今日でかれこれ三週間。部長へ回
す書類には、めくら判ながらも彼の印が捺さ
れるようになった。

「これ、お願いします」

彼のデスクの前に立った水上良枝が無表情
に言って書類を差し出した。彼女を立たせて

ともすれば圧倒されそうだ。

「見とくから、おいとき給え」

かすれた声で彼女を追い払った彼は、立案
者の欄に小さく捺してある「水上」という印
を睨みつけて、何とかあらを見つめようと焦
った。

おいて書類をパラ
パラとめくりなが
ら、彼は丹田に力
をこめて優越感を
味わった。身じろ
ぎもしないで彼の
手許を見つめる良
枝の視線に、彼は

した。

「法規によりますと、そういう表現をすることになっております。『旅行あっせん業法』第三十一条(B)項に規定されております。それから、その金額の単位は千円でございます。計算に間違いございません」

やりこめられて彼は、頭に血が上る思いだった。

「おや、立案者は水上君かい。それなら間違いないよ。さっさとハンコ捺して回し給え」

部長の大声が聞えて、彼は屈辱と憤怒に唇を震わせた。近くの席の連中が顔を見合して笑ったように思えた。良枝が残して立ち去った丁寧な会釈も、彼には侮蔑の仕草と感じられた。

「今に見てろ」

彼は良枝の後姿を睨みつけて呟いたことだった。しかし彼が如何に歯ぎしりしても、勤続十年の男子社員が一目おく良枝には、仕事で太刀打ちが出来なかった。少年時代に叩き込まれた劣等感拭うにすべく、彼女に対する彼の畏怖の念は、いつしか憧憬の情に変わって行った。そして、一度たりとも彼を小馬鹿にした態度を見せたことのない岩下早苗が寄せる、ひそかな愛情には、不覚にも全く

気づかなかった。

裕福な彼には、同じような金持の家の娘達の友達が出来て、遊びの相手には事欠かなかった。苦勞知らずの娘達とパーティーの酒を飲み、相擁して踊りながら、彼の胸の中には水上良枝の面影が端然として浮び、そして謎のような微笑を残して消えるのだった。

半年程経った或日、彼は思い切って彼女をお茶に誘った。平然としてついて来た良枝と差向いで喫茶店の一隅に坐った彼の胸は高鳴った。

「お話って、何ですか？」

「ウン。実は、そのう、末の弟さんが大学に入って聞いたもんだから、それで、いろいろ要るだろうと思って」

彼が、おずおずと差出した厚い封筒を暫く見ていた良枝は、

「そう。お断わりしたいんだけど、同窓生のあなたが折角、言って下さるんだから、有難く貰っとくわ。でもこれ、貸して下さるの？それとも……」

「ど、どっちでもいいんだよ。君の役に立てば嬉しいんだから」

案外あっさりとハンドバッグに納い込まれる封筒を眺めて、彼はホッとした。

「それじゃ困るわ。どっちなの？ じゃね、お借りしとくわ。いくらあるか知らないけど期限はなし、利子もなしよ。ありがと」

あわてた彼が引留める暇も与えずにサッと立ち上った良枝は伝票をつまみ上げていた。

それから数日後社内盗難事件が起った。

社長である良人をパーティーに誘うため、退社時刻の少し前に会社を訪れた嫂のハンドバッグから、かなりの額の現金と指環が盗まれたのだ。彼女が婦人用トイレで化粧を直していた僅かの隙の事だった。退社準備のため、多勢の女子社員達が入り出していた事と当然、嫌疑は彼女達に向けられた。しかし、貴子が被害を発見した時には、殆ど帰ってしまった後だった。

謙二は翌朝、朝食の席で兄夫婦からその事を知らされて驚いた。

「へーえ！ ちっとも知らなかったなあ。それで届けたの？」

「フフフ、届ける程の事はないさ。第一、貴子の奴め、いくら盗まれたのか分らないと言うんだし、社の恥にもなるからな」

「でも、あの指環は少し惜しいわ。高いものじゃないけど、好みに合ってたのよ」

嫂はコーヒーを掻きまわしながら、そう言

って彼に片目を、つぶって見せた。

「それで、どうするの？」

「以前にも総務部で現金が紛失したしな。女の子のロッカー室からだったけど、ひとつ、この際、社内で調べて見る必要があるな」

俊一はパイプに火をつけながら言った。

「嘘発見機に女子社員全部を掛けて見るか。」

反応が疑わしい女の子は辞めて貰うかな」

「あら、女の子だけ疑うなんて不公平だわ」

貴子が抗議したが、俊一はそれを黙殺して

「うちの社も、少し女の子が多いからな」

と呟いた。

「嘘発見機はいいけど、どこで借るの？ 警察からかい？」

「馬鹿だな、お前は。保険会社に言えば内々で貸してくれるさ」

「けど、そんなことして、いいのかい？」

「そりゃ拒絶する権利はあるさ。嘘発見機のデータや薬剤による自白は、証拠にもならないよ。うん、そうだ。お前が指図してやって見る。何、心配しなくても皆、受けるさ」

出社して見ると、昨日出勤していた女子社員は全員、今日も出社していた。三十名を越える女子社員を前にして、彼の説明は、しどろもどろだった。

「それで、嫌なら嫌でいいんです。ただ、事をハッキリさせるために……」

「あーら、ハッキリさせるんなら、警察へ届けたらいいじゃないの。私、いやよ」

「私は受けるわ。面白いじゃないの」

「女だけだなんて不公平だわ」

「そうよ、そうよ。男の人だって、入ろうと思えば入れるものねえ」

彼女達は口々に騒いだけど、結局は検査を受ける事に大勢が決まって、彼は額の汗を拭いた。

会議室に集められた彼女達は、くじ引きで順番を決められ、一人宛、医務室へやって来る事になった。検査の様子を予め知られないためだ。医務室に運び込まれた嘘発見機の準備が出来たのは十一時に近かった。

「三十名も調べるんですか」

保険会社から派遣されて来た女医が、白衣の袖に腕を通しながら、ウンザリした口調で言った。

「二十分宛としても相当おそくなりますな。明日に回しちゃいけませんか？」

若い男の助手が言う。

「おそくなっても今日中にやってしまわなくちゃ。準備はいい？ では連れて来て下さいな」

最初にやって来たのは、秘書課の若い娘だった。肘付きの革椅子に深く腰掛けさせられた彼女の額、胸、そして両手首にバンドが巻きつけられ、電線で計器に接続された。

「気持を楽にして、体の力を抜くのよ。そう。これから訊ねることには、ハイとイエエだけで答えて頂戴ね」

テープレコーダーが廻り初める。

「あなたは二十三才ですね？」

「ハイ」

「独身ですね？」

「ハイ」

「盲ですか？」

「イエエ」

「結婚してますか？」

「イエエ」

「今朝、遅刻しましたか？」

「……ハイ」

「……」

大きなカードを手にした女医が次々と質問を発し、計器の針が流れる紙の上にグラフを記録して行った。

「ダイヤの指環を持っていますか？」

「ハ、ハイ……」

「もっと、やせたいと思いますか？」

「……」

「ハイ」

「逮捕されたことがありますか？」

「イ、イイエ」

「花は好きですか？」

「ハイ」

「昨日他人のハンドバッグを開きましたか」

「イイエ」

数十問の質問を受け終えた彼女は頬を紅潮させて嘘発見機の椅子から降りた。次々に女の子達がやって来て、おずおずと椅子に腰を掛け、眉を曇らせてバンドを巻きつけられ、そして口ごもったり、あわてたり、或いは怒ったように返事を繰り返した後、心配そうな表情を浮べて身繕いしながら去って行った。

「どんな按配ですかね？」

おそい昼食を女医達と共にしながら、彼は訊ねた。

「何ともいえませんがね。今までの所は、まあ全部、白でしょうね。未だ沢山、残ってるのねえ」

女医達はウンザリしたようだったが、彼ともう一人の年配の男子社員は、満更でもなかった。嘘発見機に掛けられて調べられる女の子達の様子や表情を見るのは、少し愉快なことであった。午後の最初は、医務室勤務の看護

婦だった。彼女は明らかに怒りの色を浮べて

いたが、女性である以上、例外には出来なかった。次に現われたのは水上良枝だった。

「胸のパッドを取って下さいね」

良枝の胸にバンドを巻きつけようとして、

女の助手が言った。

「あら、パッドなんか入れてませんわ。薄いブラジャーだけよ」

「あーら、ほんと！」

やせた女の助手は羨ましそうに低く叫んで良枝のスーツの下に手を回してバンドを巻いて締めつけた。良枝は冷然と、そしてハッキリとした返事を繰り返す。

「一カ月の給料以上の借金がありますか？」

「イイエ」

謙二は思わず彼女の顔を見たが、彼女は小憎らしい程、平然としていた。検査を受け終えた良枝は二人の男の視線を撥ね返すように眉を上げスーツの上衣の裾を下に引っ張って「そんなにジロジロ見るなんて失礼よ」

と捨てりふを残して出て行った。記録用紙をチェックする女医達の頭が何度も、かしげられ、長い時間が掛かるのを彼は複雑な気持ちで見ていた。彼女が黒であるのを願う気持ちと白であれかしと思う心が入り混じって戦うの

だった。

検査は思ったより早く済みそうだった。

夕食を済ませた彼が会議室へ行ってみると

七名の娘達が不平顔で口をとがらせていた。

「ほんとに済まないねえ。車で送って上げるから、済んでも待ってるんだぜ」

「次長さん、早くしてよ。退屈で、死にそうだわ」

顔見知りの総務部の女の子が、恨めしげに訴えた。

「うん、すぐ始めるよ。食事は済んだの？」

おや、全然喰べてないのがあるじゃないか」

それは岩下早苗の分だった。彼女は隅の方で身を固くして、思いつめた様子で浅く腰掛けていたが、彼の方を仰いで無理に微笑んで見せた。

「私、何だか欲しくありませんの」

早苗は力のない声でそう言って、目を伏せた。交換台がいなくなって社内通話を通じなくなったので、彼女達は降りて来て医務室の近くの部屋や廊下にたむろして、待つ事になった。

最初に現われたのは早苗だった。謙二に哀願するようなまなざしを送った彼女は、思い

切った様子で革椅子に坐った。バンドを巻かれる彼女の顔は蒼白だった。彼女が、この検査を、ひどく恐れ忌み嫌っている事は、彼にも、よく分った。

「岩下君。嫌なら受けなくてもいいんだよ」

彼は思わず口走ったが、既に両手首にもバンドを装着された彼女は、弱々しくかぶりを振るのだった。

単調な女医の質問が初まり、早苗の返事は何故か震えて、途切れ勝ちだった。彼女は何を恐れているのであろうか。

「もっと美しくなりたいですか？」

「ハ、ハイ」

「あなたは逮捕された事がありますか？」

「……」

早苗は絶句して唇を震わせた。額に、じつとりと浮んだ脂汗が電灯に光る。暫しの沈黙の後、早苗は絶叫した。

「私は前科者なんです！ けど、盗んだのは私じゃありません。ほんとなんですっ」

コードが、ぶら下った両手で顔を掩って彼女は激しく鳴咽し、彼は驚いて駆け寄った。

「私、履歴を嘘ついていたんです。すみません」

「ま、落ち着き給えよ」

彼は早苗の肩を、そっとゆすぶりながら、顔を覗き込んだ。絶叫に驚いた娘達が集まって来て、扉を開いて室内を窺った。

「私、四年程前に刑を受けたんです。会社の小切手を偽造したんです、ほんの出来心で。

ドレスが欲しくて堪まらなかったんです」

早苗は身もだえしながら、夢中で叫んだ。

「二年半の懲役でした。それがばれるのが怖くて怖くて……。けど、盗んだのは私じゃありません。信じて……」

女医が目くばせして早苗の体からバンド類が除かれ、彼女は泣きじゃくりながら、よろよろと立ち上った。廊下に集まった娘達のひそひそ話の音が、僅かに開いた扉の隙間から聞え早苗はハンカチで顔を掩って崩折れた。

「何もそんなに思いつめなくてもいいじゃないか。たとえ君に前科があったってさ、今度の事件とは関係ないんだから」

万年平社員の年配の男が、深味のある声で彼女を慰め、謙二も

「暫く隣の部屋のベッドで休んでおいでよ」と、いたわってやった。

「済みません。ちょっと顔を直して来ますからね」

少し落ち着いた早苗は、吸り上げながらそ

う言って案外しつかりした足取りで出て行った。そして早苗の姿は、その後、二度と会社に見られなかったのだった。

岩下早苗以外の女の子には、これといった反応は記録されなかった。早苗とても黒だと断定は出来なかったし、この盗難事件は明るみに出される事なく有耶無耶のうちに済んでしまった。

良枝が借金のことを何も言わないのみか、冷然とした態度を些かも変えないので、彼は苛々して来た。そして彼女に対する思慕の情は、彼女に冷たくされる程、募って来るのだった。

或日、遂に意を決した彼は、良枝を映画に誘った。

「映画に誘う位の事に、ずい分、暇がかかったわねえ」

良枝は冗談とも嘲りとも取れる口調で、そう言って二つ返事で、ついて来た。その土曜日の午後を良枝と共に映画とドライブに過ぎた彼は、郊外のナイトクラブに彼女を連れ込んだ。有閑令嬢達との遊びに屢々現われて札ビラを切っていた彼は、眼配せ一つでボーイ達を意のままに動かした。口あたりのよい強い酒に酔った良枝を抱いて踊りながら、彼は

全身が熱くなるのを覚えた。初めて擁する良枝の体は、しなやかに引き締まって驚く程、軽やかだった。

「もう帰らなくちゃ」

良枝は流石に、ぐったりして彼に囁いた。

「だって、僕は少し酔いを覚まさなくちゃ運転出来ないからね。君もこれを飲んで酔いを覚ましたら？」

彼は、炭酸でアルコールを誤魔化したカクテルを、更に良枝に飲ませて北叟笑んだ。頃合を見計ってクラブの裏手のホテルへ良枝を連れ込む彼を見送ってボーイが笑い合った。

酔って前後不覚のようにには見えたが、良枝は、なかなか、しっかりしていた。目も昏む思いで唇を盗んだ彼が、わななく手で彼女の体に触れた途端、良枝は激しく抵抗して彼の腕から脱けて逃げた。

「何を、何するのよっ！ 馬鹿ねっ」

「いいじゃないか。ずっと前から君のこと、好きだったんだ。ね、いいだろ？」

近寄った彼の頬に、良枝の平手打ちが激しく鳴った。

「馬鹿にしないでよ。そんなのだったら、何故、ちゃんと正式に申し込まないの？」

「そ、そんなこといったって……」

彼は口ごもった。

「ごまかさなくたって分ってるわ。あなたの欲しいのは私の体だけなのよ。私を愛することなんて、あなたに出来やしないわ。笑わせないでよ。私はね、あなた達の仲間のお嬢さん方とは違うんだから。さ、タクシーを呼んでよ。帰るんだから」

未練気に、なおもいい寄る彼は、続け様に平手打ちを喰って唇を歪め、立ちすくんだ。

女の子から、このような手きびしい拒絶を受けた事は嘗てなかった。多額の金まで与えたのにと思うと、彼は口惜しかった。しかし、よろよろしながらもキッと彼を見据えている良枝の目に射すくめられると、彼にはそれ以上、踏み込む気力も萎えてしまった。

「あんたは、矢張り卑怯者なのね。もう見るのも嫌だわ」

扉を開け放したまま良枝は、振り返りもせず立ち去って行った。

水上良枝は辞表を郵送して来て、それ切り辞めてしまった。謙二の胸には後悔と自嘲のしこりが残った。部長が急な退職を不審がりそして彼女を、しきりに惜しむのが忌々しかった。彼の遊び方は以前にも増して激しくな

り、そして或日、遊び相手の令嬢達の一人と結婚式を挙げた。兄の邸の近くに建てた新居で結婚生活に入った彼は、忽ち新妻令子に飽きた。そして彼は或夜、通りすがりに入り込んだ酒場で岩下早苗に再会したのだった。早苗は相変らず優しく遠慮勝ちだった。驕慢な令子の尻に敷かれていた彼は、早苗の黒目勝ちの瞳や未だ清らかな襟足に、心のオアシスを見出した思いだった。

「私みたいな女でよかったら……」

早苗は彼の求愛を素直に受け入れて、彼の腕の中で

「嬉しいわ」

と微笑に呟いた。令子と離婚するという彼を、早苗は優しく、たしなめて

「そんなことなされるものじゃなくてよ。私は、これでいいの。時々会って下されば、それでいいのよ。ただお願いだから、お仕事を立派にやって下さいね」

彼は早苗を抱き締めて涙ぐむのだった。

「それからねえ、こんなことってなんだけど、出来たら田舎の両親に月々送るだけのお金が貰えたらと思うだけよ」

彼は早苗を更に、いとしげに抱き締めた。こんなに優しい女があらうかと彼は思った。

早苗は如何なる時でも嬉しげに彼を迎え、そして尊敬を以て彼の話に聞き惚れてくれるのだった。彼と一緒に歩くのも努めて避けて与えられた小さな家で身綺麗に、そして、ひっそりと毎日を暮すのだった。

しかし彼は愚かにも、真の女らしさに溢れる彼女のひたむきな愛情の中に、浸り切る事が出来なかったのだった。物静かで、おとなしい早苗に飽き足らなくなった彼は、妻の令子とはもよりのこと、早苗からも足が遠のいて、悪友の有閑令嬢達と遊び呆ける日が多くなって行った。

今日も会社を早退した彼は、自慢のスポーツカーを駆って競馬場へ急いでいた。郊外に出た所で、背後に白バイのサイレンを聞いた彼は、舌打ちして車を停めた。

「どうしたのさ」

並んで坐っていた娘が、ピンクのネックカチーフを結び直しながら不満そうに訊ねた。

「どこに隠れていやがったかなあ」

忌々しげに呟いた彼は免許証を差出す。

「信号無視、速度違反、おまけに二重追越しだ。分ってるな？ え、おい」

白バイの警官は風防眼鏡を押し上げて彼の免許証を調べた。

「いくらですかね？ 急いでるんですが」
罰金のチケットを期待していた彼に、警官の呶鳴り声が飛んだ。

「馬鹿野郎！ 今年になってこれで何回目だと思ってるんだ。チケットじゃ済まんぞ。出頭して貰うからな。ホラ」

免許証は取り上げられ、代りにその日だけ運転出来る免許証預り証が渡された。

「あら、私も裁判所へ出頭させられるの？」

住所氏名を警官に書き留められて、流石のお転婆娘も眉をひそめて呟いた。

「なあに、大した事はないさ。君が喚ばれる事は先ずないよ。しかし、いつの間に、そんなに点数が減ったかなあ。ちきしょう」

三日経って出頭命令書が検事局から舞い込んだ。一週間後の日を指定して午前八時半に検事局交通部へ出頭せよというのだ。正当の理由なく出頭しない場合には即刻、逮捕する旨、書き添えてあって彼は憂うつになった。妻の令子は運転出来る癖に会社への送り迎えをしてくれるどころか、

「どこへ出勤するのか分ったもんじゃないからね、馬鹿らしくってよ。運転手を雇う甲斐性もないのね」

と嘲けるのだった。口惜しかったが、同席

していた令嬢の事がばれると面倒だった。兄に相談して見たが、運動しても揉み消す事は見込み薄だった。早苗だけは顔色を変えて心配してくれて

「検事局へ行くんですって！ まあ、どうしたらいいかしら」

とオロオロ案じるのだった。

「罰金で済むのでしょうか？ それとも……」

「心配するなよ。人を轢いた訳じゃあるまいし、少し罰金が多いだけさ。今年の持ち点が無くなったんで、チケットを渡す代りに勿体をつけて出頭させるだけの話だよ。悪く行つて免許証の二、三カ月間停止が関の山さ」

「そうお。ほんとにそうならいいんだけど。」

私の貯金を罰金に使って下さっていいのよ」

彼は早苗の心根が、その時には心底、嬉しかった。

「あとう、私、経験があるでしょ。あなたがあんな所に入れられたらと思うと、夜も眠れないわ。どんなに辛いか想像出来ない位よ。あなたには到底、辛抱出来ないわよ。けど、辛抱出来ようが出来まいが、鎖つけられてぶち込まれたら、どうもこうもないし……」

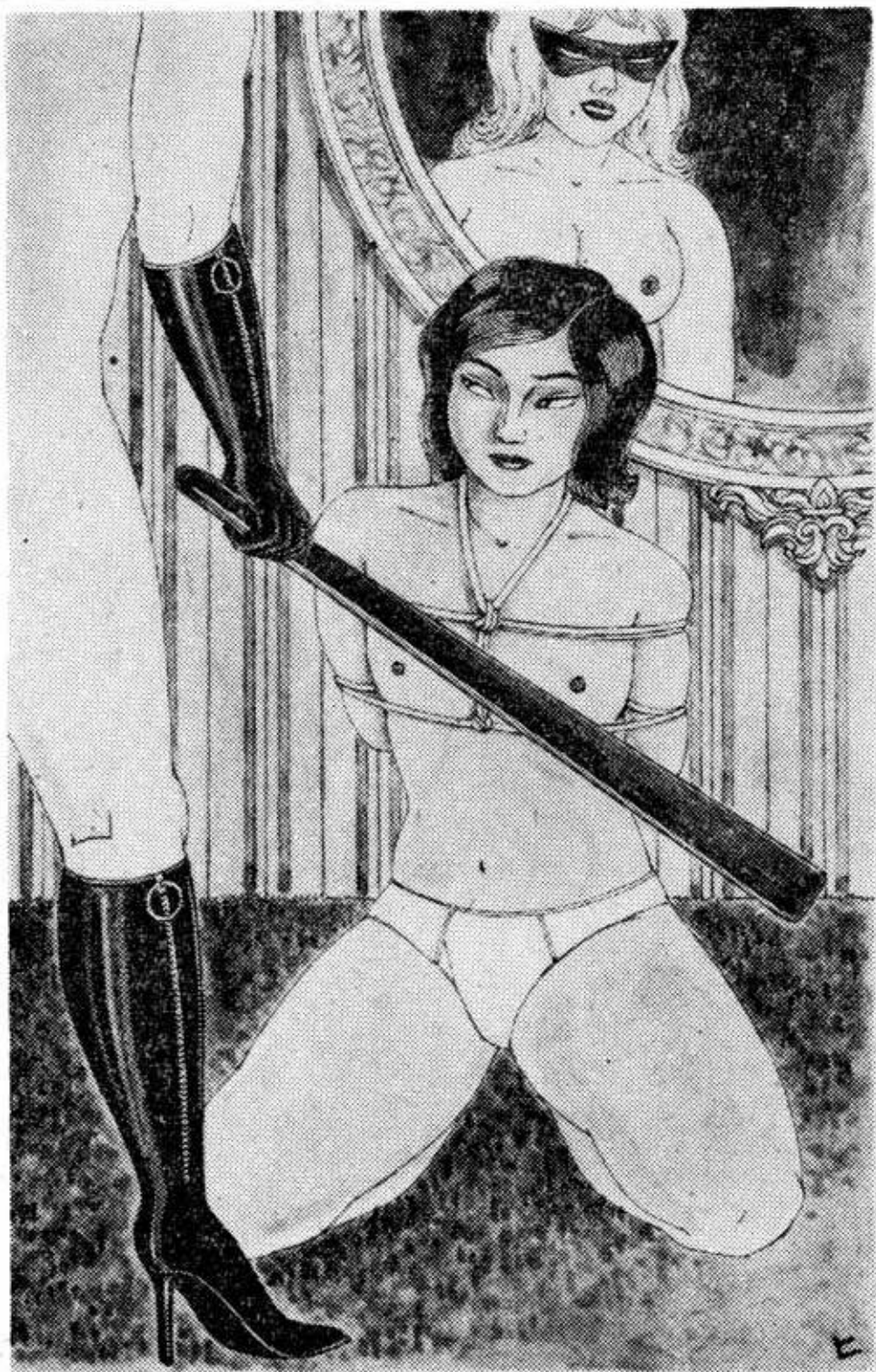
早苗は、嘗ての女囚生活を想い出したのであろう、身震いして口をつぐんだ。

その日は朝から小雨が降っていた。何年か振りて早起きした彼は、妻の車に乗って検事局へ急いだ。何思ったか、令子が運転して送ってくれるのだ。検事局の前に八時十分に着いた。

「あなた、生意気な口、利いちゃ駄目よ」
「分ってるよ」

「帰して貰えるかしら？ ホホホ」
「帰れるさ。馬鹿なこというなよ」
「そう。私ね、ちょっと実家へ、寄って見るわ。帰りは、おそいかも、知れなくてよ。じゃ行っちゃいまし。ホホホ」

令子は車の窓越しに笑ってアクセルを踏んだ。忌々しげに見送って傘をひろげた彼は、



イメージギャラリー

『屈從への出発』

マエダ・ヒオミ

検事局のいかめしい建物を仰いで、身震いした。黒塗りの護送車が、ゆっくりと滑り込むのについて、彼は門の中に入った。うしろから追い付いた若い娘が、彼と肩を並べながら声を掛けた。

「あなたも交通部へいらっしゃるんじゃないこと？ 私もよ」

「どこか知ってるの？」

「ウウン、知らない。初めてよ。玄関入って訊けば分るでしょ。あら、あれ御覧なさいな。可哀想ねえ」

建物で囲まれた中庭の一隅で、先刻の護送車から珠数繋ぎの被疑者達が降りて来て、小雨に打たれて濡れそぼりながら、地下へ通ずるらしい入口へ追われていた。衣服を着ている数名の他は、すべて男女共、レンガ色の不恰好な股引のような猿又一枚の群れで、雨に煙って時々手錠が鈍く光り、微かに連鎖の音を響かせながら深々とうなだれて、黒い口を開いた入口へ、ぞろぞろと入って行く。

「嫌ねえ。あ、護送車が又、来たわ」

スラックスをはいたこの娘は、医師である父の車を無免許で運転して挙げられたのだった。交通部は裏門に近い別館になっていた。迷った末、彼等二人が漸く息せき切って受付

に出頭状を差し出した時には、時計は八時二十九分を示していた。

入った所が広い控室になっていて、右側に受付の机と低い木柵に仕切られて、事務室の机が奥の方まで並んでいる。控室の壁には、どこに通じるのか、いかめしい鉄扉が閉まっていた。椅子一つない広い控室には、既に多勢の違反者達が集まって、ひそひそと、あちこちに固まって立話している。

あたふたと若い男が走り込んで来て、受付に出頭状を差し出した。続いて、これも若い娘がスカートを翻えし、踵のもげたハイヒールで、びっこをひきひき、息を切らせてやって来た。ブラウスの胸が波打っている。

「お願いします」

「おそくなって済みません」

喘ぎ喘ぎ口々に懇願する二人の男女を見やりもしないで受付の女子職員は、ゆっくりと書類を整理している。何回かの叩頭の後、小娘のような女子職員は彼等の書状をつまみ上げ冷やかな声で、つっけんどんに言った。
「何故、おくれたの？ 延着証明書ある？
ないのね。じゃ怠惰による遅刻ね。向うで待っていい」

権力をかさに着た小娘を恨めしそうに見返

りながら、彼等は受付の机を離れて、おずおずと、あたりを見回した。叱りつける低い声と共に、入口の扉を開いて四名の男女が警官の警棒に小突かれるようにして顔を伏せて現われた。一人の婦人を先頭に、そのあとから三人の男が行列になって続く。先頭のスラリとした婦人が血の気のない顔を両手で掩って控室の連中の視線から面を隠した。揃えて持ち上げた彼女の両手首にキラリと光る手錠を認めて、謙二はハッとした。手錠の鎖に通されたロープで芋蔓式に繋がれた四名の男女は控室に集まった人々の間を曳かれて通り抜け突当りの壁の鉄扉の中に連れて行かれた。

「出頭をサボった連中だぜ、彼奴等は」

「パクられると三、四日は豚箱へぶち込まれるからな。忌々しいけど、出頭しなきゃ損だよ」

「あ、もう九時だ。俺達も、そろそろ、これだぜ」

そう言った若いGパンの男が両手を揃えて手錠を嵌められる仕草をして肩をすくめた。経験者らしいトラックの運転手風の男達の話聞いて、スラックスの娘は泣きそうな表情を浮べた。ブザーが鳴って、きつい顔立ちの婦人職員が木柵の仕切戸を押して現われ、皆ハタと静まった。

ハタと静まった。

「皆、よくおきき。これから名を呼ぶから、呼ばれた者は、この中に入るのよ。入ったら隅に便所があるから用を足して、係官の指示に従いなさい。言っとくけど、中に入ったら私語は禁止よ。いいね」

睨み回しながら、そう言い渡した婦人職員は、鉄扉をギーと開き、そして名を読み上げた。五名宛、呼び入れられる違反者達は、情けなさそうな顔で鉄扉を潜って行き、室内からは絶えず叱りつける声や罵る声が聞えて来る。手錠を嵌める金属音が嫌でも耳に入り時折、激しいビンタの音すら洩れて来て、彼は胸も塞がる心地だった。彼の腕に取り纏ったスラックスの娘も、唇をわななかせて、おののいていた。

「私、こわいわ。このまま監獄へ送られてしまふんじゃないかしら？ ああ、あんな事、しなきゃよかった。恐いわあ」

一きわ激しいビンタの往復の音が響き、撲られる男の呻き声が聞え、娘にひしと縋られた彼も、恐ろしさに足がすくむ思いだった。

「森謙二」

「ハ、ハイ」

婦人職員に呼ばれて彼は、かすれた声で返

事した。

「加納順子」

「ハイ」

娘の声は、かぼそかった。

「これでと……。九十四名ね。あとの二人は遅刻者と……。来ないのは二名ね。もう来たって追い返してよ」

鉄扉を潜る違反者達を冷たく見据えながら婦人職員が受付の娘に、そう言った。

「お前、何してるの！ いい加減におし」

スラックスの娘は、びくっとして彼の腕から手を離して吸り上げた。床が一段、低くなつた室の中には細長い木のベンチが何列も並べてあり、既に違反者達が一米程の間隔をおいて腰掛けて横顔を見せ、うなだれていた。

ベンチに向い合つて左手の一段高い監視席には、二人の婦人看守が坐つて見下ろし、監視席の横手には昇る階段が薄暗く上方へ消えている。ベンチの背後の壁際には、むき出しの便器が数個並び、天井の電灯に照らされて、窓一つない壁や床のコンクリートが陰惨な感じだった。彼と並んで用を足しながらタクシ一の運転手風の男が話し掛けた。

「おい、今日は若い綺麗な子だぜ。どうせ縛られるにしても、野郎にガチャリとやられる

よりも女の子に嵌められる方が感じがいいからな」

全然、口を動かさずに低い声で言う運転手の言葉に、彼が振り返って見ると、鉄扉の内側のあたりに据えた大きなデスクに男の看守が踏んぞり返つて座り、その横手の台のそばに、何れも若い二人の婦人看守が手錠をいじくりながら、立っていた。

「こら、そのスラックスの娘。用便しないのなら、さっさと、こっちへ来い」

むき出しの便器の前で立ちすくんでいた加納順子に看守の太い声が浴びせられ、ビクツとした彼女は、とぼとぼとデスクに歩み寄つて再び吸り上げた。

「名をいい。いまさら泣いたって仕様ないじゃないの」

男の看守の横手の席に坐つた婦人職員が、書類から顔を挙げて叱るように言った。

「ハ、ハイ。加納：順子です」

「そう、えーと、あら、お前は免許証ないのね。これに指紋を捺すんだよ。馬鹿！ 十本共、全部にインクをつけて捺すのよ。さっさとおい」

検挙の際に取られた指紋と照合され、本人である事が確認されると、婦人看守が順子の

腕を掴んで引き寄せ、手荒くかし入念に身体検査を行い、所持品を全部、取り上げてしまった。靴を脱がされ、素足に藁草履をはかされた。

「手をお出し」

同じ年頃の同性の婦人看守に体中を意地悪く調べられ、その上に手錠を掛けられる屈辱とみじめさに、順子は身をよじつて僅かに抵抗を示した。

「そっちの手も、おかし」

既に右手に嵌まつた手錠を握つて婦人看守は冷たく言った。

「かんにん、かんにんして。手錠なんか嵌めないで」

「反抗するの？ こことは、もう娑婆じゃないのよ。おとなしくしないと、痛い目に会うわよ。あら、指のインクが私の服に付いたじゃないか」

矢庭に順子の頬に平手打ちがバシツと鳴り順子は悲鳴と共に、頬を自由な左手で押えてのけぞつた。強く左手首を掴まれて顔から引離された順子は、手首の痛さに再び悲鳴を挙げ、右手の手錠をガチャガチャいわせて、もだえたが、ガチツという音と共に、左手首にも手錠が、しっかりと喰い込んでしまった。

左肘の上に鎖が巻かれ錠を掛けられて鉄の番号札をつけられた。

「手数を掛ける女だねえ。ホラ、お前の番号は九十一だよ。覚えておおき。さあ、さっさと、あっちへ行行って座るのよ。次の邪魔になるじゃないの」

スラックスのお尻をバシリと婦人看守に打たれた順子は、両手を持ち上げて嵌められた手錠を悲しそうに眺めながら、みじめさに歪んだ顔を手の甲で、こすりこすり、よろめく足取りでベンチに崩折れたのだった。

「次は、お前かい？ 名は？ フン、森謙二だね」

婦人職員は彼の免許証の写真と彼の顔とをジロジロ見較べた。黒いインクを両手の指先に塗られて指紋を採られ、婦人看守の容赦ない手が全身を調べ上げ、所持品は悉く取り上げられ、そして差し出した両手に手錠が掛けられた。左肘の番号は九十二号だ。

自分の両手に手錠を嵌める若い婦人看守を上目使いに見た彼は、彼女の顔に、あの水上良枝の面影がオーバーラップして浮んで来るような錯覚を感じた。ここは検事局なのだ。そして前に立つ若い婦人は行刑官なのだと思うと、今、嵌められた手錠は嘗て高校での罰

の際、良枝の手で嵌められた手錠の比ではなく、冷厳な硬さと冷ややかさと重量感を以て断固として両手首の骨の芯にまで喰い入る思いであった。彼は順子の隣に腰を掛けてホッと吐息を洩らした。

未だ時々しゃくり上げている順子は、膝の上から両手を上げて、こみ上げる涙を押えていた。彼女の目の周りは、指先の黒インクと涙で、みじめに汚れていたが、彼女には拭うすべは既にないのだ。

護送車で送られて来た珠数繋ぎの四人の男女は、背板もない、このベンチに坐る事すら許されないで、監視台の下のコנקリート床に、じかに正座させられて、時々足や膝や尻を動かして呻き、その度に巡察している婦人看守に叱られビンタされていた。遅刻した二人の男女も最後に処理され、激しい往復ビンタを喰った末、監視台の下の床に泣きながら正座させられてしまった。

百名に近い出頭者は、うなだれて坐り、時々誰かが溜息を吐き、女達が吸り上げた。看守達の低い話し声や笑声が時々聞えるほかは打ちひしがれた沈黙が出頭者の頭上に押しつぶさり、巡回して監視する婦人看守の靴音が

床に鳴る。誰かが身動きして腕を動かすと、

手錠の鎖が微かに音を立て、婦人看守のきびしい視線が飛んだ。時計の針が十時を少し回った頃、監視席の電話が鳴り、番号を呼ばれた五名が連れ出されて階段を昇って行った。

連れ戻されて来る者と入れ替って、次々と連れ出されて行く。調べを受け終え処罰をいい渡された者も、全員が済む迄は、この室で坐って待たねばならないのだ。運転手風の男が婦人看守に腕を掴まれながら、顔をしかめて帰って来た。

「おい、いくら喰った？」

男の看守が煙草の煙を吹きかけて嘲笑うように訊ねた。

「ひどいもんですよ、旦那」

運転手風の男は両手を少し挙げ、指を何本か立てて金額を示そうとして、顔を更にしかめた。

「いてて！ ちょっと弛めておくんないよ旦那」

哀願された婦人看守は、面倒臭そうに鍵を取り出して彼の手錠を少しゆるめてやり、背中を突き飛ばした。運転手風の男は、よろけて脱げた藁草履の片方を足で引き寄せながら白い目を剥いて婦人看守を見上げ、音もなく

舌打ちをしてベンチに戻り、両手で鼻を横にこすりながら腰を下ろした。

「二十四号！ 何度、呼ばせるの？」

監視席の婦人看守の鋭い声が飛び、会社員風の男が弾じかれたように立ち上った。

「ハ、ハイッ」

おずおずとベンチの横手へ出て来た彼の頬に、激しい平手打ちが二度、三度、音高く鳴り、彼は屈辱に呻きながら、遙かに年下の若い婦人看守に腕を掴まれて曳かれて行った。

両手で顔を掩って鳴咽しながら、一人の女が階段を降りて来た。細い両手首に嵌まった手錠が手首から、かなり下に、ずれている。

「泣いたって仕方ないじゃないの。不服なら正式の裁判を受けたらどう？」

腕を掴んだ婦人看守に言われて女は更に啜り上げた。茶色のスーツを着た奥様風の婦人だった。

「晒しかい？」

「そうなのよ。泣きじゃくるもんだから連れて帰るのに苦労したわ。次は、この男ね。さ来るんだよ」

「そんなにしなくたって行くよ。行きゃいいんだろ。手錠なんか嵌めやがって」

婦人看守に掴まれた腕を振り離して口惜し

そうに身もだえた若い男に、忽ちビンタが飛んだ。

「ち、ちくしょう！ 撲ったな。あいてて」

自分の置かれた分際を忘れて逆上した男は苦痛に悲鳴を挙げて手錠をガチャガチャ鳴らした。婦人看守が手錠の環を握って強く締めつけたのだ。

「どう、まだ手向いするつもり？」

腹部の前で揃えて宙に浮いた両手の十本の指が苦痛をこらえているのを嘲笑り笑った婦人看守が、改めて往復ビンタを、したたかに喰わせた。もう一人の婦人看守が手早く腰縄を打って手錠を腰に押え、縄尻を同僚に渡した。

「手、手が千切れる。ゆるめて下さい。勘弁して」

「フフフ、何言ってるさ。行くんだよ」

縄尻を握る婦人看守に背中を小突れて階段を昇って行く男を見送った出頭者は、身を固くして更に、うなだれるのだった。

背板もない固いベンチに、じっと坐っているのが森謙三には次第に苦痛になって来た。

咽喉が乾いて口の中がカラカラになって来たし、それにもまして、煙草が欲しかった。素足の足裏や指に藁草履がチクチクと痛く、う

なだれた目には両手の手錠が嫌でも見えたり少しでも身動きすると、忽ち婦人看守の鋭い視線が注ぐのが感じられて、みじめな思いだった。監視席の婦人看守が煙草を吸いつけるのを上目使いに見ると、みじめさが益々つって、涙が滲んで来た。

隣に坐っている加納順子が、身を震わせて喘いだ。生理的要求に堪えているのだ。雨模様の日のコンクリートの半地下室の空気は、ひんやりと湿っている。何度も身もだえしては哀願のまなざしを婦人看守に向けていた彼女は、とうとう叫んだ。

「お、お願い。お願いです」

つかつかと靴を鳴らしてやって来た婦人看守が、ベンチの横に立って意地悪く、

「何なの？ みだりに口を利くと罰を喰うわよ」

「お、お願い」

「だから何なのよ？ はっきり、お言い」

「もう我慢できませんの。トイレへ行かせて」順子の語尾は、恥かしいのか細く消えた。

「さっき済ませたばかりじゃないの？ それとも、お前、何か病気があるのかい」

制帽をかぶり直して入念にピンを髪に挿しながら、婦人看守は意地悪かった。

「あ、あのう、先刻の時は……」

順子は喘ぎ喘ぎ怨めしように婦人看守の顔を見上げて、今にも泣き出しそうだった。額には脂汗が浮んでいる。

「ホホホ、よし、じゃ、おいで」

手錠の両手を固く握り締めた順子が、よろよろと彼の膝の前を、すり抜けて通って行った。

「おや、嫌なら、およしよ。するのかい、しないのかい？」

背後で婦人看守の冷たい声が聞え、声を吞んで鳴咽する順子の気配が感じられた。むき出しの便器を前にして、順子が尚もためらっているのだ。手錠を外してやる音が微かにして、やがて液体音が多勢の耳に聞えた。

「早くおしよ。愚図々々するんじゃないの！」
身づくろいの気配が泣きじゃくる声と共に聞え、そして非情な手錠の音が響いて、順子は一きわ高く嚙り上げた。ベンチに戻った彼女は永いこと身も世もない風情で肩を震わせていたのだった。

曳き出されていた連中が全部、連れ戻されコンクリートの壁の向うでベルの音が微かに聞えた。正午になったのだ。

「昼飯の欲しい者はいないか？」

男の看守が背伸びして、あくびしながら皆に呶鳴ったが、誰も黙っていた。

「誰も要る奴は、ないんだな？」

「ど、どんな物を喰わせて貰えるんです？」

一人の男が、おずおずと訊ねた。

「栄養たっぷりのスープさね。ちっと匂いがきついようだが。お前、欲しいのか？ 欲しければ、いくらでも持って来てやるぜ。しかし持って来させたからには、一人前は無理にでも嚙り込んで貰うからな」

訊ねた男は黙ってしまった。

「ハハハ、要らないようだな。お前達の昼飯の予算は余ってしようがないんだから、皆、遠慮しないでくれよ。ハハハ」

看守は面白そうに嘲り笑い、婦人看守達は交替で出て行った。男の看守は、女の子が運んで来た弁当とお茶を、デスクに脚を乗せてうまそうに飲み喰いした。

「お茶を一杯、飲ませてくれませんか？」

学生風の青年が、手錠の両手で髪を掻き上げながら、おそろおそろ言った。

「何だと！」

看守は忽ち目を剥いて睨みつけた。

「い、いえ、水、水でもいいんです。咽喉が乾いて……」

「何を吐かす。だからスープは要らないのかと先刻、訊ねてやったじゃないか」

「囚人食は要らないけど水が欲しいんです」

「此奴、口答えしやがって！ 痛い目に会いたいのか？」

呶鳴りつけられた青年は唇を噛み黙った。

「水も飲ませてくれないなんて、あんまりよねえ。私も欲しいわ」

青年の隣に坐っている娘が切なげに手を動かし、上体を少し回して青年に囁きかけた。

「ほんとに人権を無視してるよ。未だ処罰が決まった訳じゃないんだからね、われわれは」

青年が娘に囁いた途端、

「その二人！ 私語したわね」

つかつかと近寄る婦人看守を見て、青年と娘はハッと身を強張らせたが遅かった。

音を立てて茶を喫んでいた男の看守もやって来て、二人の男女はベンチの横に引き出された。

「私語は厳禁なんだ。言って分らん奴は、こうして体に教えてやることになっとる」

看守達の手で容赦なく鉄砲手錠にされて、青年は呻き、娘は悲鳴を挙げた。監視台の下へ引きずられた彼等は、監視台の前側に打ち込まれた鉄環に捕縄で手錠を吊られ、皆に顔

を向けて立たされた。二人共、既に蒼白となつた顔に苦痛の脂汗が滲んでいる。
「苦しいかい？ 御定法なんだから仕方ないわね。三十分間、そうしてるのよ」
「いい恰好だぜ。家の人や友達に見せてやりたいもんだ」

途切れ途切れに苦痛を訴え、赦しを乞うて喘ぎ呻く二人を看守達は嘲って笑い、ベンチの男女は恐怖に、おののいた。終り頃には二人共、笛のような音を立てて息も絶え絶えに胸や腹を波打たせていたが、五分間のおまけをつけられて漸く鉄環から捕縄を解かれるや



イメージギャラリー

『女王のゴキゲンとき』

岡 かし

床に崩折れてしまった。腕を掴まれて引き起され、苦痛の絶叫を挙げた彼等の鉄砲手錠が外された。叱りつけられ平手打ちを与えられて差出す彼等の両手首には血が滲んでいた。
ひる休みの時間も終りに近づき、看守達も殆ど皆、戻って来た。婦人看守達は声高く笑いかいながら雑談を交わし、ベンチの男女はうなだれた頭を時々挙げて、憤りと怨めしさをこめて、彼女達を盗み見するのだった。

素足に穿かされた藁草履が足裏を、ちくちくと刺し、ささくれた鼻緒が喰い込む痛さに謙二は藁草履を、そっと、ずらして脱いだ。コンクリートの床が足裏に冷たい。身動きするのすら、おそろおそろしなければならぬ身で、固いベンチに既に数時間、じっと坐らされている謙二は、悶えるようにして坐り直し、溜息を吐いた。体の節々が強張って、切ない程に腰と尻が痛かった。未だ半分しか経っていないと思うと、うんざりして泣きたい気持だった。

「九十二号！ 何故、草履を脱いでるの？」
いつの間にかベンチの横手に立った婦人看守が、九十三号と九十四号の二名の男越しに彼を睨んで叱りつけた。ハッとして、あわてて藁草履の鼻緒に指を通したが、既におそか

った。

「こっちへ出ておいで」

引きずり出された彼は、小柄な婦人看守の手で、したたかに往復ビンタされた。屈辱と痛さに思わず頬を押えて呻くと、手錠の鎖を握られて引き下ろされ、更にビンタが激しく鳴った。

それで済んだのかと彼は思ったが、きつい目をした婦人看守はネクタイを直しながら、未だ赦してはくれない。

はれ上った顔を歪めて恨めしげな彼に

「折角、履かせてやってる草履が嫌なら、履かなくてもいいのよ。お脱ぎ！」

婦人看守は冷然と言って、脱いだ藁草履を両手に持った彼を小突きながら、監視台の下へ引き立てて行った。

「ゆるして下さい。もう決して脱いだりしませんから」

恐ろしさに震える彼の哀願には耳を藉さないで婦人看守は彼に正座を命じるのだった。

「お坐りと言ったら坐るのよ。もっとビンタを欲しいの？ 壁に背をつけて真直ぐに坐るんだよ」

へたへたと崩折れた彼は、床にズボンのまま正座し、監視台の前壁に背と後頭部をピッ

タリと押しつけた。出頭者の全員と向い合った形だ。手錠の環が固く締めつけられた。

「草履の片方を口に啣えるのよ。そして、もう一つを両手を前に伸ばして捧げて」

婦人看守は事もなげに命じた。屈辱と怒りに胸が熱くなる思いだったが、命じられる通りにする外はないのだ。汚れた古草履を口に啣え、片方を捧げて手錠の両手を、のろのろと伸ばしながら彼の頬には口惜し涙がホロリと流れた。みじめな屈辱の思いと、こみ上げる怒りとで、昏むような彼の目の前に立って見下ろす婦人看守の濃紺のスカートの微かに揺れて、前の深いひだが妙にハッキリと見え

た。

「三十分間、そうしてるのよ。草履を落したり、腕が下ったり、頭や背が壁から離れたら何時までも赦さないからね」

彼の頭髪を掴んで壁に二度、三度、後頭部を打ちつけた婦人看守は、嘲けるように言い捨てて再び巡回の靴音を立て初めた。ベンチの前の床に正座させられている六名の男女が正座の苦痛に顔を歪ませ、脂汗さえ浮べて喘いでいるのが目の前に見えた。留置場から連行されて来た四名は、幾分か慣れているらしかったが、遅刻して来た二人の男女は、絶え

ず微かな呻き声を洩らして、膝や腰を、しょう中、動かして身悶えし、手錠をガチャガチャいわせて額の脂汗を手の甲で押し拭い、そして監視台を仰いで合掌して憫れみを乞う仕草をしたりするのだった。遅刻した若い娘がとうとう上体を前に倒し、両手を床について腰を微かに浮かせ、四つ這いのような恰好をして肩を激しく震わせ、嘔り上げた。冷笑を浮べて鞭を手に、つかつかと婦人看守が近寄って、忽ち娘の背にブラウスの上から革鞭の一撃が与えられ、魂消る悲鳴が響いた。

「法に違反した上、遅刻までする度胸があるのに、鞭の二つや三つでネを挙げることはないだろ？ 一日位、正座してられないの？」

娘はヒイヒイ泣きながら、再び坐り直して両手で顔を掩った。両手首の手錠が少し下にずれて斜めになり、電灯にキラリと光った。

草履を捧げさせられている謙二の両肩と両腕が、もげるように、だるくなって来た。

「腕が下ってるよ。もっと挙げて」

スラリと背の高い婦人看守が鞭を手にしてやって来るのを見て彼は震え上ったが、鞭の先端で両手首の袖口あたりに軽く打たれただけで済んだ。両手の掌を真上に向けているくはならないのだが、手錠の鎖の付根が互

いに外側になって、ぴんと張り、締めつけられた手錠の環が、こじて痛い。掌を少し向き合うようにすると、大分、楽になった。捧げ持った草履を落さないように注意しながら、思い切って手の甲を上に向けると、肩や腕の苦痛が、かなり軽くなった。手錠が触れ合っ

て音を立て彼の腕の動作は忽ち発見された。前方から斜めに振り下ろされた革鞭が、彼の正座の腿に小気味よく鳴り、悲鳴と共に口の草履を落とした彼は上体を、のた打たせて呻いた。久し振りの革鞭は、ズボンの上からとはいえ、痛かった。

「言われた通りにしないのね。十五分間、追加よ。いつまでヒイヒイいつてるのさ。ちゃんと坐るのよ。そら、これを啣えて」

婦人看守は、床に落ちた草履を拾い上げ、踵の方を彼の口に押し込んで啣えさせるのだった。

終りの頃には如何にしても両腕が下がって来て、手錠が千鈞の重みで手首に喰い込む思いだった。額の脂汗を拭うすもなく、必死の形相で苦痛に堪える彼を、婦人看守達は大目に見てくれた。囚人を扱い慣れた彼女達には、死物狂いの努力をしているのか、或いはそのふりだけしてサボっているのかは、一目

で判るのであった。

漸く赦された彼は、婦人看守に小突かれても立ち上れず、足蹴を受けて這って戻り、ベンチにしがみついて歯ぎしりしながら、やっとの思いで腰掛ける事が出来たのだった。

手錠をきつく締めつけられたままの両手首から先は、未だ痺れたままだったが、両腕や肩のだるさ、足の痛み、そして鞭を受けた腿の痛みの名残りが漸く薄らいだ頃、彼の順番が近付いて来た。隣に坐っている加納順子は絶えず両手を挙げて指先で眼頭を押えて啜り上げ、時々悲しそうに嵌められた手錠をうなだれて眺め、そして忌々しげに手錠の鎖を引っ張って見たりしていたが、番号を呼ばれて唇を噛みながら立ち上り、ままならぬ両手で髪や衣服を直し直し婦人看守に腕を掴まれて連れ出された。顔の汚れを洗わせて欲しいと哀願する彼女の声が悲しげに階段を昇って行った。

やがて一人の男が打ちひしがれて連れ戻され、謙二の番号が呼ばれた。番号で呼ばれて返事しなければならぬのが、みじめな思いだった。制服の胸が豊かに盛上った婦人看守が手錠を少しゆるめてくれて、右腕を強く掴

んで引き立てた。

「さ、おいで」

二階の調室には五人の検察官が、それぞれ一人の書記を従えて大きなデスクを横一列に並べていた。謙二は婦人検察官のデスクの前に立たされた。彼女は紫煙を、くゆらせていた。

「九十一号を連れて参りました」

婦人看守は、そう言って手錠を外してくれ

た。水色の上張りを着た書記の娘が差出す書類を受取りながら婦人検察官は、じろりと彼を鋭い目で見やり、そして書類に目を落とした。うつむくと、色白な顎のあたりがくびれ長いまつげに切れ長な目もとが、かげる。

「検察官 坪内三枝子」と書いた札を机上に立てた婦人検察官は中々の美人だった。

「住所姓名は？」

手にした煙草を灰皿に揉み消した彼女は、きびしい声で取り調べを始めた。

左隣では加納順子が、若い男の検察官におどかされ叱りつけられて、立ったまま身もだえして哀訴している。右隣のデスクの前には二人の若い男女が並んで立たされて深々と、うなだれていた。

「：お前達兩名は若松町三丁目の交差点の交

通信号を無視して渡ろうとし、警官の警告に對しても腕を組んだまま不遜な態度を取って従おうとせず、その上、近寄った婦人交通警官の手を払いのけて逃走を計った。そうだな？

「ハ、ハイ」

二人の男女は、か細い声で返事して啜り上げた。検察官は作成した調書を面倒臭そうに読み続ける。そして拇印を押された彼等に、二名の婦人看守が近寄って手錠を嵌めて連れ出して行った。

「信号無視、速度制限超過。及び二重追越と違反事実全部、認めるのね？」

「ハ、ハイ。しかし信号は、その、うっかりと気がつきませんでしたし、速度もそんなに出てるとは知りませんでしたので……」

「お黙り！ お前は盲じゃないんだろ？ 車には速度計がついてる筈よ。つまらない言い訳は、およし」

婦人検察官、坪内三枝子は、片手で机を叩いて叱りつけた。薬指に嵌めた指環の石が青くキラリと輝いた。縮み上って、うなだれた謙二は、きびしい声音の取調べに返事も、しどろもどろ。書記の娘がテキパキと作成して行く調書を悲しく、みじめな気持で眺めるの

だった。回転椅子にもたれかかった婦人検察官が、時々鋭い視線を彼に飛ばしながら調書を口早に読み上げた。

「この通りに相違ないのね？」

「ハ、ハイ」

「判決は略式命令をお受けするの？ それとも正式裁判を受ける？ いっとくけど、裁判を受けると判決まで相当、長いわよ。勿論、収監されるわ」

みじめな未決監の事は、彼も話に聞いて知っていた。

「略式命令でお願いします」

「そう。ここここに拇印を押して」

婦人検察官は、給仕が運んで来た茶碗の蓋を取って一口、啜り、煙草をくわえて火をつけ、椅子にもたれて紫煙を吹き上げた。

「罰は、どの位でしょうか？ 罰金で済ませて頂きたいんですけど」

「ホホホ。三階へ行けば分るわよ。けど、二カ月以内に又、こんな事をやると、今度は罰金じゃ済まないからね。免許証を没収されて晒されるわよ」

婦人検察官は嘲けるように言って婦人看守の方に指を挙げて合図した。謙二の背後の椅子に腰掛けていた婦人看守が、膝の上に乗せ

ていた手錠をカチャカチャと手に持って立ち上がり、彼の背後に近寄って右手を掴んで振り回し、自分の方に向かせた。よろめいて、婦人看守と向き合った彼の右手に、鋼鉄の環が振り降ろされて、冷たく喰い込んだ。彼の胸に屈辱感がこみ上げて来て思わず歯ぎしりをするのだったが、ルージュが赤い唇に、微かな嘲笑を浮べた婦人看守は、彼の左手も引き寄せて手錠の環を手首に当てがって、ゆっくりと嵌めてしまった。

朝からずっと床に正座させられていた婦人が一名、がくがくする足を踏みしめ踏みしめよろよろしながら連れて来られたのと入れ違いに、彼は調室を出て三階へ連行された。薄暗い廊下の窓越しに鉛色の空が一日中、小雨に煙っていた。控室には数名の男女が壁を背にして、立たされて待っていた。加納順子が弱々しい泣き笑いを、ちらと浮べて、すぐに顔を伏せた。

やがて一人宛、呼ばれて扉の中へ連れ込まれ、一分も経たないうちに、或者は悄然と或者は虚勢を張って出て来て、地下室へ連れ帰られて行く。順子の前の者で呼出しが途切れた。数名分宛、書類が処理されているらしく永い間、待たされた。調べを受け終えた男女

が連れて来られて、謙二の横に次々と並んで立たされた。

「珍しく早く済みそうね。あと、何人？」

「八名よ。未だ四時ちょっと過ぎだわ」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売！

一月分	1冊	六〇〇円（送共）
三月分	3冊	一八〇〇円（送共）
半年分	6冊	三六〇〇円（送共）
一年分	12冊	七二〇〇円（送共）

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八号出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用

嬉しそうに話し合う書記の娘達の声を背に彼は再び地下室のベンチに連れ戻された。

四時半には出頭者全部の処理が済んで全員地下室に帰って来たが、五時までは、そのま

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

ま坐っていないなくてはならないのだ。

退庁のベルが微かに聞え、出頭者達は手錠を外して貰い、所持品を返されて身繕いし、申し合せたように両手首を撫でながら嬉しそうに出て行く。

「ほんとに、ひどい所ねえ」

彼と肩を並べて歩きながら順子が言った。

「この中には来る日も来る日も毎日毎晩、今日みたいになされて暮してる人達がいる訳ね」

検事局に隣接した拘置所の高いコンクリート塀を仰いで、順子が恐ろしそうに呟いた。

自宅に帰った所で妻の令子はいないのだ。

令子の実家へ迎えに行くのも忌々しかったので、順子と別れると、彼の足は自然に早苗のいる所へと向ったのだった。

「次は九十二号。お前だよ」

いかめしく大きいマホガニーの机の前の、一段低くなった床に立たされた謙二は、判事補の若い婦人の黒い法服を仰いで罰金刑の言い渡しを受けた。

書記の娘が降りて来て、罰金支払命令書を突きつけた。

「さ、済んだよ。おいで」

背後に立った婦人看守が、彼の腕を強く掴んで引きずった。

カット・マエダヒオミ



被

虐

の

ひ

と

懸賞応募作品

桐 島 次 郎

新宿にはトルコ風呂が多い。

私は、トルコでの例のサービスのファンでもないから、そう足繁くはゆかない。ただ、酒を飲みすぎた時など、トルコで休んで帰る方が悪酔いが残らないし、バーやキャバレーの閉店時では、タクシーを拾うのに一骨折りしなければならぬので、トルコで時間つぶしをすることにもなる。

あるトルコで、フミ子という女を知ったのも、そんな時であったが、それ以来、私は新

宿でのトルコは、フミ子のところと決めるようになった。

フミ子は美人でもない。マッサージは、まあ、まあだ。ただ、話が面白い。彼女は男を責めるのが好きだという。私は、これでも、二、三人の女なら縛ったり、鞭で打ったりした経験もあるので、サディストを自認しているのだから相性は悪いが、Mの女なんて、そころがっているわけでもなし、SMに理解のない女よりは、はるかに良い。

「ここでさ、学生をいじめたことあるのよ」などと、彼女は私の腰をもみながら話し出

したことがある。

「自分のベルトで打ってくれ、というのよ」

「やったのか」

「そうよ、思いきりね。転げ廻ったね」

「それだけか」

「いえ、そうしたらね、いくらも金を持ってないのよ。千円しかないって言い出してね。

冗談じゃない、ただのスペシャルだって二枚でしょ。私って、気に入った男なら金なんか欲しくない、自分の思う通り責めたらね。でもその時は商売よ。うんと怒ってやった」

「そしたら……」

「どうすればいい、ってシユンとしているのよ。それを見てたら、いじめてやりたくなつて、見世物になるか、って言ってやったの。そうしたら、何でもする、って言うのよ」

「見世物とは何だね」

「私の友達で手があいてるのを三人、連れてきて、学生に色んな恰好させて笑ってやったのよ。四つん這いにさせてワン、ワンって吠えさせたり、土俵入りの真似させたり、最後にね、自分でアレさせたのよ」

「学生、どんな感じだった」

「Mなんだろうけどね。やっぱり、四人も女に囲まれて、恥ずかしいだろうし、みじめなもんだったわ。泣きそうになってね。でも、それでいて、ひどく興奮してたわ」

私は、この狭い一室で、四人の女達の哄笑に囲まれながら、殺風景な、いささか薄汚れた感じのするタイル張りの上で、男性としてもっとも恥ずべき姿を晒した、その学生の心情を思つて、哀れにも思えた。

フミ子は、男を責めた経験が多いらしく、その種の話は豊富だった。旅館の一室でテーブルを裏返して男を縛りつけ、皮鞭で一時間近く打ち続けたとか、このトルコで男の急所を細紐で縛って引っ張り廻したとか、黒人

兵の客には絶対スペシャルなどやってやらない。自分で処理させて、見物しながら笑つてやるとか、多少のフィクションもあるかも知れないが、面白い話には違いなかった。

「誰か、Mの女を知らんかね。このトルコには、いないかな」

と、ある夜、私は尋ねた。男性いじめの話も、面白いには違いないが、それだけでは私の欲望は満たされない。やはり私は、女をいじめたい。

「いないことないわよ。ここにも一人、いるわよ。私の友達でね」

「紹介してくれよ」

「いいわよ。でも、もっと早い時間に来たときにしてよ。今頃、みんな忙しいからね」

「今度は早く来よう。どんな女だね、それ」

「一寸やせてるけどね、かわいい子よ。私もいじめてやったことあるのよ」

「ほう」

「私ってね、女の子と寝るのも好きなのよ。

男はね、余程でなければ寝ない。責めるだけが好き。女の方が、いいわ」

「その子とも寝たのか」

「そうよ、私のアパートへ来たときね。その時、縛って欲しいっていうの。後手にロープ

で縛ってね、それから足首を、そろえて縛つて、それを首まで引っばつてね。海老責めっていうのかな、ああいうの。そうするとね、あそこも、その後も無防備でしょ。そうしてコケシをさ、二本使ったわ。わかるでしょ」

「太いのか」

「そうよ、相当ね。お尻の方だって結構、入るのよ、大きいのが。クリームなんか使うけどさ。でも痛がるわね。彼女も無理矢理、太いの使ったら苦しんだわ。涙ながして……」

この話は、私の好き心を刺戟した。どんな女か知らないが、そのM女性を紹介させたいと思った。フミ子も、私に紹介の労をとるところを約束した。ところが、私には思いもかけず、トルコ女性より素晴らしい女性がフミ子から貸して貰える機会がきたのである。

二

私が、いつものように乱酔の末ではなく、早々と、フミ子のトルコを訪ねたのは、蒸暑さの残る一夜であった。

「フミ子、いるかね」

「えーと、一寸……」

カウンターの男が妙な返事をした。

と、その時、二階から、いつものトルコ嬢

スタイルでないフミ子が、トコトコと降りてきた。

「今、来たんだよ」

「アラ、悪いわね。今日は早引けするのよ。今度にしてくれない」

「せっかく来たんだ、つきあえよ。それに」

私は、いうまでもなく、フミ子の同僚のM女性を紹介させるつもりだった。

「弱ったわ。そうね、一寸、外でお茶でも飲まない？」

フミ子は何か考えている風であり、私もフミ子自体が目的でもないので、誘われるまま近くの店へ入った。

そこでの話は、私を一驚させ、喜ばせるものであった。

フミ子は、ある女性——光江という——を今晚、買ったのだという。

光江は、二十七才とかだが、一度結婚して一、二年で何かの理由で夫と別れ、独りで生活している。離婚の際に夫から貰った金で洋品屋をやっていたが、借金ばかり増えて倒産し、数百万の借金を背負った。そして今は、その金貸しの一人である老人との約束で老人の命令に従う限り、一カ月二十万円ずつ、借金を棒引きにもらっているのだという。

その老人がフミ子の客であった。老人は、フミ子の性向を知り、面白がって光江を一晚貸してもよい。ただ借金の担保だから、只ではつまらぬ、一晚五万円はどうだと言った。

フミ子は、始め、馬鹿らしいと思ったが、ある夜、老人は光江をつれて風呂に來た。光江は美しく、憂いを含んだ眼差がフミ子を魅了した。この女性を金で買える、ということもフミ子にとって興味をもたせた。フミ子は、金で買う以上、品物を確かめたいと言った。

老人は光江に裸になるように命じた。おそろく、トルコなどに來たのでさえ、始めてのその女性は、いわば今まで卑しんできた種類の職業の女に、自分の肉体が品物扱いにされ、検査を受ける屈辱に耐えられなかったろう。

しかし、老人の飼育に慣らされてきたのか、マゾの血が流れているのか、光江は全身を羞恥の色に染めながらも、フミ子の前にその裸身をさらした、年令よりも若々しく、やや小柄ではあるが、色白の美しい体であった。

一糸まとわぬ姿で、同性の前に直立させられた犠牲者に、フミ子は、更に苛酷な要求をした。光江は、観念していたものか、泣きだしそうな表情を示したものの、フミ子の命ずるとおり、足を上げ、その隠すべきところ

ろまでフミ子の目に晒した。老人は、意地悪らしく、触ってはいかん。触れるのは買ってからにしてくれ。と笑った、という。フミ子は自分の手で、この女性を觸ってみたい欲望に駆られたが、老人の制止によって思いとどまり、その時、この女なら、五万が十万でも買ってやろう、と思った。そして、触れなければよいのだ。それは楽しみにとっておこうと思い、そのかわりに、光江に、さまざまな姿態をとらせた。

光江は、この自分より年若い同性の恥かしめに耐えなければならなかった。フミ子や老人に背を向けて立たされ、そのまま両手をタイルにつかせられた。尻は高々と上がり、四つん這いの姿となる。フミ子の、あれこれ批評する声を聞かされる。そのまま、這え、と命ぜられる。狭い浴室を犬のように四ツ足で廻る。もっと顔を上げて、こっちを見なさいなどと叱られる。

やがて、裸身のまま正座させられた光江を眺めながら、フミ子と老人との商談が、まともになった。いわばプロであるフミ子にとっても光江の美しい肉体は、金を出すに充分と思われた。

商談の後、金貸し老人は、フミ子の特別な

イメージギャラリー『二人の関係』志羽利也



サービスを受けた。さすがに、この技術は、素人の光江では役不足なのだろう。しかも老人は、フミ子の根気よいサービスでの極楽往生寸前に光江を招き、その小作りの顔を引き寄せ、かわい口を開けさせたのだ。

フミ子は、全く素晴らしい奴隷がいるものだと思った。

そして、今晚、フミ子は、その自分が買い求めた奴隷のところへ行くのだ、という。

「あなた、一緒に連れて行ってあげようか」

私にとって、これは願ってもない幸せだ。

「勿論、タダじゃ、駄目よ。金貸しに五万円払わされるんだから。そうね、あんた、今日

幾ら、持ってる？」

私は幸い、四万数千円の金を持っていた。

「そう、じゃ三万円、出してよ。それで二人で責めてみない？」

私は、フミ子の奴、どうせ金貸しには、うまく払わずに済ますのじゃないか、とも思っていたが、今はそんなケチなことを考えていては折角のチャンスを逃がすだけだ。

「オーケー。前渡し、しとこう」

かくて、哀れな女奴隷は、知らぬ間に、フミ子から私へ、転売されたような結果になった。

「じゃ、急ぎましょうよ」

私たちは、店を出て車を拾った。こうなれば寸秒も惜しい。

— 三 —

光江の住いは、都心に近いマンションの一室だった。どうせ、例の金貸しの持家なのだろう。

ドアを開いた彼女は、怪訝な顔をした。フミ子の来訪は予期していたが、思わぬ同行者があったからだ。しかし美しかった。フミ子の話に誇張はなかった。私も、これなら、と思った。全く安い買物だ。

遠慮なく上りこんだフミ子は、
「わかってるでしょう。今晚は、おじいちゃんから私が譲ってもらったのよ。それでね、丁度この人に会ったのよ。この人も同じような趣味なの。あんたを、いじめる権利、半分譲っちゃった」

「でも、そんなこと聞いては……」

「あんたが、とやかく言うことはないのよ。あんたは、おじいちゃんの奴隷でしょ。それで私が買って、半分また売っただけよ」

フミ子は高飛車だった。哀れな女性は、大して反抗しようとはしなかった。奴隷教育が行き届いているのか。

そう安物でもない応接セットがあった。私は、ソファに腰をおろし、女二人のやりとりを黙って聞いていた。

勝ち誇ったような顔を私に向けて、フミ子が言った。

「さて、どうしようか」

「そうだな、まずは君にまかせるよ。俺は見物していよう」

「そうね、私が先順位だものね」

光江は、身の置きどころがないような恰好で、ダイニングキッチンらしい一室と、私たちのいる洋間の境に、たたずんでいた。

「じゃ、始めようか。ここには、責め道具まで用意してある、とおじいちゃんが言っていたけど、どこにあるのよ」

光江は仕方なく、奥の和室の方へ行った。

フミ子もついて行って、二人共、何をしているのか、しばらく出て来ない。ただ、フミ子の笑い声や「馬鹿ね」とか「言うとおりのよ」とか、の声と、光江の小声でボソボソ言っているのが耳に入り、私は、何だ、もう始めてしまったのかとは思ったが、覗きにゆきたい衝動を抑えて待ってみた。

やがてフミ子は、光江を伴って現われた。

半ば予期し、期待もしていたが、光江の姿は私の目を見張らせるに十分だった。光江は、先程まで着ていた青い花模様のワンピースを脱がされ、下着さえ身にまとうことを許されず、その美しい白い肌を私の眼前にさらしていた。腰には、僅かな部分を覆うバタフライ

が着けられていたが、おそらくストリップパー用のものか何かで、赤い布地に金色の糸がハート型に縫いこめられた華美なものである。で、淑女風な光江にとっては一層みじめな感じを与えていた。そのうえ、両腕は後にまわされて手錠がはめられ、手錠についた鎖の一端を、フミ子が握っていた。バタフライも、

手錠も、この部屋に用意された小道具なのだろう。

「どう、この恰好。この人、きれいな肌してるでしょう。こんなバタフライなど、はかさないで丸裸でつれてこようと思ったんだけど何かはかしてくれて頼むしさ、あんたも始めから何もかも見ちゃうより、楽しみがあった方がよいと思ったのよ。どうかしら」

全く結構だ。私は、女を責めるには全裸に限る。パンティや下着一枚にしても邪魔だと思っているが、何も最初からそうすることも無い。私は俯向いて立っている光江に近寄り首に手をかけて上を向かせてみたり、肩や背中を、ぴしゃぴしゃ叩いたり、こんもりとよい形の乳房をつかんでみたりした。

「あんた、ダンスできる？ ゴーゴーなんか踊れる？」とフミ子。

「はい、少しなら。下手ですけど……」と光江。この女は、もはや、フミ子に従う哀れな女奴隷と化しているのか。

「じゃあ、踊ってみな。ステレオもあるし、レコードは？」

フミ子のかけたゴーゴーリズムに合わせて裸身の女は身をくねらせだした。手を自由にしてくれ、と言ったのだがフミ子が許す筈もな

く、後手錠のままのゴーゴーは珍妙な恰好になった。

フミ子も、これはなかなか巧みな踊りぶりを見せ、時折り光江の尻を、ぴしゃりと叩いたり、胸を突いたりして、はしゃいでいた。「小道具が沢山あるわ。見ていらっしやい」と踊りながら私に言う。

奥の和室へ入ってみると、先程、光江が出したものの、押入れから茶箱のようなものが出してあり、その中であつたものか、種々雑多な品物が散乱していた。ロープもある。鎖もある。医療器具に似たハサミ状のものがあつた。パイプレーターが二本。適当な大きさのコケシが三個。皮鞭が四本。ローソクが数本。特殊なパンティもある。その他、私にさえ何に使うのか判らぬようなものもある。いずれも、この部屋で哀れな奴隷の涙と汗を吸ったものには違いない。

私は、それらの中から、犬の首輪や鎖などを持ち出して、まだ踊らされている光江をとらえると、その細い首に首輪を装着してやった。首を挙げて、私の為すがままになっていくのも哀れだ、更に、首輪に鎖を通して、後手錠にもからませたうえ、股間を通して、体の前面から、また首輪へつなげる。鎖を短か

めにして、腰を曲げなければ、きつく締まる程度にした。尻を、一つ、ひっぱたいて、また踊らせる。

フミ子は踊り疲れたのか、ソファに体を投げ出している。

「どう、それ脱がしちゃおうか」と光江のバタフライを指差す。

「そうだな、一寸、似合わんからな。奴隷は丸裸がいい」と私。

四

フミ子の手で一切を奪われた光江は、股間を通して首輪につながれている鎖に、顔を伏せて立ちすくんだ。勿論、後手錠のままなので、手で覆うことすら許されず、私の執拗な視線に耐えなければならぬ。フミ子が、卑猥な表現で、あれこれ批評した。

「のどが、かわいたわ。ここにはビールか何かないの？」

全く、私もビールでも欲しい。

「あります。持って来ましょうか」と奴隷が言う。ただ立たされて、私たちの言葉と目で責められているのには耐えられなくなったのだらう。

「手錠だけ、はずしてあげる。サービスしな

さい」

フミ子に後手の拘束だけ解いてもらい、光江はキッチンの方へ行った。首から鎖を、ぶらさげたままの姿で。

殊勝な女奴隷は、ビールにチーズなどのつまみを添えて持ってきてくれた。裸身のホステスにサービスさせながら、私たちの酒宴が始まる。立たせておくこともないので、床に正座させる。私たちはソファに、ふんぞりかえっているが……。

フミ子は光江の体のあちこちに触れたり、叩いてみたりしながら、相変らず、からかい半分の批評をやめなかった。その挙句、「ねえ、こういう女に、鼻輪をつけてみたらどうかしらね。私、見たことはないけどさ。自分の女房に鼻輪つけたとかいう話、お客から聞いたことあるわ。始めはね、針を火であぶって細い穴をあけるんだって。それから、だんだん広げていくのよ。この女だったら、純金の鼻輪でも、つけてあげるか。それに鎖をつないでさ。四つん這いにして引っ張りまわすのよ。どう、面白くない？」

面白いには違いないが、他人の女に、そこまでやるのは、どうかと思う。フミ子も本気ではあるまい。

「どうかな、光江。やってあげましょうか。今晚だって、糸か、細い紐ぐらいなら通せるようにできるかも知れない。おじいちゃんに叱られちゃうかな。案外、喜ぶかもしれないわよ。どう、光江？」

「そんな……恐ろしいこと、いやです。こわいわ、いくら何でも……」

と、光江は本当に恐ろしそうだった。フミ子がプロ的な女性だけに、何をされるか判らないと思うのだろう。蒼ざめている。

「まあ、今日のところは勘弁しといてあげるか。でもね、私たちの言うこと、一つでも従わなかったら、今晚中にそのかわいい鼻に穴あけるわよ。いいわね、言うこときくわね」これは、よい脅迫だった。奴隷は力なく、うなずいた。私たちは、このあと、この美しい女奴隷を、この脅迫を用いながら、思うまま意に従わせることができた。

私は、光江にもグラスを渡して、飲ませてやった。割合と、よく飲んだ。やはり屈辱に耐えるために酔ってしまいたいのだろう。やがて、白い肌が首筋のあたりから桜色に染まってくる。

「この女、光江か。もっと奴隷らしい名で呼びたいわ。あんた、良い名前、ない？」

とフミ子が、いう。

「そうだな、犬みたいに、シロとか……。チンは、どうだ」

「チンは、おかしいよ。ウフフ……。マンの方がいいよ。ハハハ……」

「ちと、かわいそうだな」

「そうかな。じゃあ、これ、少し、ふとってからさ、ブタにしよう。ブーだ」

私は、少々光江が哀れになった。そう肥っているわけではない。同性の劣等感から、フミ子は、そんなことを言っているのか。

「さあ、ブー。運動しなさい。四つん這いになって。あ、ダメ。膝を立てて。お尻、高く上げて。そうそう。さあそのまま歩くのよ。ぐずぐずしないで。そうやって、ぐるぐる廻りなさい」

豚扱いにまでされた光江は、フミ子の命ずるまま、部屋の中をまわり出した。尻を割るようにして垂れている鎖が、いかにもこの美しい女が家畜化されたことを物語っているようだ。

「いつも、どんな風にして責められているんだ？」と私が聞く。

「そのまま、歩きながら話すの」とフミ子。「鞭打ちは？」

「あんまり、されません。お年寄りで、疲れからって」

「縛られるか？」

「ええ……」

「どんな縛りだね」

「後手にされたり、アグラかかされて」

「海老責めみたいのか」

「ええ……」

「股間縛りという奴は？」

「……されませう」

「浣腸は、どうだ？」

「されました」

「イチジクか？」

「ええ」

「何本ぐらい、入る？」

「三本ぐらいかしら。よく判らないわ」

「排泄は、どうするんだ」

「……」

「見ている前でやるのか」

「……はい」

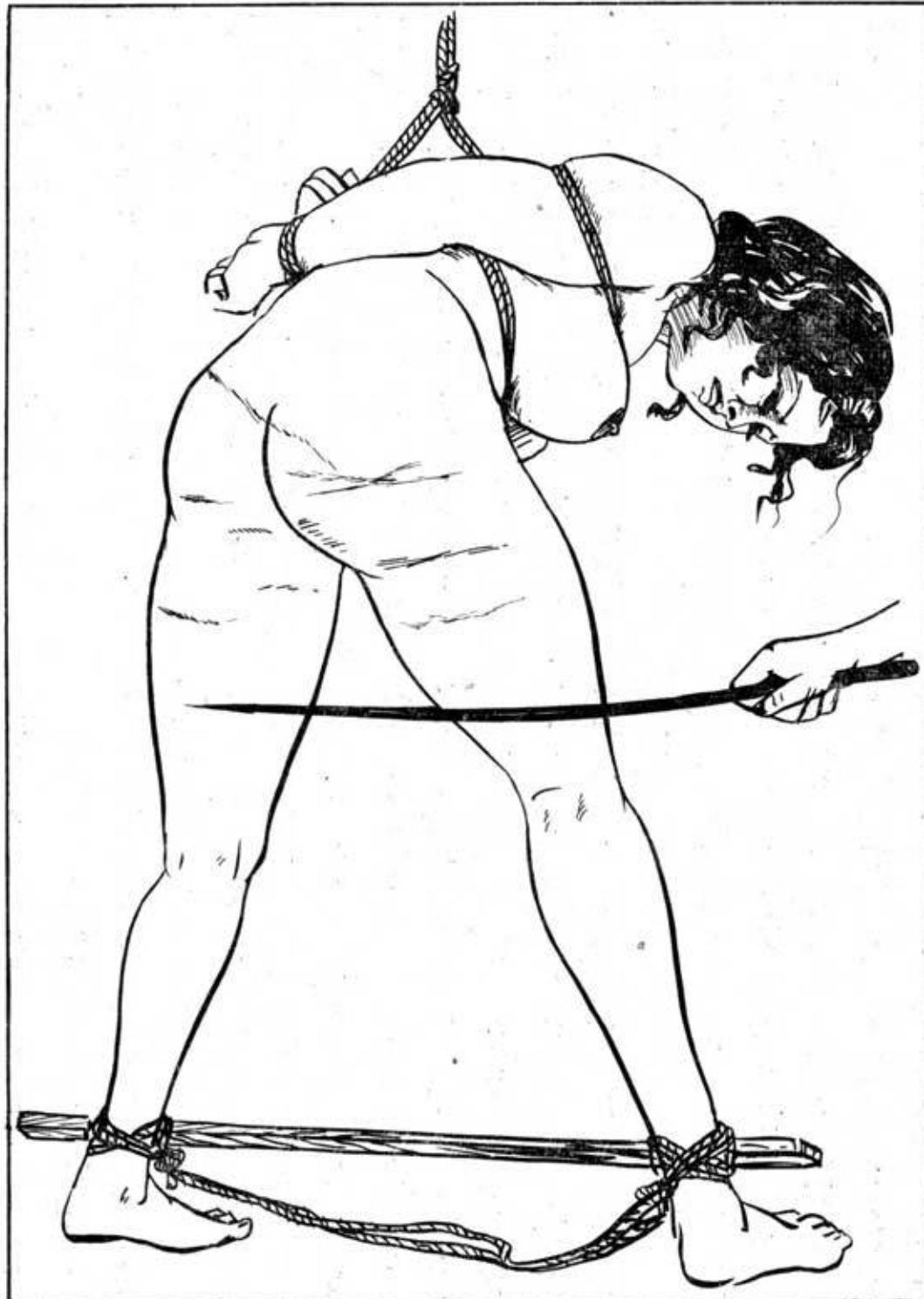
「いじめられるの好きか」

「私、判らない。辛いわ。悲しいわ。でも、何だか仕方がないっていう気がするんです」

光江は涙を、ためている。今にも泣き伏しそうである。だが「何だか、仕方がない」と

いう気持は、すでに彼女がマゾ化されている証左ではあるまいか。
 フミ子が、意地の悪い命令を出す。
 「そのまま、玄関まで這って行ってね。私の靴、くわえていらっしゃい」

光江は、高々と挙げた尻を、こちらに向けそれを振り立てるような恥辱の姿で、這ってゆき、フミ子の汚れた靴の片方をくわえてきた。涙とアルコールのせい、目が充血している。



イメージギャラリー

『刻みこむ愛条』

須坂 旭

「はい、もう片方も持って来なさい。そう、よごれてるでしょう。磨かないからね。きれいにして頂戴。ブーの舌でさ。ほら、厭がらないで、なめるのよ。しっかり」

そんなことを言いながら、フミ子は靴の片方をなめさせ、もう一方は光江の背中にのせて、靴裏の汚れを、こすりつけている。

「あんまりきれいにならないわね。いやいやするからよ。お前、奴隷でしょ。違った、ブタでしょ。ご主人の靴みがきも厭なの？」

「……」

「身の程、知らずめ。じゃあ、そこへ行ってこっち向いて。ブーって泣け」

「……」

「泣けないの？ ようし、鼻に穴あけるぞ」
 その泣き声は悲しげであった。おそらく、鞭で打たれ苦痛を与えられるよりも、自ら声を出して畜生に堕ちた自分を認めなければならぬ方が苦しかろう。フミ子は声を立てて笑った。光江にとって汚辱の時は、なお続く。

五

私は、光江の首輪と鎖をはずしてやった。いっそ何もつけていない姿の方が、被虐の姿として美しいとも思えた。膝をつくことは許

したが、四つん這いの恰好は崩させない。

「ブーよ。ブーブー、口で泣くのは、もういいよ。今度はね、ほかで泣いてごらん」

「……」

「わからないのか。その体から音を出すんだよ。やってみろよ」

「面白いわね。いくらきれいな顔してたって出るときは、あるんでしょ。芋でも食べなきゃだめ？」

これは、生理現象で、出したくても出るものではあるまい。光江の体は汗ばんでいる。敢えて音を発しようと努力しているのか、ただ屈辱に耐えているだけなのか、いずれにせよ、マゾとは言っても人間だ。こんな恥かしめは辛かろう。

「どうしたの、まだ出ないの。無理すると、音だけじゃ済まないかな。いいよ、洩らしちゃっても。あと始末は、どうせお前がやるんだから」

フミ子は、顔を歪めている光江の傍らに立ち、片手で、その尻を拡げさせてみながら、笑っている。

「少し、刺戟してやるか」

フミ子のプロ女性らしい素早さで、その指が光江の狭き門を襲う。恥辱のメス豚は、顔

をのけぞらせて、うめき声をあげた。

「何よ、指一本くらい。冗談じゃないよ」

私は、フミ子に協力するつもりで、二本のバイブレーターを持ってきてやった。コケシ状のものである。フミ子は、その一本を光江の羞恥の個所に装着した。

「どう？ いつも使ってるんでしょ。こっちは平気の筈ね。さて、後の方はどうかな」

これは、さすがにむずかしかった。メス豚は床に顔を伏せて、この暴行に耐えようとし、フミ子は懸命に二本目のバイブレーターを取り付けようとしていた。私もクリームを探してきたりしてフミ子を助けた。が、どうも困難のようであった。光江は、声を上げて泣いていた。

「ダメのようね。もう一寸、細いといいのね。でも、人によるのよ。これ位なら平気の人、ザラにいるわ。私、男の人に試したことあるのよ。おい、ブー、お前、ダメじゃないか。もう少し拡げておきなさい。奴隷だったらね、自分で自分の体、改造しなさいよ。ホモの男だってやってることよ。毎日毎日、ビール瓶か何かで練習することよ」

光江は、一本のバイブレーターで責められながら、フミ子の叱声を聞いていた。

「どうだ？」

「……」光江は、答えようもないらしい。

「お尻が……痛くて」

なる程、さんざん痛められた方が気になっ
てはバイブレターの作動も効果がない。

「少し、休ませて下さない。痛いし、すみません、トイレに行かせて」

私も、二、三度トイレへ行っている。ブーさんとて、ビールを飲んでいいるから、尿意を催しても不思議はない。しかし、そう簡単にトイレを使わせてやる必要もない。バイブ責めから解放してやりながら、

「ブタがトイレ使うのかね。人間様並みに」
「許して……。さっきから、我慢してたんです」

「駄目だね。音は出さないし、尻は拡がらないし、何かもう少し芸でもみせないかね」

「あとに……あとにして下さない……」

「じゃあ、簡単なことだけにさせてやろう。そのビールの空瓶を片づけな」

ビールが、もう四、五本、空になって瓶が林立しているのを指差して、そういうと、光江は、たちまち、それに手を出した。その片付けさえすれば許してもらえと思ったのだらう。

「馬鹿ね、手をつかっちゃダメよ」とフミ子が、私の意のあるところを察して言う。

光江は一瞬ためらったが、すぐ一本の瓶をくわえようとした。

「そうか、口があったか。その口も使っちゃダメ」

もはや、光江にも私たちの要求が判ったようだ。当惑した顔を私に向けて、言葉もなくその目が哀願している。

「別のを使うんだよ、出来る筈だ。重いから

運ぶのは骨が折れるがね」

床に、ただ立っているだけのビール瓶が、この可哀想な女に対して、恰好の責め道具となった。腰をおとし、私たちの注視を浴びながら、自分から、その空瓶に接しなければならぬ。しかし、これを持ち上げることは不可能だ。すぐ落ちてしまう。何度となく膝をつき、試みなければならぬ。もはや彼女はただビール瓶を持ち上げるだけの道具と化している如くだ。やっと太腿を合せて、瓶の落

下を防ぐ。そのまま立つこともできず、四つん這いで、少しずつ、少しずつ、手と膝で這い進んで行く。

一本を何とか運ぶのに、ずい分、時間がかった。

「許して下さい。もうクタクタなんです。お願い、トイレへ……我慢できないんです」

光江の美しい顔が醜く歪んでいる。もう限界だろう。

「フミ子、やらせてやれ。洩らされても困るよ」

「そうね。でも、ブタにトイレは要らないわよ」

フミ子がポリバケツを持ってくる。

「ほら、ブー、立って。ブタは何も恥かしいことないでしょ。ここでやるのよ。立って立って」

「許して、そんな……」

「ダメよ。お前は、ろくに私たちの命令どおり出来ないんだからね。この位やって見せなぐちゃ。そう、そう。バカね、足を、すばめてちゃ仕様がなでしょ。拡げて。手は上げて。そう、バンザイして。バケツは、この辺かな。さあ、やって頂戴、ご遠慮なく」

光江は、フミ子に小突かれつつ、そのあさ

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

ましい立ち姿を晒したものの、さすがに、バケツを使うことは出来ずに、立ち竦んでしまった。

「どうしたの、我慢できないなんて、嘘ね。」

じゃあ、早いとこ、その瓶、片づけてよ。まだ四本あるのよ」

「おい、やってしまえ。お前は、もう俺たちに何もかも、さらけ出したんだ。今更、恥かしがることはないだろう。さっぱりしてしまえよ、さあ」

そんな事を言って、私に下腹を叩かれたのが、彼女の忍耐の限界だった。それは、細いが烈しい滝の如くであった。

六

その晩、私たちは、この「ブー」と呼ばれる被虐の美女を、徹底的に責めることができた。その女も何度か昏倒しそうになったり、泣き崩れたりしたものの、全く、よく責めに耐えた。私も当初は、その女が哀れにも見えしたが、自らの責めに酔ったのか「ブー」という呼称さえ適切な一個の肉塊にすぎないようにさえ思われてきた。けれども、その女が最後まで羞恥心を忘れないでいたようなのは、私にとっても救いであった。もっとも、それ

が一層、私を刺戟して別の責めを誘発したのだが……。

私自身、いっばしのサディストを気取っていても、これ程、強烈な責めを、しかも集中的に試みたことは始めてであった。

鞭もふるった。女の尻には縞状の鞭痕がつけられた。

浣腸もした。女は、屈辱の涙にむせびながら、私の眼前に、その汚れた姿を展開した。

彼女の自らの手で、羞恥を展覧させることなども強要した。体を小刻みにふるわせながら、女は、私の好奇な視線と、同性であるフミ子の哄笑の的として供さなければならなかった。

夜明けも近くなって、私は疲労の極に達した。女も、立っていられない程、疲れ果て、崩れるように倒れていた。フミ子は、ソファにもたれて、ぐったりしている。

三人三様に、いくらか眠ったようであったが、私は、この女が欲しくなった。何とか、金を工面してでも、金貸し老人から買受けることはできないか、とも思った。

しかし、それも色々、むづかしだろう。とにかく、一夜明ければ、私たちは去らねばなるまい。

私たちは、帰り際になって、いくらか元気を、とり戻した。フミ子は、なかなかエネルギーギッシュである。

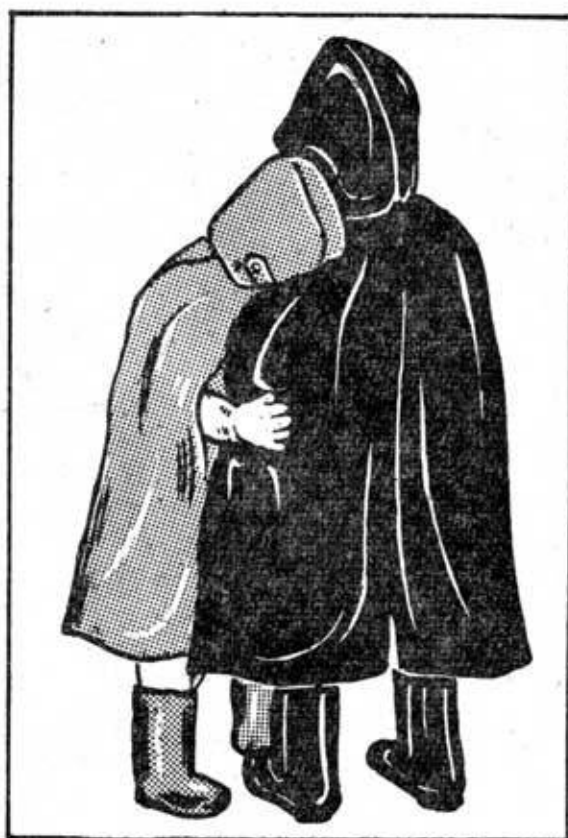
光江は、私たちの最後の責めを甘受するため、陽の差し込む窓を背に立たされた。フミ子は、何処からかマジックインキを持ってくると、直立している女の白い下腹部に、結構巧みな絵を描いた。それは、卑猥を代表しているものの図であった。

「ねえ、あんた、私の風呂まで一度いらっしやいよ。それまで、この絵を消しちゃ駄目。わかった？」

女は力なく、うなずいた。この卑猥な図柄を体に描かれたまま、この女は外出もしなければならぬのか。

フミ子は、なおも、マジックで何か描こうとした。私が制止した。これ以上、美しい肌を汚させることもあるまい。私はフミ子の手からマジックを奪い取ると、女の胸元に、小さく、

「婢」と書いた。それは私の好きな文字であった。そして、それは被虐の人への、サディストとしてのプレゼントであった。



私は、すべてを失い、友もなく、悩みや苦しみを打ち開ける知人さえもなく、淋しい毎日の繰り返しでした。

それでも自分一人で楽しむことの出来る私は、その楽しみのすべてであるゴムマントを求めて町を、さまよい歩きました。

あちこちの雨具屋、テント屋と、おそらく日本中をゴムマントを求めて、探し歩いたといえるほど、それこそ必死の思いで探し求めたのでした。

しかし、時代がすっかり変わってしまった今日となつては、ゴムマントはおろか、ゴム製の合羽さえ、手に入れることは困難になっていました。

—私の履歴書— ゴムマントへの憧れ —

『ゴムマント』に希望を求めて

鶴 崎 好 夫

(カットも)

ある店では「そんなもの今時、着るのですか?」と奇異な目で見られ、また、ある店では「そんなもの、ありませんよ」と、けんもほろろに断われました。それでも、万一、昔のものが残っていないかと、どんな小さな雨具屋へも入ってみました。無駄な苦労でした。私は失望し、つくづく、この世が嫌になりました。

そして私は、ゴムマントをさがし求めて、どうしても手に入らぬ理由を考えた結果、一、今となつては、どんなに私が望んでもゴムマントは手に入らないこと。

二、どんなに高価になつてもよいから特別注文で作ってほしいと依頼しても、人手不足と

いう理由などで作ってもらえないこと。

三、これだけ色々の物質が、ありあまる時代になつているので、ある程度の量がまとまれば、特別注文で黒、赤、黄など、望み通りのゴム引きシートが製作可能なこと。

四、従つて、一着ではどうしても作ってくれぬ業者でも、三十着、四十着と大量の注文ならば、黒つやのマント(黒いゴムマントを業者が、そう呼んでいることも知りました)でも、どんな型の合羽でも作ってもらえることということが分りました。

しかし、共に話し合える友とてない私にとつては、どうにも手のほどしようがないといった状況でした。

私は時代の進歩をうらみました。ビニールが発見され、カラーテレビが発達し、町には自動車のほんらんする便利な時代になったのを私は恨めしくさえ思えて来ました。

時代の進歩、それが私に何を与えてくれたのでしょうか。それはゴムマントが、世の中が変ったために手に入らないという失望だけでした。

私にとってビニールとかゴムシートなどは全然、別のものであって、ビニールがゴムに変わることは絶対にできないのです。食料が充分でなくても、町行く女性が皆、ゴム引きレインコートを着ていた時代。そしてゴムマントが容易に手に入り、大勢の人がゴムマントを着ていた時代。そんな世の中に、再びなることを私は望んでいます。

中学生の頃だったと思います。雪の降る日手足のこごえるのも忘れて、ゴムマントを着て自転車を走らす人々、そして雪の日には特に多いゴムマントを着て歩いている人たちを町角でぼんやりながめながら「ゴムマントが欲しい」と思い、自分も大人になったらあの人々と同じようにゴムマントを買って着て歩けるのだと思い、早く大人になりたいと願ったこともありました。しかし、その大人にな

った現在は……あまりにも無情に世の中が変ってしまいました。私は昔の思い出に、青春時代のたのしかった思い出にふけるようになりました。

私に初めてゴムマントの喜びを教えてください、あの隣のおばさん。あのおばさんも考えてみると、おばさん自身はゴムマントの愛好者ではなかったのかもしれませんが。素直でやさしいおばさんは、ゴムマントの愛好者である御主人の求めるままに、いつもゴムマントを着せられて愛のちぎりを交していたのでしよう。そんな素直なやさしいおばさんは、入院している御主人の不在がさみしくて、そしてゴムマントを着て長靴をはくことによって御主人に愛されている自分を思い出していたのだと思いました。そして、防空壕の中で、私にゴムマントプレーの悩ましさを目の当たりに見せ、愛の美しさを教えてくれた、あのカップル。やさしい女子工員も大学生の望むままゴムマントを着て体を許していました。また、田舎者で気のきかぬところはあっても、ほんとうに素直で疑うことを知らぬ私の死んで行ってしまった恋人。私が、どんな無理なことを要求しても不満な顔一つ見せず、私の言うことは、すべて従ってくれた、ほん

とうに従順な彼女。その彼女との一年足らずの身も心も燃えつき、とろけてしまうような数々のゴムマントプレーでした。

その彼女もいない現在、ゴムマントを愛好する男性の求めに応じ、それに従ってくれるような、やさしい思いやりのある素直な女性を再び見出すことができないと思うと、さみしい悲しい、やりきれぬ毎日を過し、そしてやがて中年を迎えようとしている私でした。

そんなある日、時間つぶしのために入った本屋で本誌を手にしてページをめくっている時、私は電気に打たれたような驚きと同時に体がふるえ出すのを感じました。そこには、私自身ではないかと思われるような黒いゴムマントを着た人の写真が載っていました。私は、ふるえる手でその本を買い求め、夢中で何度も何度も読み返しました。「私と同じようなゴムマントをほんとうに愛好している人がいる」そう思っただけで、私はじっとしていられない気持でした。

本誌のバックナンバーを求めつけ、少しでもゴムマントに関する記事が出ているものは買い求めて繰り返し繰り返し、読みふけりました。そして私の人生に再び朝がめぐってきたような、ほのぼのとした希望を感じるこ

イメー
ギャラリ
「ある日の午後」原 由貴子



とが出来ました。

以前にも私は本誌を手にしたことがあったかもしれませんが。しかしノーマルな人から比較すると、多少その気はあっても、それほどはげしいサドでもマゾでもない私は、女性のいじめられていた姿を見ても、それほど深い関心がなかったのだ、本誌をすみからすみまで目を通すこともなく、私と同じ性癖のゴムマント愛好者がいることも知らずに過して来たことを残念に思えてなりません。

ゴムマントプレーにあこがれ、ゴムマントを求めつづけていた私は「のぞき」という所に何度も足を向けたこともありました。

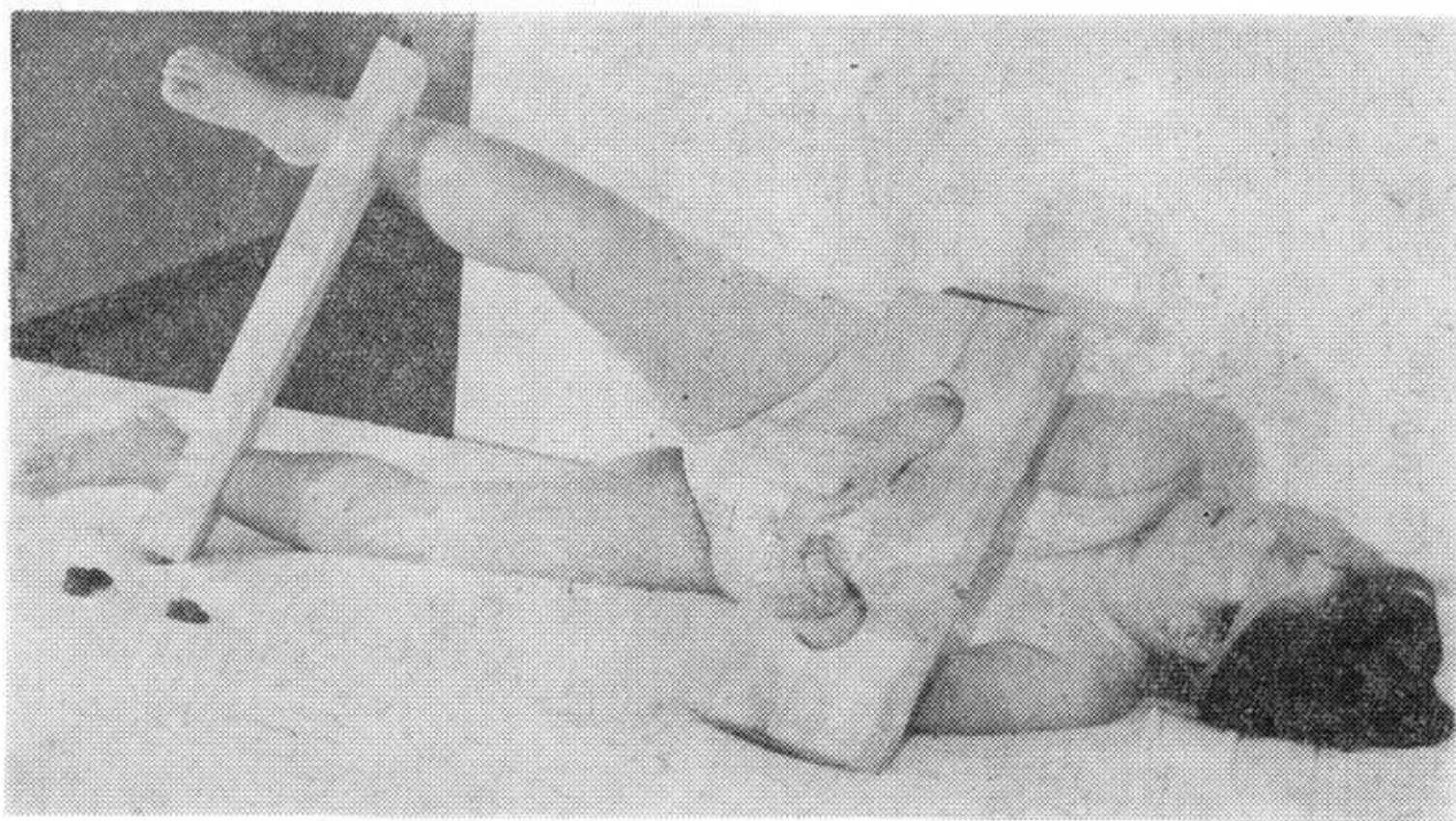
もしかして私と同じようなゴムマントマニアがいてゴムマントプレーが見られるかもしれない？ そんな

かすかな悲しい望みが私をそうさせたのだと思います。しかし、そこには、私の望んでいないゴムマントプレーは見ることが出来ず失望した私でしたが、今、本誌を手にして、そのような所へゴムマントプレーを求めていたのが無駄なことがわかりました。そして、ゴムマント愛好の同志のいることを知りました。中にはゴム合羽の代用にビニールの合羽を使用している人がいることも知りました。その人も私と同様に、ゴム合羽をどんなに手に入れたいと望んでいるだろうと、胸が痛くなる思いでした。

「全員集合」私はゴム合羽愛好の皆様、そう呼びかけたい気持ちで一ぱいです。そして皆様心が一つにして手をたずさえれば、私も望み、皆様の中にも望んでおられるでしょう。ゴムマントもゴム合羽もゴム引レインコートも手に入れることが出来ると思います。

ゴム合羽の上からゴムマントを着て長靴をはき、雨の中を歩きまわる、あのしびれるような、おののきにも似た快感は、ゴム衣愛好の皆様以外には理解いただけないと思っています。

どうかゴム衣愛好の皆様的心からなる御指導を切にお願い申し上げます。



△S & Mの考察▽

塚本鉄三論

点描

——SMルポライターの第一人者としての塚本鉄三氏
をカメラ・ルポに登場したM女性の面から、気まぐれな
一読者として、ザックバランに考察してみる——

前 河 恵 一 郎

三月号のカメラ・ルポを読んで、私は

この△塚本鉄三論点描▽を始めて書いた
ときの感激を再び味わうことが出来た。

△SMについて、ほんの駆けだしに過ぎ
ない私が、臆面もなく、こんな文章を書
くようになった動機と言えば、奇ク十二
月号で塚本氏のカメラ・ルポ『畜化願望
の女』を読んで感激したからに外ならな
い▽と書いたが、ここで私は、それを再

確認して憚らない。

今回、三月号を手にしてカメラ・ルポ『牝
獣と牡獣の対決』を読み、畜化願望の女、苗
木陽子が塚本氏に責めまくられ、激しく火花
を散らすSMプレイの模様を見るにつけ、S
M文学の頂点を観る思いがした。

今までにも、奇ク誌上には、辻村氏や山本
氏のハントやルポが載ったことがあるが、そ
れらと比較しても、塚本鉄三氏の文章は、描

写力が優れているというのか、表現力が卓越しているというのか、読む人に与える迫力の点で抜群に強力なのだ。

読んでいるうちに、知らず知らずの間に、全身で、そのムードの中に没入させられ、引きずり込まれてしまう圧倒的な臨場感が、羨ましいという気持ちを起させる暇もなく、私達を完全に魅了してしまうのだ。

その文章の不思議な妖しいまでの魅力。これこそ、SMそのものであるのか。それとも芸術の世界にまで高められたカメラとペンの魔術で、私達を美の世界に彷徨させてくれるのか。いや全く、なんとも、その汲めども尽きせぬ滋味溢れる味わいには、すっかり敬服させられてしまう。

二月号の奇クサロンで、藤川冬一郎氏が書かれた『白豚に憧れたボク』の中で、有名作家の匿名の執筆ではないのかと、塚本氏の文章の巧みに感心していたが、私は彼がSMの分野ではなく、他の文学のジャンルで活躍されたら、きっとかなりの作家として著名になられたらうにと、惜しくさえ思うのだ。

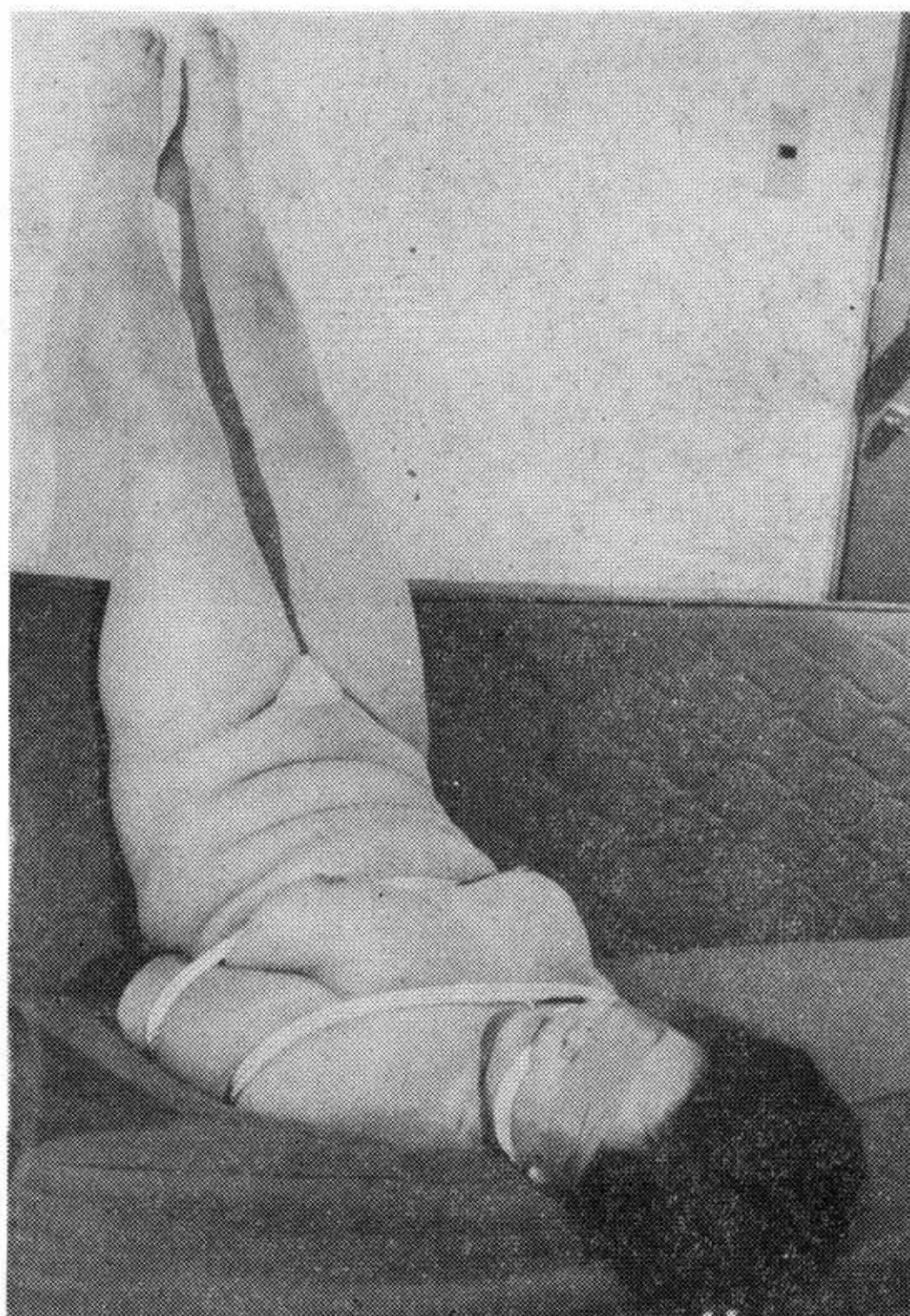
とは言っても、氏こそ、私達にとっては、灯台の灯のようなものだ。SMの世界で活躍してほしいものだ。また、奇クにとっても貴

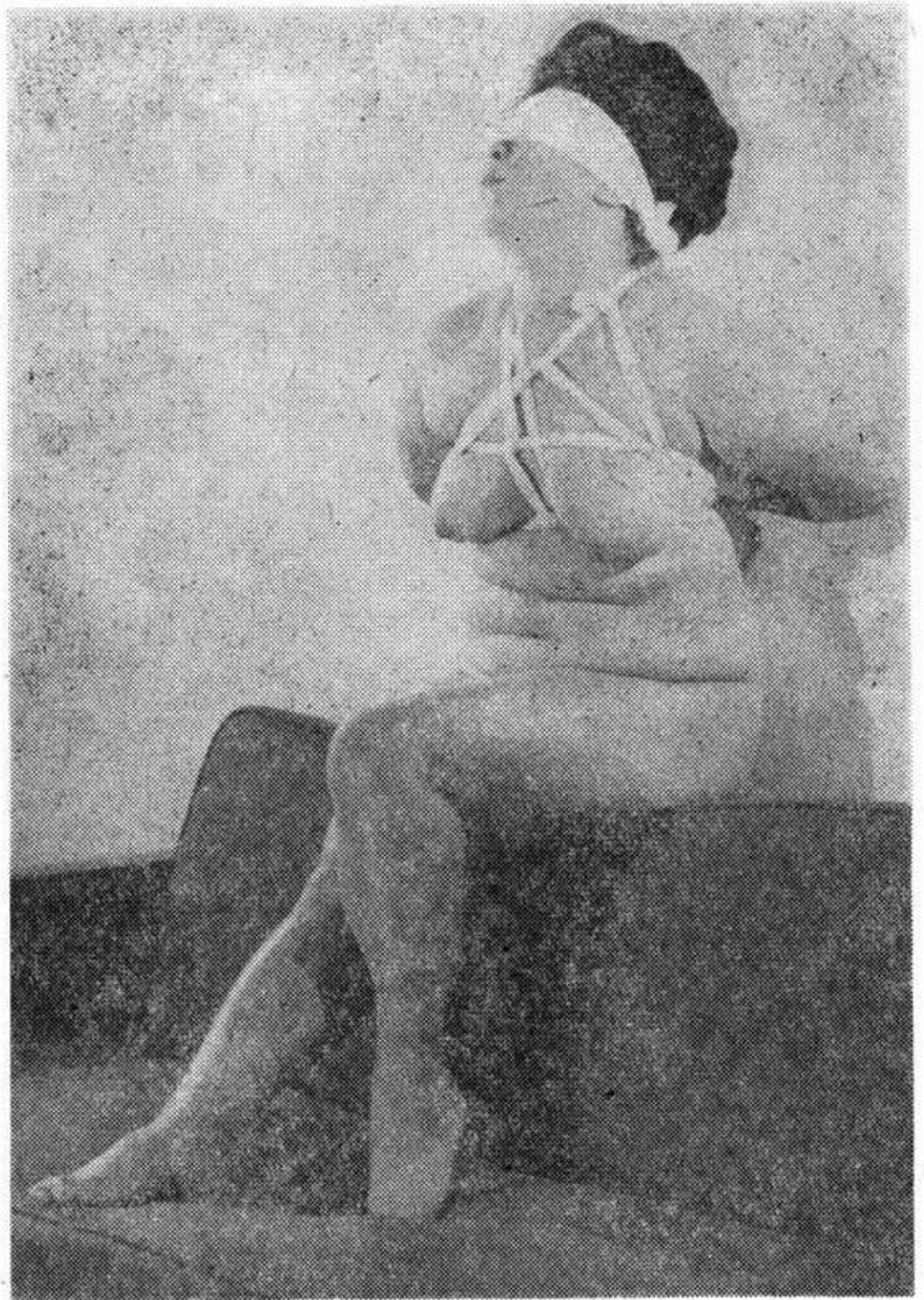
重な存在である。恐らく、奇ク愛読の多くの方々も、必ず同じ感想を抱いておられることだと、私は思う。

塚本氏の文章が他の人達と比較して、隔段に迫力があるのは、やはり空想とか、想像に頼ることなく、すべて肉迫的に体験をもとにしているせいであろう。文章構成の巧みさも

さることながら、毎号、毎号、その都度、新しいSM体験を基礎に、常に努力しているところに、貴重なSM資料の蒐積がある。

それに、溢れるようなSMに対して注ぐ氏の情熱が、いつの場合でも、相手の女性に真剣勝負を挑んでいるのは、全く素晴らしい。スタミナ不足からくる、投げやりで惰性的な文





章を読まされると、やりきれない気がする。情熱と若さこそ、氏の真情である。塚本氏の実際の年齢は存じないが、きっと、私よりは若い方のように思う。その若さを、これからも誌面に、ぶっつけて欲しいものだ。

次に、私が感心したのは、氏の人柄に負うところが大きいと思うが、銜^{てら}いのない平易な語句

を積み重ね、気負ったところが、少しもないのが極めて好感が持てるのだ。かつての辻村氏の文章には、SM界の大家といった気どったところや、自己顕示的なところが濃厚なため、嫌味があって好きになれなかった。

それに比較して、SMにのみ素直に没頭して他を求めない塚本鉄三氏の新鮮で清潔な態

度は、これからSM界を背負って立つ人の資格が十分であると思われる。

私はカメラ・ルポを読んでいて、いつも思うのだが、氏の文章には、実際にプレイをしていなければ書けない描写が随所にあらわれてくる。それが、また私達にとって魅力でもあり、迫力の源泉ともなるのだ。

先ず三月号のルポで見てみよう。

塚本氏の観察力の鋭さと、対者に対して注ぐ温い同情の念（この場合は、勿論、相手の女性を全力投球で責めることになるのだが）が、あらゆる個処に見られるのだ。

例えば、△彼女の首は、そのとき益々太くなり、息が詰まって、息苦しくなって、咳こんだ。それが更に首を太くさせるのだ。手綱を引く。首が太くなる、太くなる。頸がふくらめばふくらむほど、犬の首輪は締まってゆく。呼吸も困難なばかりに上気した苗木陽子の顔は、赤く変色している。▽（3月号40頁）

を見ても、一見、なんでもない語句の積みかさねのように見えていても、そこに、プレイを体験した者のみの書ける実感が、何気ない文章の端々にも窺えるのだ。

そして、あとでのオシャブリの奉仕の個処に至って、私は、自らが、その場に居合わし

たような錯覚をさえ、覚える始末だった。
 八苗木陽子が前後の見さかしくもなく、むしろ
 ぶりついてきたとき、私は思わず叫んだ。

「そいつは汚いゾ。自分のを舐めるのと一緒
 だゾ」

だが、彼女は、私の言葉など、いささかも
 意に介せず、如何にも美味しくてたまらない
 というように、オシャブリの奉仕を、無我夢
 中で続けるのだった。V（3月号41頁）

塚本氏は、がむしゃらに、一気に責めてい
 るようで、緩・急のタイミングよろしく、適
 当な距離で『間』をおいているのが、まこと
 にベテランらしくて心憎らしい。

神戸の街の百万ドルの夜景を目の下に眺め
 ながらの夕食時の描写は素晴らしく美しい。

ここにも、対者に注ぐ、温か味のある氏の
 SM探求心が、繊細なまでの心づかいとなっ
 て、あらわれているのだ。

氏の深味のある人間性は、SMプレイを、
 単な『性的な遊び』の域から、人生の一つの
 断面としての分野にまで高めている。ニヒル
 で冷たいという評のある中で、私はまた違っ
 た面の氏の良さを感じとっている。

八手首と足首に、がっちり喰い込んだ手枷
 と足枷を、とりはずすとき、私は、あのプレ

イが終って縄を解く際と同じ、憐憫にも似た
 感情を、ふと抱いてしまうのだった。V（3
 月号57頁）

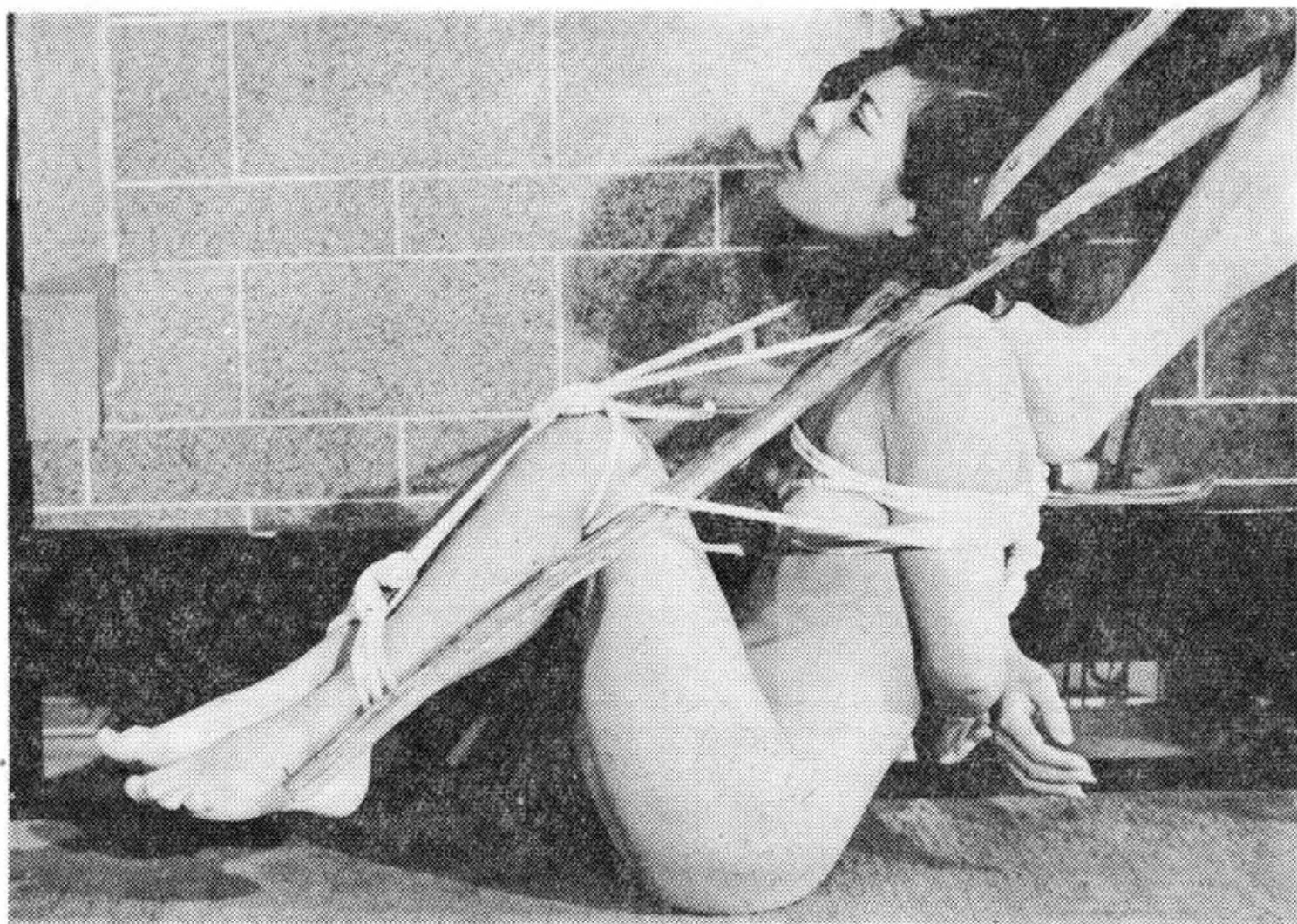
こうした氏の心の隅に兆す一抹の反省こそ
 SMプレイを、益々深味のあるものにしてい
 る。徒らに、女体を気狂いのように責めるだ
 けに終始するのであったら、これは、やくざ

のリンチに外ならない。SMプレイというも
 のは、本質的に、私刑とは異なるものだ。

八鈴木千鶴子の巻V

いつも、ぎりぎりの線にまで大胆に肉迫し
 て描写している塚本氏のカメラ・ルポの文章





は、やはり、新しい対象を得た時に、いきいきとした息吹きを感じることができ

る。
 △東京の踊子緊縛記▽（47年5月号）で初登場した鈴木千鶴子嬢は、彼女が読者通信（47年4月号）に書いた通り、抜群のプロポーションを誇るに足る肢体の持主だった。

それは題字の脇の全裸ですつくと立った彼女の緊縛姿態（5月号194頁）を見ても、よくわかる。踊りで鍛えたという柔軟な肢体はそのあとの左右に大きく開脚した肢（5月号196頁210頁）に如実に感じとれる。

初対面の女性を緊縛し、責めることに、特別な技能と手腕を発揮する塚本氏があるにせよ、東名神五〇〇キロをぶっ飛ばして、遙々

東京からやってきた千鶴子嬢を、すぐさま招じ入れてSMプレイに導入し、かくまで見事な緊縛責め写真を物するとは、全く驚きである。

右足首を上へ吊り気味にし、左足首にも縄を掛けて引こうとする予備の段階（208頁）から、左足を大きく開けさせた一連の作品（209頁）も素晴らしい。如何に踊りで鍛えているとはいえ、この左右の脚のねじれようは、ただごとではないと思う。ここにも、氏のたゆみない研究心とSMに対する情熱の成果を、鈴木千鶴子嬢のフォートの上に見るのである。

この写真を見てみると、どのような羞恥責めが彼女の上に加えられたのか、気になって仕方がない。露出症気味の彼女が、氏の巧妙な誘導とテクニックによって、どのように泣き、呻いたことだろうか。

△暖房の熱気が上部に集まるせいか、この三階のベッドルームは暖かった。私の顔にはいつしか、べっとり汗が、にじんできた。私は着ていた下着を、すべて脱ぎ去ると、やら羞恥責めの小道具を手にして、転がっている鈴木千鶴子に近づいていった。▽

旅の開放感、そしてエトランゼとしての鈴木千鶴子嬢のM性が、塚本氏の練達したテク

ニックによって燃え上ったことは想像にかたくない。

それから五カ月経った47年10月号で、鈴木千鶴子嬢は、塚本氏のペンで、『東京の踊り子浣腸記』として再登場している。

一面識もない若い女性を、逢うなり全裸にして縛り上げ、写真に撮るといふ氏一流の早業は、前回の鈴木嬢とのプレイに於いて遺憾なく発揮されたが、この二回目のルポでは、文字通り、『浣腸』に集約されている。

47年10月号の「東京の踊り子浣腸記」に掲載されている鈴木千鶴子嬢の浣腸フォトのなんと素晴らしいことよ。そして情熱的なM女のなんと優美なことよ。二〇〇CCの硝子製浣腸器の嘴管が、ずぶりとアヌスに挿入されている有様が、適確な角度で把握されている。

右足を伸ばし、左足を直角に曲げた彼女の浣腸されるポーズ（47年5月号133頁）が、たまらない。肘で支えて下を向いた浣腸器の注入を耐えている表情も絶妙である。

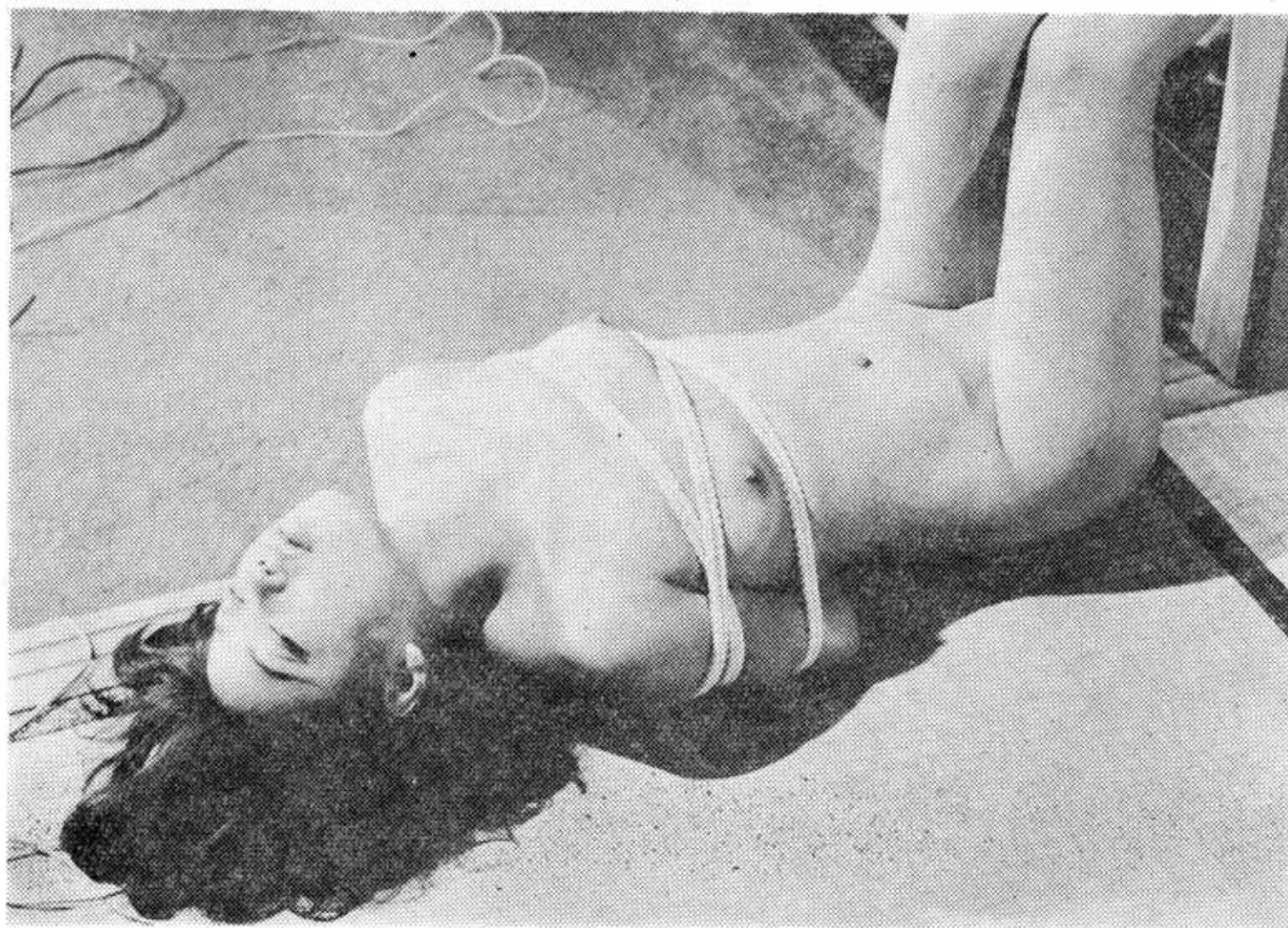
アヌス責めとか、浣腸に強い関心を持っている千鶴子嬢は、M女として、氏の飼育調教によって、どのように進歩してゆくか、私にとっても非常に興味があった。氏による言葉の責めを受けた彼女は、次第に開花した。

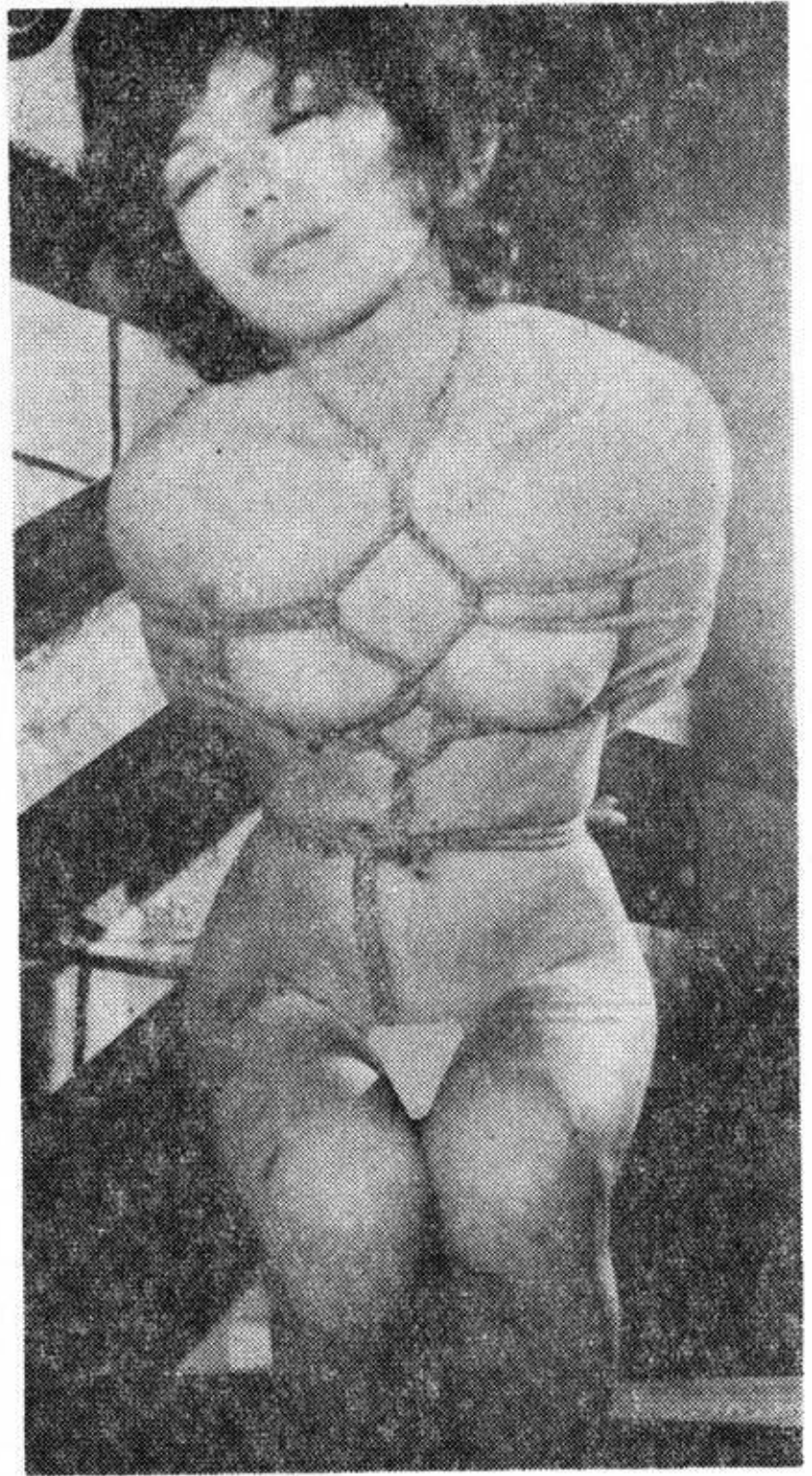
「すっかり諦めきった鈴木千鶴子は、全身の力を抜いて、私に言われたままに尻を高く掲げたポーズをとっている。」（10月号139頁）

多くの読者の方達から好評を博した鈴木千鶴子嬢の浣腸姿態と緊縛姿態が、豊富に絢爛と花を咲かせ、私達の目を楽しました。そうした浣腸の状況を、塚本氏の冷静な観察眼は次のように適確に描写している。

「ゴムの管が、くくくくと、ふるえて、浣腸液は一定のリズムをもって、千鶴子の体内に吸い込まれてゆく。」（10月号144頁）

浣腸マニアにとっては、こたえられない浣腸場面が延々とつづくのだ。いつ果てるともなく、執拗に、粘っこく、浣腸プレイが進行されてゆくのは、氏の独壇場だ。





両足を吊られて長々と伸びた千鶴子の、あのうっとりとした表情は、なんとも美しい。

(五月号146頁、147頁) 浣腸責めの後の羞恥責めを暗示していて、妄想を働かせたくなる。

△椅子へ坐らせて片足の足の裏を持って上へ挙げると、苦もなく頭上まで高々とあがる▽
(10月号150頁) というルポの文章の横に、その時の写真が、ぴったりと載っている。私は

その鈴木千鶴子嬢の写真を眺めて、自分もまた、その場に居る気持になるのだ。

△ふわふわと絹布のような蹠。髪の毛をワシ

づかみにして引き寄せても、責められる悦びに浸りきっている千鶴子は、ただ、うっとりとして、カメラの前にあられない姿態を、正面きって晒しているのであった。▽

この素晴らしい臨場感。私は、身を焼き焦がすようにして、この写真とルポの文章に魅せられるのだった。

北海道へ行くとか言っていた鈴木嬢は、これを最後に交通事故にあわれたそうだが、再び塚本氏の手によって、そのしなやかで優美な肢体を責め抜かれることを願うのは、あな

がち、私ばかりではないだろう。

△松本たえの巻▽

47年の1月号、2月号、7月号の三回にわたって、カメラ・ルポの取材をやった松本たえは、塚本氏の手がけたM女の中でも、異色の部類に属す女性といってよいだろう。

常住座臥、SMに熱中している氏の努力がこの珠玉のような女性を発見したという僥倖に、めぐり合わせたものだろう。

旅先で、かりそめの一夜を共にした女性がかくまで見事にマゾとして開花するということは、やはり塚本氏の並々ならぬSM眼があつてのことと思うが、それにしても、SM教の教祖的な靈感があつてのことか。

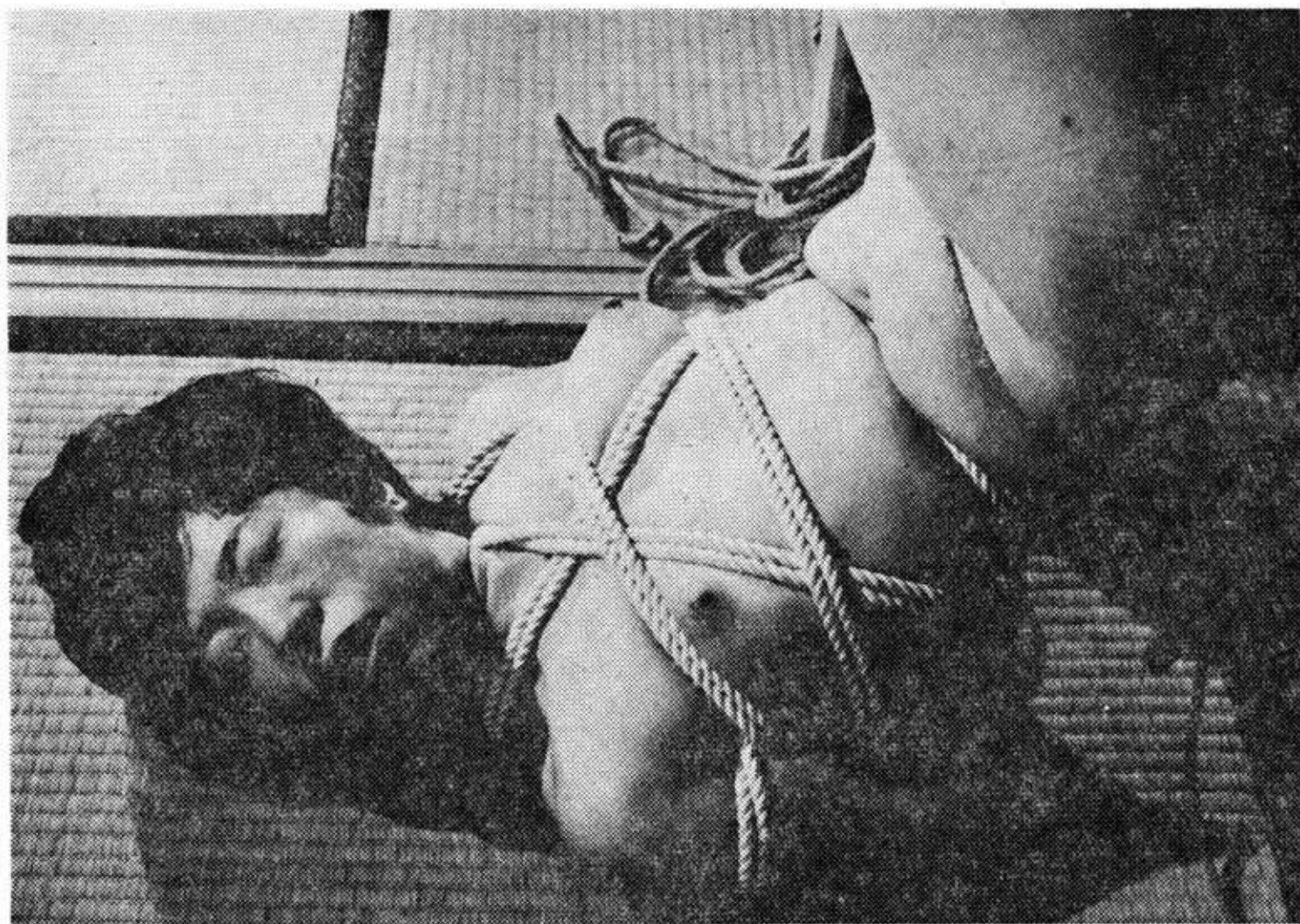
三回にわたって奇クに掲載された『芸者福竜』を主人公にしたカメラ・ルポは、さながら一編のSM小説を読む感があるが、そこに終始、脇役として登場する塚本氏が、血の通った生きた人間くさい人間として、立ち回っているのには実感があつた。

それにしても、私の心をいたく刺戟したのは、芸者福竜が、△縄に恋した女▽として、その虚飾の衣服を、かなぐり捨てた時だ。

柱に、まるで木に蟬がとまったように、縛りつけられたあの緊縛写真（47年2月号37頁38頁）には、この女性の真のM性を見た思いがした。この一枚の写真は、幾百言の説明も色あせる程迫力があつた。それに、塚本氏が狙った真横からの見事なポーズは、まさに間然とするところがない。ここにも、只単に文章が巧みだというだけではなく、責めに対する氏の熱情を見る思いがした。

両手が柱に沿って下を向いて真一文字に縛りつけられ、そして、両足は頭よりも遥かに高く、全身が完全に二つ折りになるように、縛りつけられた、この写真は、まさに圧巻だった。縄に恋した女―芸者福竜を象徴した写真がこれだと言っても過言ではない。私の好きな写真の代表的なものだ。

△全日空機で来た女△から△縄に恋した女△に変貌した芸者福竜が、最後には、△観世音菩薩の化身△にまで昇格してしまう。その過程に、私は徐々に飼育されるというよりも、急激にマゾの開花を強いられた促成栽培の蘭花の



ような華麗なSMを見た。

飄々としたルポの文章の上では、明らかに描写されてはいなかったけれど、その裏に隠された塚本氏のたゆまざる努力が、私には感じ取れるのであった。

こと程左様に、夜を徹して息もつがせずに行われた、すさまじいばかりの△女体責め△は、私達の目を眩らせるものがあつた。

△福竜の裸身は強く縛り上げれば上げるほど燃え上がって、それが更に強い縛りを誘発した。もう、そうなれば、どんな痴態でも演じたし、それが更に、次のハレンチな姿態へと展開していった。そして、セックスに対するスタミナも、そこに縄が介在する限り、それは爆発的な盛り上りを見せた。（47年2月号37頁）ということになる。

それが、更に次のパイプ付き股間縛りに於いて最高に発揮された。塚本氏のたゆみないSMへの探求心がここにも華々しく開花し結実している。この恍惚とした松本たえの責め

の表情は、どうだろう。(2月号43頁)

口を割って喰い込む猿ぐつわ。首縄から菱縄縛りの麻縄の柔肌への痛めつけ様。そして氏の考案にかかるバイブ付き紐の悪魔のような跳梁。ここに、SとMとの火花の散る葛藤に私の全身は、ふるえたのだ。

へにぶい音が奥深くくぐもって、福竜の白い裸身は白蛇のように、うねうねとくねった。

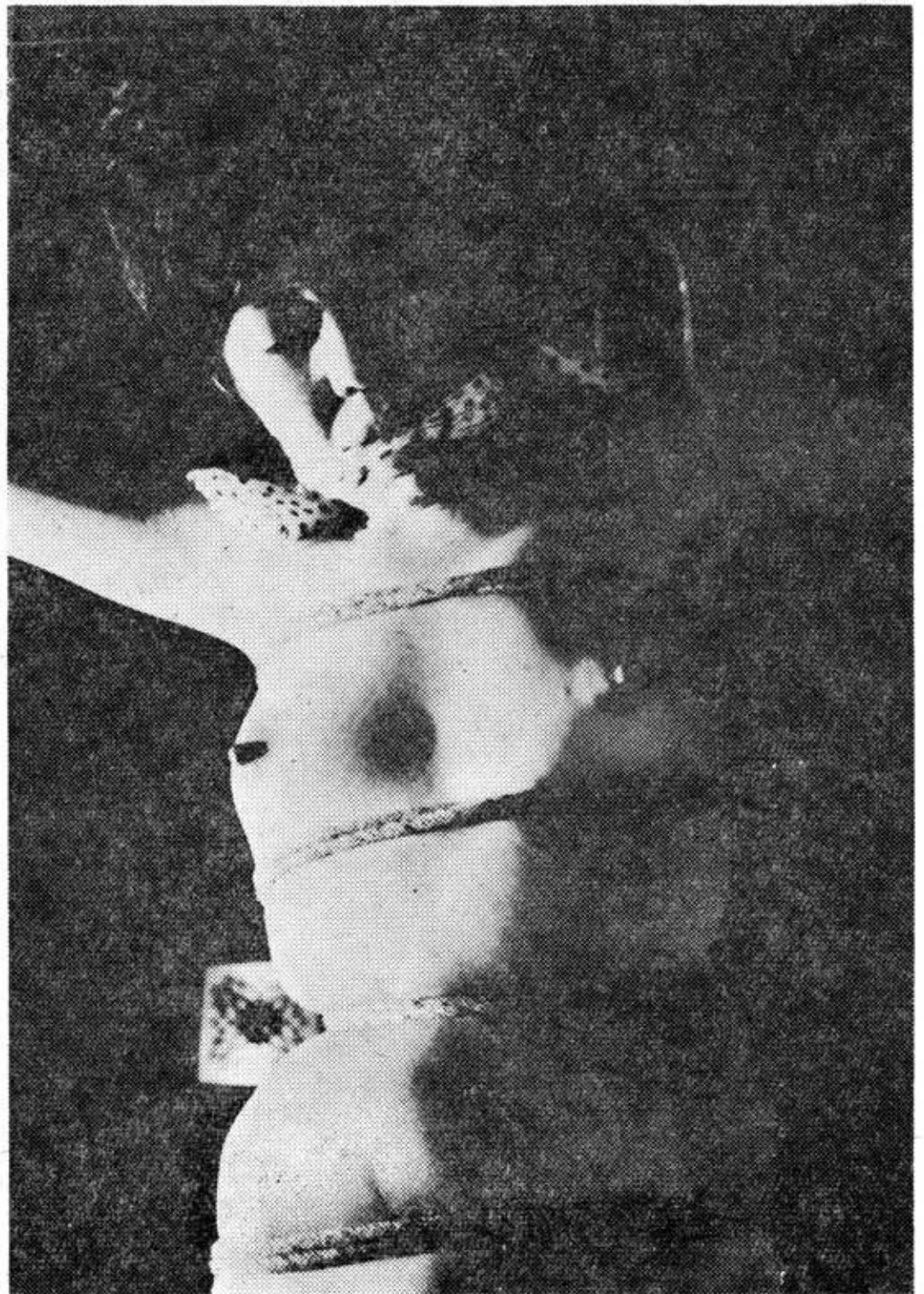
口からは言葉にならない、うめきとも叫びともつかぬ音声が、やたらに吐き出された。V

(47年2月号44頁)

泣き、呻き、悶える彼女の真白い姿態がそれからの4葉の写真が如実に、その実態を伝えている。どの一枚の写真をとってみても私達の心を、ゆさぶらないものはない。

後手の縛り方をはっきりと見せたもの(2月号46頁)にしても、二の腕にぐっと喰い込んだ縄目。両の手首を深く噛み合わせて縛られているところなど、塚本氏の細心の配慮が窺えて嬉しい。それに、縄のように腰縄に連結した紐が、きつとバイブを秘めているのだろう。双臀に妖しく埋没しているのが、目に鮮やかに映じて仕方がないのだ。

へか細くて弱々しい手首に、縄がむごたらしく喰い込み、逆十文字に引き上げられた握り



拳が忽ち白く変色してゆくのを横目に見ながら、私は縄を素早く捌いていった。(47年7月号172頁)

四カ月の空白を埋めるかの勢いで、芸者福竜に迫ってゆく塚本氏の、いつに変わらぬ情熱が、この七月号の『観世音菩薩の化身』のカメラ・ルポに於いても、いささかの手抜きも

なく演じられてゆくのである。

へキャシャな胸や二の腕に、幾人もの女の肌の脂を吸った縄が、妖蛇のようにまといついてゆきV(7月号172頁)へ皮肉に喰い込むばかり、きつちりと縛り上げた後手首の縄を右手で驚掴みにして持ちあげて、彼女の身体を宙に浮かしてから、パッと手を放して仰向け



にころがした。松本たえの両足は空を蹴って
もがき、そのつけ根の個所に私は、はつきり
と、彼女の燃えさかる泉の根源を見た。V

(47年7月号173頁)

抜き差しならぬ息づまるようなSMプレイ
の展開が、私達の目の前で繰りひろげられて
いるようだ。この前後の描写こそ、塚本氏の

独壇場といってよい。現に、プレイをやった
者のみに書ける緊迫のシーンである。

たしかに、塚本氏が文中で書いているよう
に「松本たえ」という女性は、観音様の化身
であるかも知れない。というのは、私は直接
逢ったことがないので御本人は知らないのだ
が、法悦境をさまよう写真(7月号175頁)を

見て、その感を深くした。

仰向けに寝た、この松本たえの顔の表情は
観音様のそれではなくてなんであろう。塚本氏
は本当に素晴らしい写真を撮られたものだ。彼
女こそはSMマニアにとっては仏様なのだ。
この一葉の写真は、それを、はつきり証明し
て余すところがない。

私は、松本たえのこの三回にわたって行わ
れたSMプレイを、塚本氏がカメラ・ルポさ
れているのを目にして、いみじくも、西条紀
代、笠井奈保子、南加津子などのM女を、同
じように飼育調教して、その過程を具に掲載
されたことを思い出した。

そして、今また苗木陽子の類稀なM性を引
きずり出さんものと、氏は全力投球している
最中である。この文の冒頭にも書いたように
真実に、SMプレイを体験しなければ、どう
しても書けない、切羽つまったルポの記録を
塚本氏は貴重な資料として残しておられる処
に、最高の意義があると私は思う。

望むらくは、斯くの如き、M女開拓という
至難の業績を積み重ねられ、飼育調教の努力
を今後も休みなく続けられて、SMカメラ・
ルポ文学の金字塔を、是非、氏の手に依って
打ち樹てられんことを。

(おわり)



第六十七回

赤いスプレー

有明（実はかえ玉）が、ガボンからロンドンに到着したのは、エミコ号がテムズ河をさかのぼっている頃であった。

例によって、有明は外交官として迎えられ、予めリザーブされていたサボイ・ホテルのスイートに入った。有明の友人？ 蔡樹理の予約も一緒にされていて、そのスイートは有明のそれと隣合せになっていた。この一面は、もともと王侯貴族のお泊り用に出来ていたのを、その後、二つのスイートに改造したので

二つを一緒にすると、丁度いい具合に独立隔離された一画を占有することになる。

半日程、遅れて蔡樹理の一行が到着した。

エミコ号はタワーブリッジの河下に繫留を特別に許可された。

今は有明とも蔡樹理ともつかぬ立場となった有明は、かえ玉からの状況報告を注意深く聞き取り、彼の表の顔であるガボン政府高官としての仕事を、テキパキとさばいてしまった。

ダイニングに取りよせたローストビーフのディナーを美味しそうに喰べながら、有明が山本百合子に語りかけた。

「これからが大仕事だよ。そこで君に頼みたいのだが、ゴリラの存在をデモンストレーションしておきたい。しばらくゴリラ役を引き受けてくれないか。何しろ、女どもは、みんな水中ドームの中に置いてきてしまったんでね」

有明の口調は、いつも相談をかけるような言葉だったが、そのくせ、百合子に嫌といわせない迫力があつた。

翌日、有明は百合子を連れてエミコ号に行った。外交特権を持ったヨットだというのでスコットランドヤード（警視庁）から制服の巡査が派遣され、舷門を警備している。

蔡樹理とその姪は、始めからパスを持っていたので、問題なく出入出来る。それに今日はガボン大使館のはからいでペットとして飼育されているゴリラを上陸させる特別許可証も手に入れていた。

例の秘密の船艙にゴリラの檻が置いてあった。万一のために二頭の本物のゴリラも積んであった。検疫の注射などは、この本物のゴリラにやって貰った。人間だったら顔写真や指紋などがチェックされるのだけれど、ゴリラの真疑を判定するなどという物好きは先ずいないし、出入国管理官も、それ程、ヒマではなかったから、スリ交えたところで見とがめられる懼れは全くなかったのである。

今回、始めて採用したゴリラの毛皮が、捕獲した獲物を見とがめられずに連れ出すためのカクレミノとして非常に有効だということに自信を深めていたので、有明はこれからロンドンでやろうとしている大仕事にも、これを使おうと決心していた。

「サア、裸におなり」

といいながら、有明はもう赤ペンキのスプレー缶を、かまえていた。

毎晩、素っ裸になっているというのに、百

合子は依然として着物を脱ぐのを羞かしがっていた。(その羞恥心が、たくまぬコケットリーとなって有明を楽しませていたのだが)特に今日は情けなかった。恨めしかった。ヨローロッパに来て、先輩の朝小路久子や、チューリッヒのジーナを誘拐する時、使われたので、彼女には仕組みがハッキリわかっていなかったからである。

だが、躊躇は許されなかった。やっこの思いでパンティをとる。すかさず、

「四つん這いになれ」

と声が、かかる。ベソをかきながら百合子は言われた通りにした。

「だめだめ。もっと股を開いて……」

背後で有明の声がしている。

ポトリと泪の滴が床のリノリウムの上に落ちた。

シューシュー、シューシュー。

氷のように冷たい霧が、刺すような勢いで尻のまわりを這い廻った。

ふたたびゴリラの毛皮に生命が蘇った。中味は山本百合子である。全身がスッポリ毛皮でくるまれているというのに、双臀だけがポツカリと外気に曝されている。そんな状態が

前号まで「秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその機質に応じて五段七階級に分類され、巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。有明には蔡樹理という別の顔があった。ヨローロッパでは、姪(実は山本百合子)と秘書(実はジャンヌ)を連れた蔡の優雅な旅行という振れ込みだった。それにしても、この一行、大きなゴリラをペットとして連れ歩いているというので有名だった。オランダを出たエミコ号は、いよいよ今度の作戦のハイライトであるロンドンに到着した。

百合子にとって全裸になっている以上に屈辱だった。しかも、その尻はマッ赤に彩られているにちがいない。自分では見えないけれども、今まで久子や、ジーナにそうして来たのであるから、よくわかってる。昨日は人身、今日は、わが身——だった。

突然、全裸の肌からポタポタ滴を流しながら、髪までグッシヨリ濡れたジャンヌが入ってきた。彼女はチームスの水中を潜って本船に來たのである。したがって、舷門で見張りをしている水夫にも警官にも全く気付かれて

いない。着ていたものは丸めてビニール袋に入れ、手にぶらさげていた。

有明の指し出すタオルで素早く全身を拭くと、今度は、百合子の脱いだものを、そっくり身につけた。

鎖のついたゴリラを引っ張って舷門を降りて来た二人を、警官は何も疑わなかった。

ゴリラはトレーラーに内装した鉄檻に追いつまされて、嚴重に施錠された。如何に飼育されたペットでも、何しろゴリラはゴリラだから、ウツカリ逃げ出されては大変だと警察が注文をつけ、蔡樹理の一切責任をとる旨の念書を入れさせて上陸を許可したのである。

例によってホテルからもゴタゴタをおそれてゴリラを持ち込むことが拒否されたので、檻は庭に残っている古びた納屋の中に置かれることになった。

それにしてもオトナしいゴリラだった。吼えもしなければ、暴れもしない。ず

っと檻の中にうずくまって、モソモソしているだけなのである。

納屋といってもロンドンのことだ。頑丈な石造りで、分厚い扉に古風な錠前がついている。もともと庭園の管理用具を収めていた十七世紀頃の建物だった。入っていたガラクタを片寄せて四坪ばかりの空間をつくり、滞在中は、そこでゴリラを飼育してもいいということになったのである。納屋の鍵も蔡に渡してくれた。これには蔡がホテルの支配人に渡

した百ポンドが威力を発揮していたらしい。「どうかね、別荘の居心地は……」

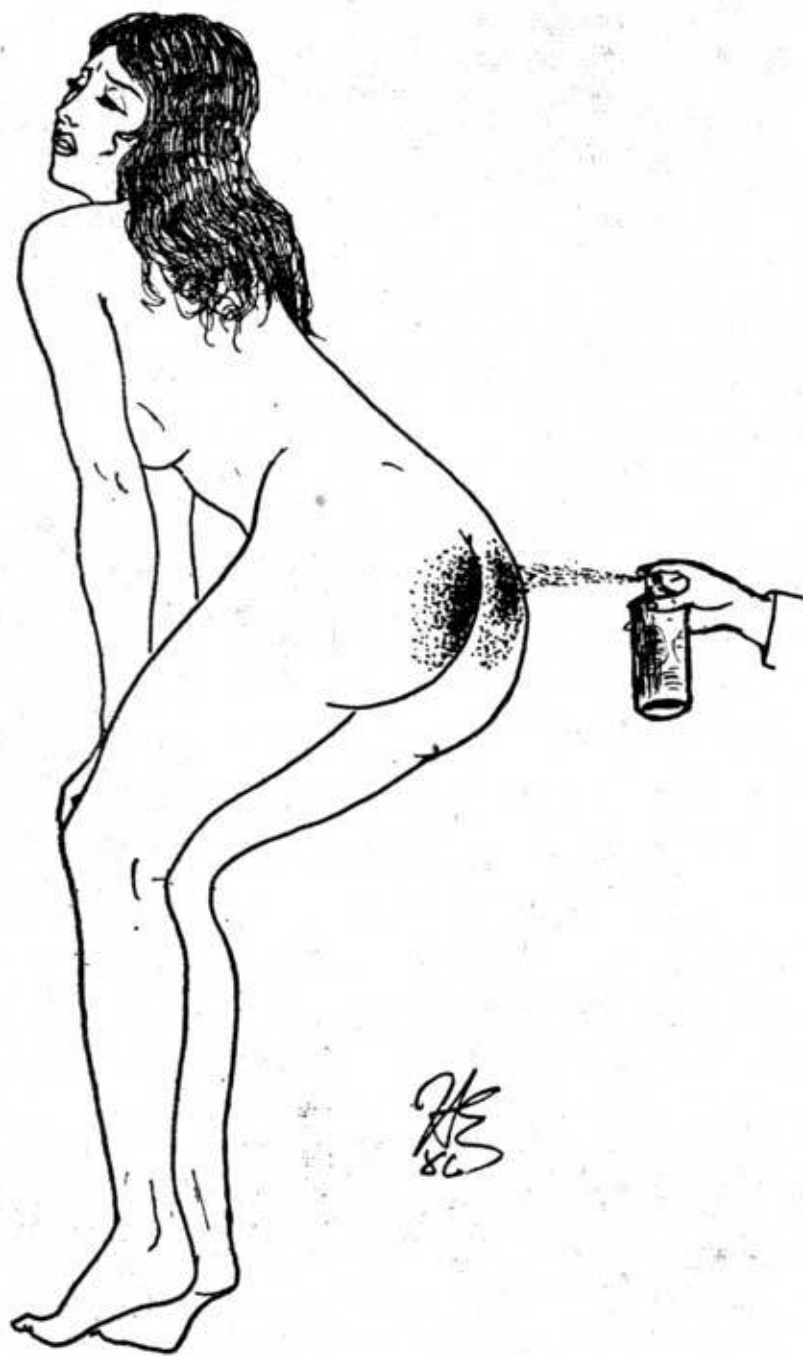
有明が皮肉っぽく声をかけた。

「……」

くぐもったような声で百合子が何か答えたらしいが、厚いゴリラのマスクにさえぎられて有明には何をいったのかわからなかった。

ゴリラの毛皮の中は詰め物が多すぎて、ひどく、あがきがわるい。百合子の目は大体ゴリラの口のあたりになり、半開きの歯の間を通して辛うじて外を垣間見るように出来ていた。まして口のあたりはゴリラの顎のなかに埋まってしまうていたから、何かもの言っても容易に外へ伝わらないのである。

百合子が言おうとしたのは、彼女の切実な生理的要求であった。実際、剥き出しの部分は、そこだけがスーとして寒く、それが余計、焦燥感を駆り立てていたのである。



「ああ、そうか。やっと、わかったよ」

もじもじするゴリラのしぐさを見て、有明が破顔して言った。

「ゴリラに、ご不浄はあるまい。そのまま、やることだ。いつでも自由にやんなさい」

ゴリラが激しく首をふった。嫌々と、だだをこねる様子である。

「困ったゴリラだね。ウン、それなら、せめて何かを、あてがってやろうか」

見廻すと移植用のトレイがあった。

「トレイをトイレに。なかなか、シヤレが、きいているじゃないか」

ひとりでニヤニヤしながら、それを檻の隙間から、さし込んでくれた。

「どうした。これでも、嫌だとは、いわせないよ」

しきりに、あがきつづけるゴリラを、わざと、にらみつけるようにする。

このゴリラ、どうしても中腰にシヤガムことが出来ないのである。中腰になろうとすると、どうしても臀部がペタンと床についてしまふ。立ち上ると檻の天井が、つかえる。

「手をついて這え。そうすれば出来る」

無情な有明の声が幽かに聞えた。それより先、我慢しきれなくなった内容が、液体に混

じって飛び散ってしまった。

「ヘエー、ゴリラの糞って人間のと、そっくり同じですね」

檻の床を掃除していたジャンヌが、ギョツとして振り返った。

いつの間にか、一人の中年の男が納屋の中に入り込んでいたではないか。

「フウ、アー、ユウ（誰れ？）」

上ずった声でジャンヌが誰何した。

「ヘエ、あっしや、この庭の庭師ですて。納屋にゴリラを入れたってんで、見にきたんです」

男は帽子をとって、ウエールズ訛りながらも、せい一ぱい、行儀正しく答えた。

檻の中のゴリラが小さく、うずくまってしまった。

有明が出て行った僅かの間のことである。

「黙って入って来ないで下さい。ここは私たちが滞在中、お借りしたんですから」

ジャンヌが、やや口ごもり気味の英語だったが、断乎とした態度で言った。

そこへ丁度、有明が戻ってきた。彼の鋭い目に射すくめられたようになった庭師は、何やら口の中でモグモグ言いながら出て行って

しまった。

「もう一つ、鍵をつけなければいかんなあ」
有明はジャンヌとゴリラを半々に見ながらこういったものである。

有明とジャンヌが出て行ってしまったあとほの暗くなってきた密室の中で、百合子は自分が甘かったことを、身にしみて覚ったのである。

ゴリラに化けて、ホテルに来さえすれば、ふたたび人間に、もどれるものとはかり考えていた。しかし、それは自分の独り合点であって、有明は、ひと言も、そんなことを言うていなかったのである。

そうなってくると、自分の代りに入るべき白人娘が攫われてくるまで、このままで辛抱していなければならないのに相違ない。

「アア」

暗澹となった心の中で、百合子は思わず絶叫していた。

何という恥かしさだろう。有明やジャンヌに裸をさらすのならまだしも、さっきのように見も知らぬ庭師風情に、自分の出したものを覗かれてしまった。

心の痛みが、肉体の痛みにまでオーバーラ

ップしてくる。さつきから下腹部のあたりがキリキリと痛んでいた。臀部だけが外に出ていたので、その部分だけが冷えてしまったのだろうか。それとも、腹具合が悪くなってしまったのであろうか。尿意と便意が交々交叉して、次第に強迫力を強めはじめてきた。

ハッと、百合子にひらめいたものがある。

こうした苦難自体、とりもなおさず、有明が彼女に与える調教の一つではあるまいか。有明のすることに偶発性は殆ど、ない。そうだとすれば、彼女がこうした羽目に陥ることも、予め仕組まれたカリキュラムであったということになる。

自分がアテ馬ではなかったと考えるだけで百合子には一つの救いがあった。同じ苦しみでも、自分が主役であると意識できる方が、まだしも我慢しやすいものである。

メリー 落馬

イギリス王族をめぐる、いわゆるロイヤルスクープの中で、マーガレット・スノードン卿に次ぐ話題は、何といってもメリー王女でいよいよ芳紀十八才、馬も車も自由に乗り廻す上に、もう一つ、大人っぽくなって、これ

では将来、彼女が乗り廻す男性も、そろそろ現われてくるのではないかと、口さがないロンドン雀が、もてはやし始めている。

若い叔母のように母親似というわけではないけれども、スチュアート家の伝統的な顔、あの細長い輪廓にスナリと真直な鼻の持主ではあった。しかし、女王陛下のようにアクセントの強すぎる目ではないし口も小さい。この方は父親のバックingham公爵に似ているのであろう。つまりメリー王女は、両親のいところばかりを幸運にも受け継いだことになる。

だが、その言動は凡そ彼女のソフトな美貌から受ける印象とは正反対であった。マリー王女のお転婆ぶりは、つねにマスコミを賑わしていたし、これではダンナになる男が大変だろうと悪口をいう者さえ、出てくる仕末で要するに、このジャジャ馬を馴らす役目は一体、誰だろうということが、興味の対象だったといっている。

ところが、これから記す信じられない数奇な出来事によって、このジャジャ馬を馴らす光栄を荷負った男は、実は有明そのひとであったのである。

そのいきさつの第一歩として、一人の若い女性が有明をたずねてアメリカから飛来したことを書かねばならない。

有明は、ためらうことなく百合子に予定された個室を彼女に与えた。ゴリラとなって納屋に繋がれている百合子には、その部屋を使うすがなかつたからである。

「どうだ。もうどこも痛まないかね」
女が無言で、うなずいた。

「そうカタくならないでいい。これから始まることは、君が日常茶飯事のように溶け込めるといことが前提なのだ。さあ、それより君のあたらしい顔を見せて貰おうか」

有明が、いきなり女の髪を、ひっぱった。スッポリと抜ける。カツラだったのである。女も自分の顔を覆っていたプラスチックの薄いマスクをはがした。

有明が目を、まるくして叫んだ。

「似ている。まるで、そっくりだ。これなら成功間違いない」

日本語だったから、女にはわからなかったらしい。

わずか一晚だったとはいえ、狭い檻の中に閉じこめられていたことは、百合子にとって



気が狂ってしまいそうな体験だった。その上止むを得ないこととはいいいながら、昨夜もう一度、垂れ流してしまっていたので、全く腰をおろすことさえ、裸の臀部を濡らさずには出来なかったのである。

朝になって、有明が入ってきたとき、思わずホッと救われたような気持ちになった。

有明は美しい白人娘を連れていた。一晚を百合子の部屋で眠って、すがすがしい顔をしている。

檻から出された百合子は素早く毛皮を脱がされる。その間にジャンヌが檻の掃除をはじめた。白人娘が汚物の匂いを感じたのか露骨に顔を、しかめて見せた。その表情が百合子の心を残りに打ちのめした。何と言いつても、出たもので、不可抗力であったとしても、出たものは自分のものである。彼女は白人娘が自分を軽蔑しているのを感じ深く傷つけられた。

だが、その恨みも忽ちに解消することになる。

今度は白人娘の方が裸にされて、今まで百合子の裸身を蔽っていた毛皮を身にまとう羽目になった。余程、因果を含められていたのであろうか。その娘は素直に有明の言いつけ

に従った。

百合子の方は逆に白人娘が脱いだものを身につけるように言われた。

タオルでゴシゴシ腰のあたりをこすっている百合子を見て、有明がプツと噴き出した。真っ白な裸身のソコだけが丸く赤色だったからである。たちまち、百合子は全身を羞恥に染めて、あわててパンティをはいた。

被虐の日々を半年以上も通り抜けながら、彼女は常に新鮮な羞恥心を示してきた。勿論有明の慎重なカリキュラム作りに依るところも多いが、彼女のそうした初々しさが、有明にとって無上の楽しみとなっている。

檻に入れられた白人娘に向って、有明が英語で話しかける。

「いいかね。これから、いよいよ決行する。長い間のおまえの努力も、この関門を突破しなければ報いられないことになる。それよりか命もあぶないことだ。計画は二段、三段と慎重に張りめぐらされている。一つが失敗しても、次の手立てがある。あわてることはい。あわてるとボロが出てしまうから、慎重に行動することだ。そうすれば、明日は、まちがいなく、おまえは『プリンセス』だ」

アッと百合子が叫んで、目に見えて、ふるえ出した。

さっきから、どうも見たような顔だと思っていたのが、誰に似ているのかハッキリわかった。それは新聞やグラビア写真で見馴れた顔だった。それで、会ったこともないのに見覚えがあったのである。

大それたことに、有明はこの国のプリンセスを誘拐しようとしている。そのために作られた替え玉が今、目の前にいるのだ。

メリー王女はウインザー城にある馬場で週二回、馬術に興じている。最近、ドライバー・ライセンスを取得した彼女は、可愛らしいロイヤルレッドのローバーを好んで運転していた。行きはM-4トランクロードから入って来るが、帰りは、いつもアスコット競馬場へ通じる広大な森林御苑の中を騎乗して通り抜けコッテージに侍従が運転して行っていた愛車に乗りかえてA-三〇を独りで帰る。

御苑を抜ける間、必ずといってよい程、その途中にあるクラブハウスに立ち寄って、お茶を飲む。そこは昔、狐狩りを目的とした貴族の乗馬クラブだったが、今はパブリックに開放されメンバー制になっている。

誰の紹介によるか知らないがロンドン滞在中の蔡樹理が毎日のようにやってきて乗馬を楽しむようになった。もちろん、借りもののジャガーにトレーラーを引っぱって、やってくるのである。トレーラーの中には、いわずと知れた人間ゴリラが入っている。

準備は万端、整っていた。有明は例によって蟻地獄のような心境である。漏斗状に掘られた砂の穴を、もがきながら落込んでくる獲物を、ジッと待ち構えている。狙った獲物が網にかかるまでは、何日でも待つつもりである。

ところが、事は一発で決まってしまった。それも第一日であった。

クラブハウスでケーキを喰べ、お茶を飲まれた王女が化粧室に行かれた。近衛兵の侍従も、そこまで、ついて行くわけに行かない。

トイレには人影もなかった。

何気なくドアを開けて入る。最も無防備になる瞬間だった。

シューッ！

どこからか音がして、忽ち王女の全身から力が抜けて行った。朦朧となって行く視野の中で、開く筈もない反対側の壁がポッカリ開

いて、黒い人影がヌッと立ちはだかっているのを見たような気がした。だが、それもホンの束の間のこと、気を喪った王女は、くず折れるようにして壁の穴の中に倒れ込んで行ったのである。

そんなこととは露知らない近衛将校は、ゆっくりと茶をすすりながら、大好きなクロスワードパズルに熱中している。

それにしても少しゆっくりだなと不審に思いついたとき、化粧室のドアが開いて、ツカと王女が、もどってきた。

キッチンと立ち上って迎える近衛将校を見向くもせず、サッサと戸口へ。そしてヒラリと愛馬に、またがった。あわてた将校が、いつもの緩慢な動作に似ず、駆け寄って自分も騎乗するや王女のあとを追う。

こうした気まぐれは、王女には、ままあることだったので、誰も怪しまなかった。

「アッ……」

胆をつぶした近衛将校は、思わず声を放った。遙か前方を疾駆していた王女が、とある丘から下って見えなくなったかと思うと、次の丘のスロープを、乗り手を失った馬が駆け上ったからである。

——王女が落馬した？

そんなことが信じられるだろうか。もし王女でなければオリンピックにだって出場出来たかも知れないといわれる程の名手である。

だが、現実には、その信じられないことが起ってしまった。

近衛将校が助け起したとき、王女は気絶していた。頭を打ったらしく、頭から血が滴っている。

王女はバッキンガム城に移され、ここで療養することになった。何故か事故のことは厳秘に付され、単に風邪とのみ、発表されたにすぎない。

その実、王室及び政府の憂色は濃かった。極秘ながら、責任ある人々には王女が一時的に記憶喪失に陥られたことが伝えられたからである。

以下は後の話となる。半年程して王女は社交界に復帰されたのだが、その間、いろいろなデマや憶測が乱れ飛ぶ中で、王室は沈黙を守り通してしまった。もっとも、時々王女の乗馬姿や、居間で両殿下と歓談される様子が写真では紹介されていたから、王女の健在を疑う者はなかったといっている。

読者にだけは、そっとお教えするが、すでに推察されている通り、この王女は有明が、こしらえた替え玉だったのである。負傷も記憶喪失も、スリ換えを見破られないための慎重なトリックの一つにすぎぬ。

アン・ブライスというのが替え玉になった女の名前だった。ニューヨークのスラム街の出身だった。貧乏な彼女は十二才のときから働かなければならなかった。華やかな生活にあこがれ、そのためには手段を選ばない娘だった。十五才のときに、すでに肉体を売るところを知った。幸運なことに彼女を買った男の一人が、自分の経営するストリップ小屋の踊り子に拾いあげた。すると彼女は、芝居に夢中に、なり始めた。特にシェークスピアものになると、自分が悲劇のヒロインになったような気がして心を奪われるのだった。

有明の世界組織が探索した「メリー王女に似た娘」多数の中から、有明は彼女に白羽の矢を立てた。血液型も同じだった。もちろん目的を秘匿し、要するに、大冒険だが「王子と乞食」のようにして、イギリスの王女になるチャンスがあるとだけ伝えたのである。彼女は深く考えもせず、これに飛びついた。生

れながらの王女に対する憎しみ、それに復讐しようとするサディスティックな欲望と、自分が王女になるというシンデレラのような幸せが見事、両立したからだった。

それ以来、彼女は失跡した。

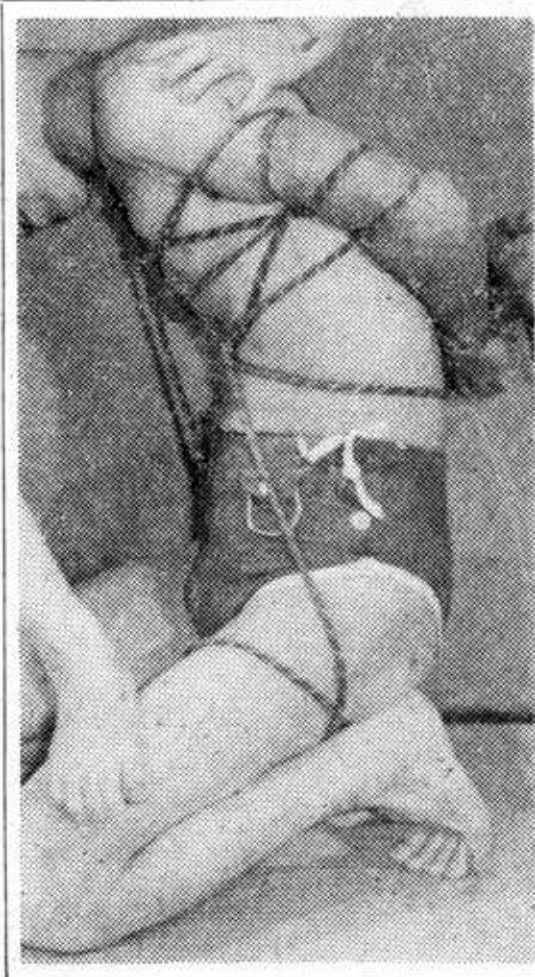
半年程かけて綿密な整形手術が行われ、必要な訓練が行われると、彼女は殆ど瓜二つと違ってよい程、メリー王女に似てしまった。

このようにして、貧乏なアメリカ娘、アンは王女様になり、本当の王女メリーには有明のコレクションを飾る畜獣としての運命が待ち受けていたのであった。

——(未完)——

——**△筆者より▽**——

(一九七三年十一月十四日、アン王女22才は第一近衛騎兵連隊マーク・フィリップス中尉と結婚された。この物語は、一九六九年を舞台としてゐるから、その頃、アン王女は十八才だったわけである。だからといって作中のメリー王女がアン王女をモデルにしたのだと即断しないでいただきたい。この物語は、フィクションであり、登場人物等は全く実在していないのだから。それにしても、どんな王侯貴顕とでも結婚なされる筈の王女が、無名の近衛将校と結婚なさったのは如何に乗馬が取り持つ縁があったとはいえず、あまりに不釣り合いだったと訝しがらるイギリス人も少なくないのである)



／＼わが家のバースディ・プレゼント＼／

瘦 せ た 縛 り

早 木 夢 二

今年も私の誕生日は勿論、彼女の誕生日には、盛大な拷問プレイをするつもりだった。

そして、載る載らないはとも角、また綿々と埒もないことを書いて、送ってみようと思っていたのだった。

ところが、私はふとしたことで引いた風邪をこじらせてしまつて、三十九度から四十度の高熱に悩まされること二度。それも各々一週間ずつという大病をして、折角、彼女待望の拷問プレイを行う誕生日がきたというのに私はすっかり瘠せて、あの「小肥りの、むっちり脂ののった下腹に縄を喰い込ませて」と、得々と書いていた面影は、すでになくなっていた。

あの頃から十キロ近く瘠せたのだから仕方

ないというものだが、折角のことだから、私も、もう大分よくなっている体を振るい起たせて、彼女の希望を少しでも、かなえてやりたいと思った。

彼女としては自分が縛られて、さきさまの責めを受けたらしいのだったが、悲しいかな、私には、依然として肉づきのよい彼女を緊縛して、あれこれと拷問責めする気力はなさそうに思えて、彼女には悪いけれど、病氣上りの私を緊縛して、責めてもらうように頼んだ。

ちょっと失望したようだったが、彼女はこの処ずっとプレイをしてないので、その期待もあってかやっとな承知してくれたのである。なるほど、瘠せたものである。

その日は慶子の誕生日であった。彼女も、もう、うばざくら、といって悪ければ、女ざかり、といっておこう。私たち、どちらかの誕生日には、必ず緊縛プレイをすることになっている。

もう、だいぶ前のことになるが、私の誕生日に、彼女が贈りものとして拷問プレイをしてくれた。そのことを、私は「女囚とお役人さま―ある日の拷問プレイから」として、本誌に投稿した。私たちの夫婦プレイの偽らざる一面が出ていると、自分でも思っていたので、菱縄を打たれた裸女のカットつきで載せてもらった時は、ひどく嬉しかった。

裸になって、彼女からお縄をいただきながら、私はぐるぐる我と我が身を見回して、情けないぐらいだった。

腹にはシワが幾重にも、たるんだ皮膚の上を走っており、腰骨は張って太股の肉が、がつくり落ちてゐるのが、よくわかる。

ふつくと肉で受けていたお縄が、ぎしぎしと骨に、こたえた。

それでも、いつもの通り、菱縄を打たれ、股間縄を施され終ると、我ながら、一回り細くなったと言ふものの、いつもの緊縛感が泌々と甦ってくる。

余り縄の部分が、以前より、ずっと長くなっている。

「瘠せたわね」

慶子は感心したように、

「まるで、何日も何日も拷問にかけられた囚人みたい」

うまいことをいってくれたと私は思った。

お召捕りになって、白洲や牢内で、連日連夜石抱きや海老責め、はては鞭打ち、吊し責めと拷問を受けていれば、こうなるものである。そうだ、私は正に、その囚人なのだ。

その他にも火責め、水責めなど、ありとあらゆる拷問を受けたのだ。

四十度の高熱に喘ぎながら、私はそんな自分を夢みていたのではなかったらうか。

私はずっと前、拷問のことを書いた本の中で、丸橋忠弥が下帯一つにされて、四つ這いの恰好で杭にくくりつけられ、背中を割ってその中に熱い鉛の湯を注がれている拷問図を見たことを思い出した。

また病中のつれづれ、気ままに読んだ小説の中で、石川五衛門が焼きごてを裸の尻に、骨が飛び出るまで当てられている拷問場面があった。

私は、高い熱に我が身を焼かれていた自分が、その忠弥であり、五衛門であるように錯覚するのだった。

そして、彼らはやがて、責めに疲れた体を裸馬の背に晒して、市中引き廻しの上、刑を受けるのだ。

そう思うと、私は慶子にお縄をかけられながら、瘠せて氣力の乏しい体に、何か沸々と責めへの情熱が、たぎってくる思いがした。

二

彼女が敷いてくれた席の上に坐った私の前の椅子に、彼女は腰を下ろした。

「顔をお上げ」

と命じられて、うなだれていた顔を上げると私の目は丁度、彼女の腰の辺りにあった。

彼女は、自分の緊縛の希望が満たされなかったので、少しでも感じを出そうとしてか、自分で首から縄をかけ下ろして、へその辺りで結ぶと前後へ回し、幾筋かの縄をかけていた。

いつもの縄なら大体二筋だが、きょうは、ちよっと見たただけではよく判らなかったが、四筋ばかり回している。いつか私がかけたところのある、縄ふんどしのつもりであろう。

そんな私の感じに気がついたのか、

「いいでしょう、これ！」

と目でその方を示して、彼女は笑った。

「縄ふんどしよ」

やっぱり、そうだった。私は彼女から、それをかけて貰って縛られたことを思い出し、ちよっと嬉しくなった。

彼女は、私を見降しながらいった。

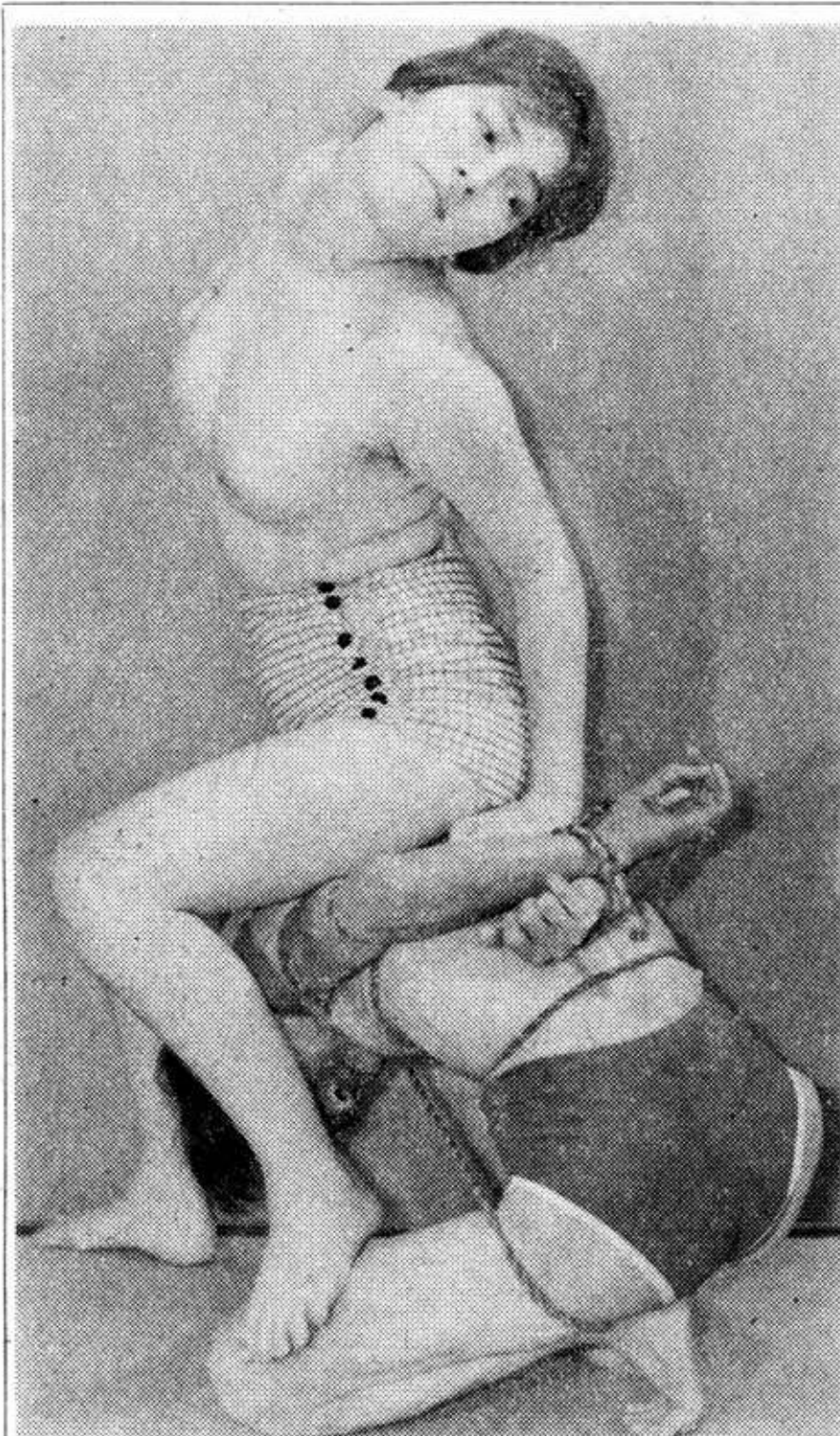
「体の方は、すっかり瘠せたけど、変らないところもあるのね」

私は何か恥かしい気がすると同時に、彼女に対して申し訳ない気がした。

「すみません」

私は素直に謝った。

Mフオト 『苦悦する腰掛け』 絹川 文代



「あら、いいのよ」

彼女は、にっこりしてくれた。

「こんな瘠せた囚人を責めるのは可哀想ね」

彼女は、そう言って、

「きょうは体の責めはやめて、お調べをしましょうね」

囚人とお役人さまの関係が、いつしか成り立っていて、私たちはお調べプレイとでもい

う責めの中で、ぎりぎりまでの精神的な羞恥や苦痛を与え合っているのだった。

彼女の心づかいが嬉しかった。

「ありがとうございます、お役人さま」

私は心から礼をいった。

「では始めましょ」

彼女は私の余り縄を手にとって、もて遊びながら、お調べを始めた。

「科人、早木夢二！」

彼女の声は、いきなり、いかめしい調子に変わった。

「ハイ」

「その方のお召し捕りは、いつだったか？」

「ハイ、二十日前でござります」

「お調べは何回、受けたか？」

「殆ど毎日でござります」

「素っ裸で菱縄を打たれ、奮にのって奉行所通いをしたのだな？」

「ハイ、左様にござります」

「拷問は、何回、受けたか？」

「お調べの都度、お白洲で受け、牢に帰ってからは、夜、拷問蔵に引き立てられ、責め問

いを受けましてござります」

「どんな拷問を受けたか？」

「石抱き、海老責めが主でござります」

「どれが一番、苦しかったか？」

「海老責めでござります」

「自分の尻に、ご対面した訳けだな」

「ハイ、左様でござります」

「啞え刑に服したこともあったと聞いているが、左様か？」

「ハイ、二度ばかり、係のお役人さまに命じられましてござります」

彼女は、ちょっと笑った。意地悪い笑いのようでもあり、白洲の満座の中で呻いている海老縛りの私をいたわっているような笑いでもあった。

「石抱きは？」

「三回、受けました。いずれも石を三枚、抱かされ、気絶致しました」

「素っ裸か？」

「ハイ、拷問中は、いつも……」

「膝が砕けたであろう？」

「ハイ、皮が破れ、肉が裂け、血がお白洲の上に流れました」

「涎や鼻汁も垂らしたであろう」

「ハイ、涎や鼻汁を、抱き石の上に垂らし、すると、係のお役人さまが怒って、笞で背中を打ちましてございます」

「その方、海老と石と、むしろ拷問が好きか？」

「ハイ、どちらも好きでございますが、どちらかと申せば、石抱きでございます」

「海老よりも？」

「ハイ、海老縛りにされますのも好きでございますが、何といても石抱きが一番、拷問らしい拷問と存じますので……」

私は平素から思っていることを答えた。

三

彼女の顔が赤らみ、真中を縦に縄が走っている両側で乳房が、きゆうと張ったように見えた。お調べの間に、彼女自身が、或は、きよう得られたかも知れない羞恥感や苦痛感が彼女の体の中に湧いてきているらしかった。

それは、私とても同じことだった。

いかに病氣上りで、見るかげもなく瘡せているといっても、同じ菱縄縛りを受け、お役人さまである彼女の前に引きすえられ、さまざまの責め問いに答えている中に、いつものような嗜虐感が、体内を貫くように湧いてくるのだった。

私の顔にも血がのぼってきた。私は胸を張り、後に回されている両手を自分で絞った。かけ縄が首にぶち当たったような気がした。

「お、お役人さま！」

私は思わず呻くようにいった。

「……」

彼女は答えず、私を見返した目の中は、何か燃えているようだった。

「お役人さま……」

私は重ねて言った。

「何だい……」

彼女は、そういったが、その声は嗔^かれていた。

「責めを受けようございます」

私は思い切って、そういった。

「私も……」

彼女は切なさそうな声で返した。

もう彼女は、お役人さまではなくなっていた。そこには、いつもの、裸で縛られて責めを受けたい願望に憑かれた早木慶子という女の、赤裸々な姿しかなかった。

私には、その彼女の気持が、よく判った。又それだけに、きょうのことは私の責任として彼女に申し訳ない気持が強くなった。

「すみません。私が病氣だったりしたもんだから……」

と私は言った。

「いいの、いいのよ」

彼女は手に持った私の余縄を、ぐっと握りしめながら呟いた。

「でも、責められたいわ。だって……」

もう三月ぐらいにもなるのだった。こんなことは、私たちの間で緊縛プレイが始まってからこちら、珍しいことに属する。

大体、週に一回は、どちらかが縛り、どちらかが縛られていた。

そしてそれは又、同時に私たち夫婦の間では大事な儀式にもなっている。

急に、彼女は立って、隣の部屋に入っていた。

どうしたのかと思っていたと、現われた彼女は、金属製の便器を手に持っていた。私たちにとって馴染深い便器である。

ちょっと照れ臭そうに笑って、

「許して……ね」

と彼女はというと、椅子を部屋の隅に片づけその代りに便器をおいた。

私は微笑ましい気持ちで、そんな彼女の動作を見ていた。

「いい？」

「いいとも」

彼女は私の正面を向いて、便器の上に跨った。俄に、ご自慢だった縄ふんどしが邪魔になってきたらしく、もそもぞ、し始めた。

「いいじゃない、そのまま」

見かねた私が、そういった。

彼女は私を見てニコツと笑った。

「始めましてよ」

見なれたポーズだが、私とても久しぶりで見ると、排泄責めの姿態である。

いつか私自身も上体をかがめて、のぞき込

もうとしているのだった。

「あら、嫌だ」

彼女は、そんな私に気づいて、そういったが、別に気にもとめない風で、じっとさし迫っている瞬間に備えて体を堅くしていった。妙やかに、そして恥かしそうに便器に流れ込む水音が聞こえた。

「ああ」

と彼女は呻いた。

「出たね」

「ハイ、出ましたのよ、出ましたのよ」

彼女は顔を、ぶるりと振った。尻を、ちょっと持ち上げる。髪がザワザワと、ゆれた。音が続いて、湯気が、ふわっと漂い出て、のぞき込んでいる私の顔を軽く撫ぜた。

私は目をつぶって、その臭いを胸深く吸い込んだ。なつかしい、温い臭いだった。

「すみましてよ」

彼女の声で私は我に返った。そんな様子を彼女に見られたかも知れないと思うと、恥かしい気がした。

「すみません」

彼女は、そういうと、頭を下げた。まだ便器の上に跨がったままであった。

四

いつものように、次に進むのだろうかと思っていると、彼女は、ゆらゆらと尻を、ゆすりながら、自分からは言い出し得ないのか、赤く染った顔を私に向けて、何か物言いたげであった。

「してもいいよ」

私の方から、そう言うと、

「いい？ ああ、嬉しい！」

彼女は俄に元気づいたような声だった。

「本当に、いい？」

「ああ、いいよ」

「でも、こんな目の前で……」

「構わないよ。私も見たいし……」

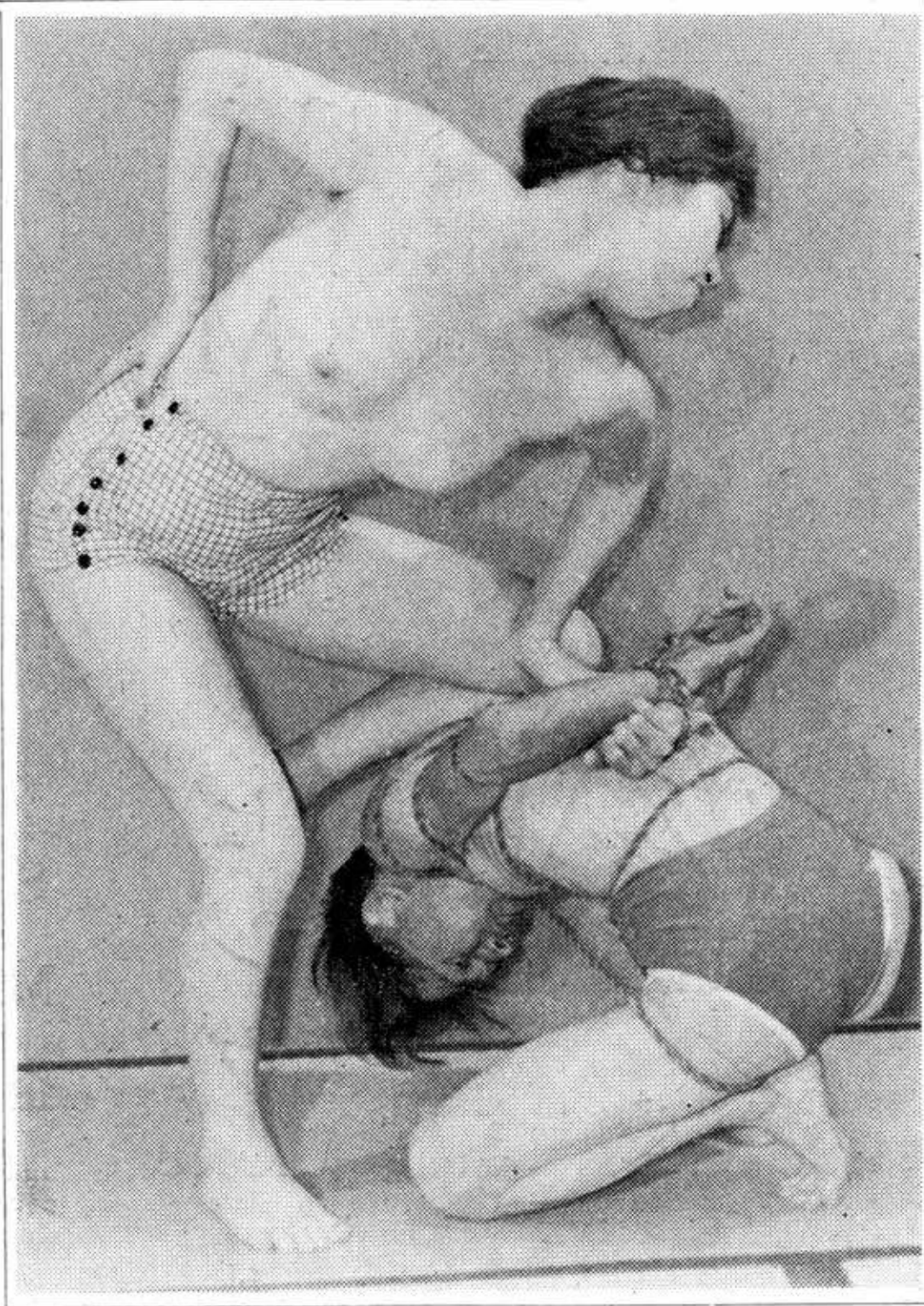
それは本当だった。ずい分、長い間、彼女の営みを見ないでいる。高熱に浮かされながら、そんな彼女の営みの姿も、私の脳裏に浮かんでいたのだった。

「うんとしてくれよ」

私は、はげますように言った。

「嬉しいわ、そんなに言っておきよ……」

きょうは、もう拷問プレイはないと諦めていた彼女だった。それが思いがけず、事なりゆきで、苦痛責めではないけど、いつも楽



しんでいる排泄責めに、ありつけた？　ことは、彼女にとって思いがけない幸せといつてよかった。

私も素っ裸の彼女を海老縛りにして、たっぷり肛門とご対面させたり、石抱きの真似事で拷問の気分を出したり、あれこれと責め上げて、ぐったりと疲れた彼女の裸身を胸の中

に抱きしめて、最後の望みを達してやろうとずい分、長い間、楽しみにしてきたのが、せめても排泄責めでお茶をにごす形となったのは、残念でないことはなかったが、まだ彼女を十分に愛撫出来る気力の回復していない体であってみれば、これも又、望外の喜びだといえた。

縄ぶんどしは、やはり先程の滝を浴びたようだった。濡れた縄が肌にまわりついてるのは、さぞ気持が悪いだろうが、今日はそれにもまして、彼女の糞に、べっとり塗れることを思うと私は、ぞくぞくするような快感を覚えた。

「今度は、うんと汚れるよ」

そう言うと、

「いいの、よごれても……。私、そんなことお構いなしに、一生懸命やりたいわ」

彼女は、気ばった声で答えた。

ふくらした双丘が、ぐんと張った様な気がした。ううんと気合いの入った感じが、便器の上に丸まっている彼女の裸身に漲った。

彼女は顔を二、三度、ぶるっと、ふった。

「ああっ」

今まで、うつむいていた顔を、さっと立てて、私の正面を向いた。

「いよいよかッ？」

「ハ、ハイッ！　もうすぐですッ」

彼女が叫ぶように言った。

ぶるっと体が、ゆれた。

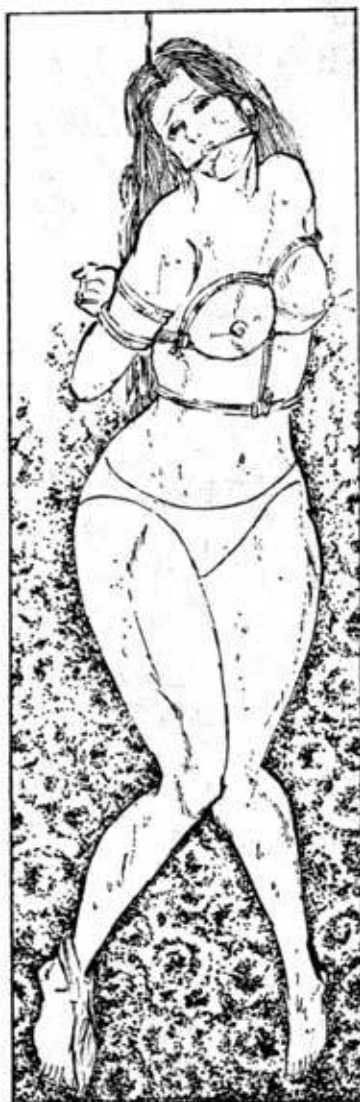
私は段々広がって行く臭いを鼻一ぱいに受けながら凄まじい彼女の営みを見ようと、瘠せた緊縛の身体を乗り出しているのだった。

— 連載創作 — 「S M 企業」 — 第七話 —

S M スワッピング

秋津新次郎

カット・萩末博



「ようし、少し、ましになって来たな」

ピノキオは久江の高手小手姿にようやく満足そうな声を上げた。美紀は、ほっと溜息をついた。今日はじめてロープを握らされ、久江の身体にロープを絡ませたのだ。

ピノキオの鞭に怯え、無我夢中でロープをかけながらも、自分自身、もう何度も縛り上げられた経験があるだけに、どこにどのようなロープがかかると苦しいかを、よく知っていて、つい久江の身になって手加減をしてしまう。そんな美紀の思いやりも、鋭いピノキオの目を逃れようもなく、何度もやり直しを命ぜられ、その度に鞭がふりかかった。

度重なる鞭の痛みは、理不尽にも鞭をとばすピノキオに対する憎悪から次第に久江に対して、きついいましめとなって現れてきた。久江の高手小手は、もう極限まで吊り上げられ、手首は充血して変色していた。

ピノキオは久江のロープに手をかけて、まるで荷造りをした荷物の結び目を確かめるように、その締まり具合を検査した。

「三号！」

突然、ピノキオの声が高く響いた。

「は、はい、御主人様」

思わずビクンとしながら、もう珠子の声は奴隷女のおののきを現わして、御主人様の哀れみを乞う姿勢を示していた。

久江の緊縛される姿を目の前にして、それから視線をそらすことも出来ず、ただひたすら目の前の嵐が早く収まるようにとの祈りも虚しく、ピノキオは、ゆっくりとした口調で、珠子に命令した。「四号に悦びを教えてやれ！ いいか！ 馴れ合いは許さんぞ。失神するまでやるんだ。要領は一号とやった時と同じようにやれ」珠子は声もなく、すくみあがってしまっていた。

「どうした三号！ 返事をせんか！」

ピノキオの手から、鞭が音を立てて珠子に舞いおりた。

「ヒッ！ はい、御主人様」

「よし。二号、四号を立たせろ。四号、下手に暴れると鞭がとぶぞいいな」

久江が美紀に縄尻を取られて立ち上る。その前に素早く、にじり寄った珠子は、

「ご免なさい、ゆるしてね」

素早く久江のパンティを引きおろし、思わず羞恥で腰をくねらせる久江の太腿の一本をかかえこむようにして舌を這わせた。

「ヒエッ、いや！ やめて。ああっ」

カアッと身体中の血が燃え立つような羞恥と、おぞましさに、高手小手の下自由な姿勢で、身をくねらせては逃れようとする久江である。

「四号！ 動くな。二号、しっかりつかまえてろよ。三号！ どうした。しっかりやらんか」

ピノキオは三白眼をひからせて、ニヤニヤと下司な笑いを泛べながら、いかにも楽しそうに三匹の痴態を眺めた。

「ああっ、いや！ もういや！ やめてお願い。そんな、いや！」
呻き、もだえて声を上げる久江の身体は、もう自分の意思とは、かわりなく、少しづつ、女体の悲しい性^{さが}を剥き出していった。

☆

☆

木戸大造は、S M クラブからの連絡を例の料理屋の一室で首を長くして待っていた。あの夜、生まれて始めて、S M プレイを目にした大造は、もうすっかり、のぼせ上って、何としても会員になり

たいと思いつめてしまった。金さえ出せば会員になれるという会ではないだけに、その思いは切実だった。

と、机の上の電話が、けたたましい音をたてて大造の思考が途絶えた。とびつくように受話器を、にぎりしめる。

「もしもし、木戸さん？」

「はい、私です」

「お手紙、拝見いたしました。困りますなあ、お金なんか送って来られては……」

「そのう……お気にさわったら、ごかんべん下さい。決して……」

「いや、お気持はお手紙でよく解っています。むろんおっしゃる通り、例え百万、一千万お出しただいても、当方で会員として相応しくないと判断した方は、入会していただけません。そんな訳でして、ご厚意は有難くお受け致しておきますので、取り敢えず送金していただきました十万円はお返し致しますので、どこへ送ればいいのか、それを……」

「いや、そのう。手紙に書きましたように、それは、あの時の会費の一部にでも、していただければ……」

「それは困ります。もし、ご住所を連絡なさりたくないなら、どこか近くの郵便局でも指定して下さい。局止めで送りますから」

「……」

「もしもし、どうなさいました。お金を送って来られたのはですね貴方一人じゃあないんですよ。それで入会していただくかどうかは関係なく、皆さんにお返ししてるんです。あなただけなんですよ、お金を送って来られた人の中で、ご住所が書いてないのは」

☆

☆

修一はニヤツと笑いながら受話器を置いた。傍らには、今控えたばかりの木戸大造の住所のメモがあった。バスルームでシャワーの音がとまり、バスタオルを胸に巻いて洋子が出て来た。

「いやね、一人で、にやにや笑ったりして……どうしたの？」

「うむ。ほら、例の金を送って来たカモさ。とうとう住所を知らしやがったぜ」

「そう。よく知らず気になったわね」

「なあに、作戦通りだ。おい、それより時間忘れるなよ、いいな」「わかってるわ」

何気なく返事をしながら、洋子は自分の顔の赫らむのを覚えた。今夜は少し早めに店を閉めて、そのあと、あの地下室へ行かなくてはならないのだった。そのため、ここ一週間、修一と綿密な打合せを重ねてきた。久し振りで三匹のメス奴隷にまじって、厳しい修一の責めを受けながら被虐の渦に溺れる自分を思っ一人、頬のほてるのを覚えた洋子である。

☆

☆

地下室の奴隷部屋では、四人の女の奇妙ならみ合いが続いていた。久江が洋子と顔を合わせたのは今日が初めてだが、美紀と珠子にとって洋子は憎むべき相手である。この地下室でのおきまりのユニホームとでもいうべき、薄いパンティとブラジャーだけの姿で、四人の女が向かい合って正座しているのだ。部屋には四人の女だけで、ピノキオもボロ武も修一もいなかった。いや修一のみは隣の拡声器に耳をつけ、部屋の様子を窺っていたが、ピノキオとボロ武は久し振りの休みを貰って、羽根をのばしに飛び出して行った。「ママ。あんた、どう言うつもりなの？ 私達をこんな、ひどい目

に合わせてさッ！」

とうとう沈黙に絶え切れなくなって珠子が口を切った。修一が、一杯にポリウムを上げていた拡声器の音を小さくしなければならぬほど、その声は高く聞えた。

「どうなのよ。何とか言ったらどうなの？ 一体、私達をどうするつもりなのよ！」

美紀の声が甲高く響く。

「ねえ、どうする？」

美紀の声が、珠子の声に小さく答えた。修一は、あわてて拡声器のポリウムを上げる。

「いいわ、ママ。好きなだけ、とぼけときなさい。私、やるわよ。命令をうけているのよ、御主人様から。覚悟してもらおうわ」

何かゴソゴソ音がして、

「いや！ やめて！」

と洋子の悲鳴が、きこえた。

「おだまり！」

ビシッと、鞭音が、ひびく。洋子の身体に炸裂したようである。

修一の顔に笑みが泛ぶ。奴隷部屋に、ムチとロープを置いておき美紀と珠子に、洋子を縛り上げておくように命じておいたのだ。美紀のロープのかけ方は、ピノキオの報告によると、仲々あざやかになってきたそうである。

「いいか。言うことをきかないようなら、鞭を使ってもいいぞ。ただし、顔だけは傷をつけるなよ。もし傷つけてみる。お前達の顔に硫酸をぶっかけるぞ！ 一時間たったら又、来る。それまでに、お前の気の済むように縛り上げておけ」



イメージギャラリー

『マゾ開眼への途』

日本 武士

そして約二十分。美紀と珠子の荒い息使いにまじって、洋子の挙げる悲鳴が時折り、きこえた。

「何さ、大そうな声を出して。私達が、私達が、どんな目に合わされているか、思い知らしてやるわ！」

美紀の甲高い憎悪のこもる声に続いて、ビシビシと洋子を鞭打つ音が聞えた。修一は棚にかかった電気鞭を握ると、ゆっくりと立ち上がって奴隷部屋に歩を運んだ。

わざと音を立てて、ドアの鍵を開く。

修一が一步、中へ入ると、待ち構えていたかのように三匹の女奴隷が跪いて、修一の靴に屈辱の接吻を、くり返した。

「どうした一号！ 挨拶をせんか」

洋子は、高手小手にくぐられ、ブラジャーもパンティも、むしり取られた上、胴もくびれんばかりの股間縄に締め上げられ、もう惨々鞭打たれて、みみず脹れになった身体を、ごろんと床にころがして呻いていたが、修一の声に何とか身を起そうとして、その度に悲鳴に近い声を挙げた。

「二号、鞭をよこせ！」

床にころがっている鞭を、あわてて二号が拾うと修一に差し出した。

「一号、あまったれるな！」

激しい叱責と同時に、修一の手が大きく振られ、鞭は洋子の尻に炸裂した。

「ヒイッ！ おゆるし下さい」

思わず哀願の涙を流し、痛みをこらえながら芋虫のように修一の足元に、にじり寄って、ようやく奴隷のしきたりである、靴に口づけが出来た。

「三号、一号を立たせろ」

「はい、御主人様」

三号が、打てば響くように一号の後ろに回ると、ためらいもみせず腰の縄に指をかけ、

「さあ、立つのよ」と、引っ張った。

「ヒエッ！ ツウー、やめて！ ああ、もう勘忍して」

修一になら、いい。どんな哀願の声でも上げることができる。だが、美紀と珠子にだけは許しを乞いたくなかった。だが、この時とばかり、修一の命令にことよせて振舞う二人の、いたぶりには、さすがの洋子のプライドも、もろくも崩れ果てて、ただもう痛みを逃れたい本能のままに、許しを乞い、悲鳴を挙げてしまった。

修一は、美紀と珠子の、洋子に対する憎悪の深さを改めて思い知らされた。

「御主人様。どうか、もうお許しを……。ご慈悲を下さい」

かねての打合せ通り、洋子は修一の足元に身をすり寄せ、哀願をくり返した。

「そうだな。おい、二号！」

「はい、御主人様」

「また思い切って縛り上げたもんだな」

「はい。いいえ、済みません」

「ふっふっふ。すみません、か……」

「いえ、お許し下さいませ」

「そうか、何を許すんだ？ ええ、二号！」

「はい、あのう……」

「嘘をつけ！ まだ、やり足りないぐらいだと思ってるんだろう。」

「どうだ？ 正直に言え。嘘をつくなよ」

「は、はい」

「どうした、ええ？」

「お許し下さい。どうか、もうこれ以上、いじめないで下さい。お願いします」

「そうか、いじめる、か……。いいか、俺はお前たちを、いじめてはいない。と言っても解らないだろうな。よし、これから俺の言うことを、よく聞けよ。二号と三号、お前たちは、この一号が、よっぽど憎いらしいな。無理もない話だ。だが俺としては、この一号もそれから新入りの四号も、同じに扱っているつもりだぜ。俺のある目的のために、どうしても必要な商品としてな。ただ、それぞれの能力に応じた使い分けは、していく。一号は今のところ、商売をしている。それは二号も三号も、よく知っている筈だ。もし一号が商売をやめて、お前たちと同じように、この部屋で暮すことになれば誰が金を稼ぐ？ お前らが、ここで三度々々の飯を食って行けるのは一号のお蔭だぞ。それを忘れるな。俺が何のためにお前たちをこのような目に合せているのか、それは、いずれ折りをみて話してやる。それまで調教師の言うことを、よくきいて、一日も早くマゾ奴隷として、男に対して従順になれるよう励むことだ。遅くとも二年もし俺の思惑通り、ことが運んだら、お前たちは一年半で自由な身になれる筈だ。その時、一人最低三百万円の預金通帳を持たして自由にしてやる。そうか、信じられないようだな。まあいい。信じようと信じまいと、それはお前達の自由だ。だが、俺は言ったことは必ず実行する。俺がどういう人間かは一号に聞け。差し支えのない限度でなら話してくれる筈だ。二号、一号のロープを解いてやれ。それから四号、S Mについて、よく勉強しろ。S Mとは、どういうものかは、三人が教えてくれる。二時間したら又、来る。それまで自分たちが、どうすべきかを、よく話し合っておけ。断っておくが絶対に反抗は許さんぞ。甘ったれるなよ」

修一は、散らばったロープや鞭を手にとるとドアをあけ、外から

しつかりと錠をおろした。もう間もなくピノキオとボロ武が帰ってくる筈である。

洋子の指導で三人のメス奴隷が、今夜どのような態度で三人の男を迎えるか。そして、そのあと、洋子や他のメス奴隷たちが、くり展げる痴態を思っ、修一の顔が、ほころんだ。

☆

☆

石島義夫は、Tホテルの一室で妻の鈴子と共に、胸を躍らせて待っていた。四日前、突然、電話がかかって来て、SMスワッピングをもちかけられたのだった。相手は、先日のSMクラブに出演した女の夫と名乗り、もしよろしければ、一夜、奥様と女とを取りかえてプレイを楽しみたいと申し込んできたのである。

以前、あるSM誌の通信欄でスワッピングの申し込みをして、二度ばかり楽しんだことがあったが、SMクラブでショーを演じた女ほど美しい相手ではなかった。それどころか、二人とも四十を過ぎた女で、妻の鈴子がまだ三十四才の若さなのにと、つい相手と比べて何だか少し損をしたような気がしてならなかった。それに初めての一回きりのことであり、女の方も何となく、ぎこちなくて、想像していたほど楽しくなかったこともあって、それ以後、相手の男の方から何度か申し込みを受けながら、二度と応じようとは思わなかった。

ところが、今日の相手は少しちがう。女とは先日、会って知っているし、和服のよく似合う細面の美人であり、それにM感度も上々で、かえって妻の鈴子の方が少し、ひけ目を感じるほどであった。相手は、もうすでに、どこかで妻を見たらしくて、大変、乗り気なようだった。それに相手は、あのSMクラブの正会員であるらしく

下手に断っては折角のチャンス逃すおそれもあるので快く応じたのだった。

ただ、妻は相手の男を全く知らないの、説きふせるのに少し手間取ったが、前二回のスワップで味をしめたのか、口ほどには、今日の日を嫌がっている様子はなかった。

「ねえ、いま、何時？」

妻の少し苛立った声に、義夫は腕時計を覗いた。

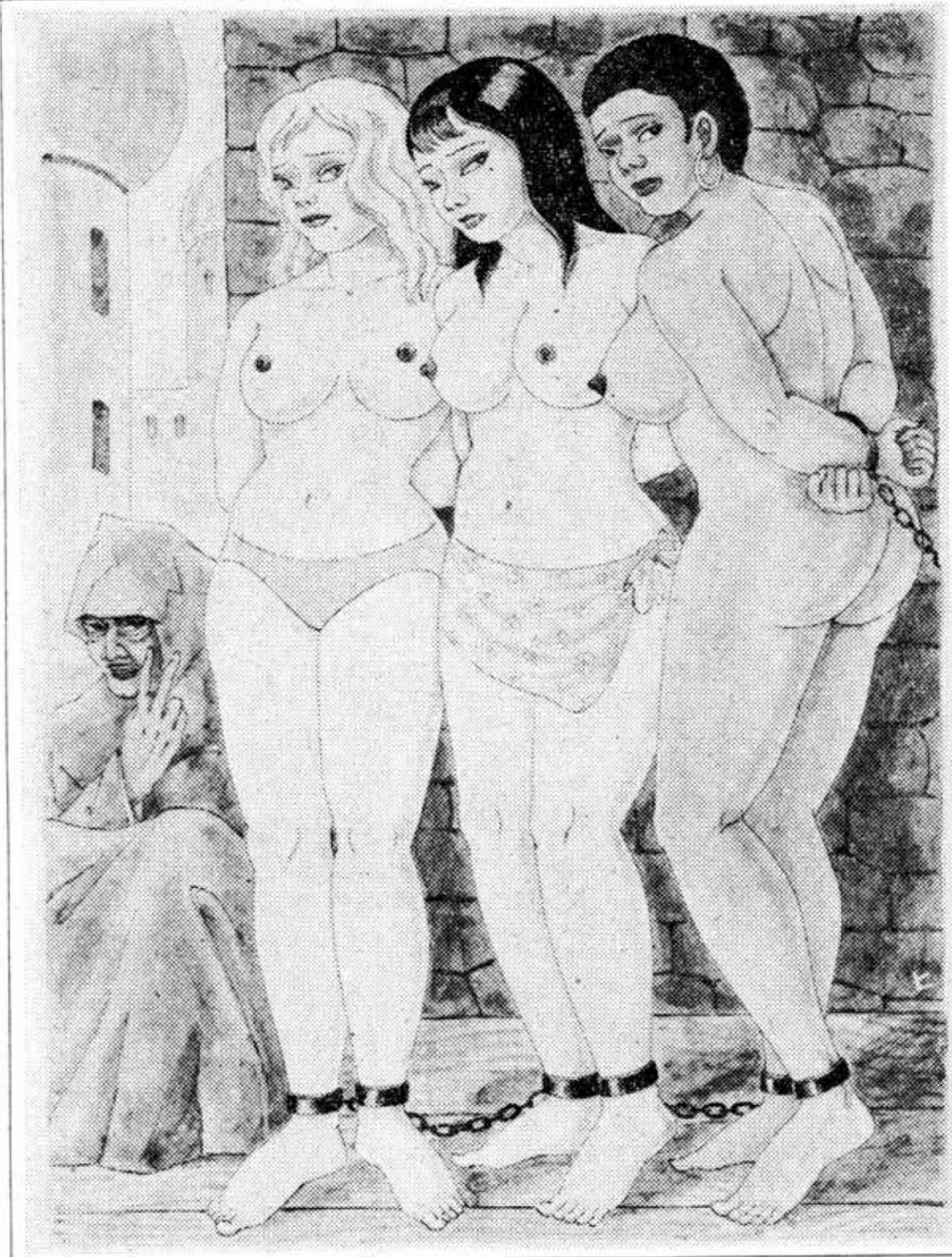
「六時五分だ。まだ、一時間もあるな」

約束の時間は七時である。相手は、もうこのホテルの一室にきているのかも知れない。七時ジャストに、この部屋に電話がかかることになっている。それを合図に、お互いに女を縛り上げ、部屋の鍵をかけて二十分後に、下の喫茶室で男同志でキーを交換する。そして、そのキーを持って、それぞれ相手の部屋に入ることに決めてある。

十一階建のマンモス・ホテルである。キーさえ持っていれば、誰がどの部屋へ入ろうが、誰も詮索はしないだろう。こんな安易な方法があったのを、今度、相手の男に教えられるまで気がつかず、前のスワップでは相手の男と、まず会って、何度も何度も打合せをして、途中で女同志を交換するという廻りくどい方法をとったことが馬鹿みたいだ。

先日のSMクラブでは自分の腕を見せるチャンスがなかった。今日こそは、あつと言わすようなプレイをしようと、もう何度も妻を相手に練習を、くり返してきた。こちらの方はともかく、相手の女が、どんな姿態で自分を迎えるのだろうか。それを思うと、ついわくわくしてくる義夫である。

……イメージギャラリー……『青空市場』……マエダ・ヒオミ……



と、ツインベッドの枕元にある電話が音を立てた。ビクンと妻の肩が、ふるえる。それを横目で見ながら、義夫はあわてて受話器を取り上げた。聞き覚えのある相手の声が、きこえて来た。
「もしもし。どうも、少し早いと思ったんですが」

全裸で貞操帯一つを身につけた妻を後ろ手にして手錠をかけると義夫はショルダーバッグを肩にドアの外に出て、しっかりとキーを廻した。
喫茶ルームでウェイトレスにコーヒーを頼んだ義夫は、ゆっくり

義夫は反射的に自分の腕時計を覗いた。まだ六時半を少し廻ったばかりである。

「いいえ、私の方は、かまいませんよ」

「そうですか。それじゃ、二十分後に下の喫茶ルームで。私の部屋は六階の××号ですから」

「はい、解りました。私の方は五階の××号です。それじゃ二十分後に……」

受話器を置くなり、妻が不安そうな声を出した。

「ねえ、何だか私、こわい……」

「大丈夫だよ。さあ、仕度しろ！」

それを振り切るように、もうプレイに入った時の声で義夫は命令を下した。

おずおずとスーツを取り、シミーズ一枚になったものの、まだ少し躊躇している妻に、

「何を、もたもたしてるんだ。早くしろ！」

義夫はショルダーバッグを引き寄せ、中から革と金具で出来た貞操帯を取り出すと、妻にはくように命じた。カチッと音をさせて貞操帯の鍵を締める。

「よし、後ろを向け」

と室内を見渡した。まだ相手は来ていないようである。

「あ、コーヒー」

後ろの声で振り返ると、見覚えのある男の顔が義夫にうつった。

「どうも、お待たせしました」

二人がけのテーブルに義夫と向き合った男は、いかにも商談でもしているような気軽な態度でキーを差し出した。義夫は、あわてたように自分のキーを出して交換した。

「あのう……」

義夫が更に、手錠の鍵と貞操帯の鍵が一緒についているキーホルダーを、おずおずと相手に差し出すと、ちらっと相手の顔に怪訝そうな影が走った。が、それも一瞬で、

「ああ、どうも……」

当然のようにキーホルダーを相手が受け取ったとき、ウェイトレスがコーヒーを運んできた。ともすれば慄えそうになる手にコーヒー茶碗を包みこみ、義夫は、わざとゆっくり、すすり込んだ。

「このホテルは、よく防音装置が来ていますから、少しぐらい派手に声を出しても大丈夫ですよ」

義夫がドキンとするような言葉を、相手の男は、さりげなく言っていた。

「それじゃあ、おさきに」

相手の男は、今交換したばかりのキーと、キーホルダーを右手に左手には小さなスーツケースをぶら下げて、ゆっくりと喫茶ルームをあとにした。義夫は、ちらっと男の持つスーツケースに目を走らせた。多分あの中には、色々な責め道具が一杯、つまっているに違いない。これから、あの男と妻が演じるであろう痴態を胸に描いた

義夫は、くそっ！ と、自ら望んだスワップでありながら、妻への複雑な嫉妬と、もうすでに自分を待っている筈の女に対して、激しい嗜虐の血を燃え立たせた。

ドアをあけると、部屋は真っ暗だった。後ろ手でドアをしめ、キーをロックしながら、確か壁の左手にあるはずのスイッチを、まさぐった。パッと部屋が明るくなり、目の前に、妖しく艶やかな女の姿が浮び上った。

「お待ちしておりました、御主人様」

薄いピンクの長襦袢姿で高手小手に縛り上げられた、あの舞台上で見た美女が、膝歩きで近づいてくると、義夫の靴に音をたてて唇を這わせた。

「よし。顔をあげろ！」

義夫は芝居がかった、こわい声で声を荒げた。

「はい、御主人様」

「いや、御主人は、やめて貰おう。そうだな、旦那様とでも呼んでもらおうか」

「はい、旦那様。どうか今夜は、お心のままに奴隷の私を、もて遊んで下さいませ」

多分、教えられた通り一生懸命、しゃべっているのであろう。ぎこちない言葉の端々に、ひたむきなものが感じられ、義夫は、妻とSMプレイを始めたばかりの夜のような新鮮な悦びが、急激によみがえってくるのを感じた。

「よし、立て」

「はい、御、いえ、旦那様」

女は後ろ手の不自由な姿勢で立ち上がり、義夫と視線を合わせる

と、恥かしそうに、まばたきをして目を閉じた。

義夫は、長襦袢の裾に両手をかけると、さっと左右に大きく引きめくった。

「あ、あっ」

女は咽喉の奥から絞り出すような声を上げたが、長襦袢の下には義夫の予想を裏切って薄いブルーのパンティがあった。だがパンティの上から、股間を通して締め上げている白い腰紐のあることに気がついた。

「うむ、腰紐のふんどしか。なるほど、さすがだな。どうだ、締めり心地は。ええ？」

義夫は、そのふんどしの縄を何度も、なぞった。

「ああっ、ひいっ！ ああっ」

女は、義夫の手を無意識に避けようと身を、くねらせる。

義夫はショルダーバッグから電動コケシを取り出し、電池のスイッチを入れると、女の足のふくらはぎから、少しずつ上へ上へと移動させ始めた。ビビッと、単調な羽音にも似た震動音は、腰紐のありかを求めるように唸り続ける。

「あっ、いやっ。御主人様、おゆるしを……」

「旦那様だ……」

「ああっ、おゆるし下さい。ヒエッ！ だ、だんな様……」

☆

☆

修一はドアをロックすると、じっと室内を見渡した。石島の妻はベッドの蔭に隠れるように後ろ手錠で床に正座していた。じっと俯向いて、身を固くしているのがわかる。修一は、どさっと、その前にスーツケースを放り出して命じた。

「そら、それをくわえて、ついて来い」

修一は、さっさと着ているものを脱ぎすて、シャワー・ルームへ入って行った。

しばらく待ったが、一向に女は入って来ない。

「何をしている。早くこんか！」

女は、後ろ手錠の不自由な姿勢で重いスーツケースを口にくわえようやくシャワー・ルームの前に、たどりつくくと、くずれるように正座した。

「ベッドの上にキーホルダーがある。くわえてこい」

と、容赦のない命令が下る。女はもう一度、キーホルダーを口にくわえて戻って来た。

修一の、じっと見つめる厳しい視線に、女の、貞操帯一つを身にまとっただけで、口にキーホルダーをくわえ、後ろ手錠の姿を身の置きどころなく、くねらせる姿が映る。

修一は今、このホテルの一室で、石島に責められている洋子の姿を、だぶらせて見ていた。

「何を、つつ立っている。坐れ！」

ドキッとするほど鋭い声で叱咤を浴せられた女は、崩れるようにその場に正座した。

修一は、今頃、石島の責めに羞恥と快楽の悲鳴をあげているであろう洋子を思い出すと、つい目の前に正座している女を思いっきり責めさいなまずにはいられない理不尽な憤りがこみ上げてくるのを抑えることが出来なかった。

——(第七話 了)——

——美鼻凌辱に憑かれて……V——

鼻

責

考

杉 谷 潤 三



顔の中央に鎮座します「鼻」の姿の良し悪しこそ、美人たる第一条件であるといっても過言ではなからうと思う。隆鼻術の世に盛んなるゆえんも、ここに存するのであろう。ところで小生にとっては、美人といえは責

め、責めといえは美鼻、ということに相成るのであって「鼻責め」こそ、数あるプレイ中の最高峰、責めの急所にして肝心要の最大事であると信じているのである。

当然、この華麗を極める「美鼻凌辱」には身を焦がすほどの憧憬と感激を覚える次第であるが、美鼻の魅力について、ここに少々、女優の面々に御登場願ひ、サンプルとしての鼻を拝借して書いてみたいと思う。

一般に美しいとされる鼻であっても、すべてが、小生の凌辱欲を、かき立ててくれるとは限らないのであって、次に列举する鼻種はたとえそれが、人により「美鼻」と評価され得たとしても、鼻責め対象としての魅力には欠け、小生の食指は動かないのである。

つまり、鷲鼻、団子鼻、獅子鼻、蓮切鼻、大鼻、小鼻、扁平鼻、スキージャンプ鼻、吹出物のある鼻、色艶のない鼻、傷のある鼻、

鼻孔の見えすぎる鼻……等々で、例えば美鼻といっていっても知れぬ鼻の持主、真理アンヌ、天地真理、小川真由美、山本富士子などが、この中に、あてはまるのである。

小生が強く惹かれる美鼻とは、まず、色の白さ、光沢、なめらかさ、端整さ、柔らかさ、温かみ、気品、馥郁たる色香の漂い……等々の条件を満たすものであって、これを女優の中から探し出すとすれば……

いの一番には山本陽子風の鼻である。これこそ、まさしく庶民的な温かみ、柔らかさを備え、ポツチャリした肉の付きようといひ可愛らしさといひ、まことに鼻責めにもってこの理想鼻だと思ふのだ。この種の美鼻は、どう弄ぼうとも素直にいうことを聞く従順そうな佇まいが感じとれるところがよろしい。ちょうど若尾文子タイプの鼻のおとなしさ、控えめさが感じられ、欲するままに翻弄し、そのクニヤリとする鼻頭を下から上へと思うさま突き上げ、愛らしき豚鼻を現出せしめて賞味したい気持にさせられる。

光沢ある艶やかさ、端整さ、高貴さでは、土田早苗風の美鼻が挙げられよう。なんと滑らかで艶っぽい皮膚であろうか。鼻線は高貴を想わせて流れ、鼻肉の如何にも、しなやかさを感じさせられる。この美鼻を強引に前後左右上下に操れば自由自在に屈曲し、いかに

も驕慢そうなその表情が無残至極にもモミクチャに崩れ去り、天性の気品もどこへやら、すっかり別人の如き様々の畜相にされて呻き声を挙げるであろう。

次に注目したいのは、十朱幸代風の鼻である。この鼻種は美鼻の輪郭ではないであろうが、低くて愛らしくセックスアピールを備えているといえよう。小生には「メスの性臭を漂わせている鼻」と感じられるのだが、このタイプの非知性的な鼻型は改めて崩すまでもない。もともと崩れかけているのだから、ほんの少々「目もあてられぬ崩し」の手を加えた後、散々に味覚を満喫、鼻匂を嗅いだ上で牛に使う大きな鼻環をガッシリとはめ込んでやり、この低き愛鼻が引き千切れるほどに、ぞんぶんに引きずり、引き回してやりたいような気がするのである。

色白く、肉づきもよい、女王のような気品ある美鼻は、有馬稲子、今陽子風の鼻で、極めて美形で高貴でさえあるからこそ、一層、その激烈な変形歪曲の愉楽が大きい。この女王鼻に対する小生の責め願望は果てしなく拡がるが、顔面中央を水平に力の限りタコ糸を巻きつけ、二十巻きほどして結びとめた上、その美鼻を左右いずれかに片寄せせて、ヒラメの如き鼻孔配置に変えられないものかと想ってみたり、更には、小生発案の「豚鼻化装置」を施してみたいものと夢見ている。こ

の装置なるものを美女に施した構図で説明すると、まず、額に巻きつけて締めあげたベルトがある。このベルトに直交して繋がっているもう一つのベルトがあり、これが顔の中央に垂れていて、その先端に着いている二つの鉤形金具が、押し上げた美鼻の孔を引っ掛けて吊り上げ、固定している……という、極めて手軽なものであるが、さぞや、すさまじくも興味深い情景であろうと胸がおどるのである。また更に、そのままの浅ましい豚鼻で歌を唄わせ、愛を語らせれば、さぞかし面白い眺めであろう。かつて高貴に匂った鼻孔は、今やみじめに縦長に引き伸ばされ、苦しげに喘ぐ美醜混淆の白き牝豚は、深々と刻まれた横じわ入りの惨めたらしく縮められた鼻梁をやがては次第に桃色に染めて、めくれ上がった上唇を慄かせながら何事かを空しく訴え、涙と共に哀願することであろう。

清純派、佐藤オリエ、白鳥みずえ風タイプの鼻には、その艶といい、鼻孔の丸い形といい、実に色っぽい魅力を感じる。このタイプの美鼻を想うとき、あの滑らかで光沢に満ちた鼻の頭を、ぐりぐりと、こね上げ、こね曲げ、こね回し、如何にもおとなしげに見える鼻孔の千変万化の様相を楽しみたい欲望を覚える小生である。あの鼻毛を丹念に、毛抜きで残らず引き抜き、鼻くそなどもお湯で綺麗に洗い去り、そして明るい光にその鼻をかざ

してみれば、さぞ、どこもかしこも、かげりのない柔和で温かな美しい鼻肉姿となっていることであろう。この美鼻を、改めて完全な扁平鼻に押しつぶし、あるいは、めくり上げて捻り回した後、このような仇っぽい罪深い美鼻に対する罰として、ぴったりと特製の洗濯バサミで摘んで封印を施し、香わしい鼻息も洩れないようにしてやりたいと思うのだ。

朝丘雪路、大信田礼子、木の実ナナ風の鼻形は、たしかに三流に近い獅子鼻といえそうではあるが、その色香の故に救われるタイプであろう。このテの鼻を責める場合の小生の青写真としては、まずその鼻頭を押し上げて鼻孔の全貌を鑑賞し、双つの鼻翼を、絹糸のついた針で鼻頭中央部に縫いつけてしまい、閉じられた鼻孔からの鼻声を楽しみたいということになるのだ。さぞかし、岩下志麻よりも悩ましい声になることだろう。

山口淑子、篠ヒロコ風の鼻は、その先端が割れている感じで、如何にもエロティックな微妙な陰影をたたえているタイプである。このような色気を絶えず振り撒いているような鼻頭は、大いに圧し潰して悲鳴を挙げさせてやりたい。きつと可憐で、なまめかしい悲鳴であろうと思う。

小生の最も魅力を感じる鼻、それは、田代美代子タイプの美鼻である。このタイプのものは、色、匂い、音色、形、手触り、皆、良

ろしい。すべてが美として迫ってくるような気がする。この種の美鼻の持主はグラマーが多いから、鼻責め前提の全身緊縛も大へんに効果的である。全裸に剥くと、びっくりするような満々たる乳房、山のような臀部、くびれたウエストが小生の目を、うばう。どうしても縛ってやらなければいけないような気持ちにさせられる。大急ぎで二ダース程の真赤なしごきを持ってくる。柔らかな肌は小気味よく、このしごきを受け入れ、無数の小さな丘を現出することになる。小生の縛りかたは、後手高手小手のガンジガラメ縛りである。それに、豊満な肉体には、苛酷なばかりの強烈きわまる三重菱縄股間縛りの方が、よく似合うと思う。ひしひしと締めあげた嚴重な、いましめというものは、見事な美体を更に美しく引立てる役目をする。太腿の上端辺りもグイグイ締め上げて、くびり、そのしごきを、たすき掛けに肩に回して華麗に仕上げると、芸術作品の完成である。小生が全身緊縛をする時には、いつも真っ赤な、しごきを使い、そのしごきの、ところどころに鈴を付けることが多い。

如何に豊満な柔肌といえども、力の限り締め上げた厳しい緊縛には苦痛を覚える筈である。必ず呻き声と共に芸術作品が、うごめき始める。すると忽ち玲瓏たる鈴音が湧き上が

って来て小生をうっとりさせてくれるのだ。その鈴音を味わうために閉じていた目を開くと、緊縛美に満ちあふれ、はちきれんばかりの凝脂の塊りにも似た光沢に輝く裸身が、更に小生を恍惚の境に誘ってくれるのである。

縦横に走る真赤な鈴付きのしごきは、白磁の如き柔肌を噛み、そのうごめきにつれて益々強く責めつける。豊満な裸身は呻き悶え、空しい哀願を繰り返した末に、ついに為すすべなきを悟り、諦めきって静止する。忽ち、豊満美と緊縛美に加えて、えもいえぬ哀美がその美体に漂い始める。

小生は、この哀れな凝脂の塊りを立たせると、歩行困難なるを百も承知で追い立てる。巨大な白尻を青竹で叩き、あるいは足で蹴りとばしつつ無理矢理に歩かせ、有無をいわさず浴槽に突き入れる。この浴槽の湯は、酔がぞんぶんに利かせてあるのである。文字通りの酔漬けにするのだ。諦めた態度であった緊縛美女が、強烈な酔の匂いに顔を振り回してあばれ始めるのを押さえつけ、がっちり例の「豚鼻化装置」を施してやるのである。ここで、ようやく、小生の当初の責め計画図の完成を見ることになるのだ。

魅惑の美鼻は見事に吊り上がり、引き伸ばされた双つの鼻孔に強烈な酔の匂いが襲いかかる。しかも首から下はドッポリと酔漬けの

ままなのだ。まさに魅惑の酔牝豚人というところ。かくて美女は、皓齒をカチカチ噛み合せ、後手高手小手の緊縛肢体の方々に鈴を慄わせ、畜生に堕ちた観念の涙にむせびつつ、酔と共に全身を包むマゾの喜悦に、のめりこんでゆくことであろう。

以上が、大体、小生の「美鼻凌辱青写真」であるが、幸いにして我が愛する新妻は、最後の田代美代子タイプの「美鼻女」なのだ。なるが故の結婚ともいえるが、最後の項を長々と書いたのは、確かに、その故なのだ。全裸三重股間縛り、両太腿付根縛り、両肩たすき掛け縛り。そして、緋の鈴付きしごき、酔漬け責め、更に豚鼻化装置……等々は、決して、願望のみの夢物語ではないのである。我が愛する新妻の「酔牝豚人」化の完全屈服肢体実現を想う時、小生の胸のときめきは、はなはだしい。小生の計画通りの緊縛を受けて全身の映る鏡の前で嬉しい口惜し涙にくれる我が妻、可奈江を想いつつ、更に、海老に折り曲げた酔牝豚の柔肌を丸ごと平らげる瞬間を想いつつ、ひとまずペンを置くことにするが、この桃源境に遊び得た後は、被虐妻、可奈江の「如く」された心情を素直に綴らせ、告白文として送稿させるつもりでいる。そして又、豚鼻化装置にて仕上げた上で、塚本鉄三氏のカメラの前に奉納することも真剣に考えていることを、つけ加えておこう。

〔M 女 通 信〕

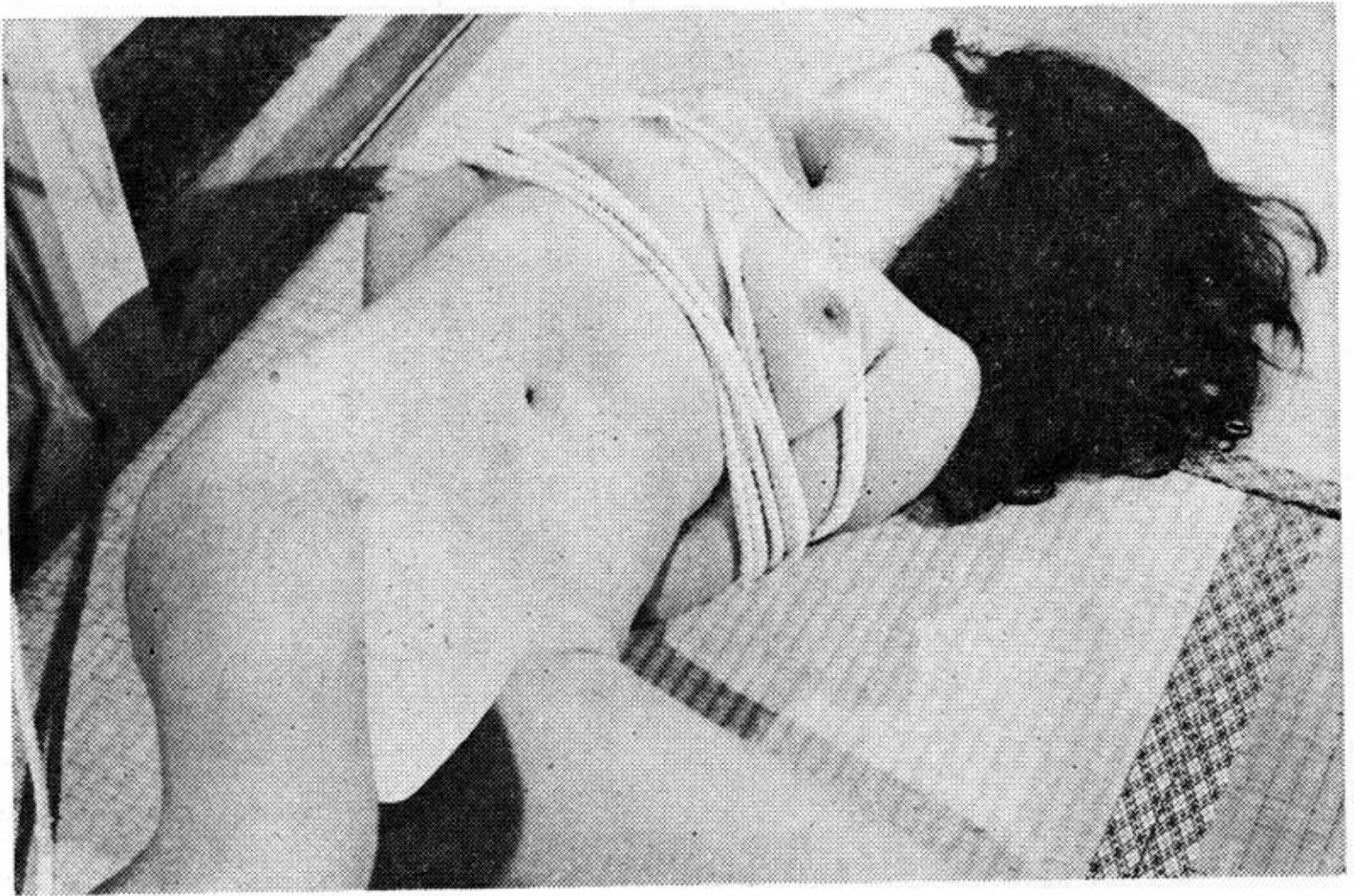
浩子は、ふるえる小羊です

たか
高

むら
村

ひろ
浩

こ
子



「私は昭和二十五年一月十八日、四国の高松からポンポン船で十五分ばかり行った女木島という離れ小島で生まれました」

これは、私が始めて書いた△告白▽の書き出しでした。それから、私は、もう何度、そんな文章を書いたことでしょうか。

奇クを書店で買い求めたり、プレイを経験したりした時、むしように書きたくなって、ペンを走らせたりしましたが、それは、一昨年頃が一番、激しかったように思います。

口下手な私は、電話をしたり、逢って話をするということは苦手でしたので、原稿の外に、お手紙も、よく書きました。

手紙や原稿を書いている時の方が、自分の気持を、よく表わせるように思えるのです。三月号で、久しぶりに『唄を忘れたカナリヤの唄』（題は編集部でつけて下さいました）という文を載せていただきましたが、その時に書きましたように、私は二十三才になり、故郷へ帰ったら、結婚にふみきろうかと、考えておりました。

それで、最後の思い出にもと思い、SMプレイを、お願いしました。私の身体を思いのままに、無茶苦茶に弄んでほしいという願いは、十二月はじめの、あの寒い日に、かなえ

られて、私は何カ月ぶりかで、熱い血をたぎらせることが出来ました。

空想癖の強い私が、平常、胸の中で考えておりました事を、乱暴な仕草で、忽ちに行われて、私はマゾの喜びに、くたくたになっ

てしまいました。
逢った時から、私の身体は、いすくんでいました。彼の目で、じっと睨まれると、私はがたがたと膝がふるえて、どうする事も出来ず、両手で抱きすくめられて、はじめて、安心した気持になれたのです。

私は暮れからお正月にかけて、割りとき長いお休みをいただきましたので、故郷の女木島へも帰りましたし、金比羅さまにも、お詣りしてきました。そして足を伸ばして松山まで行き、道後温泉にも入ってきました。

もう二度と、大都会へは戻ってこないかもしれないと思っていた私でしたのに、やはり一月の十日には、大阪へ帰ってきました。

S Mプレイをすることは、なんとか辛抱できても、奇クを読むのを止める事は、どうしてもできませんでした。なんとか、この道から離れようと幾たびも思い、そして、実行もしましたが、どうしても、奇クの魅力からは逃れる事はできませんでした。

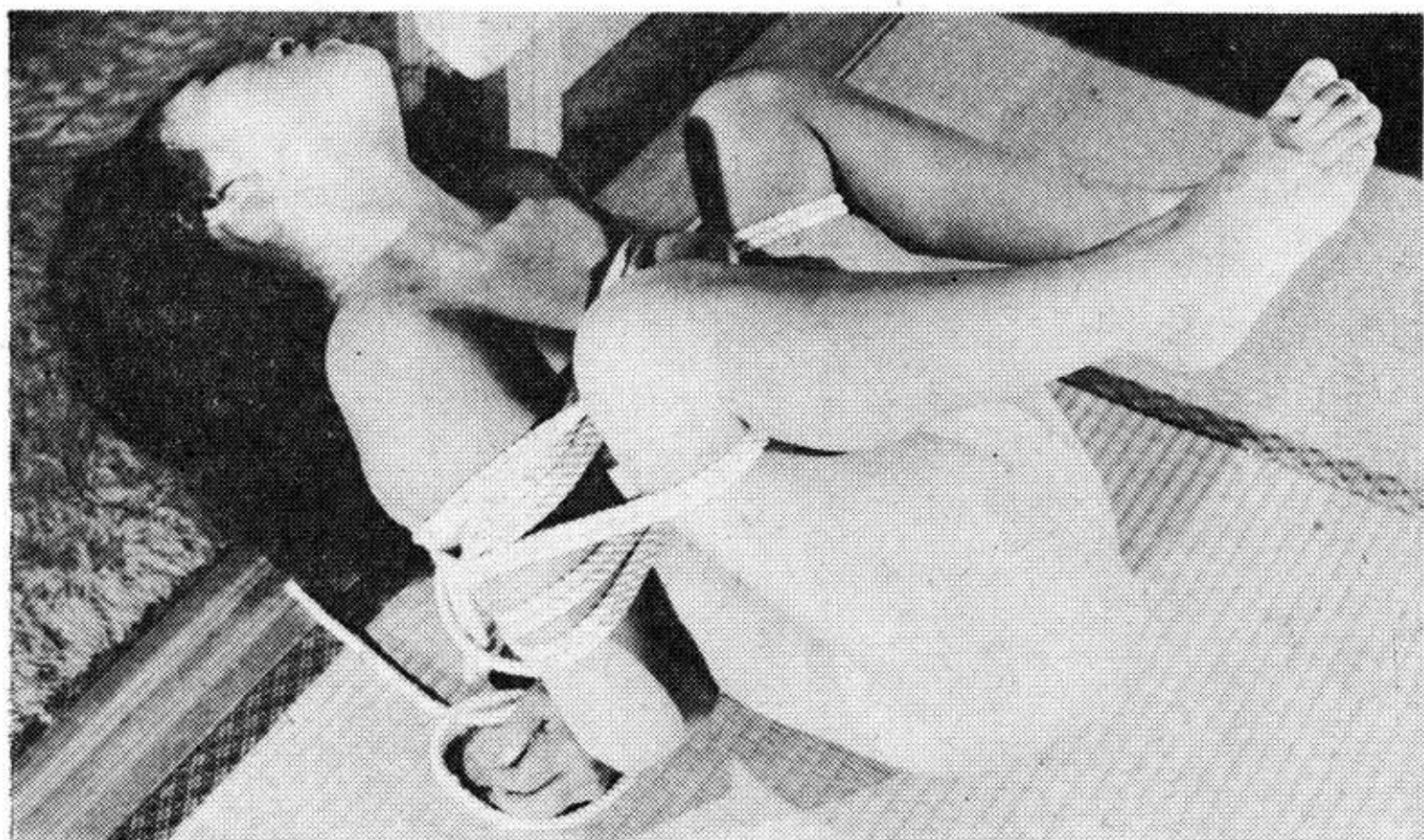
S Mプレイの方は、私に直接、お便りを下さった方と、四度、五度と経験をしました。が必ずしも、私の空想していましたがイメージと合致はしませんでした。私の期待が大きかっただけに、その失望も大きかったです。

誰とでも、責められさえすれば、それで、自分のマゾが100%満足するとは私も思っておりません。でも、私の気持がこのように冷えきってしまうとは予想していませんでした。

最初は私の我ままのせいだと、自分で考えていました。これ程、いじめられたいと願っている自分の気持が、何故、相手の方に通じないのだろうかと思情なくなりました。

そんなわけで、S Mプレイをしたいプレイに身も心も徹したい、誘拐されていじめ抜かれたいと、強く願っていましたが、実際は諦めて、辛抱してしました。しかし、奇クの方は、毎月、月末になると、どうしても、求めずには、いられません。

苗木陽子様や南加津子様、それに玉木章子様など、同じ気持の同性の方が





沢山おられることは、何より心強い事です。

私の事を奇ク誌上で、いろいろな方が書いて下さいましたが、その中でも、昭和四十七年七月号に書かれた城崎恭介様の「渚責めの構想」(おれも責めたや 高村浩子)に、一番強く心をひかれました。何故、城崎恭介様の胸にとび込んで、なぐさみものにしていただかなかったかと今になって後悔しています。

城崎恭介様。もし、この私の文章を、お読み下さいましたら、是非、私に一筆のお便りを賜りませんかでしょうか。

城崎様は、架空体験記によって仮に、私を責めようとなさいました。でも、私は実際に責められとうございます。このなぐさみものにされたいという強い願いは、この頃になって、またまた強まってきました。

城崎様の創作の筆を折らせてしまったという私の拙い告白「M女

通信」が、もし本当に、その原因でしたら申しわけございません。実際に、その後、城崎恭介様の作品が、奇ク誌上に載っており皆さんの気になります。

私は城崎様の書かれた、あの文章のようにして、いじめられたいと思います。

なんとなくロマンチックで、あんなにされたら、きっと私はしびれてしまうでしょう。

城崎様は、私の事をロマンチストだと言って下さいました。SMの空想ばかりしている私を、そんな風に、お考えになられたのでしょうか、実際に、もっと動物的で、生ぐさい感じさえする私なのです。

被虐の妖精と城崎様がおっしゃって下さったにしましては、私は自分の理想には程遠いマゾ性を恥かしく思うのです。それでいて、これ程までに、私のM性、M女通信に恋いこがれて下さる城崎様に、自分の心と身体のすべてを捧げてしまいたいのです。

私に無理心中を強要されて、遺書としての「渚責めの構想」を奇ク誌上に書かれ、そして、実際に筆を折られてしまったのです。

せめてもの高村浩子の城崎様へのつぐないとしては、城崎様の無理心中の強要に応じて私も、それ以来、奇ク誌上では死んでしまい

ました。

と申しますのは、四十六年五月号に「被虐こそ私の夢」を初めて書かせていただいたてから六月号に「妄想の自画像」四十七年二月号に「プレイに徹したい」三月号に「私は誘拐されたい」四月号に「被虐の初夢」五月号に「私は縛りのモデルになりたい」六月号には

「浩子の近況のことなど」と連続して載せていただいておりますのに、城崎恭介様が七月号の「渚責めの構想」を發表されてから、私は筆を絶ってしまいました。

高村浩子は城崎恭介様の心中のお申し出でを快くお受けして、合意で心中してしまっただけです。この世の思い出に私は城崎様に、身も心も捧げて、SMの魔王の一奴隷となつて、体がバラバラになつてしまうような責苦を受けようございました。

城崎様のあの「渚責めの構想」の文章を拝見しただけで浩子は、気持の上でも、体の

上でも、受入れの態勢が十分だったのです。

こんな状態で責めを受けたら、どんなに素晴しかったでしょう。浩子の事を、水商売に転落するかも知れないと、お門違いの御忠告下さった方もございますが、その方に比較して、城崎恭介様は、なんと明るくて、真っ直ぐな気持の方なんでしょう。

このような方となら、浩子は、喜んで心中の求めに応じてしまいます。そして、高村浩子は城崎様が筆を折られたのと同時に、一緒に死んでしまったのです。一年半の間、じっと我慢していたのです。

それなのに、昨年の暮れになって、これがもう最後だと、都会にいる最後の機会だと考えて、とうとう、禁を犯して又責められてしまいました。

部屋へ入るなり、洋服を着たまま、いきなり襲われた私は、それ以来、高村浩子として蘇ってしまったのです。最後のプレイを思い出し、故郷へ帰ってしまったおもうと思つたのです。思い残すことなく、これで故郷へ帰れたらそれでいいと思いました。

公害のない澄んだ青空、おいしい空気。新鮮な魚や野菜大都会では、すっかり失われたものが、田舎にはありました。二十日ばかりの間、私はそんな静かな雰囲気の中で、のんびりと過していました。



もう二度と、大都会へは戻るまいと決心して
いました。

それなのに、どうでしょう。夕食が終って
一人で海岸の波打際に立った時、体の奥底か
ら、あの、いつもの誘惑が、じわじわと湧き
起ってきたのです。

なまじっか、別れの思い出にと経験した、
あの十二月初めのプレイでの強烈な印象が、
どうしようもなく、私の体の柔らかい部分を
さいなみはじめたのです。

あたりが静かであるだけに、あの時の素晴
しい快感だけが、ふっふっと燃えあがってき
たのです。その妄想を振り払う事は、浩子に
は、どうしてもできませんでした。

もう一度だけ、もう一度だけ、あの体全体
がローのように溶けてしまうような恍惚とし
た境地を味わいたいと思って、再び、海を渡
ってしまいました。

大阪へ着くなり、私は塚本様にお電話して
しまいました。「この前のように、四時には
帰りたいと申しませんから、今度は、お気の
すむまで責めて下さい」と。

金曜日の朝の事でした。吐く息も真白で、
零度近い気温でしたのに、私は興奮で額に汗
を浮かべていました。

「今日は二人の方と午後逢う約
束をしているのだが仕方がない。
貴女は、わざわざ、出てこられた
のだから、先約の方は事情を話し
て、お断りしましょう」

彼は何の予告もなしに電話した
私に、少し迷惑そうでした。私は
「すみません」と、小さく詫びて
いました。

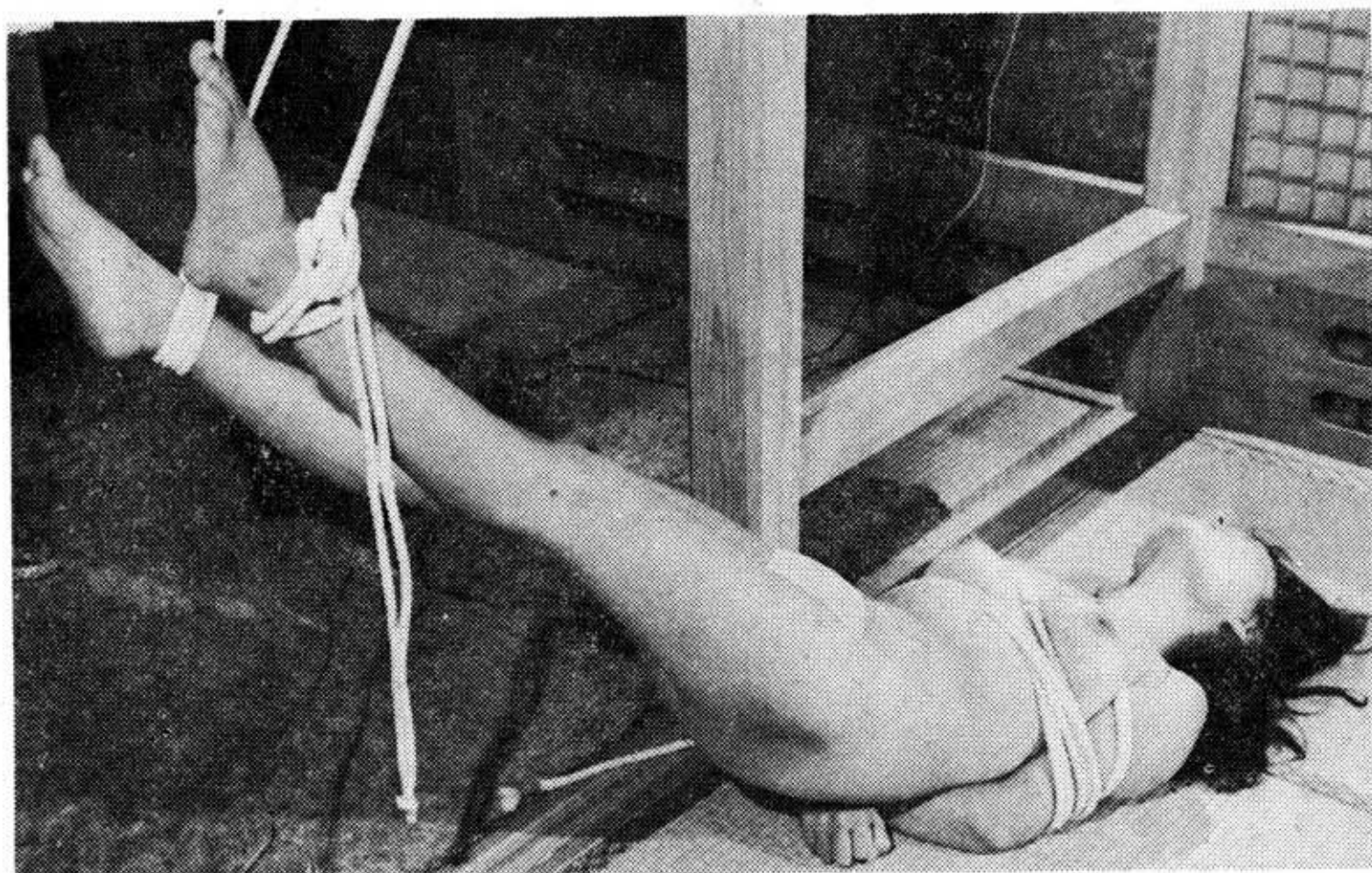
今年になって、浩子は、又も責
められてしまったのです。

それも、六時間あまりも、ぶっ
続けで、休みなしで責め続けられ
ました。

彼も休もうとは言ってくれず、
私も休ませて下さいとは申しませ
んでした。

十二月の時と同じ様に、部屋へ
入るなり、責めのプレイは開始さ
れたのです。入浴もさせてもらえ
ませんでした。テーブルの前のお
茶とお菓子を前にして、正座して
いる私は、後から抱きつくように
して襲われたのです。

「いやいや、もっと、あとにして



……」

私は激しく抵抗しました。昨夜、船に乗ってから、体をきれいにしていない私です。その前に、お風呂に入りたかったのです。

でも、彼は許してくれませんでした。

荒々しく、私のセーターやスカートを脱がそうとするのです。私は、そうはさせまいと両膝に力を入れて、ぴったりと合わせ、両肘で胸を抱え、両手では乳房を押えて前かがみ

になっていました。

でも、首すじに粘っこい指が這ってきて、彼の熱い息が私の頬にかかりますと、私は操ったさの余り、思わず仰向けにころがってしまいました。ゆるんだ内股へ手が差し込まれてしまいますと、私の全身の力が急になくなってしまいました。

もう、こうなったら、私は自分の着ている物を、少しでも早く脱がしてほしいと思いま



した。抵抗しなくてもよいように、両手を後手にして、きつく縛ってほしい。そして、その上で、自分をナグサミモノにしてほしい。最も、みじめな状態で、あられもない格好でそうされたいと願っていました。

そういう願いに、私の体は早くも、潤んでいましたので、その事を知られるのが、とても、死ぬ程、恥かしいので、それを見られまいとして私は必死に拒み続けました。それが又、私の気持を高めてしまって、私は、もう、どうしようもない状態にまで、なってしまいました。

それから、私は、もう何度、失神してしまったでしょうか。縛られたまま、ぐったりとなってしまった事までは覚えていますが、それから後の事は、はっきりとは、どうされてどんなになったのか、わかりません。

六時間あまりの時間が、あっという間に過ぎていました。責め続けられて、気がついた時、こんなに時間がたっているのかと、驚いた位です。別れしなに、私は、「もう一度、次に責めて下さい」と、お願いしました。

誌上に出ていますS・M研究会のことにも、私は興味を持っています。そんな方々の前で責められたら、どんなでしょうか。

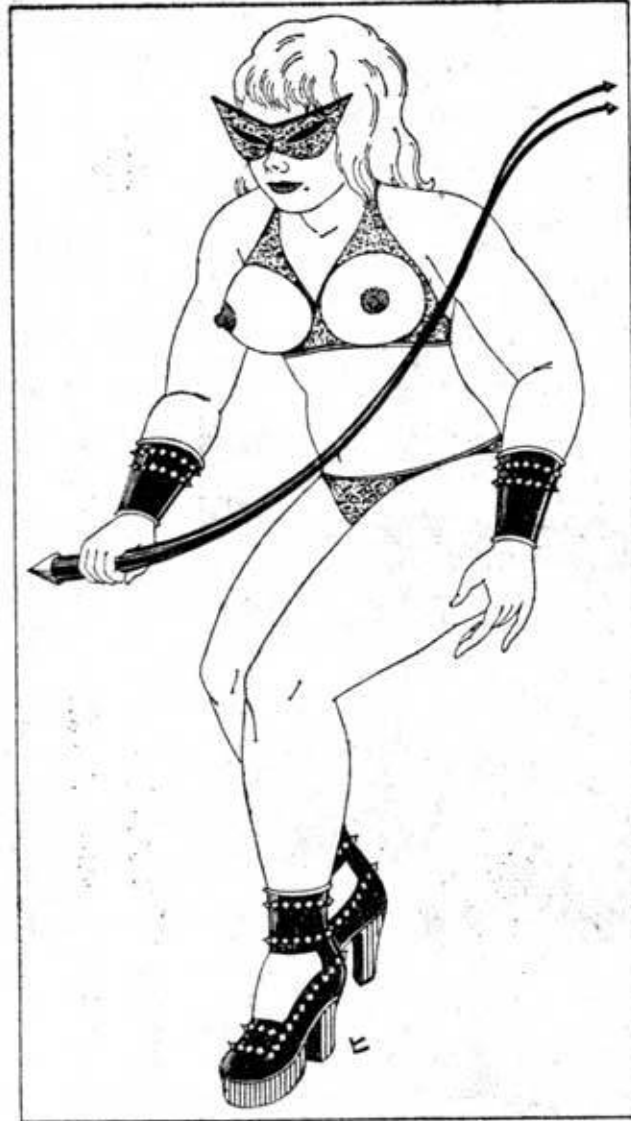
連載・M派交友録 (五十)

躍る牝豹

△加納吟子の巻(1)▽

鬼山 絢策

カット・マエダヒオミ



イヤな奴

新宿三丁目から二丁目寄りに曲ったビルの地下に「マドンナ」というバーがある。黒田氏の行きつけのバーで、あけみという

Sの女の子がいるというので、黒田氏と画家の岩見崇氏と三人で行ったが、お目当てのあけみは休みでいず、黒田氏は電話で、ヤプーシヨの女王さまをやったアングラ劇団の女優、加納吟子を呼び出して、来てもらった。

ヤプーシヨの時、この加納吟子を肩車にして奴隷の接吻を演じたヤプーが、岩見氏だったのである。

四人で楽しく飲もうと思っているところへやはり画家の佐戸崎昂が現れた。

美術学校を同期で出た佐戸崎と岩見とは、いろいろの面でライヴァルであった。

だが、佐戸崎はS型の人間であり、岩見はM派と、対照的な性格だった。

布施明に似た端正な容貌の佐戸崎昂は、酔うとその顔とは対照的に野卑な言葉がポンポンと出て、温厚な岩見崇を執拗になぶるので見るに見兼ねた吟子が、岩見に同情して「岩見と一緒に帰ろう」と言い出した。

振られた佐戸崎は怒ったが、それは見たほどではなかった。と言うのも、吟子を岩見に取られた——という感じは全然なかったからである。

——岩見に何ができるものか。この男のでき

ることと言えば、舐めることと吸うことだけだ――。

つまり、ただ吟子が自分の意に従わず、つら当てがましく岩見と帰るといふ、そのことだけが癪にさわっているのだった。

佐戸崎は吟子の腕を引っ張って何度も椅子に座らせたが、とうとう、それを振りきって吟子はボックスから立ち上がり、

「岩見さん、送ってね。サ、帰りましょ」と促した。岩見は、チラと佐戸崎の顔色をうかがっただけで、席を立とうとしない。

「サ、行きましょよ、岩見さん。あたしと一緒に帰るのがイヤなの？」

「イ、イエ、そんな……。光栄です……」

「じゃ、サ、ホラ、早く」

焦れっただけに吟子は岩見の腕をとって、ボックスから引きずり出すようにした。

「この頃は女が男をかつさうんだからな」佐戸崎は吐き出すように言った。

岩見はヨロヨロよろけながら、

「そ、それじゃ、鬼山さん、黒田さん。失礼します」

背の高い吟子に腕をとられて小男の岩見が引っぱられて行くと、余計、小さく見えた。

「あんまり、あんたが、からかうからよ」

マドンナのママが、さとすように言った。

「今晚は随分、酔ってるのね。酒ぐせが悪いんだから、あんたは」

「フン、俺は岩見にサービスしてやってるんだぜ。ああやって、からかってやると、奴は内心、喜んでるんだ。そこまではママも知らねえだろう」

「知ってるわよ、そのくらい。けどさ、こうして皆さんのいる前でやられちゃ、いくら何だって羞かしいわよ。そこんところを汲んでやらなくちゃ……」

「だから、ママは知らねえと言うんだ。奴はそういう風に、より羞かしいことを好むんだよ。もう少し居りゃ吟子の足でも舐めさしてやろうと思ったのに、皆さんも面白いショーを見そこないましたね」

「そりゃ残念だったなあ」

と黒田氏が調子を合わせた。

「おい、ママ。今晚、俺とつき合わねえか」

「なにそれ、あたしを口説こうって言うの？」

ムードないわねえ、皆さんの前で」

「俺、本気だぜ。この店へ来るのも、ママが目当てなんだからな。よう、俺と寝ようよ、ママ」

「寝てもいいけどね、あたしの亭主に見つか

るとコワイよ」

「アレッ、亭主が、いたのか。そりゃ、なおいいや。ママ、頼むよ、今夜」

「あたしや、かくれて浮気するのはイヤだからね、亭主に電話で断っとくからね」

「ああ、その方がいい」

「あたしの亭主、知ってるの？」

「知らねえよ、そんなもの」

「安東組の、般若の辰ってケチな野郎だけどさ、いままで二人殺してムショから出たばかりだからさ、まさか出たばかりで、また戻るのはイヤだろうから、まあ手荒なことはすまいと思うけどね」

ママは電話の受話器をとりあげてダイヤルを廻しはじめた。

「かくしごとのきらいな男だからね。あたしは何でも断っておくよ」

「おいおい、分かったよ、やめてくれ」

佐戸崎は立ち上った。

「帰るの？ じゃ、お勘定」

「つけとけよ」

「ダメよ、こないだも、あるんだから」

佐戸崎は返事もせずパイと出て行ってしまった。

「ほんとにイヤな奴ですよ。うちへ何度、来

たか分かんないけど一度も勘定、払ったことないんですからね」

「ヘエ、ゴリッパですな」

「冗談じゃないわ。いつも岩見さんに払わせてるんですからね」

その時、電話のベルが鳴った。

岩見氏からで、黒田氏が出た。

「いま「ヤプーの館」に、二人でいるんですよ。よければ、これから来ませんか」

時計を見ると十二時半だった。まだ終電車に間に合う。それに、ばかに眠くなった。

「もう遅いから失礼しますよ。悪いけど、お二人に、よろしく言っといて下さい」

「冷静だなあ、鬼山さんは」

黒田氏は言葉で、ほめながら、その目は軽べつしたような、まなざしであった。

つまり私の臆病さを嗤ったのか、「突っ込みのたりなさ」を不甲斐ないと見たのか、要するに私には、もう一つ「若さで突っ走る情熱」が欠けていたので、いつもあとで「あああの時、一緒に行けばよかった」と後悔することがあるのである。

アングラ劇団

一週間ほどして、佐戸崎昂から封書が届い

た。封を切ってみると招待券をはさんだ手紙が出て来た。

「先日は大変失礼しました。酔っていたものですから勝手なまねをして、御迷惑をおかけしたことを思います。」

来る十三日、さそり座が公演いたします。

加納吟子がヒロインで活躍します。構成は僕が担当しました。是非、見に来て下さい。御覧になるのでしたら、初日が絶対です。初日（十三日）に是非、おいで下さい。」

私はアングラ劇団は余り見たことがない。

一度、天幕小屋の芝居を見たことがあるがストーリーがバラバラで、ただ奇をてらった目先の変化だけを狙った底の浅い芝居は、私自身としては好まないもので、その後は見に行かなかった。だが、今度は芝居よりも加納吟子に興味があった。

ヤプーショーで、みごとな女王さま振りを演じた、あの大胆な演技。公衆の面前でパンティを脱いで平然と岩見氏の扮するヤプーに奴隷の接吻をさせてみせたあの放胆さ。そして新宿のバー「マドンナ」で会った時は、極めて平凡な女らしい女性にかえていた。

金井克子の顔を、もう少し細おもてにしてエキゾチックにしたような、かなりの美貌で

アングラの女優にしておくのは、もったいないようなプロポーションをもつ、この女優が本番の芝居でどんな演技を見せるか。また佐戸崎が特に「初日が絶対です」と書いてきたことにも興味もてた。

生憎、十三日は仕事が長びいて、渋谷の何といったか忘れたが、小さな劇場にかけつけたのは九時を、かなり過ぎていた。

百人も入れば満員になるような小さな小屋だったが、入場料は七百円で、当時としては比較的、安くない方だった。にも関わらず、入りは良く、ほぼ満員に近かったのは、やはり、たで喰う虫も好き好きで、アングラファンというのが、いるのだろう。

加納吟子は眉を、ぐーっと釣り上げ、眉と目の間を真っ黒に塗りつぶし、逆立った金髪の大きな、かつらをかぶり、化けもののようなメイクアップにはガッカリさせられたが、男を責めさいなむ場面が非常に多く、言ってみればヤプーショーの続演みたいなものであった。

ただ、ヤプーショーと違うところは、男の方に熱気があることだった。あの時は学生アルバイトのエキストラだったが、ここでは、ともかく一座の俳優が「役」として振り当て

られているのだから、一生懸命やっている。

吟子は、南京袋みたいな変てこりんな衣裳をつけていたが、ところどころ破れていて、乳房が覗けて見えた。どうやら、その袋の下には何もつけていないようだった。

吟子が高々と足を上げて男を蹴とばす時、チラリと見えるものが妖しかった。

吟子の足は容赦なく男共の肩を、腰を、頭を蹴った。力強く、目一ぱいに蹴とばした。

蹴とばされても、蹴とばされても、男達は両手を捧げて吟子の足元に這いずり寄った。

何か時局を風刺するような、警句みたいなせりふを吐き散らしているけれども、単なる思いつきだけで、相変わらず底が浅かった。しかし、ほんとうの見せ場はマゾヒズムに焦点を絞っているらしく、男の俳優では、どれが主役かスターか分らなかったけれども、吟子は一様に男共を殴り、蹴り、踏みしだいた。

ラストに近くなつて、ひざまずいた男の前に立った吟子が、男の頭を両手に抱えて下腹部にピッタリと引き寄せると、肩を跨ぎ、続いて男の両肩へ逆の肩車に乗ったところは全くヤプーショーの再演だった。

男は吟子を肩と胸の上に乗せて、スックと立ち上った。呼吸をとめられているらしく、

かなり苦しそうで、フラフラしていた。

吟子の得意そうな笑顔。だが、せっかくの美貌も、グロテスクなメイクアップのために美しさは感じられなかった。

他の男達が我も我もと、その肩車を志望するように吟子に、つきまとう。吟子は男の肩の上で激しく尻を振り動かしながら、まつわりつく男達の頭を高い位置から蹴とばしては「政府の犬め。糞でも喰らって死ねッ!」というような、せりふを、どなる。

最後に男は力尽きたようにグラグラと揺れたかと思うと、舞台の一番前方の、かぶりつきの前あたりで、尻餅をついたように、あぐらをかき、バタツと倒れてしまう。

男の顔が離れたあとに、サツとライトが、左右から当てられた。これでは、まるで関西ストリップそのものだ。

——なるほど、これが初日の見せ場なのか、と私は思った。

ぶっ倒れた男を踏んで他の男達が這い寄ってきて、ライトに照らし出された吟子の部分を、二人の男の顔が隠した。

吟子は両足を大きく開き、二人の男の頭を両手で一つずつ掴んで、交互にキスさせた。

右の男に、左の男に。また右の男に、また

左の男に……。何回も何回も繰り返し、その間にも「毒ぐもの汁を吸って狂い死ね」とか「世の亭主族よ、よく見ておけ」とか、関連のないせりふが、とび出してくる。ストーリーとしても何の脈絡もない散漫なものだが、刺戟的であり、アクションを、より効果的にしていることは確かだった。

一体、アングラというのは、どこまで演じて見せているのか、ふだん見ていないから、私には分らなかったが、やはり究極は、安易なエロチックを売り物にするよりしか、可能性がないのではないか——と思った。

大胆なアイデア

「先日はどうも……」

声をかけられて振り向くと、岩見昂氏がニコニコ笑って立っていた。当然、彼は来ているだろうと思っていたが、芝居がはねて客がゾロゾロ帰りかけたところで私の傍に来たらしかった。

「楽屋へ行きませんか」

岩見氏が、あの一件以来、吟子に熱をあげていることは黒田氏から聞いていた。恐らくこの芝居も稽古の段階から通って見ているの

であろう。トイレの脇の、ちよつと気のつかぬ入口から楽屋へ入った。

楽屋と言つても六畳ぐらいの狭いところに大勢の俳優がゴチャゴチャと、かたまつており、その奥の三畳ぐらいの部屋に、佐戸崎昂がいた。

「やあ、いらっしやい。よく来てくれましたね。どうですか？ 今度の芝居は」

「大変、面白かったですよ」

佐戸崎は私には笑顔を見せたが、岩見氏にはチラと視線を走らせ、明らかに不愉快な目つきをし、そして黙殺していた。

「吟子さんが大熱演ですね」

「凄かったです。でも、明日からは、あすこまでは、やりません。ですから、今夜、是非、来て頂きたかったのです」

「吟子さんは？」

「いま、風呂です」

雑談しているところへ、湯上りタオル一枚を身体に巻きつけて吟子が、男達の間を、かき分けてやってきて、

「あら……」

私と岩見氏に愛想のいい笑顔を見せた。

「ちよつと失礼ね、着替えますから……」

別室もなければ、つい立てもない部屋で、

吟子は羞かし気もなく向うを向いて、サラリとタオルを脱ると、輝くばかりの裸体を見せて、ガウンを羽織った。

「凄い熱演でしたね」

「フフフフ。何が何だか……夢中で、やっちゃったわ」

横向きになり、片足をあげてパンティをはく時、我々の方に、さっき舞台で、まざまざと見せつけられた部分が覗けて見えた。

「ま、入りも上々で、成功の部類といえるでしょう。今夜は僕が、おごりますから、これから祝盃をあげに行きましょう」

渋谷の朝鮮料理へ、吟子、佐戸崎、岩見、私の四人で行き、日本間の一室を借りた。

私は一応、背景や構成について、お義理的に佐戸崎を、ほめた。

「しかし、惜しいのは吟子さんのメイキャップですね。ああいう風にしてしまうと、折角の美貌が台無しになってしまつて、もったいないような気がするんですが……」

「ハハハハ。岩見君も、そんなこと、言つてたな。でもね、芝居のムードからして、ああしないと、そぐわないですよ」

「あの南京袋みたいな衣裳……」

「イヤ、あれは南京袋そのものですよ」

「あれは、いいな、野性味があつて」

「岩見は、あれも反対だったな」

何を言われても岩見氏は黙ってニコニコしている。

「あの演出は……」

「僕が考えたんですよ、あらかたね」

「しかし、あれじゃ、ちよつと危険ですな」

「ですから初日だけです、人気取りにね」

「冒険ですね」

「でも、ああでもしなけりゃ、客がつかませんよ。高度の演技なんか見せたって分かりやしないんだから。イヤね、僕は、もっと面白いこと、考えてたんですよ。吟子を客席へ下ろしてね、お客の顔に、こすりつけてやろうってね。それを提案したんですよ」

「ウワァー、そりゃ凄いな」

「イヤ、中には彼女に、ヤプーなみのキスしたい奴だって、いると思うんですよ。だから初日は特別サービスで、たっぷり、よろこばせてやれって言つたんですがね」

「イヤよ、まさか。そりゃ、できないわよ」

吟子は大笑してテレもせずと言つた。

「まあ、見ず知らずのお客に対してやるのが冒険なら、第二案としてサクラを使うことも考えたんですよ。例えば、岩見君をサクラに

してやれば、安全だからね」

岩見氏の顔がポツと、あかくなった。

「マスクでもしてるんならともかく、大勢の前ではね。いくら何でも、ひどいね」

「内心は、やってもらいたくて、うずうずしてるくせに、どうしてもOKしないんだ。やっぱり羞かしいのか、岩見君は」

またぞろ佐戸崎が岩見を、なぶり出した。

岩見氏は相変らず黙ったままであった。

ストリップの劇場でお客をストリップパーが徹底的に、なぶりものにするアイデアは、私も十年ぐらい前から考えていたことなのだ。

現にロサンゼルスのパンプブローチーという劇場では、レストラン式の客席へポルノを論じた女優が降りてきてキスさせたのを目撃している。既にアメリカやドイツでは、それを、とっくの昔に、やっているのである。もっとも、この時は私は、まだアメリカへ行って実際に見ていなかったけれども。その後、最近になって日本のストリップ小屋でも、これが実現したという記事があった。

それからアングラの芝居についてデスカッション風な意見が各自、述べられたけれども私の見るところでは、みな理想を追っていて夢を叶えることを願っているような、地に足

のついていないようなことばかりだった。

そうした話の中から私は加納吟子を観察したが、彼女は見た目は妖艶で舞台上に立っている時などはS的要素が多分にあるように見受けられたが、こうして素顔で対談しているところを見ると、ごく女らしい素直な女性のように見られた。彼女は岩見氏に、かなり好意的で、見る目つきも、さげすんだようなところはなく、何か恋人でも見るような、まなざしであった。

楽屋で人前にチラリと見せたりして平気でいるところなどを見ると、大変な、あばずれ女のように思えるかもしれないが、芝居でやっている、そういうことは存外、麻痺してしまうもので、ストリップパーと同じで、それだから多くの男を知っていると、すれっからしとか、いう事とは結びつかないのである。このへんは現代の若い女性は割りきっている、ポルノ女優なども存外、純情で内気な娘らしい娘もいるのと同様に、世間の見る眼とは違うことが多いのである。

内 気 な 男

私が佐戸崎と会ったのは、この夜が最後で

それきり会う機会がなかった。そのうち二、三年を経ずして心臓麻痺で急死してしまったという。

岩見崇氏とは挿絵やカットを頼んでいた関係で、月に一、二度は会っていたし、黒田氏とは、たまに会って、二人の対立関係、また加納吟子をはさんだ恋の戦いの模様などを、聞いていたので、このへんから小説風を書き改めて行きたいと思う。

○ ○

女にかけては手の早い佐戸崎昂は、劇団に關係すると同時に、強引に加納吟子と關係を結んでしまった。

だが吟子は、別に佐戸崎が好きではなく、彼の強引さに押れてしまったという感じであった。

ところが、あの一件の夜以来、吟子と岩見崇とは急速に結びついて行ったのである。

佐戸崎は、単に吟子の肉体を欲する獸的な欲望だけであつたが、岩見の方は真剣に恋をし、結婚することまで考えていたのだった。

吟子が岩見に接近しはじめると、佐戸崎は「フン、まさか岩見が、この俺と吟子を張り合うつもりじゃないだろう」と鼻で嘲笑いながらも、悉く邪魔に出た。

イメージギャラリ― 『くすぐったいじゃナイ』 岡 たかし



吟子は最初のうちこそハンサムな佐戸崎を嫌いはしなかったが、あまりしつこく、まつわりつかれ、岩見との間を嫉妬して邪魔したり邪推して嫌味を言ったりする、女のくさったような佐戸崎を段々、うとみ出した。

佐戸崎の邪魔する隙を狙って、吟子は岩見

とデートした。

「ねえ、岩見さん。どこか静かなアパート、ないかしら。余り高いところじゃ困るんだけど二万円ぐらいまでのところで……」

「いまのところじゃ、いけないのですか」

「ううん、そうじゃないんだけど、佐戸崎が

うるさく電話をかけたり、やって来たりして困るのよ。だから、佐戸崎の知らないところに越しちゃおうと思うの。それにアングラの女優も面白くなかったから、やめちゃおうと思ってるのよ。いま、あるお店にバイトみたいな、かたちで出るようになったのよ」

「じゃあ早速、探してみよう」

吟子も女優では食えなくなって、あるクラブのホステスみたいな働き口を見つけ出したのだった。

「それから、もう一つ、お願いがあるのよ。今度、出るお店のママや支配人にね、あたし亭主持ちですって言っちゃったのよ。ああ言うところ、一人だって言うのと、いろいろ誘惑があるでしょ。だから、亭主持ちだと言っとく方が安心なのよ。だけど、やっぱり、その証拠を見せなくちゃならないでしょ。だから勝手に一人で、きめちゃったんだけど、岩見さん、あなたが御亭主になって下さらない？」

「えっ？ 僕がですか」

岩見は驚いたが、喜びの色を隠すことはできなかった。

「そりゃ光栄です。とても、あなたの御亭主という柄では、ありませんけど、お役に立つなら、こんな幸せなことは、ありません」

「ねえ、今晚から出るのよ。あなた、来て下さらない？ お仲間の人にも亭主だと言って紹介するわ」

岩見は感激に顔を紅潮させていた。

ああ、これが、ほんとうの亭主だったら、どんなに幸福だろう。

岩見は、吟子のスーッと、のびた高い鼻。紅く、やや受け口になっている魅力的な唇。そして、うるんだ瞳でジッと自分を見つめている目を、まぶしそうに見上げた。

だが、こんな美しい人が果して自分のような者の妻になってくれるだろうか？

岩見は、すぐ佐戸崎昂の姿を思い浮べた。

佐戸崎は貴公子のように端麗で背も高く、スラリとしていて、服の着こなしにしても一分の隙もない。それに引き替えて自分はチンチクリンで、顔は角ばっていて、鼻ばかり大きく、部厚い唇は、まるで土人のようなだ。

だが、吟子さんは佐戸崎を避けていることは事実だ。そして、自分に頼ってきている。俺は何の取柄もない男だが、ただあるのは、誠実だけだ。誠心誠意、この人のために何もかも捨てて、つくそう。自分に出来ることはそれだけだ。

吟子が自分を見つめる目、それは多分に情

熱的である。自分を好いてくれていることは間違いないことだが、果してそれが恋愛なものか、更には結婚までを考えた真剣なものか。それとも、頼れる相談相手としての単なる好意的なものか？

女性に対しては臆病な岩見崇は、いまが愛の告白をする絶好のチャンスであるのに、それを言い出し得ないでいたのだった。

翌日は朝早くから足を棒にして吟子のためにアパート探しをした。

吟子が出る店が新宿なので、新宿に近い所がよいと思い、近くの駅附近を探し歩き、ようやく二、三軒、候補を見つけ出したが、ふと思いついて小田急沿線を探すと、代々木八幡の駅の傍に新しく建てたアパートがあり、契約料と敷金は高かったが部屋代は一万六千円で二部屋あり、小さなキッチンもついていて割安だったので、ここが一番だと思った。契約金と敷金は、自分が負担するつもりだった。

岩見は、すぐ吟子を呼び出して見せた。

「まあ。陽当りもいいし、駅もすぐ傍だし、とってもいいわ！」

吟子も、ここが気に入った。岩見は吟子が気に入ってくれたことが何よりも嬉しく、早

速、契約金と敷金、前家賃などを支払い、不動産屋の礼金までも済ませた。

「すみません。今、あたし、お金がないの。稼いだら返すわね」

「いいんですよ、こんなもの。僕にプレゼントさせて下さい」

「ああこれで、あのゲジゲジみたいな佐戸崎の手から逃れることができたわ。うれしい、今夜、来てね。待ってるわよ」

岩見は吟子がクラブのホステスになることは好まなかった。できれば、しばらくの間でも生活費ぐらいは援助したいと思ったが、そこまで云うのは厚かましい気がして、口に出せなかった。

夜になって「メルジー」というクラブへ行ってみると、想像していたよりは上品なクラブで、吟子はスタンドの中に入っていた。「このひと、あたしのハズ。よろしくね」

朋輩のホステスに岩見を紹介した時は、岩見はテレて思わず顔が赤くなった。

岩見は片隅で水割りを飲んでいた。吟子は岩見の方を見向きもせず、お客達にスタンドの中から愛想を振りまいていた。

ホステスの中でも群を抜いて美しく、新劇の女優さんのアルバイトというふれ込みなの

で、客達も他のホステスとは違って、間を距てた話し振りをしているのが、岩見には安心感をもてた。

亭主の自分が傍にいたのでは、やりにくいだろうと察した岩見が、水割り一ぱいで席を立つと、吟子が耳許で、ささやいた。

「十一時でカンバンよ。十一時に電話して頂戴」

“夫婦”のちぎり

近所のすし屋で吟子を待ったが、なかなか現れず、十二時近くになって、やって来た。

「ホステスってのも楽じゃないわね。お酒は強いつもりだったけど、お客として飲むのと違って気が張ってるから酔えないのよ。ああ、いまになって酔いが出て来たわ。おなかもペコペコだし……」

吟子は、すしを、よく食べた。

「ねえ、岩見さん。送ってくれるわね」

外へ出ると吟子は、岩見を流し目で見た。

「ええ、喜んで」

「でも、あたし、前のアパートに帰るのイヤよ。今夜は、どこか他に泊りたいわ」

「じゃ、ホテルにでも」

「うん、そうしたいの。どんなところでもいいわよ」

歌舞伎座の奥には連れ込みホテルが並んでいる。その一軒に入った。

「ああ、面白い。ちよっと家へ電話をかけてみてよ。きっと佐戸崎が来てるから」

「彼は部屋の鍵、持ってるんですか」

「管理人に言って図々しく開けさせちゃうのよ。一度そんなことすると、管理人も信用しちゃうんだから、困ったもんよ」

試みに吟子のアパートに電話すると「ハイハイ」という佐戸崎の声が返ってきた。

岩見は、すぐ電話を切った。

「でしょう。フフフ、いい気味だ。あいつ、一人でイライラして待ってやがるのよ。フフフ、バカ野郎」

岩見としても、これは痛快だった。

「ああ、疲れた」

吟子はベッドに、弾みをつけて腰かけた。

「初めてのお勤めで、気疲れしちゃったわ」
手持ち無沙汰になった岩見に、

「あ、ちよっと、お風呂のお湯を出しておいてくれない？」

「ハイ」

岩見は浴室に行ってお湯と水の栓を捻り、

湯加減を調節してから部屋に戻ると、吟子はもう服を脱いでブラジャーとパンティと靴下だけになっていた。まぶしい裸体だった。

岩見は呼吸がはずんでくるのを抑えながら

「では、これで……僕……」

皆まで言わずに吟子が言葉を遮った。

「何よ、こんな見も知らないホテルに、あたし一人だけ、置いてきぼりにするの？」

「ハ？……」

まさか！ と思っていた言葉が聞かれたのである。

憧れ崇拝していた美の女神のような女性から、よもや一緒に泊るといふことは、心の中で10%ぐらいの期待はあったにしても、それは不逞な野心と自ら戒めていたことなのだ。

「今夜は、ここへ泊って行って頂戴！」

吟子は命令するように断定的に言った。

「ハ、ハイ」

——それは光栄です——

と言う言葉さえ出ず、岩見は狼狽した。

「岩見さんて、ほんとうに、いい人ね」

吟子は楽しそうに岩見を見ながら、片足を高々と上げ、くの字に曲げると、太腿のつけ根のガーターを、はずした。

「ねえ、脱がしてくれる？」

「アッ。ハイ、喜んで……」

岩見は吟子の傍に駆け寄り、足元に、ひざまずいた。

吟子は、その膝の上に片足を乗せた。

岩見は、恐る恐る、靴下の根元に手を、のばした。

吟子は、脱ぎやすいように少し股を開いている。

「ねえ岩見さん。あたし、あんたが好きよ」

「あ、ありがとうございます。僕のような者を……」

「あなたには、ずい分、お世話になったわ。

そのお礼というわけじゃないのよ。でも、あなたとあたしは仮の夫婦でしょ。たとえ今夜だけでも、夫婦のちぎりをしなくては恰好がつかないじゃない？ アッハハハ」

ふくよかな太腿にソツと自分の指が触れないように気をつけて、岩見はクルクルと靴下を巻いて行った。

「誤解しないでね。お礼じゃないのよ。あなたが好きだからなのよ。あたし、あなたが欲しいの。あなたが必要なのよ」

岩見は目頭が熱くなり、おさえきれない涙がポロポロと、あふれてきた。

「岩見さん！」

吟子は突然、岩見の顔を両手ではさみ、上に向けると背をかがめて、その唇に紅い唇を重ねて強烈に吸った。

「ア……」

——もったいない——

岩見には、痺れるようなショックだった。

「吟子さん。僕は、何と言っていいか、こ、こんなうれしいことはありません」

涙のあふれでる顔を見ると、吟子も真剣になって、またキスを重ねた。

——今宵一夜限りでなく、ほんとうに結婚してくれませんか——

と言う絶好のチャンスである。だが岩見はとも、そんな言葉は切り出せなかった。

——まだまだ、お互いを、よく知らない。もっと知り合ってから言うべきだ——

岩見はプロポーズの言葉の代りに、

「吟子さん。こっちのおみ足を僕の肩の上に乗せて頂けませんか」

としか、言えなかったのである。

吟子は、ちょっと笑って靴下を穿いた足を高く上げドシンと乱暴に足首を肩に乗せた。

岩見は靴下を巻き上げ、くるぶしの下のところに唇を当ててキスした。

「あ、もうお風呂、いいわね」

岩見の目の前で、後ろに手を回して器用にブラジャーを、はずした。豊かな乳房がプルンと顔を出した。

サッと立ち上った吟子は、岩見の前に立ちふさがるようにしてパンティを足元に、ずり落とした。

プーンと女の体臭が、もろに岩見の鼻を襲う。

何度も吟子の裸体を見ている岩見だが、こんなに間近く、はっきり見たのは、始めてだった。ヤプーショの時、肩車の向きを変えて、顔の正面から跨がって来た時、チラリと見たはずなのだが、あの時は夢中で、意識して見る余裕がなかった。アングラ劇場の楽屋で着替えをする時もチラリと見たが、ちょっと距離があったし、傍に人もいて、よく見なかった。

今こそ、はっきりと間近に見たのである。

「ふふふ……」

サッと白い裸身が眼前から消えた。

吟子は浴室へ去った。

目の前に吟子の脱ぎ捨てた小さなパンティがあった。床に落としておくのは、もったいない、というように拾い上げ、顔に押し当てた。いま鼻先に嗅がされたと同じ匂いが、タ

イメージギャラリー 『その夜のプレゼント』 マエダ・ヒオミ



ツプリとしみ込んでいた。岩見は、たんねんに裏表を調べ、裏返すと、少し変色した部分に鼻をつけ、クンクンと鼻をならして、犬のように嗅いだ。舌を出して匂いの強い部分をペロペロと何度も舐めた。

浴室では吟子がパシヤパシヤと、お湯を使う音が聞えてきた。

「岩見さん。いいお湯よ。一緒に入らないところ？」

いつもより調子の高い、よく透る声が聞え

てきた。

「ハ、ハイ」

またしても岩見は、とまどった。

——女王さまと、お風呂をともにしていいのかしら——

身にあまる光栄すぎて、恐れ多い気がしたのである。

——イヤ、女王さまは僕に奉仕を命ずるために呼んでいるのかもしれない——

岩見は浴室に行く決心をして服を脱ぎ始めたが、さてパンツ一枚になると、このパンツまで脱いだものかどうか迷った。

——女王さまの前に醜い奴隷の総てを、ひけらかすのは失礼だ。三助だってパンツは、はいているじゃないか——

岩見はパンツをはいたままで、浴室のガラス戸の前に立った。

「あの、入っていいですか」

「どうぞ。フフフ」

ガラス戸を開けた。

「あーら、アッハハハ、何よう、その恰好。

あんた、お風呂へ入る時、いつもパンツ、はいて入るの。アッハハハ」

岩見は羞恥で赤くなった。決心して後向きになってパンツを脱ぐとタオルで前を隠して

入った。

湯槽につかっていた吟子が湯をこぼして立ち上り、外股に足をあげて湯槽のふちを跨ぎ越して出た。

この浴槽はタイル張りだが、床から15センチほど高くして、あとは下へ落とし込んで低くしてあった。

「お背中、流しましょうか」

「いいから入ってよ。寒いでしょ」

女王さまのつかったお湯に入るなんて、もったいないと思ったが、言われるままに、浴槽に近づいた。吟子がグイとひじを曲げた。

その先端が岩見の足に、さわった。

「アッ、すみません！」

自分の肉体に触れたことが、きれいな女王さまの身体に何か汚いものが、さわったみたいな気がして、思わず謝ったのだ。

「ごめんなさい。あなたには、ぬるいかな。

あたし、あまり熱いお湯は苦手なのよ」

岩見は湯槽につかった。女性の体臭と、化粧品ミックスした匂いが体じゅうを柔らかく包んでくれるようで快かった。

吟子は石鹸で手早く、あちこちを洗うと、サッと流して立ち上った。さすがに楽屋風呂に入りついていると見えて、風呂の中の動作

は早かった。

早くも上がる気配が見えたので、

「あ、お背中を流しましょう」

「フフ、いいのよ」

サッサと浴室から出て行ってしまった。

岩見の方は、そうは行かなかった。

——これから吟子さんの身体に触れることになるだろう。汚れていては大変だ——

そういえばしばらく風呂に入っていない。

岩見は一人になった気安さから、丹念に身体を洗い出した。

——吟子さんはどういう気で居るのだろう。

今夜、自分に身を委かしてくれることは確かだが——

それが実は岩見は恐いのだった。

これほど敬い、慕っている吟子だが、そして、その裸体に、自分の裸体に触れたとしても果して男としての機能を完全に果せるかは自信がなかったのである。

慾情する牝豹

「長いお風呂ねえ、男のくせに」

風呂から出てみると、もう吟子は寝化粧をすませて宿の浴衣に着更えていた。

「すみません。ちょっとこのところ風呂に入らなかったで、綺麗に洗ってたんです」

吟子はスルスルとベッドの中へ、もぐりこんだ。

「もう遅いから寝ましょうよ」

岩見はモジモジしていた。

「どしたの？ 早くいらっしゃいよ」

吟子はベッドの端へ身体をずらせて、岩見の入る場所をあけて待っていた。

「吟子さん」

「なあに」

「吟子さんは、ほんとに僕のようなものが好きになってくれたんですか」

「ほんとよ。あたし、まじめな人が好きよ。

いままで、つき合ってきた人は、みんな、ぐうたらで生活力のない、いい加減な奴ばかりだったもん。岩見さんのような誠実な人があたしは一番、好きなのよ」

「ありがとう。しかし、吟子さん。僕の性格が、イヤ性格といってもセックスに対してですが、特異なものだということは、御承知のはずなんでしょう」

「知ってるわよ、フフフ。でもあれはプレーでしょう」

「サア、プレーといっているのかどうか。僕に

は、もっと重要なことなのです」

「重要？ ああ、分かったわ。あたし、平気よ。あなたのマゾヒストとしての性格は、あたしは別に嫌いじゃないわよ。だからって、あたしは別にサジストじゃないけどさ。あなたのそういう点は理解してるつもりよ」

「そうですか、ありがとうございます。では吟子さん、僕の身体を、そのきれいな、おみ足で踏みつけて下さい。お願いします」

「いいわよ。何でも、してあげるわ」

岩見はベッドの傍らに、うずくまり、

「ああ、女王さま。僕の女王さま。今夜ほど幸せな夜はありません」

と頭を下げた。吟子はベッドから起き上がって、

「こうすれば、いいの？」

浴衣の裾がまくれ、白い長い足が出て、岩見の背中を踏んだ。

「もっと強く踏みつけて下さい、女王さま。僕の頭を踏みつけて下さい」

吟子はベッドから床に、おり立った。岩見は床に、ごろりと転がり、仰向けに寝た。

「あなたはヤプーショーの時のことが忘れられないのね」

「そうなんです。僕が最初にお会いした時か

ら、僕はヤプー、あなたは気高い女王さまでした」

「じゃあ、あの時のようにしてあげましょうか」

「ええ、ええ。それを、さっきから望んでいたのです」

吟子は浴衣の裾を両手で捲り上げ、両足をひらいて岩見の顔の真上に立ちはだかった。

見上げる岩見の目は赤く血走り、額に静脈が、みみずのように浮き出ていた。

吟子は、含み笑いのような微笑を浮かべて見下していた。浴衣の下には何もつけていなかった。その女の武器を、女の誇りを堂々と

哀れな奴隷の面上に、かざした。

吟子は女優である。相手が芝居がかりであれば、それにたやすく「乗る」質をもっているのである。

吟子は女王さまになった。女王さまの役を振り当てられて、すでにその気になっているのである。

ゆっくりと片膝をついた。

吟子の、すべすべした内股の肌が、岩見の片頬にピッタリくっついた。岩見の顔はポツ

ポツと、あつかった。吟子は片方の足を膝について、両の太腿で岩見の顔を、はさんだ。

「あんたは卑しい奴隷、あたしは女王さま。さあ、女王さまの氣に入るように、うまく奉仕するのよ」

ゆっくりと、ジワジワと接近させる。

「ああ、女王さま」

岩見は大きく口を開けて下げる。すると吟子は尻をスーッと上へ持って行く。

「アッハハハ、アッハハハ」

「ホラ、どうしたの、奴隷。何してるのさ」

岩見は今度はムクムクと頭を上げて、口を

もち上げようとする。吟子は笑いながら両の内股に力を入れてギョッと両頬をはさんで、

おさえつけてしまうと、岩見の顔は動けなくなってしまう。

「アハハ、どしたのさあ。何ぐずぐずしてるのよう」

うんと焦らせてなぶってやる。思うところへ口が行かないようにからかっているのだ。

岩見は太腿で顔を思いきり、はさまれて、苦しい息をハッハッと吐き、口を一ぱいに開けて、犬のように舌を出した。

吟子は持ち上げていた尻を顔の上に近づけた。すると夢中で動かしていた岩見の舌が触れて、ペロペロと、やたらに舐めまわした。

「アハハハ。くすぐったいッ」

吟子は太腿の力を抜いた。

途端に、岩見の頭がムクムクと、せり上ってきた。吟子はサッと、尻を持ち上げた。

このへんで願いを叶えてやろう——

哀れみを乞うように見上げる岩見の、うるんだ目を見下ろしながら思った吟子は、一ぱいに開かれた岩見の口を、ふさいだ。

吟子は、ジーンと快感が走るのを覚えた。

——奴隷ごっこも、わるくないわ——

こうやっておさえつけて自由を奪い、奉仕させてやるのは、殊に、いい気持である。

岩見は、目をつぶって懸命になっている。

「目をつぶっちゃダメよ。目をあけるの。目を明けて、あたしを見るのよ」

岩見は薄目を明けて、まぶしそうに吟子を見上げた。

「伝言板」○本誌へ寄稿された方、投稿された方、モデルに志願された方、読者通信を寄せられた方々、住所氏名は絶対御安心の上、通信をお寄せ下さい。尚、手紙の転送や郵送などは双方が納得されない限り原則として取り扱いません。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。電話連絡が必ず必要な際は、当方からその旨を記してお返事申し上げます。

吟子はヤプーショーの時のことを想い出していた。

——あの時は、どうだったかしら？ たしかに瞬間は、ピリッと感じたけれど、あとは何だか、分らなかった——

それは、やはり周囲の大勢の目を意識していたからであろう。大勢に見られている。そして、いま自分は「女王さま」としての演技をしているのだ。つまり舞台に出ているのと同じ緊張感があった。セックスプレーをしているのではなく、芝居をしているのだ。という意識が強く、岩見の肩に跨がって、全身のポーズの美しさを保たなければならないし、女王さまが昂奮したりしては、おかしいなどと、そんなことを考えたりしていたから、さして快感を覚えなかったのだ。

それが、いまは密室の中の二人きりのプレイである。そして、これは芝居ではなく、セックスプレーなのである。だから、安心して自分の思うままの感情を剥き出しにして、よいのだ。だから、ヤプーショーの時とは比較にならぬ快さを感じ、それが次第にエキサイトしてくるのだった。

——この男を思うように、あしらってやるといった、余裕のある思いが、いまは、こみあ

げてくる官能のうずきに直結した。

顔を両股で思いきり締め上げられた岩見は、真っ赤な顔をして苦しさに喘ぎ、眉を寄せ、目をつぶって、それでも必死に奉仕を続けている。

吟子は最初は堂々と身を起こしていたが、次第に前かがみになり、いまは猫のように背中を立てて、首を下の方に下げていた。

はたから見れば、それは余りいい恰好ではない。少なくとも「女王」の姿とは、およそ遠いポーズである。もしも舞台だったら、絶対に、こういう恰好は、しないだろう。

だが、いまは、この姿が一番、快いのだ。はじめは、吟子は両手の位置についても、舞台でやる時の癖が出て、ひとつのポーズをつくっていた。右手を腰の右側に当て、左手は太腿の上に軽く置いていた。この形が一番ポーズとしては優美なのだ。

それが、いまは垂れ下がる髪をかき上げ、身体が前かがみになるにつれて、遂に岩見の頭の上の床の上に両手をついて、四つん這いのような恰好になってしまった。

それは欲情した牝豹というべき、野獣のポーズであった。

——(続く)——



〔前書き〕

編集長様

こんなペーパーに鉛筆で拙い字で申しわけありません。当家ではSMは法度^{ほつと}でして、小生ひとりのささやかな回春法です。

愛読八年になります、専ら妻子の留守か寝静まってからのことにしています。従って

編集長様

戸越春太郎

—＜告白＞—

☆☆奇ク愛読歴八年の我が少年期の異常性体験☆☆

我が性[〃]の回想

戸越春太郎

この手紙もカモフラージュのつもりで、こんな形式になりました。御容赦下さい。

この作文は突然の思い付きで、こんな挙に出たわけではありません。もう長い間、自分のウラ面を綴ってみたいと思いつづけていたのですが、なかなか決断出来なかっただけでした。綴るといっても、まとまりません。支離滅裂でしょうが、これから綴ってゆく内容が、[〃]奇ク[〃]作りの何かの参考又は勇気づけになればと思い、小生のウラ面、体験を思い出すままに綴ってゆきます。作文も文字もデタラメです。御判読下さい。

○○○○性の回想○○○○

私は当年四十九才、会社顧問。四十三才の妻、二十三才の一女をもって世渡りする平凡無才の男である。

これは私のオモテ面。私のウラ面は、妻との性宴にマンネリとなり、新しい刺激の欲求に妻以外の好みの、路往く人妻の腰に魅かれる毎日を過している中年男である。

奇ク愛読を含めて、小生の性モラル、又は性精神構造を打ち明けると次の通りである。

一、SMについて

青少年には不用である。夫婦のケンタイ期中年男女の回春に大いに結構。ただし、

プレイに相互理解と合意とプレイ・タイムに限っての愛情を絶対条件とする。

二、他人同志のSM

いずれはマンネリを感じるであろうが、過ぎたるは及ばざるが如し。合意ならば人妻であっても、ギリギリの限界までプレイした上セックスまでいくべきだ。夫婦交換プレイも同室で行うべきである。ただし終了後は節度ある社会人に戻る者が、その資格がある。

三、妻の浮気

妻が浮気したからとて目クジラ立てるのは男の封建的危険思想である。男女共、夫婦としての責任と義務を忘れぬ限りにおいて、家庭外における浮気は自由である。ただし、あくまでも世帯持ちの相手に限る。又、セックス・フレンドとしてのみの交際とする。妊娠衛生には注意のこと。

四、SM・セックスの対象範囲

SMもSEXも、好みの相手に巡り逢えず長い欲求不満が続く現在の私の場合、相手の愛と合意が得られ、後くされがないならば、もとより性友としてののみ異性の肉体を考え欲

求するから、女性生体ならば無差別に容姿年令に関係なくプレイしたい。ただし、出来得れば十七才から五十七才位まで。

五、売春について

売春防止法は廃止すべきである。(小生はプロ女性を金で自由にすることは大嫌いである)ただし、すべて公営とし、オーダーは電話、満足の代金は国家が女性の銀行口座に振り込むようにする。性欲を提供するための女性性は、国家に登録し、美肌であり粒選りのプロポーションのものをキープする。又、国民の模範になるような教養を身につけさせるものとする。もちろん、二人以上でもオーダー出来、SM用も用意すること。オーダー出来る男の年令に差別なく、行為出来るものは十五才の少年でも四十代、五十代の女性をコール出来る。逆に五十代、六十代の男が十五、六才の提供女性を愉しむことが出来るシステムにする。人身売買、民間売春を行った者は死刑とする。

以上が私の性思想である。さて、次は私の「性とSの回想」を記したい。

私が奇クを愛読する下地は、遠く十五才の少年時代から始まっている。十五才から四十才までの遍歴を無文才だが綴ってみよう。

十五才の夏の夜半、Aに激痛、下腹部に重苦しい疼痛を感じて目覚める。しばらくは自分のからだの状態が不明のまま前記の激痛が増大。耐え切れず「痛い、痛い。苦しい」を連発。うつ伏せのからだを怖ろしい力で後ろから前後にゆすられる。次第に意識がハッキリ、自分の異常な姿を知る。両尻に柔らかく生温かいものが、ぶつかったり離れたりするたびにAと下腹に、凄い苦痛が加わったり引いたりする。現実に戻ったとき、総身に恐怖と耐えられない地獄の苦痛が襲ってきた。

パンツも脱がされた素っ裸の私。掛布団を高くたたみ重ねて腹の下にかわれ、両手首を揃えて紐でくくられ、それが柱の根元で縛りつけられている。足はビクとも動かないし、しかも股を大きくひらかされている。両膝上をくくられていて、締めつけられる痛さに頭を振って足の方の状態を見る。なんとロープが左右の柱にピーンと張って、ゆれている。



生々しい……ものがAを押しひろげて……まれる。それが、ゆっくりしたり、早くなったりして……苦痛を加えている。相手は当時二十六才の叔父であった。叔父の剛毛の生えた太い両腕が、万力のような力で私の体を抱き込み締めつけていた。すべてを知った私は意識を失った。

次の夜、私が眠らないうちに叔父は私を襲った。恐い叔父だったので、いいなりになった。今度は手足は、くくられなかった。苦痛は昨夜より少なかったが吐気がした。メンソレタムが何度も塗られたが、不快な感触と痛みは一時間以上、続いた。

次の夜、私のパンツを脱がした叔父の手は私のものを握み、激しく上下する。むずむずし、尿意を感じる異様な感じに、おろおろするだけで快感は覚えず。叔父のものを握まされ、上下することを命ぜられ、気味が悪い。

その異常な行為は毎夜、続けられ、ある夜突然、性感を知る。(以来、四十九才の今日までオナニーを続ける。)

その年の暮れの夜半、夜遊びから帰った叔父が、絶えていた私のAを久しぶりに犯す。スラストしながら叔父の掌が私のものを上下するが、遂にものにならず。それでも叔父の

掌は私のものを廻りながら、その夜のバーでの出来事を荒い息で話す。叔父の話の内容は少年の私には強烈すぎた。又、この話から、初めて女体への関心が強くなった。

その夜、叔父は遊び相手の女給が帰ってしまったので、勢いづいたものの、やり場もなく、ストリートを一杯のんでいると、叔父より二十才も年上の小柄で色っぽいママに手をとられて、二階のママの部屋に連れて行かれた。ママは、いったん下に行き、店を閉めてくると、「今夜は、わたしで我慢しなさい」といって叔父に前戯を長々と要求したので、怒った叔父は、そばのビール瓶を……して帰ってきたという。私は、女性はどこにあんな大きなものを……と、美しい女性のものに憧れていたことに幻滅の悲哀を感じた。

十六才の春、大叔父、結婚。相手は祖母の妹の三女である。私の幼心に早くから焼きついた、色白、小柄、中肉の美人の叔母であった。私は、この叔母が好きだった。当時、二十四才であったと思う。

ある夕刻、入浴中の叔母から水を手桶で所望された。湯が熱かったのだ。祖父には、よくいづけられたので、何気もなく湯殿の戸を開いた。とたん、私は息がつまり、見ては

ならないものを見た思いに、足がすくんでいった。叔母は私を子供と思っただか、むちむちした真っ白い女体の正面を私に向けて立っていたのだった。折しも妊娠八カ月の叔母の裸体は実に美しく、やや大形のオッパイには、こんなに美しいものだったのかと、目をみはった。目立つ腹のふくらみの艶々しさ。そしてたくましい両太股、すらりと細い下肢に、しばし口をあけて見とれていたようだ。

「早くちょうだい」の叔母の声に、我にかえった私は、手桶を渡すと、急いで自室にもどった。そのときは胸の動悸が長い間、とまらなかつたものだ。そして、女体には腋下と下腹に黒々としたものがあることを知って、女とは不可思議なものとの不協和音に悩まされた。しかし、その夜から叔母の裸体を隣のうちに画いてオナニーをすることを覚え、それは素晴らしい快感を促進させることを初めて知り、以後、長い間、叔母の白い裸体は私のオナペットとして続いた。

その叔母と大叔父が、ある日、二泊三日の旅に出た。その、彼等の新居に私が泊ったときのことである。

興味と好奇心にそそのかされて大叔父の本箱を開いた。そして江戸川乱歩の『魔術師』

に心を魅かれ、その残酷な世界に、今まで感じたこともなかったゾクゾクする異様な快感を覚え、トリコになっていった。

女性が回転鋸で胴切りされるく、だり、私の身体は異常な状態を示し、広い大叔父の寝室で惨虐場面を繰り返しながらオナニーをする。これが私のS小説を読んだ始まりだった。

更に本箱を物色中、驚愕の物件を生まれて始めて目にした。写真十数枚である。それは大辞典の間からパラパラと落ちた。全裸の若い女性が、やや開股して椅子にかけたもの。もちろん体毛は豊かにハッキリ写っていた。これにビククリするとともに、いやらしさも感じたが、好奇心の方が強くてスゴイ写真に目が魅きつけられ、私の未熟な脳が引っかかり回されるような強い刺激をうけた。

その中に、そのものズバリの写真が、四枚ほどあった。一枚は若い男が肥った女を四つん這いにさせ、後ろから襲っているもの。次は瘡めた小柄の少女が、若い男たちに両手両足を大の字に開かされ押えつけられていて、

その少女に中年男が迫っているところ。哀れな少女は、か細い両手足が折れんばかりに押えつけられ、全身をつっぱって苦痛に耐えている。少女は細いからだにしては大きな目の乳房で、顔はのけぞって、おとがいと黒髪しか写っていないかった。

次の一枚は、年増の女が、長襦袢の胸を大きくはだけ、巨大な乳房を出し、自分の両手で両膝うらを持ち、両足を上に大きく開き支えていて、男がAを攻めているものだった。男女ともに喜びの表情が顔に出ていた。

最後の一枚は二枚目の少女のもので、敷布団の上に、うつ伏せにされ、細面の美しい顔が手前にねじ向けられている。その口一杯に布切れが詰めこまれ、黒髪を引っつかまれて苦しそうに顔をゆがめている。細い両腕は一文字に左右に広げられ、手首と二の腕を逆に押えつけられている。そして、太いとはいえない両股に手をからまされ、足首をつかまれ少女は膝立ちを強制されていた。その少女の背後から男が攻めているものだった。

当時、私の故郷には女郎屋が十軒ほどあっ

た。その女郎屋の中の一軒で写したもので、東北から買い入れた少女を、女郎屋の主人が仕込み部屋で最初の品定めをする場面を写したものと、後年、大叔父から聞いた。激しいショックを受けた私は、その夜、なかなか眠れなかったものだ。

以上四枚の写真は、いずれも少年の頃の私には、男と女のいやらしさを植えつけられたのだ。それは、その頃、町の路上でよく見かけた野良犬の、人を恐れぬ交尾の様子を見て嫌悪していた感情と同じものだった。十五、六才の頃は、女性を抱くと快感であることなど知るよしもなかったのだ。まして、男と女があんなことをする意味がわからず、見ただけのそれは、ただ醜いと感じるのみだった。そして、それからは担任の女教師に対する憧れが消え、また、初めて生の女体を見た叔母にも嫌気がさし、避けるようになった。

しかし、大人の男女に対する、いやらしさの感情も、同年代の異性には別の感情が働いていた。

隣家のK子はスラリと伸びた白い手足と、



細面の可愛い顔をした少女であった。K子の家と私の家は一日おきに風呂を立て、お互いに交流があった。

十六才の夏、K子の入浴中の姿が目に入り私の心にK子と裸で抱き合いたいという欲求がムラムラと起った。

十七才の冬、K子の家で、K子と彼女の母親、私と三人でこたつに入りミカンを食べていた時、私が伸ばした足先がK子の太腿に触れた。K子はハッとして白い頬を赤くした。私は心よい感触にジーンとした。これは生まれて始めて異性の生の肌^{なま}に触れたのだった。

同じ年に、ある学友の家で古いアルバムを見せてもらった。その最後のページに、私の心をかきたてる数枚の黄色くなった写真があった。それらを眺めているうちに、私の身体に異常な変化が起って困った。その写真は、世にも凄惨なものばかりだった。私の心は恐怖におののいている反面、何か異常な高まりを感じるのだった。写真は三枚あって、いずれも支那大陸でのものらしかった。

一枚目は、赤い線入りの黒の軍袴、上半身裸の日本兵が後手縛りで木に吊るされ、頭をガックリ垂らして死んでいるものだった。

二枚目は凄惨な女性のものだった。アンペ

ラを敷いた上に、日本女性か現地女性が不明だが、三人の全裸の女性が、頭上に打ち込まれた杭に両手首を合わせて引きしぼられ、腋毛を黒々と見せ、豊かな乳房を白日の下にさらけ出し、三人とも両足を左右にひらかされて太い杭にくくりつけられていた。手前の女性には妊娠しているらしい腹と口中に夫々杭を打ち込まれて死んでいる。中央の女性は、ひらかされた太股のつけ根の中心部に深々と杭を打ち込まれて死んでいる。一番、向うの小柄の女性は下腹部のあたりにアンペラがかけであるので、はっきりとわからないが、左足首が杭からはずされて、太いロープが長々と地上にくねって放つてあるし、縛った女性の足の位置が異常にからだから離れたところに延びていたので、恐らくそのロープを力一杯引かれ、残酷にも引き裂かれたものだろう。女性たちの手足は、むごくも針金で縛られていた。また、敷いてあるアンペラの上には布切れが散乱していた。

三枚目は、これも凄まじかった。若い女性が素っ裸で民家の土壁を背に、太股を大きくひらかされ、両足首をロープでくくられ、逆さ吊るしにされたものだった。両腕も大きくひろげさせられ、その手のひらは無残にもク

サビ状のもので土壁に打ちつけられていた。女性の口中には土くれが一杯、つめこまれていて、ギリギリ一杯にひろげさせられた女の体の中心部には前後二本の支那槍が深々と刺されていた。

以来、その残酷な写真に不思議な力で魅かれ、度々理由をつけてはアルバムを見せてもらった。

後年、その学友の家を訪問したが、そのアルバムは父親が死んだとき棺に入れてやったと聞いた。その父親は支那大陸歴戦の勇士であったとか。どんなルートで入手した写真なのだろうか。

これらの写真が少年時代の私の心に、女体残酷美を植えつけたものと、今日はっきり知ることが出来る。このような出来事や物件によって私の少年時代は、当時の言葉でいう、変態好みの異常な世界に浸る願望が日増しに強まっていった。

私は、その頃から女体を抱く夢を見るようになった。相手は叔母であったり、K子であったりした。だが、夢の中では、いつも私のものを触れようとして叔母やK子のそこを探しても見当たらなかった。現実には、その頃の私は、女性との行為を前述の哀れな女郎の写

真から漠然と想像していただけた。

無性に女体を抱きしめたい思いが狂おしいまでにのつた。だが、十七才の私には、そんなことができるわけがない。

そんな夏の終りのある日、悪友の一人から耳寄りな話を聞く。

それは、その悪友が山羊と……したというのだった。山羊のそれは人間のものと似ていて具合がいいというのだ。その話を聞いた私は、胸の動悸が高まるのを覚えた。

私は早速、それを試す決心をした。

山羊は四キロ離れた村の叔母の家にいたことを思いついた。だが、そこは人目があって不可能なことを知る。思い巡らせているうちに、折しも夏休み中の母校に一匹だけメスの山羊が飼われていたことに気づいた私は、矢も盾もたまず、母校に向った。

母校につくと、山羊小屋は在学当時の場所にはなかった。山羊の鳴声が旧校舎の裏庭のあたりで聞えた。幸いにも小屋は、校舎と裏堀との間の日蔭にあったのだ。

私は全く人影のない静まりかえった白屋の

山羊小屋に入った。私の胸は躍った。だが、山羊は後ろを向いてくれず、人懐かしげに私の方に頭を向けてすり寄ってくるのだった。

夏休み中は高学年の生徒が一人だけ、毎朝、世話にくるだけで、後は誰も山羊に近づく者のいないことを私は知っていた。だから山羊は私に甘えたいのだと思った。山羊は、尻の方へ回ろうとする私の方へ私の方へと頭を向けてくるのだった。私は痛いほどの高まりに五体を震わせながら、全身に汗していた。どうしても山羊の尻をとらえることの出来なかった私は、半ば諦めながら山羊に草を与えていたが、フト一計を思いついた。

それは、山羊の後足を浮かして縛りつけることだった。早速、実行にうつした。山羊小屋の隣は農具小屋だった。その中に都合よくボロボロの紅白幕の千切れたものがあった。それを結び合せ、かなりの長さにしたものを引きずって山羊小屋に入ると、山羊にかぶさるようにして、その幕布れのつなぎ合わせたもので山羊の後足のつけ根の近くの胴に一巻きすると、片方を小屋柱に結びつけ、一方を

柵板の間に通し、グイッと引きしぼった。山羊が、うるさく鳴き出したので参ったが、どうにか山羊の後足は約十センチほど吊り上った。山羊の後ろに位置してみると、高さはピタリだった。あたりを見回したが誰もいない。私は、山羊のメスのそこを眺めたのは、この時が初めてだったが、それは犬のそれよりも、かなり大きかった。

私は、生まれて初めての妖しい高まりに五体は震え、喉はカラカラに渴いた。山羊は悲しい鳴き声をあげるが、人に気づかれるようではなかったので安心した。私は、山羊の尻を撫でて、おとなしくしてもらうことにつとめる。獲物を求めて動悸をうつ私の……その寸尺のところ奇妙な私たちの山羊の……がある。私はたまらなくなつて接近していった。それは生まれて始めての感覚だった。しびれるような感じが全身に走り、ついで両足の力がガクッと抜けてしまった。

私は大分、後になってから『獣姦』という言葉を知った。

——(この項おわり)——





カット・岡 たかし

美女のいる茶店

新宿追分は、奥州街道、甲州、青梅など、諸街道筋の辻にあたっているところである。その追分の一隅に、卯兵衛という男が、古くから茶店をひらいていた。卯兵衛は、娘のお花と、ふたり暮らしであった。お花は母親を、はやく失った不幸な娘だったが、十三、四のころから、道ゆく人々の目をひく美しい器量に成長した。年ごとに磨きがかかり、お花は、あでやかさを増した。十七歳の春を迎えるところになると、お花めあての客の数が、ふえた。

ちょっと足をとめて、一服しよう、お花の美しい顔をみながら、茶を一ぱい飲んでいこうという客が多く立ち寄り、千客万来の忙しさだ。

たとえお花目当てでも、こんなに店が繁昌するのは、これも神仏のおかげと、卯兵衛は常に信仰をおこたらなかった。

悪い虫でもつかないうちに、はやくよい聲を迎えたいものだ、卯兵衛は、そのための神参りにも精をだす。

ところが卯兵衛の茶店にとって、ここに意外な商売仇が現われた。

辻をすこし離れた場所に、同じような店が一軒、ふえたのである。

江戸残酷帳

妖 異 招 き 猫

白 鳥 大 藏

その店は若い女を三人もかかえていて、客に対する愛想のよさも、卯兵衛親娘を、はるかに、うまわわっている。

なにしろ客の注文によっては、裏の小座敷で、気に入った女と、ひとときの甘美な夢を結ばせるといふ怪しい商法なのだ。

新店だけに客がつくまでは、茶代、酒代を極端に安くしてある。その上、女の値段までが安いのだ。

新しい店ができてから、卯兵衛親娘の店は目にみえて、さびれてきた。男たちは、どうしても色気の豊富な店のほうへ足を向けてしまふのだ。こんな状態が長くつづくと、そのうちに店じまいをしなければならない。

店をはやく閉めても、卯兵衛は心配で、なかなか眠りにつけなかった。

ある夜、床の中で、うとうとしていると、ふいに枕もとで声がした。

「もしもし、ちょっとお起きになってくださいませ」

と、かわいらしい女の声である。そして、なにやら、なまぐさい風がスウツと吹いた。

卯兵衛とお花は、ともに目をあけて、首をもたげた。すると、寝床と寝床の間に一匹の猫がいる。大きな白い猫である。

なんだか見たような猫だと思って、卯兵衛父娘は、じっと見つめた。おどろいたことにそれは店に飾ってある招き猫だった。

土で造った招き猫が、いま奥の部屋へきて両手をついて、口をきいているのだ。

卯兵衛もお花もびっくりして、腰をぬかしそうになった。たけは二尺もあろうか、十日ほど前に卯兵衛が、多摩川の宮ノ坂へ行ったとき買ってきたものだった。

用たしの帰途、その近所にある猫寺といわれる豪徳寺の門前で売っていたのである。

この寺が、なぜ猫寺と呼ばれて親しまれているかというところ。

ときの老中、井伊直孝が遠乗りの途中、名

だけは立派だが、草ぶかい、みすばらしい草庵の豪徳寺に立ち寄った。家臣数名と草庵にはいるや、にわか夕立がきた。

いかに貧しい草庵でも屋根はある。その屋根のおかげで直孝主従は濡れずにすんだ。

直孝に茶のもてなしをした住職が、高德の僧であつたので、直孝は感じいり、あらためて一寺を寄進した。

この井伊直孝を草庵に招き寄せたのは、寺に飼われていた一匹の猫だという噂がひろまった。門前にある花売り店の主人が、ために手招き猫を造って店先へ並べてみると、これは縁起がよさそうだといって、参詣人たちに飛ぶように売れた。

商家の縁起棚に飾るとお客が増えて、商売が繁昌するという評判まで、ひろがった。

傘をさす猫

卯兵衛も、その評判をきいて招き猫を買った。泥を焼いてつくった、その招き猫が、いま、生きているもののように、からだを柔らかく動かして話しかけてくる。

お花はふるえながら、なにか用なの、と猫にたずねた。猫は、お花さんが子どものとき

に使っていた雨傘と、着物が欲しい、とこたえた。

お花は、ひごろ神仏と同じように手を合わせて信仰している猫の言葉に、ふたつ返事で承知した。さっそく、お花は起きあがって、欲しいという二品をとり揃えると、猫にあてがってやった。

猫は大よろこびの感情を動作にあらわし、お花にむかって、なん度も頭をさげた。

そして、姿をスウツと消していった。

ここで父娘は、奇妙な幻覚から、さめたのであった。しかし翌朝になり、店をひらいたとき、昨夜のできごとが、幻覚でも夢でもなかったことに気がついた。

茶釜と並べて飾っておいた招き猫が、赤い振袖を着て、蛇の目の傘を握っているのだ。

お花は、猫がなぜ、こんな真似をするのかと、おどろきと疑いの目を、みはった。

朝食をすませて、店へ出てみると、猫は、こんどは傘を半開きにして、顔をかくし、からだを、くねらしている。猫のくせに、そのなりふりが、ふしぎに色っぽいのだ。

肩から腰の線の、ふくよかな姿態は、まるで人間の女のようなのである。この奇妙な猫の姿は、朝から往来の人たちの目にとまった。

ちょっと見ると、猫じゃ猫じゃを踊りそうな腰つきで、化け猫じみた感じでもある。

だが、無気味な気配はなく、どこことなく愛嬌がある。人間が、ちょっとでも目をそらしている間に、この猫は動きを変えるのだ。

そこがまた、おもしろい。お花茶屋の招き猫は何やら仕掛けがあるらしく、愛嬌があつて、おもしろいという噂がたち、客の入りがまた、よくなった。それだけではなかった。

この招き猫は天気を予言した。

傘をさっとひらくと、かならず雨が降ってくるのだ。猫が傘をひらくと同時に、お花の頭の中いっぱい、雨、雨という言葉が満ち満ちてくる。そこでお花は、往來の人々にむかい、雨が降ってきますよ、雨が降ってきますよう、と知らせるのだ。

それをきいて、家へ逆もどりする客もいるし、お花の店においてある雨傘を買って、身仕度する旅人もいた。

卯兵衛とお花は、ホッと一息ついた。奇妙な招き猫のために店が持ち直ったのである。

こうして卯兵衛の店は、ふたたび繁昌をみせて、父娘は、しあわせな日々が送れるかにみえた。

赤犬の甚太

だが、また別の不運が、父娘の身にふりかかってきた。新しくできた茶店のあるじが、これをうらやみ、ねたんだのである。

ある夜、土地のならず者で赤犬の甚太という男にたのんで、卯兵衛の店を襲わせた。

赤犬の甚太を兄貴分とする三人のならず者は、命じられたとおり、卯兵衛の店に押し入り、招き猫のぶちこわしにとりかかった。

しかし、そのときには猫がどこへ消えてしまったか、店さきに姿を見せなかった。

ならず者たちは、店のすみずみまで家探しをしたが、影も形も見えない。あげくの果ての腹いせに、赤犬の甚太は方針を変えた。

猫なんかより、人間の娘のほうがいいと、今度はお花のからだに目をつけたのである。

「なるほど、こいつは聞きしにまさる、いい女じゃねえか。化け猫なんかを探すよりは、この娘を手ごめにしたほうが、よっぽど、おもしろいぜ」

赤犬の甚太は、淫らに光る大きな目で、寝巻姿のお花の、胸もとから腰の肉づきをなめまわす。

「いやよ、いやッ！ おとっつあん、おとっつあん。助けて！」

本能的に危機を直感して、お花は卯兵衛に救いをもとめる。

だが、甚太は乱暴にも卯兵衛の脾腹を、したたかに蹴りつけた。

「ううッ！」

ひと声うめいて卯兵衛は、もろくも畳の上に悶絶してしまう。

「おとっつあん！」

泣き声をあげて卯兵衛にとりすがったお花の片手を甚太は、すばやくつかんで、ぐいと背中にねじあげた。ならず者の一人が、その甚太の手に縄を渡す。

「やい、お花といったな。かわいいそうだが、縛らせてもらうぜ」

甚太はお花の両手を背中へねじあげると、きりきりと縄で縛りあげるのだ。

この男は、こんな仕事に慣れているらしくあざやかな手つきでお花を後ろ手に縛りあげた。寝巻の裾が、あらわになり、白い足が膝の上まで、さらけだした。

「あれえ、助けて、助けてえッ！」

お花は恐怖にふるえ、必死の声をあげて哀願する。その痛々しい哀願の声が、甚太をは

じめとする三人の男に、いっそう淫らな刺激をあたえたのである。

「てへへ、なんてまあ、いい声をだして泣きやがるんだ。その声をきいたら、どんな男だって観音さまに参詣したくならあ」

甚太は、舌なめずりしながら、いやらしい声で言う。胸にかかった縄は、見えなくなるほど強く喰いこんで、逆に乳房の丸みをもっこりと強調しているのだ。

「まったく後ろ手に縛られた若い女の風情なんてものは、きれいにひらいた桜の花びらが風に吹かれて、散りそうでいながら必死に枝にしがみついているような味があって、なんともたまらねえ色気だぜ。無理に散らすのはもったいねえや。しばらくは、じわじわ責めつけて、きれいな娘が、肌もあらわに悶えるところを、じっくり楽しむとしようぜ」

招き猫を、ぶちこわしにきたことも忘れ、赤犬の甚太は、いまはお花の色気ばかりに心を奪われている。甚太を兄貴分とする三人の男も、負けず劣らず卑猥な欲情に憑かれた目で、無残に縛りあげられたお花の姿態をなめまわしているのだ。

「兄貴、どうせ縛るのなら、素ッ裸にむいたほうが、おもしろいぜ」

と、ならず者の一人が、唇の端から、よだれを流しながら、お花にとっては、おそろしいことを提案する。

「そうだな。これだけの器量だ。裸にむいてじっくりと縛りあげようか」

せつかく縛りあげたのに縄を解き、お花の寝巻の紐を、ひきはがした。

四人の悪党

お花がどんなに必死の力をこめて反抗しても、欲情に狂った四人の荒くれ男の腕力にはかなわない。

寝巻を、はぎ取られ、赤い腰巻までも、ひきはがされた全裸の上に、また、ひしひしと縄が、かけられていくのだった。

「お願いです、ゆるしてください。どうか、それだけは……」

どんなに泣いて哀願しても、男たちは淫欲に燃える目を赤く血走らせて、お花の素肌を責めなぶる。後ろ手に縛りあげておいてから更にまた、柱へぐるぐる巻きに縛りつけた。

四人の男の手が容赦なく、お花のすべすべして柔らかい肌を撫でまわす。

「なんとまあ、雪のように白い肌をしていや

がる。茶店の娘にしておくのは、もったいねえぜ。みるよ、この内腿のやわらけえこと。ゾクゾクして、おれは気が狂いそうだ」

「助けて、助けてえ！」

つつましく盛りあがった乳房の上下に、きりきりと縄がくいこみ、その苦痛とおそろしさに、お花はもう半狂乱になって悶え泣く。

四人の悪党は、もう夢中だった。お花の両足首に、べつべつに縄をかけると、柱を利用して、ぐいと足をひろげさせ、大腿びらきに縛りつけたのだ。

つまり、お花の尻は、べったりと畳につけたままで両足をひろげ、膝をまげた形に固定してしまっただのだ。お花にとっては死よりもつらい羞恥の姿であった。

「そらよ、ご開帳だぜ」

「助けて、助けてえッ！」

泣き叫ぶ声も、もう喉がかすれてむなしくヒイヒイと鳴るだけである。

赤犬の甚太は、その可憐な顔を両手で挟みこみ、花びらのようなお花の唇へ、自分の汚い唇を押しつけると、チュウチュウ音をさせて吸いはじめた。

「む、むむむッ！」

甚太は、お花が苦しがつて眉と眉のあいだ

に皺を寄せて悶える顔をみて、よろこんでいる。

「ふん、おめえの唇の味はなんていいんだろ。おれはもう、たまらなくなってきたぜ」そんなことを言ってお花の首を太い腕で抱きしめ、またチュウチュウと小さな花びらのような唇を吸いあげるのだ。

甚太のその痴態を目の前にしたあとの三人も黙っていない。一人はお花の乳房へ吸いつき、一人は臍のあたりを、一人は内腿のあたりを、なめまわす。

雪のように白い裸身へ、四人の汚い無頼漢が、それぞれの方向から、とびつき、勝手なところを卑しく、なめまわしているのだ。

男たちの頭が、ぶつかりあい、お花を抱きしめようとすると手と手が、からまり合って、奇妙な形になった。

「むうッ、むうッ、むむむうッ！」

まだ男を知らない生娘のお花にとっては、まさに地獄責めだった。

どんなに暴れようともがいても、手は背中に固く縛りあげられ、両足は裂けるかと思うばかりに、ぎりぎりの限界まで、ひろげて縛りつけられている。四人の男の思うがままに責めなぶられるのだ。

「おい、てめえら、おれがすむまでは勝手な真似をしちゃならねえ」

ふいに、甚太が怒りだした。

ほかの三人の頭をなぐり、脇腹を蹴って、男の顔を、お花の肌から、ひきはなした。

「そんなこと言っても兄貴、こんな色の白い餅肌を目の前にして、おれたちが我慢できるわけはねえじゃねえか。早くさっさとすませて、おれたちのほうにまわしてくれよ」

ならず者の一人が、口をとがらせて甚太に言った。

「そんなにあわてるなってことよ。まあ見ていろ。おれがこれから女の責め方の手本を示してやる。まず、こうして、乳房を口にふくんで……」

甚太はそう言うのと、こんどはお花の乳房に吸いついたのである。

「ヒイッ！」

お花は顎をのけぞらせて絶叫する。

甚太は口の中いっぱいにふくんだお花の乳房を、舌でぬめぬめと愛撫する。

甚太は愛撫のつもりでも、お花にとってはこれもやはり地獄の責め苦である。

舌の先でコチョコチョコとくすぐり、なめまわす。ときには歯をあてて、ぎりっと噛んだ

りするのだ。

「ヒイッ、ヒイッ、ヒイッ！」

噛まれたお花は、縛られた全身をふるわせて泣いた。雪よりも白い内腿の肉に痛々しくけいれんが走って、その眺めが、ほかの男たちの劣情を刺激する。

「兄貴、もうたまらねえよう、早くおれたちにまわしてくれよう！」

男たちは足をバタバタさせて、だらしのない泣き声をあげた。

「ばかやろう、がたがた騒ぐな！」

甚太は叱りとばした。そしてこんどは、お花の柔らかい内腿のあたりへ顔を寄せると、ガブリッと噛みついたのである。

「ヒイッ！」

噛まれた苦痛よりも、自分のもっとも恥ずかしい場所へ、甚太の顔が、いきなり接近したことに、お花は戦慄した。

「お願いです、もうやめてえ！」

一度、強く噛んでから、こんどは自分の噛んだあとを、甚太はぺろぺろと、なめまわすのだ。その感触が、また気も狂わんばかりの羞恥となって、お花を泣かせる。

「いい匂いだぜ、お花。生娘の味ってものはまったく、たまらねえや」

甚太の舌が、さらにのびた。

「ヒィーッ、助けてえーッ！」

熱いものが足の指先から脳天にまでつらぬき、お花はのけぞって絶叫した。

その声に、卯兵衛が意識をとりもどした。

「おのれ、む、娘に、なにをする！」

お花の危機をみて愕然とした卯兵衛は、よろめきながらも夢中で起きあがり、猛然と甚太に、むしゃぶりついていった。年寄りながらも、死にものぐるいである。

「このじじい、なにをしやがる。はなせ、はなしやがれ！」

生娘の内腿をむさばっていた甚太は、卯兵衛に足を取られて、ひっくり返った。

ほかの三人の無頼漢が、甚太にむしゃぶりといた卯兵衛の手をひきはなそうと、躍起になる。だが卯兵衛は、死んでもはなすものかとばかりに、なおも、がむしゃらに甚太の腰を抱きしめた。

焼けた両眼

物凄い格闘がはじまり、そのはずみに火鉢の上にかかっていた鉄瓶が、ひっくり返って灰神楽になった。

その灰神楽が、柱に縛りつけられていたお花の頭の上にまで舞いあがった。

お花は、もうもうたる灰を、からだじゅうに浴びて悲鳴をあげた。縛られているので、逃げるできないのだ。

目の中に熱い灰がしみこむ。痛みがはげしく、お花は縛られたまま、のけぞり悶えた。

と、そのとき、ニャアゴという、家じゅうにひびくような太い、うなり声がきこえた。

つぎの瞬間、一匹の巨大な猫が、矢のように、この部屋の中へ飛びこんできて、甚太の喉にガブリッと噛みついた。

爪をたてて、甚太の胸もとをガリガリッとひっかく。甚太ばかりではなく、ほかの三人の男の目玉を狙って鋭く爪をたて、うなり声をあげて暴れまわった。

ならず者たちはキモをつぶして、部屋じゅうを逃げまわったあげく、外へ飛びだしていった。

熱い灰で目を焼かれたお花は、その痛みに朝までころげまわって苦しんだ。朝になって医者を呼んだが、その医者も、さじを投げ、卯兵衛は、ただオロオロするばかりである。

その夜、眠れないままに、卯兵衛とお花はまた、ふしぎな幻覚を同時に見た。

招き猫が、前足で自分の両眼をこすっている。その前足をお花の両眼へもっていくと、やさしく、なでまわすのである。

とても猫とは思えない、しなやかな前足の動きである。そんな動作をくりかえし、くりかえし、飽きずにつづけている。

こんなことが朝までつづいた。

熱い灰に焼かれたお花の目は、夢の中の招き猫の前足のおかげで、痛みもとれて快方にむかった。

完全にもとどりの目になったお花は、翌朝、家じゅうをくまなく探しまわった。そして、よくやく猫をみつけた。台所の片隅に転がっていたのである。猫の両眼は醜く焼けただれて見るも無残な顔つきになっていた。

お花は思わず猫を抱きあげ、もとの場所へ飾ると両手を合わせ、丁寧に礼をのべた。

その翌朝、この招き猫は、こなごなに砕けて、土間に散っていた。自分からその身を砕いたのである。これは一種の自殺であった。

お花は涙にむせんで、命の親であるこの猫に、ふたたび手を合わせて念仏を唱えた。

お花は、泣く泣くひろい集めた猫のなきがらを持って、豪徳寺へおもむいた。

住職に回向してもらい、猫塚に埋めた。